
[illegible]八月創刊明治二十五年三月十二日
[illegible]發行[illegible]郵便物認可
女鑑
第十六年
第三号



尾上梅幸丈　市村羽左衛門丈
尾上菊五郎丈　尾上榮三郎丈

樂屋使ひ

貴功化粧水　浦しま
一名しわよらず
御水白粉　浦しま
あれしらす　江戸っ子

定價

| | |
|---|---|
| 大壜 | 金二十錢 |
| 中壜 | 金十五錢 |
| 小壜 | 金十錢 |
| 特製 | 金五十錢 |
| 大壜 | 金廿五錢 |
| 中壜 | 金十八錢 |
| 小壜 | 金十二錢 |
| 貝入 | 金三錢 |
| 錫入 | 金六錢 |

◎うらしまを常に使用せば色を白くし艶をいだし、顔手足のあれ、にきび、そばかす、あせも、しもやけ、おしろいやけ等に最もよろし

◎うらしまを常に御もちひなさるれば老て御顔に「しわ」のよることとなしわけて「ばら」「すみれ」の愛すべき香氣を多量に含みたる好品にして其容器にも高尚優美の粧飾をつくしあれば御進物用にはきはめてよろし

◎本品に名醫よりつたはる所の由來書あり御一讀を乞

◎全國至る所の名高き小間物店にて販賣仕候

製造元　東京市日本橋區若松町　若松堂

發賣元　東京市日本橋區橋町四丁目　内外小間物化粧品問屋　丸見屋號　丸善商店　電話浪花四四八番




本舗　東京日本橋區新和泉町　三井花陽堂

わたらしく輸入せる此おしろいはいならぬ香ひと清き元素にて作りたればけはいの品としてはこよなうめでたきなれいにしへよりつたわれるそれにくらべてたかふところにそわるのはれ世のおみなたち一度び用ひ見てぞかいみしさしるしをしられよ

取次販賣は到る處の小間物化粧品店にあり



# 女鑑 第十五年第三號 目次

## 口繪

熊本に於けるリチャードソン夫人招待會



（昨年十二月十三日リチャードソン夫人熊本豫備病院慰問の際日本赤十字社熊本支部に於て撮影したるものなり）

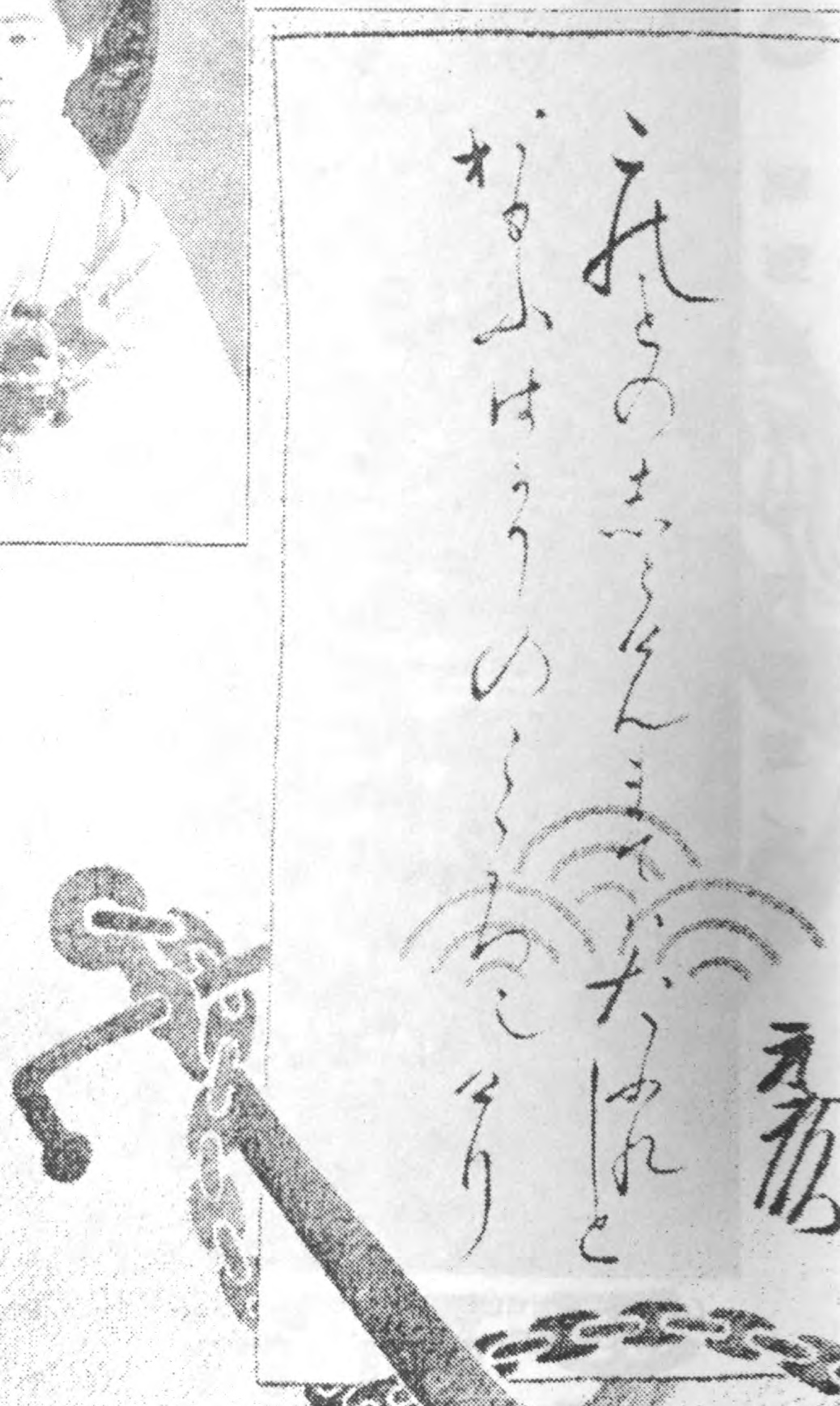
上村海軍中將の家庭



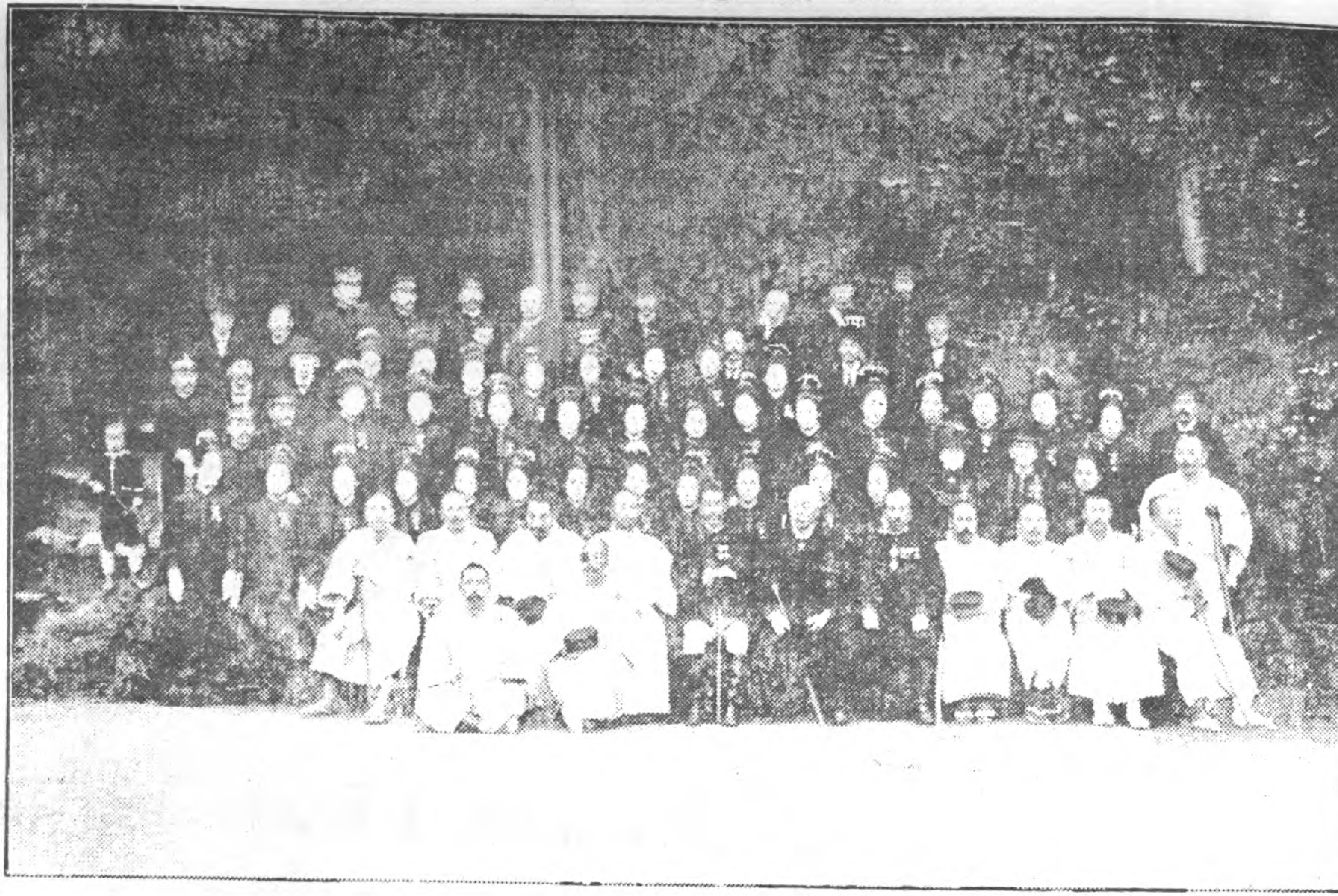
故高崎少佐未亡人恒子



宮中御歌所々長
男爵高崎正風氏令息
故海軍少佐高崎元彦氏遺筆



愛媛縣篤志看護婦人會



（日本赤十字社長松方伯の一行愛媛縣道後轉地療養所に出張せられたる時紀念として撮影したるものなり）

全國到ル處ニ在リ
特約販賣店
東京 大阪 平尾贊平 本店 支店

最新煉香油
男女コスメチック代用品

# パール




東京濱町一丁目
平尾贊店
電浪一一〇

清心丹は興奮、清涼、收斂、健胃消化剤なれば衛生家の四時日常欠くべからざる要薬なり依てポッケット用、携帯用に便利なるニッケル罐入の設けあり

定價は金卅錢、十五錢の二種あり販賣所は全國薬舗賣薬舗にあり御最寄にて人魚の商標御認めの上御要求あらん事を乞ふ




本舗東京市元大阪町

高木與兵衛

---

○大日本の淑女方が一般に渇望する處の原料の確實なる洗粉は此の花洗粉也



一度御試用の上御高評を乞ふ

特約販賣店

浅草公園第六區 辻小間物店

京橋區桶町 増田勉強堂

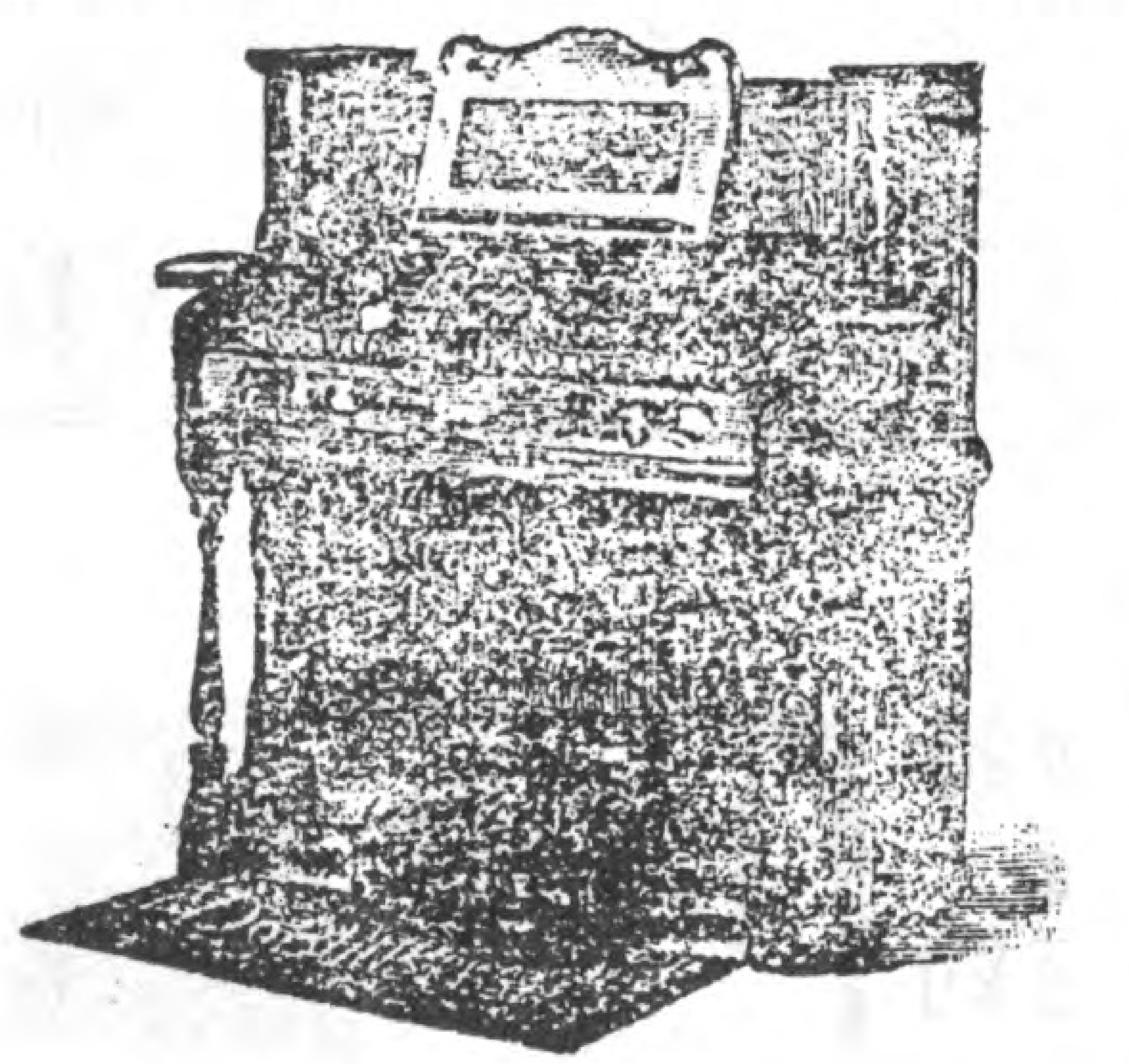
（目錄進呈）

第五回內國勸業博覽會下賜
一等賞牌二等賞牌三等賞牌褒狀
北米聖路易世界博覽會下賜
# 名譽銀牌銅牌賞牌

東京音樂學校御用品
東京音樂學校證明書受領

◎獨乙式學校用 改良風琴

金十八圓　金二十八圓
金三十八圓　金四十五圓
金五十圓　金六十圓
金七十圓　金八十圓
金九十圓　金百圓
金百卌圓　金百五十圓
金二百圓　金三百圓



◎獨逸コンボルダ式 學校唱歌教授用風琴

金三十八圓　金五十八圓　金八十圓
金百圓　金百卌圓　金百五十圓

◎ヴァイオリン

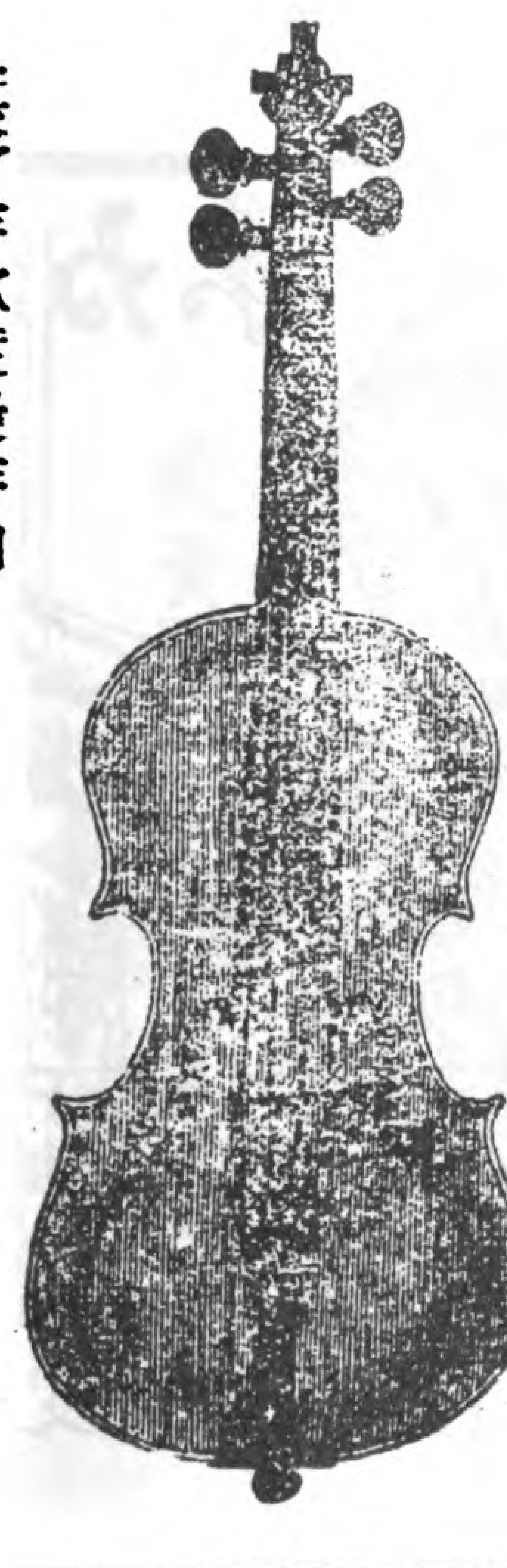
金四圓　金五圓　金六圓　金七圓　金八圓
金九圓五十錢　金十圓五十錢　金十三圓
金十五圓　以上金五十圓

◎ヴァイオリン用弓

金一圓　金一圓五十錢　金二圓

◎ピアノ

金三百圓以上金千圓迄



◎祝捷樂隊用樂器

七人組織樂器壹組
小供用　金拾五圓　甲號金三十圓
乙號　金貳十圓　特別金六十七圓
九人組織樂器壹組
甲號　金五十圓　乙號三十五圓
特別　金百十圓

◎大小太鼓、シンバル、トライアングル、コルチット、クラリオチット 其他
西洋樂器一切

旗野作歌渡邊作曲
◎旅順陷落祝捷歌
一册金六錢　郵稅金二錢

諸大家作歌作曲
◎露國征伐軍歌
三種金十錢　郵稅金四錢

（雛形進呈）
西洋樂器標本模型品
體操運動器械校具類
製造元
東京市神田區
千代田町貳番地
# 同文館樂器校具店



月經を通じ二十二病症の根本を全治す

藥價
半週分 二十五銭
一週分 四十五銭
二週分 八十五銭
三週分 一圓二十銭

# 月やく●閉止

三四ヶ月の月經閉止も二廻分にて必ず通ずる不思議の効あり

# 月やく遲延

常に月經閉止を苦慮するより神經性にて月經閉止を來し亦は遲延れることあり此藥を一廻分も用ちゆれば直ちに通下す

**血の道にて頭痛眩暈し** 目かすみ、逆上して顔面潮紅する人亦は常に月やく過少にて肥滿たる人處女十五六才にして月華なき人等は毎月持藥として此藥を用ゆれば**子宮病** 月やく●閉止、遲延、過少を患ふことなく通利を快よくし**血の道を根治**し身體强壯に**容貌艶快**ならしむること此藥特有の偉効なり

本舗 東京市日本橋區藥研堀町四十三 藥劑師高木與八郎

---

東京銀座一丁目河岸通り

# 帝國貯蓄銀行

（電話 新橋 八一六 二八〇八）

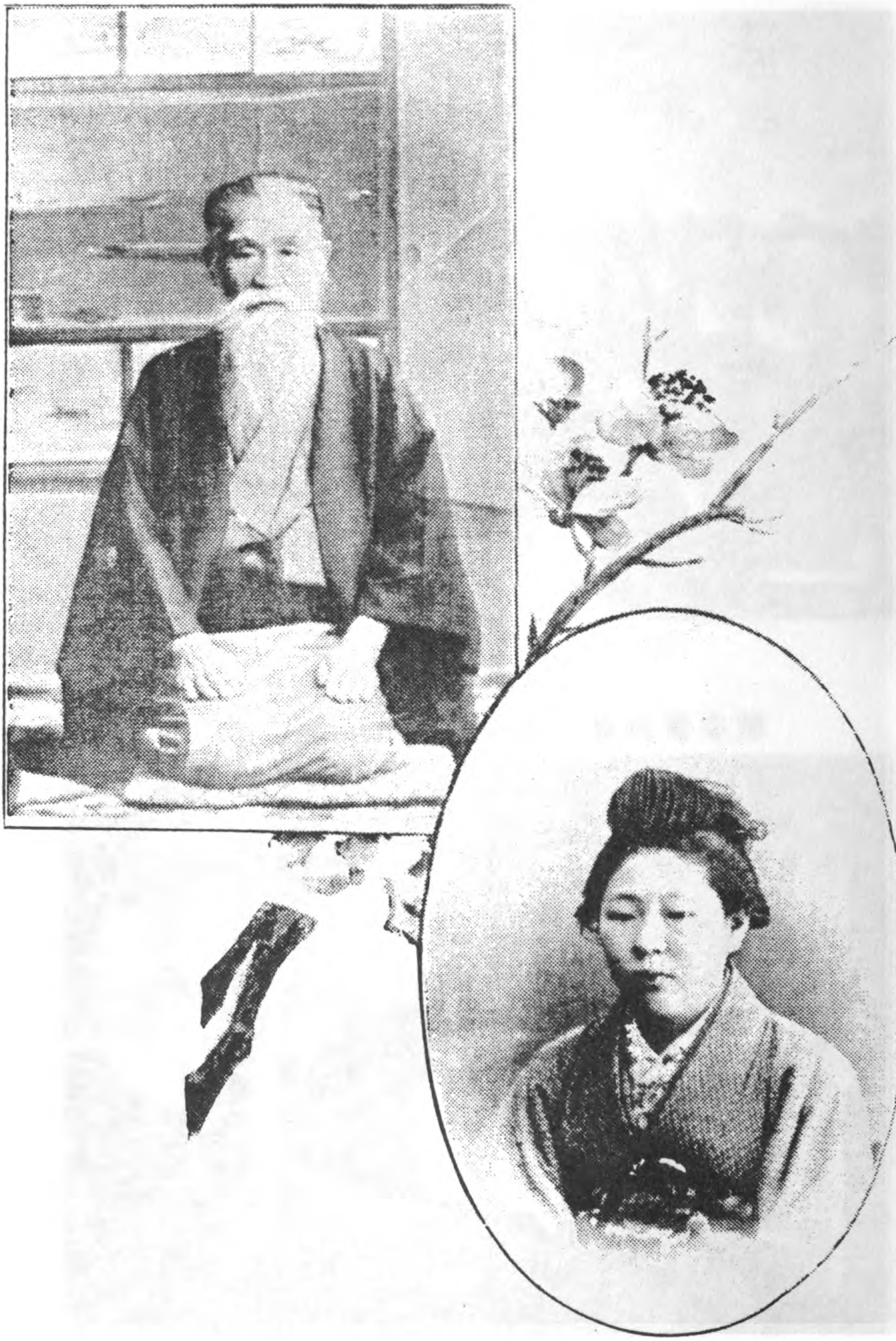
本鄕一丁目 本鄕支店
飯倉三丁目 飯倉支店
赤坂表一丁目 赤坂支店
四谷大通り 四谷支店
南品川一丁目 品川支店
横濱吉田町 横濱支店

牛込神樂坂 神樂坂支店
神田須田町 須田町支店
兩國米澤町 米澤町支店
淺草雷門前 吾妻橋支店

代理店 日本橋坂本町 田中銀行

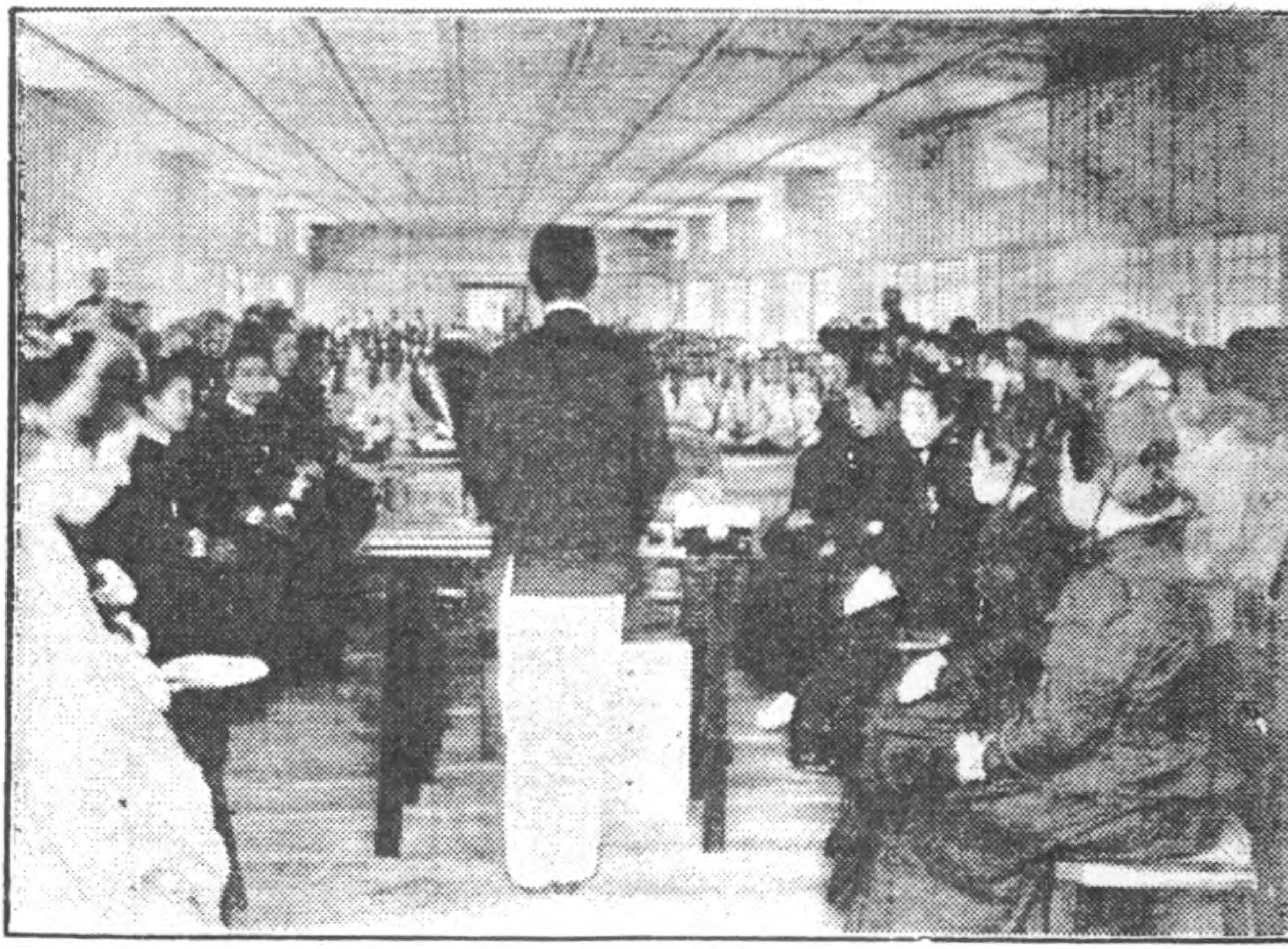
●一錢以上何程にても御預り最も便利に取扱申候
●毎月五日迄の御預け金は全月分の利子を付け申候

歌撰者 菊池武則先生

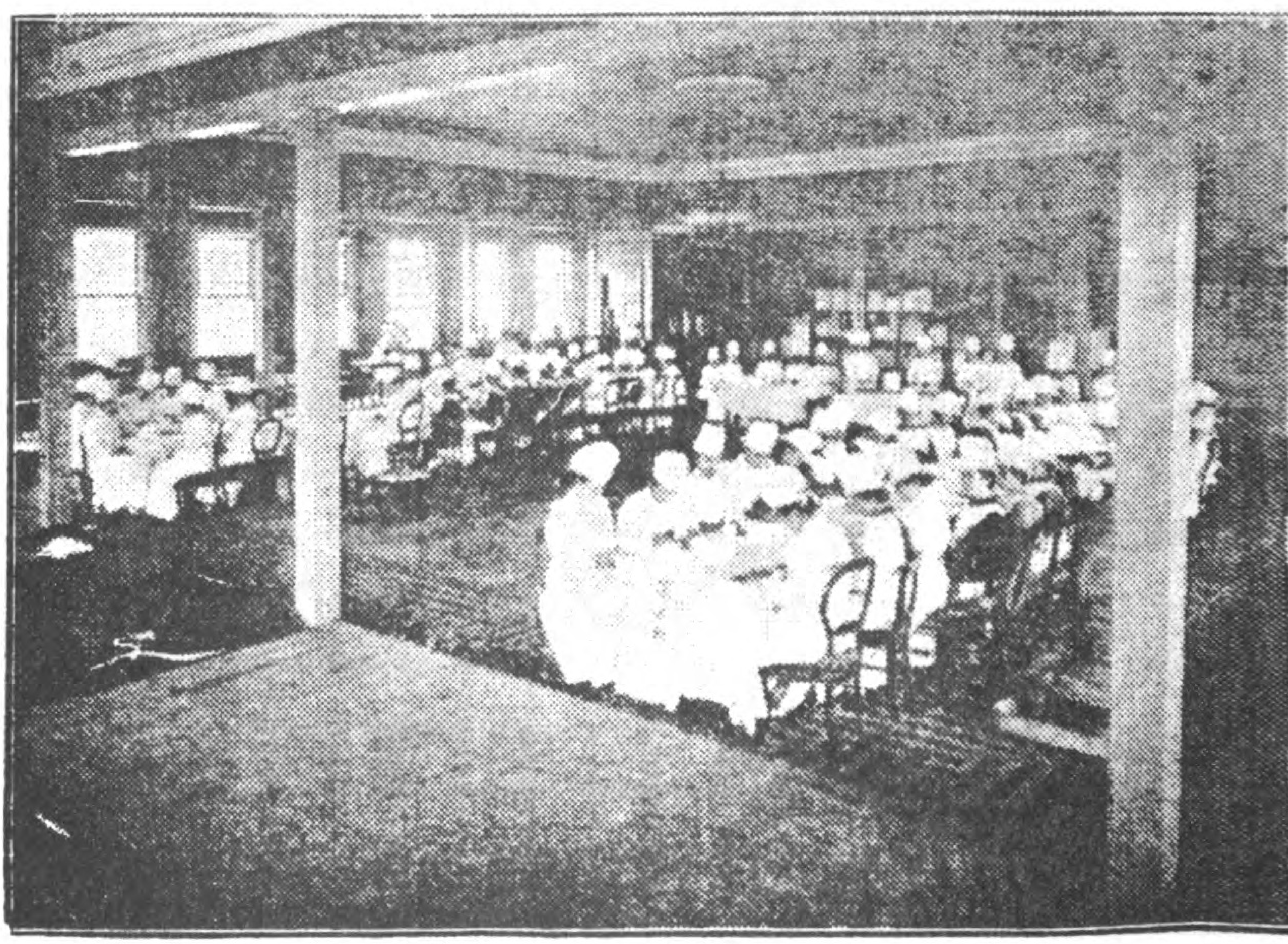


女鑑兼題投稿優等者 上田徳子

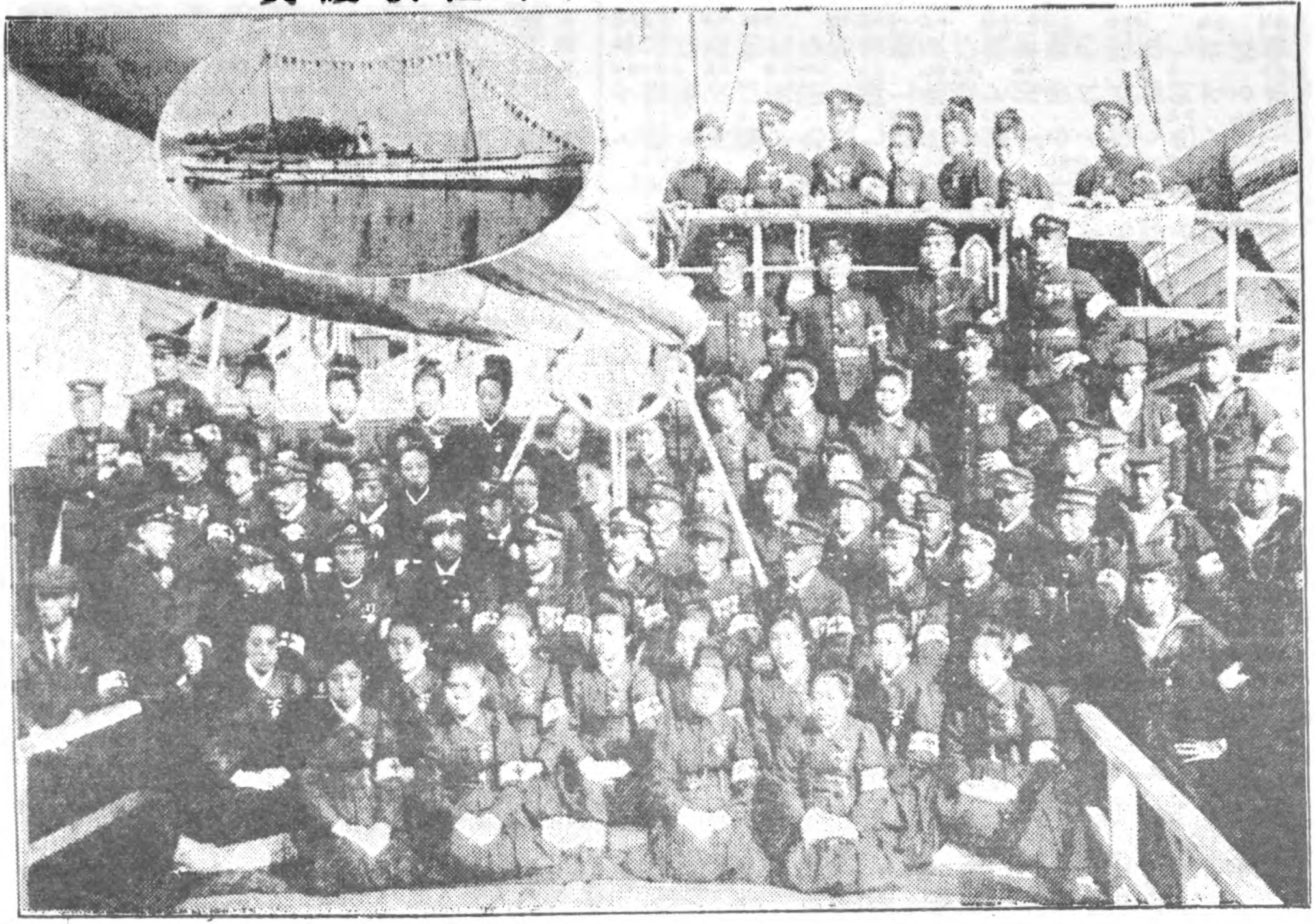
熊本特志看護婦人會同地豫備病院患者を慰問す



篤志看護婦人會福井支會の繃帶製作



陸軍病院船幸運丸乘組救護員



# 褒狀受領

定價 壹袋壹錢
罐詰五錢




此名題洗粉は皆々樣の御引立に依り益々盛大に相成難有仕合に奉存候然るに近來諸方に名題洗粉の摸造品澤山顯はれ候に付弊舗製造品には袋の裏面に芝居櫓形の登錄商標を相印し御座候間何卒御求の節は篤と御熟覽の上多少に不限御用向の程偏に奉希上候也




東京淺草區黑船町

**梅素亭謹製**

---

# 紳士貴婦人用

米國有功專賣

●プレスト洗粉は皮膚の理を緻密にし色を白くし光澤を艶麗ならしめ自ら精心の爽快を覺ゆること妙なり●プレスト洗粉は(にきび)(あせも)等を治するに特効あり平常使用せらるゝ時は皮膚病に罹るの憂なし●プレスト洗粉は効能顯著なるが故に普通の洗粉の如く多量に使用すべからず故に經濟上却て德用なり販賣店は全國到る處の化粧品小間物店賣藥店にて販賣す



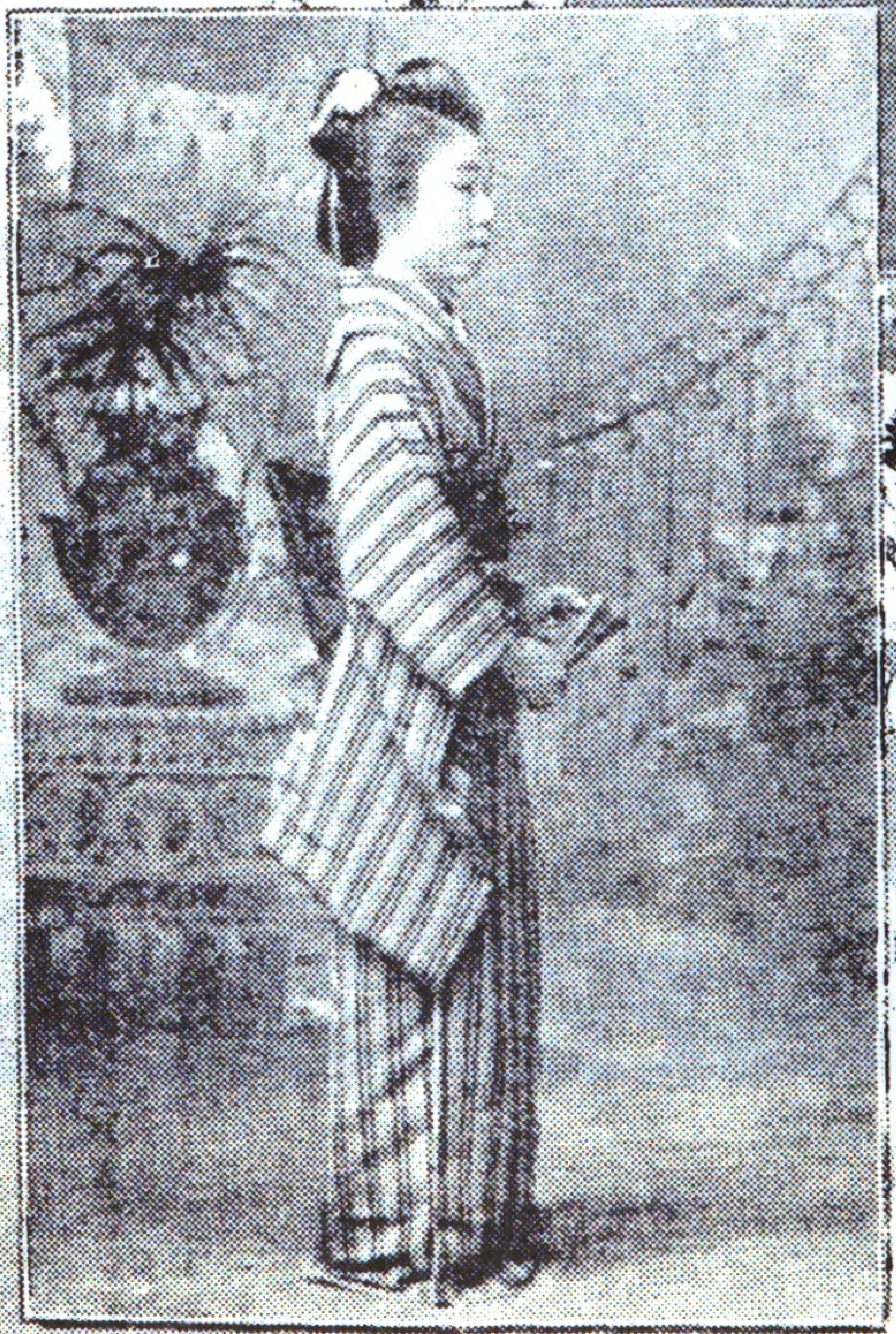

日本特約 一手販賣

東京牛込西五軒町

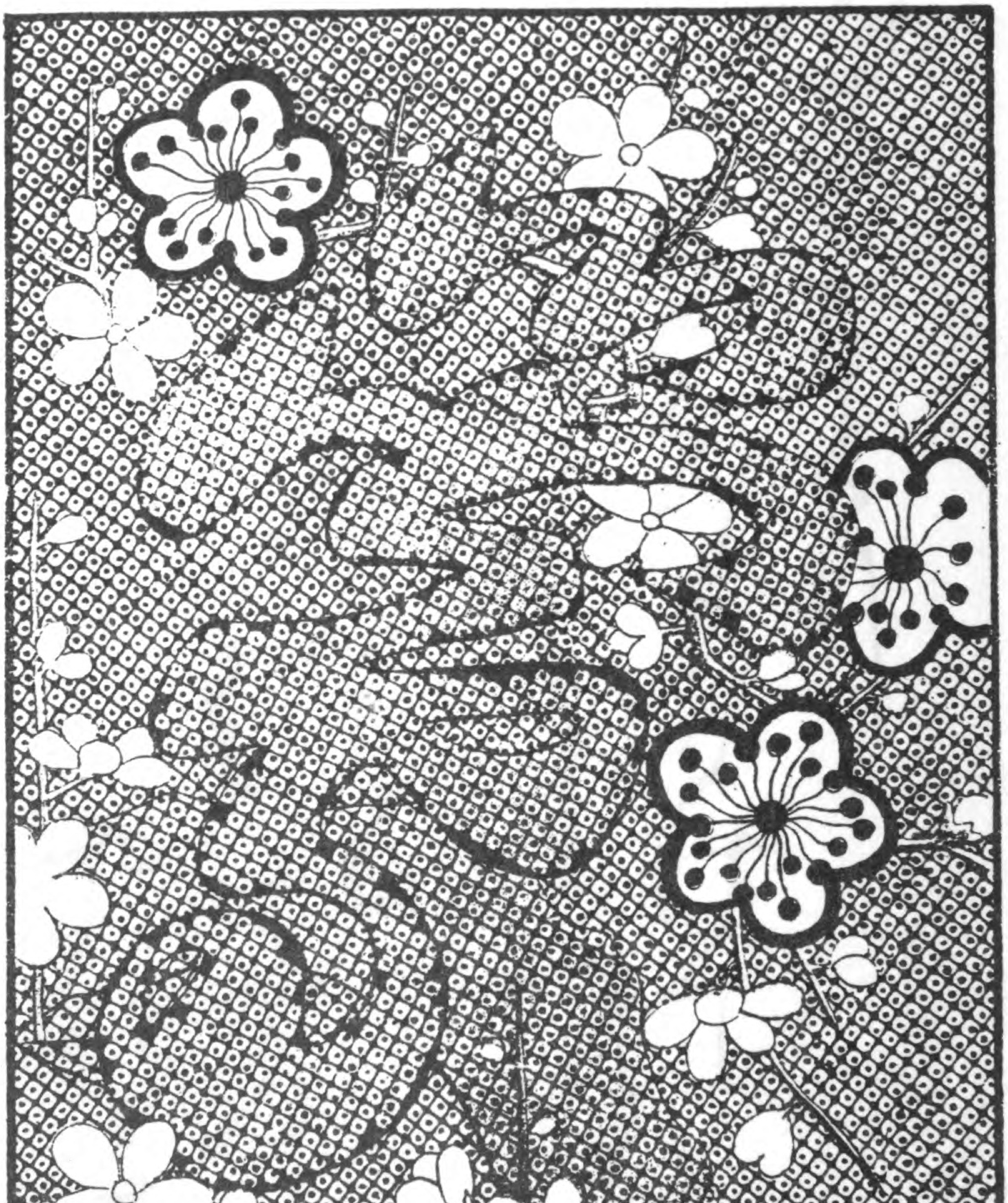
**山本玉川堂**

女流書家宮里三木枝子刀自





女鑑兼題投稿優等者　宮内ちか子



裲襠鶯宿梅摸樣ノ一部分

あさみとり
いとよりかけて
しらつゆを
たまにもぬける
はるの
やなきか

宮里三木枝子書

# 新刊

女子高等師範學校教授 黒田定治先生
女子高等師範學校教授 東基吉先生 共著

## 女子教科 實踐教育學

教育學書の刊行せらるゝもの頗る多し。然れども特に女子用の教育學書に至りては甚だ少なし、本書は多年女子高等師範學校に在りて教授の任に當らるゝ兩先生が今回女子用教科として適切ならしめんが爲めに執筆せられたるものにして先づ筆を一般教育の理論より起して心理學の應用に及び以下家庭教育、幼稚園保育の如き最も詳密を極めたれば、女子教科として極めて適切なるのみならず、一般女子の教育學を學ばんとする人に取りても無二の良書といふべし

定價金六十錢
郵税一冊六錢
製本頗優美

女子高等師範學校教授 東基吉先生著

## 幼稚園保育法

幼稚園教育のこと近來漸く盛なるに至りたりといへども悲いかなこれが原理方法等につきて詳細に記述したる書籍なきを以て日々斯業に從事せる保育者は其人に於ても更に進んで研究發明の參考に資するものなく殊に新に斯道に從事せんと欲する人に於ては遂に以て保育の何たるを知るに由なく爲に百事日新の時に當り我國教育界の一大恨事といふべきなり本書は著者が多年實際につきて研究推敲せられたる結果にして先づ筆を一般教育より起して家庭教育學校教育を詳述し次で幼稚園の必要保育の要旨保育の事項方法等其他一切幼稚園に關する實際の事項は勿論フロェベルの傳記學説等に至るまで一々明瞭に記述して餘す所なく殊に附錄として幼稚園の設備をも添えたれば凡人も本書に由りて幼稚園の原理と實際とに通ずるを得べく幼稚園保育者は勿論小學校教師並に特に家庭の教育に心を用いらるゝ人々に取りては必讀無二の良書といふべし。乞ふ續々御注文の榮を賜はらんことを

定價七拾錢
郵税六錢
フロェベル氏肖像及手技彩色圖形入り製本頗美麗

女子高等師範學校教諭 後閑菊野先生
大山斐瑳麿先生 共著

## 家事經濟學

●總論家、經濟、家事、經濟學、家事經濟學の地位、其特質を述べ●收入論は收入の意義、種別內容を說きて利子勞銀、企業所得等より理想的收入に及ぼし●支出論は支出の意義、種別、內容を叙し、衣食、住其他各種の支出を詳說し又其比例並に原則を示し●會計論は會計の意義、機關、豫算、決算、收支の調理を述べ收入と支出の關係より不足の補充、剩餘の管理に至る迄精に論明し附するに家計簿記を以てし結論に達す

洋裝全一冊
定價金六十錢
郵税金六錢

發行所 東京日本橋區通三丁目 成美堂
東京京橋區南傳馬町二丁目 目黒書店

中流以上の御婦人方に最も適當なる

# 自宅内職

は高尚にして雅趣ある絹絲編物業也

空手徒食は中層婦人界の陋弊なり此弊を打破し國の生産を増殖するは邦家目前の急務也●知らぬ方には教授す●遠方には通信教授の便あり郵券三錢送れ●月收九圓以上十五圓位○多數の支店と特約製造所を有す

東京市神田區駿河臺袋町二番地

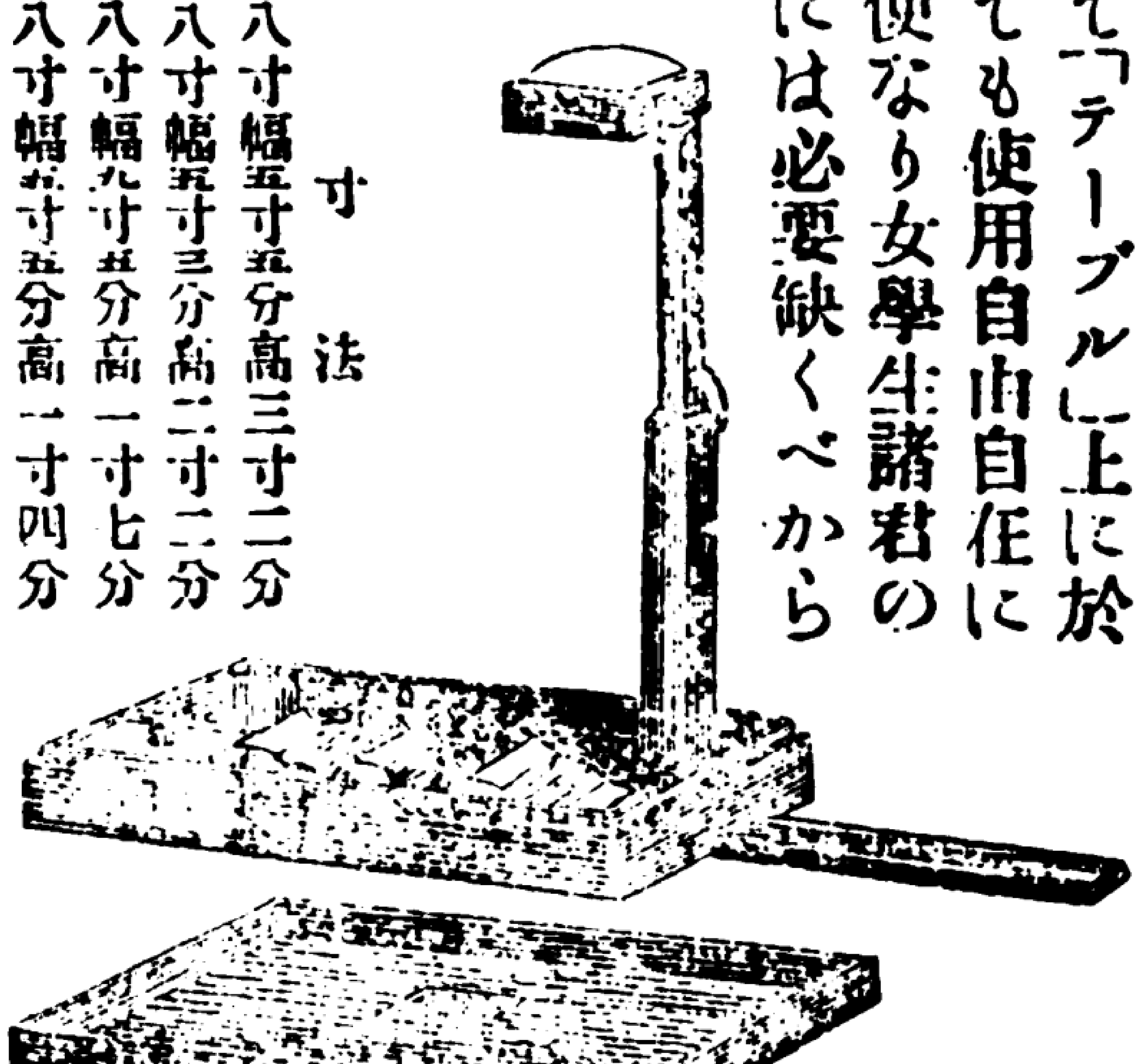
## 石元絹絲編物所本店

---

專賣特許
最新改良

# 携帯裁縫用具

携帯裁縫用具は針差し絲巻ふまへ等は皆此箱の中に疊み仕舞様出來て以て「テーブル」上に於ても安座の時に於ても使用自由自在にして携帯上至極輕便なり女學生諸君の通學及世の旅行者には必要缺くべからず加ふるに體裁優美高尚なるを以て四季の御進物には最適當の良器なり



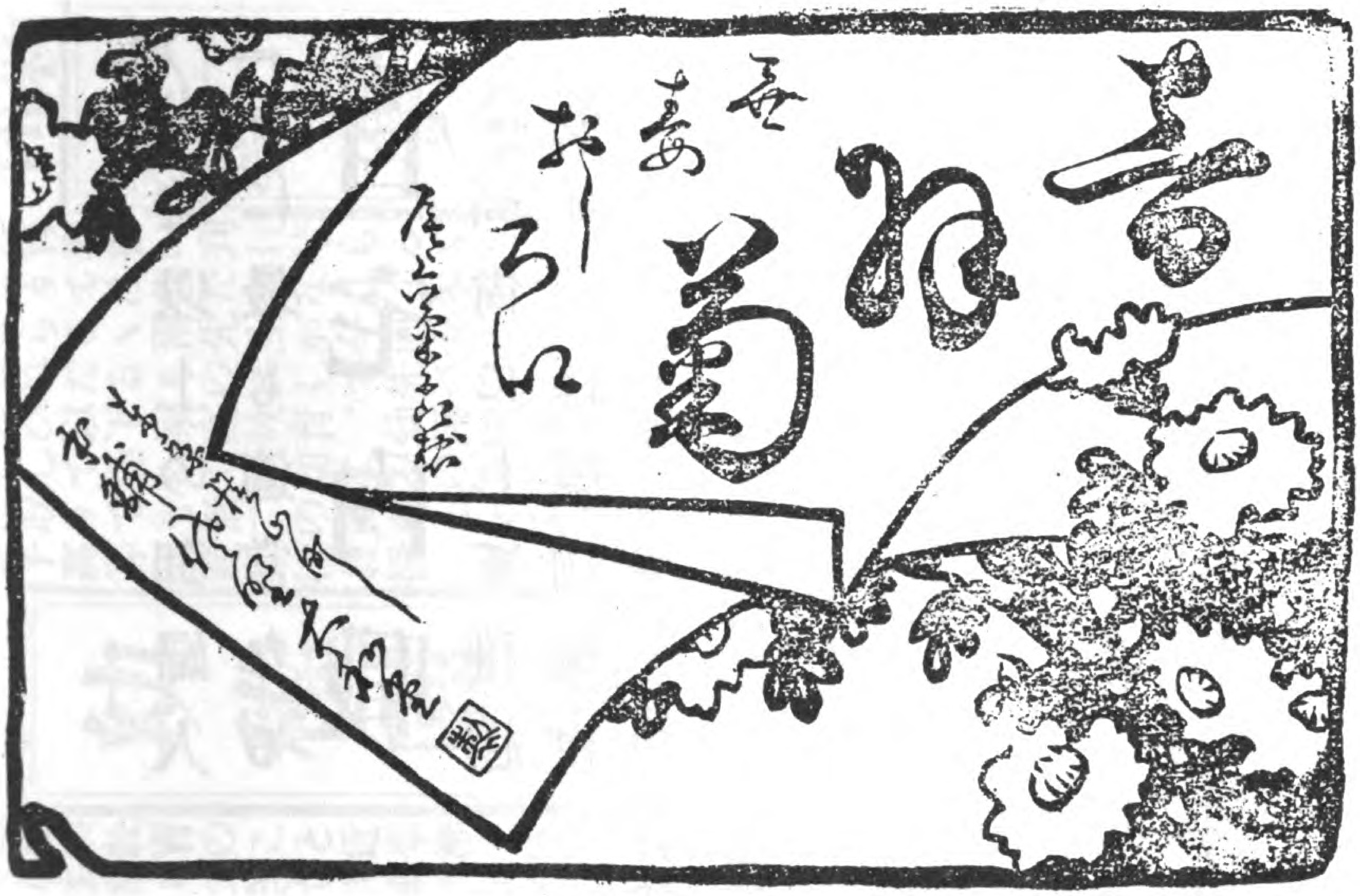
| | 定價 | 寸法 |
|---|---|---|
| 一一號 | 金壹圓 | 丈八寸幅五寸五分高三寸二分 |
| 一二號 | 金八十錢 | 丈八寸幅五寸三分高二寸二分 |
| 一三號 | 金七十錢 | 丈八寸幅九寸五分高一寸七分 |
| 一四號 | 金五十錢 | 丈八寸幅六寸五分高一寸四分 |
| 一五號 | 金三十八錢 | 丈八寸幅五寸五分高一寸三分 |
| 一六號 | 金二十五錢 | 丈八寸幅四寸五分高一寸三分 |

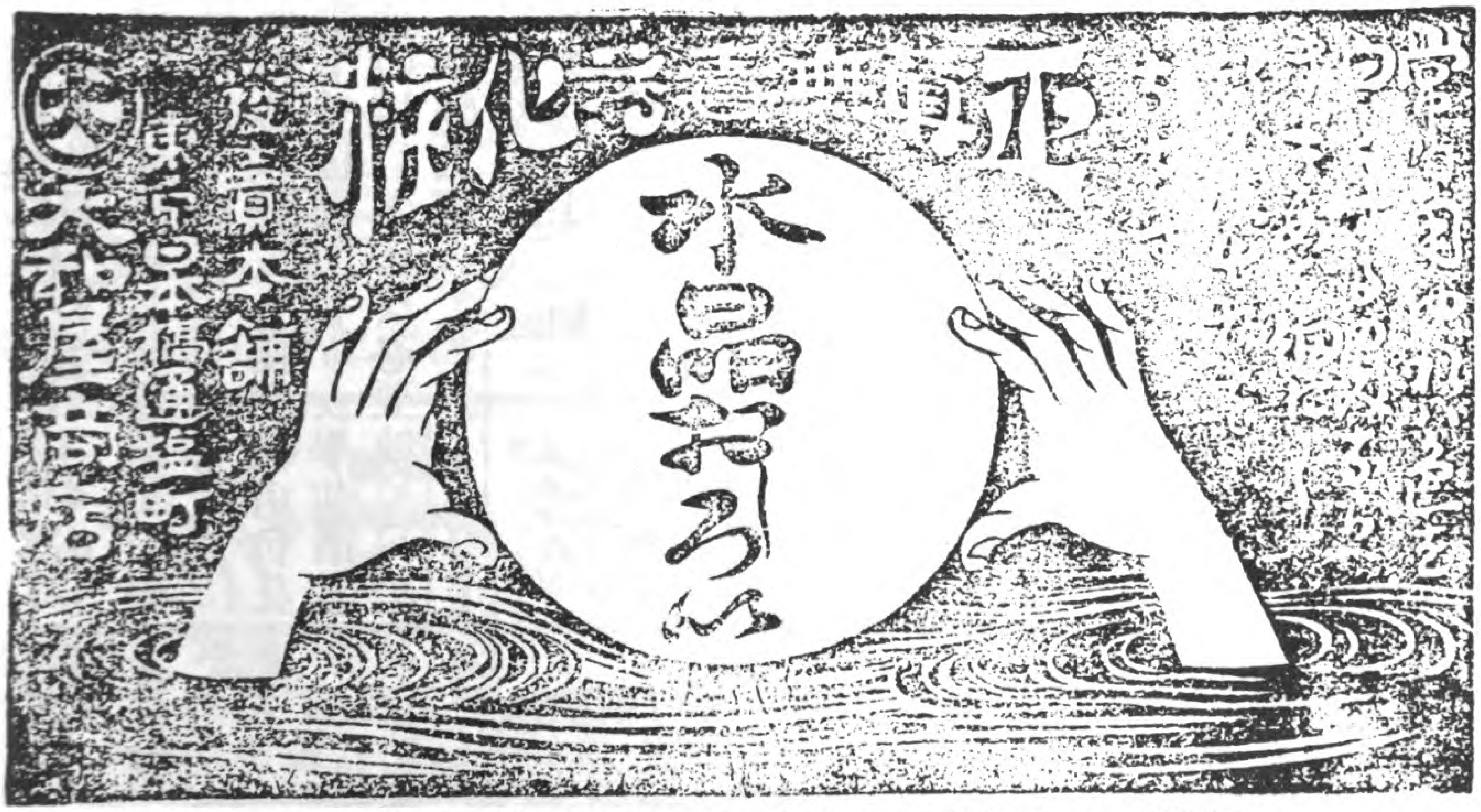
○一號二號三號の三種には蓋裏に小切並に「ツマ」形等を入る「タトー」附

東京市本郷區森木町二丁目五十六番地

專賣特許携帯用裁縫用具
專賣特許ゴム製下駄裝
專賣特許寒暖濕乾計
製造元 Ⓢ 佐藤福次郎

御遠方より御注文の節は代金に小包料を添へ本郷二丁目郵便取扱所へ御振込あれ




定價●金五十錢●金廿五錢●金十五錢●金十二錢




第十五年第參號

# 才女と賢婦

ローランド夫人たらんか、ワシントンの母たるべきか、才媛若し併せて賢婦たるを得ば、之に優したることはあらじ。されど古へより才媛と呼ばれし者必ずしも賢婦ならず、賢婦といふ者また必ずしも才媛ならざるを見れば、如何に文明の今日なればとて、才媛にして賢婦たるを兼ぬるものを求むるも、その類殆んど罕なるべし。

世に謂ふ交際の舞臺上にさかんに持囃されて、容貌人を魔し、才辯流るゝが如く、多くの男兒を掌中に飜弄するの技能は、一個の卓れたる女丈夫ならでは爲し難きところなれば、女流として一代の譽れと見るを得べしといへども、亦一家を齊へて、婦女たるの道を致し、その夫に對しても、その兒に對しても、賢婦たるの實を擧ぐるもの、如きは、縱ひ藉々たる名聲を留めざるも、最上の女性として、眞成の價値あるを認めざるを得ず。

現今の女生は、學校に於て、日に家庭必須の學科を受くると同時に、又た世上の交際に欠ぐべからざる各種の智識をも授かりつゝあり。されば世に出でゝ交際社會に奔走する資格と、家に在りて、一家を經營するの要素とを兼修しつゝあるものといふべし。若しその學ぶところを以て悉く之を他日に實行し得べしとすれば、出でゝは社會

に立ち、入りては家庭を治むるに於て、何等の障礙をも見ざるべき筈なれども、實際に於ては、學問はどこまでも學問にして、實際と相背馳することあるは遺憾なり。

且つ人各々能あり不能あると共に、また各々好むところと、好まざるところとあり、強て其の不能なることを行ひ、好まざることに當らんとせば、遂に失敗に終るを免かれざるなり。社會と家庭とは、婦女子に取りて、必ず兩立すべからざるものとはいふべからざれど、人力には限ありて、社會交際の間に奔走する一方には、一家の經營にも亦鞅掌するは、體力心力の共に許さゞるところなるべし、男子は外に勞し、婦人は內に働らくといふも、畢竟此理より出でたる兩性分業の方法にして、精力強き男子にても、一身にして內外の勤めに當らんか、徒らにその心身を勞するのみにて、外の事の擧らざると共に、又た內の事もその効を見る能はざるべし。况んや纖弱なる女子にして內外兩端の責を一身に負ふに至りては、自ら一方に重きを措き、他方に輕きを加ふるはまだしものことにて、多くは双方共に疎そかになりゆきて、內外孰れもその効を見る能はざるべきは、必然の數なるべきか、故に學校の課業としては、社交に屬するものと家庭に屬するものとの區別なく、一意專心に業を修むべしといへども、何れか將來の目的をば、能と不能とに鑑み、好むところと好まざるところとに省みて、社交の人たらむか、家庭の人たらむかを決定するは尤も必要のことなりといはざる可からず。

尤も今日我國の婦女子は、支那朝鮮の婦女子の如く、生涯室內にのみ籠居すべくもあらざれば、縱ひ家庭の人たるも、全く緣を社會に斷つべくもあらざるは、猶社交の人たればとて、終始交際の舞臺にのみ飛舞

跳躍して全く家庭と關係を絶つ能はざるに等し。故に家庭を目的とする人にありても、社交上の禮義、交際上の知識を知らざる可らざると共に、社交を目的とする人に於ても、また家庭上必要なる諸般の勤めに當るの覺悟なかるべからざるはいふまでもなし。

予輩は凡ての婦人に對し、内を守るのみを以て、その能事なりといふものにあらず。或時は國家に報ずること、宜しく彼のジャンダークの如くなるべし、或時は社會の爲に盡すこと、當に彼のナイチンゲール女史の如くなるべし、又或時は主義の爲め社會の爲に、熱心魔力を振ふことローランド夫人の如くなるを厭はざるなり。されどジャンダークの忠肝と義膽とありて、始めてジャンダークの事を爲すべし、ナイチンゲールの熱誠と義俠とありて、始めてナイチンゲールたるを得べし、ローランド夫人の才色と熱心ありて始めてローランド夫人の働きを爲すを得べし。若しジャンダークに劣る僅かに一等なれば、爭で馬に跨り白刄を閃かして、雲霞の敵軍を蹂躙するを得べき。ナイチンゲールに讓る僅かに一歩なれば、如何ぞ惡疫猖獗の間に立ちて、身命を擲ち、幾十萬の病者を慰撫して、泰然自若たるを得んや。ローランド夫人に輸することたゞ一着ならば、政治集會の首領となりて、交際場裡に跳躍し、その黨員を頤使するを得べきぞ。ジャンダークならざる、ナイチンゲールならざる、ローランド夫人ならざる者にして、敢てジャンダークたり、ナイチンゲールたり、ローランド夫人たらむことを望まば、虎を描いて貍に類するの譏を見るに止まらず、恐らくその身を誤らざるを保すべからざらん。故に女子の天分たる唯一の家庭内守のことを除きては、國家に盡すも、社會に盡すも、交際場裡に立つも、その分に應じ、その力を量りて、然る後之

に當るは尤も肝要のことならざるを得ざるなり。

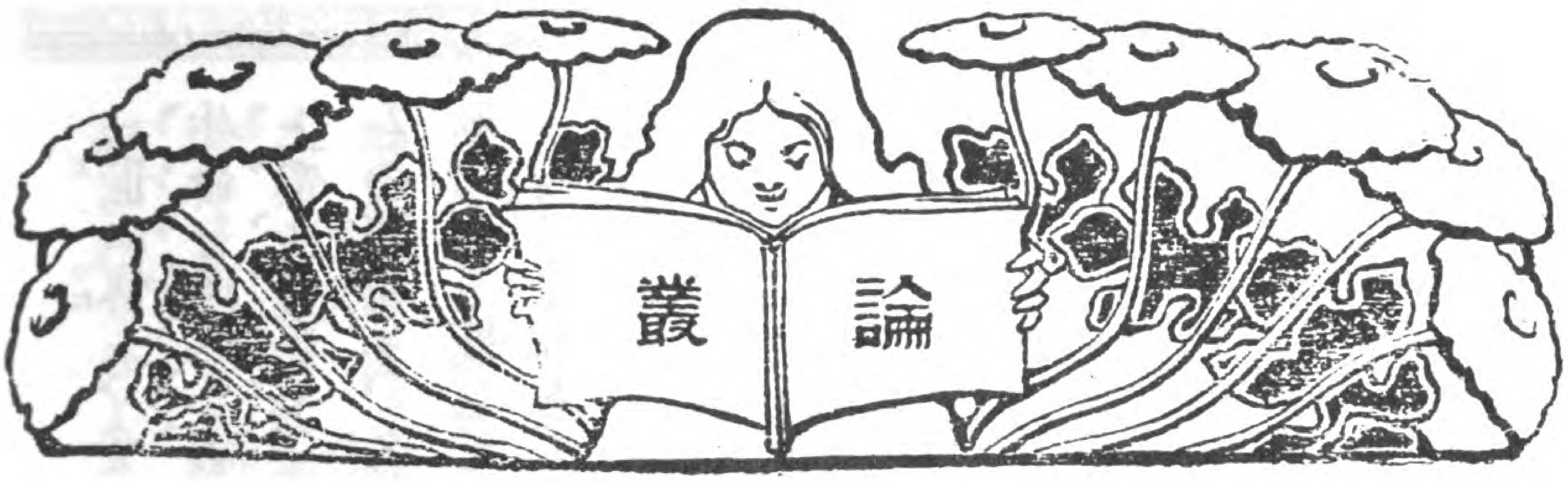
たゞワシントンの母たるに至りては、ワシントンの母たらざる凡ての婦女子も、之を學んで殆んど達し得べく、縱し容易に達し得べからざるも、尙之に近づくこと一步なれば、一步の功あり、十步なれば、十步の益あり、之を龜鑑とするに於て、寸の害なくして、尺の益あり、女子として尤も安全なる道は、實にこゝに在るを忘るべからず。

名と譽とは人の欲するところ、普通の女子といへども、なほ相應の名譽心を抱かざるものは少なかるべし。况して日新の敎育を受くる女子にありては、その學問、智識、男子に比して必ずしも劣るべくもあらざれば、名譽を好むの情は自然甚だ熾んならざるを得ざるべし。されば名譽心の上よりしては、世に識られざるが常なる家庭の內にありて、平凡の生活を營まんよりは、交際場裡に出入して、當世の名士才人と握手し談笑し、あつぱれ才女の名譽を輝かさんとするの情切なるも、また尤なることゝやいはん、料理と裁縫と、仕事と養育とを以て、日々朝夕の勤めとせんよりは、花の如き粧を凝して、舞蹈、演樂の場中に飛翔せんこそ、如何ばかり愉快ならめと思ふもまた無理とのみは云ひ難からん。されどかゝる希望を達し得るものは、千に一もなかるべく、又達し得たりとて、最初に空想したるが如く面白きとのみにはあらで、その裏面には案外に苦しき事情の幾重となく纏ひ來るに驚かざるを得ざるべし。ローランド夫人の刑場に送らるゝや、自由の像の前を過ぎ、悄然頭を低れて曰く、アヽ自由よ、汝の名によりて、幾多の罪惡は犯されつるよと、人生の自由を叫びたる、この一世の女丈夫も、遂にその終りを令くする能はざりき。

世に傳ふ、ワシントンの名を成し功を遂げて、家郷を過ぐるや、その母ワシントンを見て、われは汝に生命を與へし者、又幼き時の導者なり、されば汝の成功は如何に大なるも、名譽は如何に高きも、われは上帝につぎて、尤も大なる尊敬を汝より受くべきものなり、と語りしといへり。實にワシントンは、その運命も、名譽も、みな母の賜ものなりとして、片時も之を忘れざりき。しかも死後紀念碑の成るに及び、たゞ題して「ワシントンの母メリー」と記せり。語は簡なれども、人を感ずること之に過ぐるなし。

女子なりとて、一切政治の事に立ちさはるべからずとの理れはあるべからず。しかも又強て自ら求めて政治に關からんとするにも及ばざるとならずや、女子が女子として盡すべき職分は、他に多々これあればその職分を盡しもせず、徒らに口喧ましく政治の權理のとて狂奔するは、予輩その何の心たるを知るに苦しまざるを得ざるなり。時勢の必要に際し、一朝機會の來るあらば、縦ひ直接ならずとも、間接には女子が政治に關與するの時あるべし。かゝる時に臨みてこそ、十分に働きもし、盡しもせめ、多々ある己れの職分を舍きて、柄にもなきことに立ちさはるは、狂にあらずんば、乃ち愚なり。

ワシントンの母たらむか、ローランド夫人たるべきか。才媛として、名を輝さんか、賢女として、實を擧げんか、是れ心ある女學生が將來の理想上、平素考量して、決定すべき問題ならむ。ワシントンの母たるは安全にして、ローランド夫人たるは危險に、ワシントンの母は學び得べく、ローランド夫人は倣ひ難く、ワシントンの母は學びて損なく、ローランド夫人は倣つて益なし、ワシントンの母たるは能ふべきに近く、ローランド夫人たるは、能ふべきにかたし。予輩は、ワシントンの母たらんことを以て今日の女生に切望して已まざるものなり。




# 戰時恤兵と婦人

三輪田眞佐子談

△婦人の天職

婦人は婦人として天地が自から存するものであります、而してそれは男子に對して存するもので、男は外、女は内といふことに定りて居るので、現時の如き戰役の時には男子は外に出征せられて居りますが、婦人は内に居て之が刺擊劑となることが、其天分を盡すものであつて、即ち天職を全うするものであります。

婦人が内に居て刺擊劑となるとは、婦人が婦人の手で、出征軍人の家族を慰問したり、靴下又は日用品を送るといふ樣なことをして種々恤兵の事をするとであります、これが則ち内から男子を刺擊することゝなるのです、婦人の恤兵動作が大に士氣を勵ますことは、戰地から還つた將士がみな喜んで語る所であります、されば此際婦人が恤兵に盡さるゝのは、軍國の爲めにもなり、又た刺擊にもなるのであります。

△婦人の位地

從來婦人の位地が卑いのは男子の罪ばかりでもないのです、自ら侮りて、他人之を侮ると申しまして、即ち婦人自ら卑しむが故に、卑くなるのであります。而して今は**婦人がその位地を高くする秋となつたと思ひます。**

今や婦人社會は、女子教育の力で却々立派な御方々が出來ました、又這度の戰役には、婦人殊に中流以上の婦人が、大分活動され、婦人の團體が價値を發揚し、爲めに自から婦人の力が社會に認められつゝあるのであります、凡べて事の興るのは、時機といふものがありますから、這度を好機會に、日本婦人の位地を大に高めたいものであります、さうするには婦人が此戰役に對し、今後盛んに其天職たる内からの刺戟、即ち恤兵に盡さるゝことが必要であります。

彼の有名なる米國の獨立戰爭は、八ケ年の間、續いたのでありますが、當時如何に米國婦人方が盡されましたか、其は著るしきものでありまして、歷史上婦人の光を輝かしたる最も大なるものゝ一ッであります、而して米國婦人は之が爲に其位地を高くしたのであります、日本婦人も亦希くは此日露戰役を一新紀元として、婦人の位地を高めたいものです、否今日已に大分高くなりましたから、今一層の奮發が肝要ではありませんか。

### △恤兵の方法

恤兵の如きは、士氣の奬勵に大關係のあるものであつて、戰の勝敗は士氣の如何に依て決せらるゝものであります、萬一出征將士が内を思ふといふことになれば、戰は必らず惡結果となるものです、故に婦人は内から刺戟して、彼等に内顧の感を起さしめず、常に勇往邁進するやうに仕向けねばなりませぬ、而して其刺戟劑中恤兵は甚重要のものであります。

さて此恤兵の事に金を出すにも、婦人の手からでなくては出ないことがあります、男子よりは、婦人の力の方が金を出さするに適當であります、凡そ何等の事業にても、之を經營するに必要なる金錢は、大概男子の手から出すので婦人の金といふものは尠ないです、けれども恤兵とか慈善とかいふ樣な事業であると多

くの場合に於て其金が女の手を通ふして出るものです、主人公は乃公の方には金は無いといつて斷つて了つても、奧樣が承知なさると直ぐ其家から金が出るのです、それから又家政上貯金などは、多く婦人の力に由るもので、且つ一家の富は多く家政上の經濟方法宜しきを得るより出來るものでありますが、是又全く婦人の力であります。

私の方の學校(三輪田女學校)では、紙屑、菓子箱等の廢物利用から、往々意外の金を造りますが、這度の戰役中でも、これで百三十圓の金が出來て居ります、例へば電氣鐵道の乘車切符の如きも、一度に十枚買へば、五錢の金が出て來るではありませんか、此邊は克く注意す可きことです。

恤兵は金が第一です、而して其金を造り、又金を出す可き人は、婦人でありますから、婦人は克く金を造る方法を巧妙にして、大に恤兵に盡されたいものです。

△婦人と勇士

戰地よりの通信に、戰地では女子の手に觸れたものなら、何でも難有といつて感じて居る相です、これは何も卑しい考へから然るのではありません、人間の自然が男子は婦人を慕ふからさうなのであります、其處で戰地では女を畫いた繪端書が大變流行し、之がために士氣が勵まされて居るといふことです、又內地より婦人の音信が一通でも其隊中に落つると、皆打集ひて大喜びに喜んでそれを引張り回はして、讀むさうであります。

されば婦人の力が、如何に勇士を勵ますかは此の一事でも知らるゝのであります、故に大勝利は實際婦人の力を以て、其一班を成功したものといつても、決して差支ないと思ひます、此點から申しましても婦人は盛んに恤兵をしなければなりませぬ。

### △婦人と平和

戰爭は近い將來に於て、平和を招かねばならぬものです、即ち戰爭の最後は、平和の終結であります、而して此平和の上に於ても、亦婦人の力が大いに與るのです。

男子と男子との平和は、外交の力でありまするが、これは矢張理屈的で、權謀術數を其間に挾み、表のみが平和で、心は矢張り鎬を削つりて居ることが多いのですから、眞の美しい圓滿なる平和といふものではありませんが、婦人の力で結びつけた平和は、感情的で、涙の平和です、されば婦人が原動力となりての平和は、理屈的のものではありません、美しい圓滑なる高い感情から來るものであります、愛、同情、四海同胞といふやうな高尙な思想から生ずるものであります、故に平和も亦婦人の力によりて終結して貰いたい、即ち交戰國の社會の空氣が、婦人によりて造られまして、其空氣が人生の美しい高い感情を以て充されて、それから眞の平和が產み出されたいものであります。

婦人が戰時に於ける天職、及び其力は、前に申すが如きものでありますから、婦人は此際盛んに內から男子に刺擊を與へ、同時に其社會の空氣を美にしたいものであります、終りに一言したいのは、日本婦人は開戰當初から克く盡されつゝありまするが、併し日本人は冷熱の變じ易い國民でありますが、婦人は男子に比較すると、容易に冷めない方で、古昔から女の一心とか、執着心とかいふを申しますが、婦人の態度は男子の如く俄かに熱し、俄かに冷めるといふ方ではありません、されば其冷熱の度の烈しい此の國民は婦人の力で絕えざる熱誠を時局の上に捧げたいのであります、希くは婦人が大いに其固有の一心力を此に傾注して欲しいものです。

# 女子と政治及び社會

リギヨル博士談
前田越嶺記

## 女子と政治

女子は仕合せな事には、政治家の資格あるものが甚だ稀であります、蓋し天は女子を政治家として造つたものではないと見えます、若し政治家たる點について資する所があるとすれば、家庭に於て政治家たる良人に報國の義務の觀念を切實強固にせしむるに在りと思ひます、直接政治上の議に參與すると云ふ事は餘りこのましくはありません。

心術陋劣なる政治家の間には、美にして才のある女子を己が野心の機械に用ゐる說が行はれ、又時としては實際斯く用ゐたものもありますが、是れは不道德の手段で、決してほめた話ではありません。

彼の革命の偉人ミラボーは、マリー、アントアネット皇后の勇敢なる氣象に打たれ、感激の餘りに『王「ルイ十六世」には人物なし、唯一人あり、其后即ち是れ』と申したとがありますが、如何にも后のみ王の侍臣中に眞箇の義勇を有つて居つた方でありまして、后はなほ之を圓滿に發揮したのである。

即ち民衆が酒と怒に醉ふて、后の宮殿まで驀入したとき、后は決然之に向つて曰ふには『われは死を恐れず、そは吾母より之を學びたれば、從容として死に就くの日を待たむ』と、后は又其時王子を避難せしめ亂入せる暴民の前に毅然と立ち、手を胸の上に交叉しつゝ、『われを殺せ』と申されました、暴民共は其の大

勇を見て、今が今まで后を殺さんと叫びたる口もて、一齊に「皇后萬歲」を呼號したと申します、歐洲の名ある婦人中には恐くは后の如く勇壯の擧に出でたものはありますまい。后は彼の有名なる澳國皇后マリー、テレーズの公主であります。

女子は政治上に於ても、他の舞臺に於けるが如く、其の淑德の外、眞個伎倆を揮ふ道はありません、直接公務に從事するときには、政治的資格がありませんから、動もすると陰謀奸策を用ゐるの恐があります。

## 女子と社會

昔から淑德と社交術とを有つて居つた者は、いつも社會に重要な天職を盡したものでありますが、現今の社會に於ては尙一層さうだらうと思ひます。

多くの人々に就て考ふるに、社交と云ふものは厭倦の商賣であります。之を賣つたり、之を買つたりして居る、それで「人生の」月日が經過されるのであります。

婦人が家庭に厭倦が來る時に、若も自由に外出が出來るならば、直に人の家に到りて其人にも厭倦を生せしむると云ふのが常であります、能くも知らない事を言つたり、又は言はなくてよい事を言つたり、甚しきは言ふべからざる事を言つたりして居る、故に比較的利巧な婦人となると、暇な時間を利用して、人をも己をも滿足せしむるやうにするのであります。

世に有用の婦人と云ふものがある、十五六歲の女子までも、そを理想して居ります、が、所謂有用の婦人と云ふものは如何なる者を指すのであるか、それを知つて居る者は洵に尠う御坐ります。

社會有用の婦人と云ふは、芝居にも行き、競馬にも加はり、夜會には必ず出席する者を指して謂ふので

はありません、又た一生の間遊ぶと樂むと譽めそやされる「少くも譽めそやされんことを務むる」とで暮す者の謂でもありません、如此き婦人の歷史は三語能く之を蔽ふを得、則ち佛語の「サビイエ、バビイエ、スデザビイエ」で、着たり、饒舌つたり、脱いたりするのである。

然らば如何なる者をか社會有用の婦人といふかと云ふに、德操と榮譽とを忠實に守り、先づ第一之を敎訓と龜鑑とを以て其の子孫に傳へ、次に其が家庭に出入する人々にまで善良なる感化を及ぼす所の婦人を謂ふのであります、是れが實に婦人の社會に對する美にして、大なる天職であります。

世の所謂美人なるものは、世間に多くの騷ぎと響きとを起させる、然し自分の實際占むる位置の部分は洵に僅少であります、彼女は世間到る處に身を顯し、頭を出すが、しかし身後に何の遺跡をものこさない若し强て其の殘つたものをさがせば、香水のにほひばかり。

美人は其の子供に敎育を授けません、蓋しその暇がないからであります、化粧と訪問が是れ其の一生の大事業であるから。

社會有用の婦人は、先づ第一母となるにあります、餘は皆之に隨伴してまゐります、其の自ら撰び、且つ人にも倣はしむる所の主義は、大なれども至つて簡であります、此種の婦人は神を萬有の上に仰ぐ、唯是のみであります、神は上、天に於ては日月星辰の軌道を畫し、下、地に於ては凡ての有生の道を律しました、人生の辿る可き道をも規畫したのである、義務即ち是れであります、之を神の爲に高尙に遂行するのが、即ち是れ人生最榮最大の道であります。

這般の婦人は自ら敬ふ、故に人からも敬はれる、彼は飽迄も其の母たるの權威を失はない、此は是れ婦人が男子の上に占有する唯一の至上權であります、彼は自分の子供に對して母の義務を圓滿に盡して居る

から、其の子供にも己に對する義務を盡さしむる權利を有つて居ります、畢竟是れも亦神の爲なので、「先ず第一神、次に父母を敬せよ」と云ふ主義であります、蓋し歐洲の家庭教育の主義は、兎に角今迄は善良なる人々の社會には、此の如くでありました、即ち何事も敬神の主義の上に築いたのであります。

今日の社會は、此の如き主義思想を目して陳腐と申します、然し是が爲に個人も家庭も昔より善良幸福になつたとは云はれません。

謂ゆる社會有用の婦人は、啻己の家庭をのみ心配しません、出來得るだけ其の餘惠を社會に蒔かんことを務めて居ります、貧兒、不幸なる者のなげきある毎に、必ず之に耳を傾けて避難所と慰藉とを之に與へます、此種の婦人は其の富貴と、衣裳と、裝飾との美の爲に、名高いのではなく、其の貧民や不幸な兒供に對する慈善の爲に名高いのであります。

其の與ふる道は其の與ふる物よりも價があります、何せなれば人に見られんことを欲して與ふるのではなく、人に見られざらんとを欲して與ふるのでありますから、宛も天使が忽然顯はれ出で、又忽然消え失せて了ふが如くであります、故に其の慈善施與等に依估贔負な跡もなければ、又愛憎などの沙汰もありません、是れ右手に施す所、之を左手に知らしむる勿れと云ふ福音の道より出でたるものであります。

要するに此種の婦人の家庭に行ふ所は、社會直に之を取つて利用することが出來るので、其が社會的天職は其が家庭的天職の繼續推移に過ぎません。

此の如き社會的家庭的天職を行ひつゝある婦人は、他に何等の報酬をも要求しません、義務、天職を圓滿に盡したと云ふのが、即ち其の無上の報酬なのであります。

# 獨逸に於ける婦人の職業（承前）

内閣統計局長　花房直三郎君述

獨逸國に於ける男女職業の趨勢は斯樣な工合で、獨り女子の有業者の増加するのみならず、從來男子の職業に屬して居つたものが女子の職業となり、女子の職業に屬して居つたものが男子の職業となると云ふ樣な趣きで、男女に對する職業配當が一大變化を經つゝあるものゝ如くである。從つて此間に於て男女職業上の競爭も現はれて來て、其衝に當るものは可なり之を強く感ずる。然し大體より云ふ時は、女子の勞働は男子との競爭と云ふよりも寧ろ其補充であつて、獨逸の工業の勃興は、男子の勞力を吸集し盡くして尚ほ不足を感ずる。此不足を女子は恰も補ふものである。但し女子の職業は其範圍が甚だ狹い。女子が補充の爲めに通過する此狹隘の道路に當つて居る男子は其競爭を感ずる。乍併一方に於て男子の働くべき區域は甚だ擴がつて居る。從つて男子は其自己に不利なる地を女子に讓つて、自分は他の有利なる職業に就く途も開けて居る。故に此競爭の現象は工業の大發達に伴つた一時的の現象に過ぎぬのである。

女子の職業を觀察するに當つては、副業と家内工業とが最も肝要な問題である。副業に在つては女子が尚ほ一半の力を家事に供給しながら職業を執り、家内工業に在つては、女子は其家庭に在つて職業を執ることが出來るが爲めに、此二者は女子が本業界に侵入するに最も便宜な階梯である。

男子の副業の減少するに反して、女子の副業に從事する數は著るしく增加して來るやうだ。同國副業總件數の百分の三十五、二八即ち百七十四萬六千三百二十六件は、女子が執る所の副業であつて、右百七十四

萬餘の女子の副業件數の中、百四十萬八千二百八十八件即ち百分の八十、六四は本業なき家族若くば僕婢の執る所のものである。又本業を有する女子にして同時に副業を執る者の副業件數は二十六萬五千二百九十七件で、無業獨立の女子の執る副業の件數は七萬二千七百四十一件に過ぎぬのである。

今職業の大分類に從つて、千八百八十二年に對する九十五年の女子副業の增減を見ると左表の通りである

| 大分類 | 一八九五年の婦人副業の數 | | 一八八二年に對する婦人副業の增加 | | |
|---|---|---|---|---|---|
| | 絶對數 | 各大分類の副業總數百に付婦人副業の割合 | 絶對數 | 各大分類の副業總數百に付婦人副業增加の割合 | 各大分類の副業總數百に付婦人副業の割合の增加 |
| A農業 | 一、三五一、五七〇 | 三七、〇五 | 四二八、三〇八 | 四六、三九 | 八、一一 |
| B工業 | 一五三、〇五五 | 二四、七一 | 六二、七一八 | 六九、四三 | 七、〇四 |
| C商業及交通 | 二二一、〇八四 | 三八、八〇 | 一四一、〇七四 | 一七六、三一 | 二〇、一八 |
| D家事僕婢等 | 九、三二九 | 五五、六五 | 二三九 | 二、六三 | 二、四七 |
| E公務 | 一一、二八八 | 一一、八三 | (一)一、〇八七 | (一)八、七八 | (一)一、三〇 |
| 總計 | 一、七四六、三二六 | 三五、二八 | 六三一、二五〇 | 五六、六一 | 九、〇九 |

此表に依て見ても、女子の副業は、公務を除くの外、總ての職業中獨り絶對數に於て增加したるのみならず、男子に對する其割合に於ても大に增加した事が見える。

工業全體に於ける女子の步合は僅かに百分の十八、三七に過ぎぬが、家內工業に於ては其百分の四十五、一四は女子が占めて居る。即ち家內工業は專ら女子に依つて營まれると云ふことは是で知られる。其職業の種類から云ふと、殆ど十分の九以上は紡績、裁縫、洗濯等に屬して居る。其地位より云ふと、獨立の地位に於ても、被傭者の地位に於ても、殆ど男子の數に匹敵して居る。千八百八十二年に對する比較は、調査の方法が異なるから乍遺憾僅に或一部に就て之を測知することが出來るのみである。

有業女子の數の各地方に對する配當の狀態を見ると、有業者總數の百分の二十二、一七より三十七、三二の間を昇降して居る。而して其多寡は主として各地方に於ける職業構成の狀態に因るので、女子の執るべき職業の多少に因て女子の有業者の增減を來たすのだ。殊に農業地方で未だ少農の專ら行はるゝ處では、女子の有業者は最も多い。又工業の勃興して婦人の勞力を吸集する地方も、女子の有業者の數が多い。一二の例外を除き大體に於て有業婦人の數は絕對的に增加して來た。乍併比較的には往々減退した所も見える。要するに工業の發達は必ずしも直に有業婦人の數を增加せしむるものではない。其工業は女子に適するや否やと云ふ事、其工業が勞力の需要を農業に從事する男子に依て補ふ事、而して農業の勞力を女子に依つて補缺し得るや否やと云ふ事は一研究問題である、地方に因つては農業には有業女子の數が大いに增加しても、職業全體に於ては有業女子の增加の甚だ著るしからぬ所もある。是等の事實に依つて、ラウフベルヒ氏は、近世の經濟の發達は一般に女子の勞働を必ず增加するといふ說を駁擊して、更に土地の人口的階級に照らして之を證明せんと試みて居る。今土地の人口的階級に依つて有業女子の比例を見ると左の通りである。

| 人口的階級 | 婦人百人に付有業者 | | 有業者百人に付婦人 | |
|---|---|---|---|---|
| | 一八九五年 | 一八八二年 | 一八九五年 | 一八八二年 |
| 大都會 | 一八、九三 | 一七、六五 | 二三、五六 | 二二、七二 |
| 中都會 | 一五、七三 | 一四、六四 | 一九、八五 | 一九、二八 |
| 小都會 | 一五、三三 | 一四、一六 | 一九、九四 | 一八、八八 |
| 地方都會 | 一七、五九 | 一五、八五 | 二三、二三 | 二一、七〇 |
| 地方 | 二二、九一 | 二〇、六二 | 二八、八〇 | 二六、六六 |
| 總計 | 一九、九七 | 一八、四六 | 二五、三五 | 二四、一六 |

此數は家内に屬して居る婢を除きたる數であるが、大體上婦人の有業者は中都會小都會に最も少なく、地方と大都會とに最も多い。何故なれば地方の職業の主たるものは農業にして、農業は又婦人の重なる職業である爲めである。大都會に於てはDの大分類に屬する家事僕婢、定業なき勞働者に婦人が多く、工業にも亦た婦人を使役する機會が尠なくないが、就中商業及び交通業に關する婦人有業者が多い。尚ほ職業の大分類に依つて區別して見ると、有業者百人に付女子の比例は左表の通りである。

| 人口的階級 | 農業 一八九五年 | 農業 一八八二年 | 工業 一八九五年 | 工業 一八八二年 | 商業及交通 一八九五年 | 商業及交通 一八八二年 | 家事僕婢等 一八九五年 | 家事僕婢等 一八八二年 | 公務等 一八九五年 | 公務等 一八八二年 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 大都會 | 二一、一一 | 一九、五四 | 二三、六四 | 二五、三三 | 二一、六四 | 一六、六四 | 五六、五一 | 四八、七九 | 一四、二四 | 一二、四三 |
| 中都會 | 二六、一六 | 二四、〇二 | 一九、四九 | 二〇、四三 | 二二、八六 | 一七、九三 | 五一、〇六 | 四三、四一 | 八、六二 | 八、一九 |
| 小都會 | 二九、五八 | 二六、六二 | 一七、七一 | 一八、一四 | 二四、三三 | 一七、九〇 | 五一、一八 | 四四、〇八 | 九、二一 | 七、六〇 |
| 地方都會 | 三一、六九 | 二九、八一 | 一七、六〇 | 一六、七二 | 二六、六七 | 一九、六七 | 五四、六〇 | 四六、六三 | 一五、〇三 | 一三、九五 |
| 地方 | 三三、六三 | 三一、〇八 | 一五、三四 | 一四、四六 | 三〇、六三 | 二二、〇五 | 五六、二九 | 四九、一四 | 一七、五三 | 一六、七八 |

此表に依つて見ると、規則正しく斯樣なことが見える。即ち土地の人口多きに從つて婦人の工業に參加する數が增し、之に反して其農業及び商業、交通業に參加する數は減ずる。家事僕婢等及び公務等に於ても單に大都會が少しく例外を示すのみで、大體に於ては有業婦人の數が人口の多寡に轉比例を現はして居る此事實に依つてラウフベルヒ氏は論斷を下して、『都會の經濟の進步は婦人の職業の增加と相伴ふと云ふことは言はれない。之を言ひ得るは唯だ工業に就てのみであつて、其他の職業に於ては其數列の經過は寧ろ反對を示して居る』と言ふて居る。次に又前表の八十二年に對する比較上工業に於ては地方の步合が增し都會就中大都會の步合が減じ、即ち各階級間の差等が少しく平均されたことが見える。此事實に依り同氏

は又一歩を進めて『若しも土地の人口多きを以て經濟進步の一徵候と見ることが出來るならば、經濟の低い發達期に於ては、工業の爲めに婦人が尙ほ多く男子の傍に使役せらるゝと雖も、發達の程度が進で來れば、婦人の工業に從事する數は、縱令絕對數に於ては尙ほ增加の傾きを有するも、男子に對する步合に至ては旣に減少の傾向を現はすと云ふことを前の事實に依て結論することが出來る』と言ふて居る。

夫れからラウフベルヒ氏は獨逸の有業婦人の數を各國と比較して、終りに同國婦人の職業に關する將來の趨勢を論じて居る。各國比較の點は數の批評が錯雜に涉るから暫らく之を省略するが、其豫言の點は頗る大膽であることは同氏も自白して居り、又同氏の著書に對する或る雜誌の批評に『ラ氏の書には往々主觀的の意見が混ざつて居る』と記してあるが、恐らく此等の點に關しての論評であらうと思はれる。乍併夫れは却々の議論で隨分面白いから其大意を摘んで話して見るが、槪略左の通りである。

旣に各國と比較して見ても、婦人の勢力を容るゝ程度は、絕對的に於ても、男子の勢力に對する比例に於ても、各國互に大差がある。更に之を小地區に分析する時は、各國の國內にも亦た大差が存する。其獨逸帝國內に於ける各地方就中土地各階級の差異は旣に論述したる所である。卽ち各國、各地方、土地各階級とも夫々婦人の勢力に對して特別の容積を有して居る。而して此容積の程度は、國民的經濟上及び社會上の發達に因るものである。今此容積の程度の定まるには、二個の勢力が時としては反對の方向に影響する。卽ち一は經濟技術的勢力、他は社會的勢力である。

先づ右の如く述べ來つて、一方には今日の生產技術上の變化、卽ち孤立的家族經濟から各種の生產が分離して社會的生產事業となるに從つて、婦人の家庭に於ける經濟作用は主として消費の整理に止まり、因て又婦人にも社會的生產に從事するの餘地が出來て來たことを述べ、又他の一方には分業の進步就中機械應

用の進歩に依つて新たに婦人を要する事業が起つたとを述べて、而して更に次の如く議論を續けて居る。家族の事務の範圍の縮少と社會的職業を得る機會の增加とは、乃ち婦人の職業に對する二個の前提である。此前提は國民的經濟の進歩するに從つて其度を進めるものである。乍併之は唯だ婦人が職業に就くを得べき道途を得たと云ふに過ぎぬ。其道途をば婦人が果して用ふるや否やと云ふことは、一は勞働市場の狀態にも因るが、又一は婦人の家庭に於ける地位を指定する一切の社會的要素にも因るのである。婦人は恰かも二個の威力が之を得んことを競爭して居るのである。妻たり母たらんとする傾向、風儀及び義務は婦人を家庭に羈束し、彼れを箇人的經濟範圍に限局し、自ら職業を求むることを抑へんとして居る。然るに又他の一方に於ては、家族の收入の不充分なること、分業的に製出せられて貨幣經濟的に購求すべき貨物に對する需要の增加したること、並に縮小したる家庭に於て婦人の勞力を充分に利用するの餘地なきこと、此等は皆婦人を驅つて職業に就かしめんとして居る。此二箇の勢力中孰れが勝を制するであらうか。婦人を驅つて職業に就かしめんとする壓迫の狀態か。若くは之に反する家庭保守的の趨勢か。

此疑問に對する解答は社會の狀態の變遷に依つて定まるものである。分業並に技術の進歩は婦人の勞力に對する近世國民的經濟の容積を增した。故に今日は婦人の勞力は何れの邦國に於ても多少の增加を見ざるはない。然るに英國に於ては最も重要なる事實が現出し來つた。夫れは外でもない千八百八十一年より九十一年に至る間に於て、婦人の工業に從事する數が少なくも比例上進歩せざりしのみならず、若干の重要なる職業に於ては稍減退の傾きが見えるといふ事である。英克蘭及び威爾斯に於ては、男子百人に對して有業婦人は左表の通りである。

| 種類 | 一八六一年 | 一八七一年 | 一八八一年 | 一八九一年 |
|---|---|---|---|---|
| 毛織物工業 | 六〇 | 七九 | 一〇二 | 一〇〇 |
| カムカルン工業 | 一六一 | 一七九 | 一八〇 | 一七二 |
| 絹工業 | 一八〇 | 二〇八 | 二二四 | 二〇一 |
| 木綿工業 | 一三一 | 一四九 | 一六三 | 一五六 |
| レース工業 | 五〇八 | 四七六 | 二八九 | 一六七 |
| 手袋製造業 | 六三六 | 七四五 | 五八六 | 三三四 |
| 紙工業 | 七二 | 六五 | 八〇 | 六七 |

是に依つて見ると、若干の重要なる工業に於て、以前は婦人の數が急速に增したものが、最後の「センサス」に於ては靜止若くは減退の傾きを示して來た。

是を以て見ると、婦人の職業の增加と云ふものは必ずしも社會の進歩に伴はねばならぬものではない。のみならず婦人の職業が最早や增加せずして靜止し、若くは少なくとも男子に對して減退するの時期があるのである。農業に就ては英米兩國は旣に全く此時期に達した。而して工業に於て進歩したる英國は恰も此時期に達せんとして居る。

以上は反譯にあらず唯だ其大意であるが、扨てラウフベルヒ氏は此變化の技術及び社會上の進歩に起因することを述べ、特に賃銀を高め且つ其動搖を少なからしめ、從つて全體の生活を高く且つ安全ならしむる社會上の進歩が及ぼす効力の大なることを述べて、斯樣になつて來ると婦人を職業に驅り入れた壓力は消滅して、而して家庭の保守的勢力が最も勢力を得て來る。蓋し婦人の勞働は男子の賃銀と最も關係を持つて居つて、夫なり父なりの賃銀が高ければ、自然婦人の勞力の供給は減じて來るのである。畢竟婦人の

勞力の急速なる増加、特に工業に於ての急速なる増加は、社會的の進歩が技術的の進歩に伴はざる間の現象であつて、更に文化が進んで其二箇の距離が少なくなれば、婦人の天然及び道徳上の職分と牴觸して、國民の生活に危險であるやうな婦人の職業は第一に熄んで仕舞ふのである。獨逸は未だ此時期に達せぬが然し既に往々其痕迹が認められると言ふて居る。我邦將來の女子職業問題に留意するものは、又深く此間の理法に鑑みて國力の發達を裨補せんことを心掛けねばならぬと思ふ。

（終）

# 米國に於ける女子教育

米國文學博士　山下彌七郎

米國の女子教育の方針は、丁度男子の教育法と同じくして、皆個々別々の嗜好に應じて、專修攻學し、以て、獨立せんとする目的の爲めに、凡ての組織と方法とが成立して居ります、今其の教育法を大別して、物質的教育と、精神的教育との二種に區別されるのであります。

## （一）物質的教育

物質的教育とは、所謂「インテレクチユアル、エヂユケーション」の意味で、精神的教育、即ち「スピリチユアル、エヂユケーション」に對しての用語でありまして、兩者全く相反するもので御座ります、今此の物質的教育の内容を申せば、學校と並に學校に附屬したる諸文藝倶樂部とか、又は諸研究會等が主なるものにて、之を區別すれば、左の通りであります。

## 一、物質的教育

1 普通教育 ｛ A 小學校　B 高等學校　C 師範學校
2 豫備教育 ｛ A 高等學校　B アカデミー
3 專門教育 ｛ A 大學校　B ビジネス、コーレッヂ

### （一）普通教育

#### （A）小學校時代の教育

一般に此の小學教育は、各國共に大差は無いと思ふ、併し亞米利加に於ては、其の根底に於て、全く自由の方針を取り、日本などの如く保護奬勵するの方針とは、其の趣きを異にして居るのであります。

第一米國の自由方針と申すは月謝を拂はない、又書籍もなる可く買はせない、併し時々金錢を與へ、又書籍抔を與へて奬勵すると云ふ譯で、學課の程度、及び課目は、確かに一年程は日本のそれより高くして、又學力も夫れ丈け充分にして、其の修業年限は、日本現時小學制度と同樣であります。

毎週、土曜日曜を除き、毎日午前九時より午後三時半迄の定めであつて、此間は十二時より一時迄は晝飯時間としてある故、都合五時半が課業時間に當り、又一時間毎に、十分間宛の休憩を與へます、而して高等一二年迄は男女混合教育であるが、それより以上になるとツマリ男子が「ベイスボール」とか「フートボール」とかの眞似をなす時代には、自然運動が男女の間に區別を生じて來るのであります。

此の小學時代は、米國にても、學課の如きは自由撰擇を許さないので、即ち一年生は一年の學課、二年生は二年の學課を必ず修めしむるので、其の點は日本と大同小異であります。

### 學校以外の修學

女子は大抵八才よりして音樂を學び、繪畫を習ひ、高等三年頃よりして、高等學校に附屬する料理科を修むることに致します、併し是等は皆女子自身の嗜好に出づるものにして、決して父母兄姉等の奬勵に由りて修めるのでない、又其の音樂の如きは、一週に二回（一回一時間）畫及び料理は一週間に一時間宛として、此の間に父母は、女子の嗜好と、又彼等が技藝の發達とに注意して、詮するに是等に由て成年の婦人となる時に、何か獨立し得べき特種の専門を修めしむる撰擇の資料とするのであります、此の時代よりして、父母は決して女子の嗜好と、彼等の意志の活動とに對しては、毫も檢束を加へず、つまり彼等に意思の發達をなさしめて、積極的に彼等の嗜好を増長せしめ、終に彼等が藝能と技術とに伴ふ科學とを修めしむるに勉むるのであります。

### （B）高等學校

高等學校は、丁度日本の尋常中學と、高等女學校と、高等中學校とを一緒にした樣なもので、其の修業年限が四年で、素より男女混合教育であつて、所謂「コエヂユケーシヨン」の法に據て居るのである。其の授業時間の如きは、小學校と大差なきも、學課の如きは全然相違して、高等學校では全く自由撰擇の方針を採り、而して或る課目は一學期（四ケ月）或は二學期、或は三學期續いて修業し、正科生のみは是非一學期に四課目丈けは、必修課目として、即ち一週間に一日四時間として、都合廿時間丈けは（土曜日を除く）授業を受けざる可からず、是れ即ち「レシテーシヨンアワー」であります、此の外にも研究時間があつて、化學理學の如き學科を修むる者は、實驗時間（ライブラトリーアワー）なるものが附帶し來り、別に一定の規定といふものはないが、其時間は割合に多くして、丁度「レシテーシヨンアワー」の一時間に對し、二時間位に相

當します、而して「ライブラトリーアワー」の二時間は、都合に依りて土曜日に與へる樣になるのであります。

此の學生の中に、正科生と傍聽生との區別があります、後者は如何なる學課を傍聽してもよいが、正科生のみは是非共ラテン語及び獨佛の兩國語の內を撰んで、二年(四學期)以上は是非修めねばならぬ、今假に私が高等學校へ入學したと致しますれば、始めの一學期に、私は私の課目に四つの撰擇をせねばならぬ、先づラテン語、歷史、英文學及び化學と致します、即ち是等の「レシテーションアワー」が四時間になるのです、併し右の化學に就ての「ライブラトリーアワー」は除いて、只其の授業時間のみで、一週間に二十時間となるのです、而して四ケ月の終りに(一學期)其の受持敎授が、其の學期間に於ける成蹟を證明します、併し若し、成蹟が惡くして證明を與へぬ時には、私は學期の定規試驗を受けて、而して後ち證明を貰はねばならぬ、若し又不首尾なるときは、次學期迄別に其の課目丈けを引延べて、敎師の證明書を得るまでは心身を勞する故に、此の不首尾の學課丈は、丸で餘計な修業で御座りますから、つまり成規の四課目以外にやることになつて居ります、以上の次第であるから、怠惰者と馬鹿者とは、餘計な時間を費し、又餘計な勞力を供して修學せざる可からざる次第であります、第二學期になると、別に前學期と同じきものを修むるの要なく、自由の撰擇に任せるが、併し四年間の中に規定の年限丈けは修めるとが必要であります。先述せる如く、化學は三學期とか又ラテン語は少くとも四學期とか申す樣な次第でありますから、夫れ丈け終はれば不可なく、殊更に初學期に化學を採つたからとて、再び次學期まで、之れを繼續するの必要なく、全く自由であります。

運動となりては、女子は男子と區別せねばなりませぬ、何となれば運動の種類を異にするからであります、

之に關しては日本に於けるが如く必修せざる可からずとか、又は體操時間の如き嚴格なる制度の存すると云ふことなく、寧ろ課業以外に一週二回位宛の運動時間「ヂム子ーシムアワー」なるものがあつて、敎師も聘してあるが、全く放任主義であります、併し米國では、女子も男子と同樣體育の必要を大に感じて居るのでありますから、殆んど全體の女子が、皆運動には熱注して居るから、放任するも差支がないのであります。

體操の種類は、日本と大差なきを以て、述ぶるの必要はないが、併し一種の興味を與ふるのは、諸學校の競技運動である、例へば「テニス、バスケットボール」の類が重なるものであつて、其の競技になりますと、實に學校全體が大騒ぎをし、殊に競技者の苦心と、他の男女學生等の狂奔の如きは、日本大學の「ボートレース」位の處であろうと思ひます。

前述せる如く、亞米利加の女子敎育は、殆んど男子と大差はないが、只其の運動が違ふとか、又は女子は料理の方法を講ずる代りに、男子は機械を使用し、製造するの練習をなす位の處で、是等は素より學課の内に包含するものでなく、要するに個人の自由たりと雖も、男女先天的性質上、其の趣を異にするは又止むを得ざることである。

修業時間は、毎日五時間と三十分にして、其の内四時間は授業時間とし、殘り一時間半は、圖書館に於て復習時間に充てられてあります、去れば家に歸りて準備等の煩なく、殊に其の復習時間には、同僚と共に討究を試みるので、此の短時間に於て、比較的得る處が多ひのです、凡て女子は學課と云ひ其他諸事の如きも亦忠實にして嚴密なるを以て、自然學績も良好にして、殊に米國婦人の語學の才を有することは、實に驚く可きものである、彼の「ラテン」語、「グリーキ」語、獨語及び佛語等の熟達には、男子も舌を捲く程

である、併し數學の如きに至りては、到底男子と雄を爭ふことは不可能であります。
原來高等學校は、重に市立であつて、何れも月謝を免じ、教科書を貸與し、貧者と雖も容易に入學することが出來て、普通教育の發達を期せんとするの方法であつて、若しその市區以外の女子で、此の市立校に入學するものには、一課目に付一學期間に五弗(日本の十圓)宛を納め、其他壹弗の圖書館費と、理化學實驗費用として、若干を納付するのであります、去れば市以外の通學生には、一學期廿一弗餘を要します、併し尤も書籍のみは貸與することゝなるのです、

今若し何故に此の高等學校が、尋常中學と高等女學校と、高等中學等を一緒にしたるの觀わりや、と云ふに男女の教育が、殆んど同一であると云ふとで、又高等學校には、大學校に入るの豫備科を與ふるので、例へば「ラテン語」の二年以上、獨及び佛の二年以上と申す如きは、全く大學校に入學せんとするの資格を養ふて以て、重要の目的とするのである、其他經濟、憲法及び論理法等が正科生に課せられて居るのである、是等も亦大學校へ入るの豫備であります、去れば高等學校卒業生は、何れの大學へも入學することの出來る制度である、併しよし大學へ入學せずとも、女子は卒業後、小學校の教員となるの資格を附與せらるゝを以て、獨立の業務に從事することを得るのです、大體貧女學生は多く卒業後一應は女教師となりて學資を貯へ、而して後ち大學校へ入學すると云ふ次第であります、而して其の收入は月に日本の六十圓位に相當するのです。

### (C)師範學校

以上の外、師範學校が設けられて居りますが、其の目的とする處は、單に教師養成所たるに過ぎませぬ、而して其の勢力も、亦微々たるのである、其の學課の程度も、一般小學校の教師に相當するの程度に止ま

りて居るのであります、又同校は市立又は州立にて、月謝は免ぜられ、書籍費も亦悉皆免除されて居るのです、而して此の卒業生の需要は、中々多くして、其全部は皆教師に從事するの勢であります、又是等高等學校師範學校の教授は、大抵大學校若くば大學院の卒業生であります、而して此の師範校生は重に女生徒にして、小學教員は殆ど女子の專有物たるの觀を呈して居るのです。

### 學課以外の研究

高等學校若くば師範學校内には「シセロニアン」倶樂部とか「シェクスピアー」會とか「ホーソロン、デベートソサエチー」等の如き、種々の會合が、一ケ月一回、又は毎週一回宛の規定で、催うさるゝのです、是等の會合は皆研究會で、例へば「シセロニアン」倶樂部の集合には討論を研究し、「シェクスピアー」會では沙翁の作を講究し、「ホーソロン」討論社では、討論演説の稽古を致すとか云ふ樣な風にて、何れも夜分會合に男女混合であつて、之れは實に一種の趣味を有して居ると考へます、時々競爭演説討論が、此の各倶樂部内に催され、有志家及び金滿家は奮て寄附し、以て優等者に賞金を與ふる等實に盛大を極めて居ます、而して時々他州に赴ひて、討論演説を致すことも度々であります、以上の外に音樂、外國語等を學校以外に教師を聘して學ぶものがありますが、是等は大概一週一時間位であります。

亦外に女子高等學校も有りますが、實に勢力微々たるのであります。

### (二)豫備教育

#### (A)高等學校

此の高等學校に關しては、已に普通教育の部に於て、之を詳説したれば、爰には抄略致します。

#### (B)アカデミー(豫備門)

此れは正則の大學校と連絡を保ちて、換言すれば大學校の附屬の如きものであります、其の校長敎師の如きは、大概は大學の敎授助敎授、又は大學院生等を以て、其任に當るのであります、去れば高等學校とは多少其の組織を異にして居ります、此の「アカデミー」は、大學校の入學志望者のみ在學し、高等學校へは、兩面相兼ぬる人々を以て充されて居ります、然らば何故に「アカデミー」に入學志望者があるかと云ふに、第一、年限が短かく即ち三年にして卒業することを得ると、直接大學へ入學することを得るとの便を有して居る故であります、尤も此の「アカデミー」は、多くは私立學校にして、月謝を拂ひ、又書籍も自辨せねばならぬ、月謝は一課目一學期間に五弗宛にして、大概六科目位は必ず修業せねばならぬ、故を以て貧書生には、中々困難である、其の志望者は、重に早く學業を終りたいと希ふもの、又は老書生の如き、金を惜まずに修學し得るものが大部分を占めて居る、故に寧ろ學士博士となる變則の方法である、併し割合に此生徒は高等學校の生徒より威張つて居て、學校以外に於ては、可成大學生と交際を結んで居ります。

## (三)專門敎育

### (A)大學校

大學に入學してから後、始めて女子に彼「ヤング、レヂー」なる一種の好味ある冠詞を附せらるゝので、所謂婦人としての最初の楷段である、先づ年齢より見るときは、十八九歳の頃にして、實に血氣盛なる時代であります、併し大學は割合に六ケ敷、且つ授業講義等は、全く高等學校と其の趣を異にするより、其の一年の苦しさは實に意外との評判であります、それ故校長若くは諸敎授等の慰告が、新入學の大學生に對して設けられて居ります、而して元來授業時間は一週間大抵十七時間、乃至十九時間にして、午前の八時から、午後の六時迄として、毎日十時間宛の積りではあるが、實際の授業時間は、一日に三時間若くは四

時間位の割合であります、併し大概の課目は一時間に對して、二時間位の準備を圖書室に於てせねばならぬ、又女子は一日三時間宛の「チムチージム」の時間を課せられます、課目は全く自由に撰擇することになつて居りますが、皆其の擔任教授の許可を得なければならぬ、故に新學期の開始前大概一週間位は「レヂストレーション、ディス」と申して、相互相談を開き談判をして、其の課目を撰擇するのです、彼の料理法及び家事經濟學は、言ふ迄でもなく女子に限るのです。

又校內に於て、課外に修學會、若くは其他色々倶樂部がある、例へば「パラリヤン」社とか、「デリアン」會とか、青年婦人會とか、又は討論會、演說會の如きもの一週一回とか、一日一回とか開かるゝ、是等の會員は男女相半ばすと云ふ位です、去れば大學に入學してよりは、廣く社交に顔を出す樣になるので、自然學校以外に教師を雇ふ等の必要なきまで、諸般の設備が完全して居ります、舞踏會の如き、又は芝居等の如きも、大概一週間に一回宛位にして、是等は日本にて云ふ舞踏とか芝居とか云ふ野鄙なものでなく、至極高尙で、又趣味を有して居ります、所謂る交際場裡の一の要具であります、運動中「テニス」等の如きは殆んど男女混合であり、彼の「バスケット、ボール」等に到りては、敢て男子に讓らぬ程の仕掛である、大學に入學してより二ケ年間は、是非每週一日に一時間宛の運動(チムチージム)を課せらるゝ規定になつて居ります、而して競技者は大抵二組に分れ、第一を「ファルスト、チーム」と呼び、第二を「セコンド、チーム」と申しますが、第一組が大抵他の大學校の競技を演ずるときに、學校を代表して出づるのでありまして、第二組は第一組の豫備として之に備へ、毎年二三月頃になると、隨分遠方まで出掛け、千哩位の遠地まで押し掛くると云ふ樣な次第で、實に壯大なるものであります、大學に在學中、四年の間に於ける女子の費用は、割合に巨額に達します、夫れは重に交際を廣くするからであります、又女子は金錢の融通が男

子よりも能く付くのであるから、從つて其使用も亦多い譯である、例へば男子が在學中は殆ど一切自から勞して其の報酬を以て、其の費用に充つるに拘らず、女子は自由に父母兄弟の保護の下に在りて、融通が自由なるに由り、勢ひ不知不識の間、其の費用が嵩まるのであります、之れ日本の婦人とは相違する點であります、例へば州立大學で月謝は免除さるゝとするも、少くとも一學期(四ケ月)廿弗位の圖書館費といふ樣なものが入る、又其他廿五弗の下宿料と、洗濯料等を合計するときは、月に四十弗(八十圓)位は要するので、若し又私立大學に入學するときは、一層の費用を要せねばならぬのです。

昔時より女子の爲めに、專門大學校が設立されてありますが、是等は割合に無勢力で、又實際上より論ずるも、却つて男女混合の大學生が、實力に於て優ると云ふことである、彼の先年來「シカゴ」大學總長が、男女教育分立論を唱導してより、一時世上の教育問題となりて、甲論じ乙駁して、其の可否を決するに苦んだが、博士ジョルタン氏の男女兩性の相違を論據とし、男女の混合は、尤も人間社會、若しくは教育界に必要であると云ふ新奇說を出してよりは、最早前說を支持するものなきに至つた譯である、右の如く小中大學を經ての女子教育は、一般に普通と信ずる次第で、又實際立派なる婦人が、養成されるのであります。彼等の卒業後は大抵結婚をするのが普通でありますが、中には教師となり、或は大學院に入學し、或は音樂研究の爲め獨逸に、美術修業の爲め佛國に、留學するものも尠くないのですが、全體から打算すれば極少數です。

(B)ビジネス、コーレッヂ

右の正則大學校以外に、「ビジチス、コーレッチ」と申し、日本語にて商業大學とか、實業大學とか云ふものがあります、之れは皆速成的のものにて、大抵六ケ月にて簿記を卒業し、又は速記術を總るとか、或は

「タイプライター」となる事が出來るとか云ふ樣な、極く實際の事を敎育する處であります、之に入學するものは高等學校を卒業しても大學に入學するの資力に乏しきものとか、又高等學校を卒業せざるも大抵一通りの文通位が出來て、何か實際の學問をヤローとか考へるものであつて、其入學の程度は、至極容易であつて、又便利であります、女子は多く是等の學校で修業して速成書記「タイプライター」帳簿係などの實務に從事するのであります。

此の大學生は、割合に時間に餘裕がなくて、社交に遠かり、學資に制限ある所謂貧乏者であるから、寧ろ學校以外に學修することが不可能であります。

以上述べたる所は米國に於て、女子敎育の物質的又は科學的學修の順序でありますが、之よりは精神的敎育の事を大畧説明致します。

## (二)精神的敎育

米國は殆んど耶蘇敎旨を以て國敎とする位でありますが、實際上に於ては、憲法に於て信敎の自由を許されて居ますから、銘々自由の宗敎を信じて居る、併し矢張耶蘇敎を以て唯一の宗旨として居ります、小學時代より敎師は毎に「クリスマス」の由來を説明するとか、七月四日の獨立祭の理由を話すとか、感謝日に就て説くとか、或は又古來の英雄豪傑の談を試むる等の方法に由りて、以て精神敎育の開發に意を用ゐて居ります、これは皆校内に於ての方法でありますが、校外に於ても、金曜日若くは土曜日には、男女共に相攜へて寺院に詣て、聖書の講話を聽き又は讃美歌の稽古等を以て精神敎育の一助として居るのです。

高等學校及び「アカデミー」又は大學時代になりますと、毎日三十分間位大講堂に於て、校長、敎授及び總長などの宗敎談、敎育談等がありますが、其の講話以前に牧師の聖書誦讀と、讃美歌が御座ります、茲で

所謂學生としての精神敎育を受けるのです、其他日曜日には、銘々の寺院に詣りて、牧師の説敎を聞くを常例と致します、而して寺院より歸りて後ちは、男女混合して散策に、旅行に、殆んど一週の苦悶を散ずるの愉快を求むるので、實に面白き習慣を有して居るのです、私立學校を除きて、官立學校に於ては、其の學校で宗敎を説くとか、聖書の講義などは大禁物であります、去れば個人の信仰を束縛する等の如きことはなく、全く信敎は個人の自由に任せてあるのであります。

極言すると、米國の女子敎育は、良妻賢母たる可き人物を養成するより、寧ろ獨立獨行し得るの學力を作るを以て、本旨と致して居ります、結婚なるものは人間が自然に得る所の義務として居て、決して良緣を求むる爲めに學問するのでないのです、去れば學問は獨立獨行と云ふを目的として、嫁入と云ふものは只其の目的を達する自己の便宜上、又は社會の組織上、自然の義務とするのであります、是等は日本の女子敎育とは、多少其の趣を異にした點と考へます、私は以上の敎育方針を以て、積極的で、又樂天的主義(生活を愉快にする方法)で、個人的であつて、銘々の權利と申すものを以て、自然てふものを制するの方針であると信じますが、日本の女子敎育は、皆消極的で、悲觀的で、義務てふもので、自然に從はねばならぬ樣な方針ではないかとの疑を存するのです、兎角米國の女子敎育は、前述の通りでありますから能く其得失を酙酌して貰ひたい次第で御座ります。

以上はたゞ予が、多年米國に留學中、見聞したり、又た取調べたりしたところのものを記したまでゝありまして、予の意見として述べ、一言も挾まないのでありますから、他日我國の女子敎育と比較して愚見を陳する積りであります、どうぞその御積りで一讀せられんことを願ひます。




# 江戸時代の烈女

西村梅軒

## (其二)藝州侍従吉長の内室

享保年中の事なりとかや、安藝の侍從吉長の内室は加賀宰相綱紀の息女にてありしが、生得勇氣に富みたる武邊の女性にて、乘馬打物の術に達し、殊に長刀鍛鍊のきこえあり、召使ふ女中等にいたるまで、皆々勇氣たくましく、誠に一騎當千の女丈夫なりき。御弟中將吉治また頬骨たかく、色くろく、馬術に達し、器量人に勝れ、武勇第一の大名にてありしが、姉弟の間友愛滿ちて睦まじく、毎日の見舞ひ誠に孝悌の道に適へりと言はぬ人なかりし。この内室は世に安藝の御前と稱へ、その名當時日本にかくれなかりし程の女性にて、吉長との御交情もいと親密なりしかば、子息兩方を設けられ、嫡女は松平肥後守の嫡男大膳太夫正甫に嫁ぎて内室となり、次男岩松(後の刑部少輔伊勢守)もまた成長して智勇世に優れたる武士となれり。

然るに吉長いかなる惡魔に誘はれしにや、その後不心得にも新吉原に通ひ、晝夜を分たず酒色に溺れけるより、内室しかじか意見を加へられければ、吉長も一時は思ひ止まりて身を愼まれたり。されど一度惡習に染みたるためにや、長く謹愼を守ること能はずして、何時の間にか復び足を遊里に入れ、遂に遊女花紫、歌野といふ兩人を請出して、表向きをも憚らず、之を上屋敷に据え置き、公事も疎かに、日に増し彌々逸樂を擅にしたりける。而して又何者の勸誘にやありけん、その後素性も定かならぬ賤しき野良

陰子にまで心をうごかし、己が身分をも打忘れて、その不行跡容易に改まるべくも見えず。因つて内室或日吉長に對ひ『私やうに申上ぐる事、殿のまつたく嫉妬と思召し候はん、されども弓矢神かけ奉りてさら〳〵左樣の所存には御座なく候。殿の不行跡に付何分世上の聞え惡しく、其の上彼の塲所は賤しきものも澤山入込むよし、若し不法の惡徒わざと御名を假り申すこともあらば、將軍家へ對し夫れこそ由々敷大事なり』と、樣々異見を加へられけれども、心最早他に移りたる吉長はこれを耳朶にも留めず、剩さへ芝神明前の陰子を兩人まで請出し、加之ならず、歸國の際國元へまでこれを召連れ行かんとせり。

こゝに於て内室又々吉長に對面して『大名の遊興のあまり遊び女を請出すとは世間例しなきにあらねど、江戸より國元迄御供とはあまり不體裁に候はずや、第一將軍家へ聞えまゐらせても其向き宜しからざる事なり』と公私の利害を說きつゝ種々諫言に及ばれたるを、邪心に惑はされたる吉長聞きて却つて立腹あり、其後江都より國元へ出立しける時、内室にはいとま乞ひもなく發足したりければ、内室は憤怨の情容易に抑ゆべくもあらざりしも、力めて温和の樣を裝ひ、獨り『物見』より恨めしげに之を見送りたるに、遊女陰子はいづれも扮裝美々しく、歷々の諸武士よりも我儘なる振舞にて、さんざめかして出立しぬ。

内室は是に於て局等に向ひ『これ程なる殿の亂行を諫め止むるもの家臣中に一人も居らずとは、いかなる事ぞや、且は無情にも此方を踏付けし給ふ殿の所業こそ憎ましけれ』といへば、局始じめ女中共皆『御尤もなる御道理かな』と恚らぬものなかりける。時に内室は密かに一間に入り給ひ、此度の事變に付、御弟加賀中將吉治へこま〴〵と遺書認ため、惜むべし三十二歲を一期とし自害して相果てぬ。居あはせたる女中等これを見て俄に騷ぎうろたへ廻はる折柄に、局外山澤井、中老豐田等内室を抱かゝへ、直

ちに醫師に氣附をと申しける。内室これを聞きて、『其方達は日比に似合はぬ怯びれ者なり、武家の女性たるもの腹切る程にて、生くべき樣に割るべきか、豫ねて覺悟の事ぞかし、必らず驚き騷ぐとなかれ、いかに豊田介錯せよ』と呼び掛けつ、其の聲金石にも徹らんばかりなり。

内室の凜乎たる臨終の一言に、外山深井豊田の三女は斷腸の思ひを爲して早速追腹切らんと云けるを、内室又これを聞きて、『追腹は天下一統の法度なり且つ其方達は岩松が行末の運命よく見屆けくれよ、返へすへも賴むぞ』と云へば、三女は言葉を揃へて『たとひ御勘氣を蒙むるとも、今の場合御供申さで濟むべきや』と是非へ御免下さるべしと、赤誠動かすべくもあらざる故、内室息の下より『日頃の自分が鑑識いさゝかの相違なし、嬉しきは今の其方達が志操かな、然る決心ならば外山深井は供いたせや、豊田は後に留まり、殘らず介錯して、三十五日も過ぎたる後は勝手にし苦しからず』と申渡されけるより、三女は内室の前に平伏しつ『恩命の程は死すとも忘れ申さず』とて、雄々しく誓約の言葉の下より外山深井の兩女はわれ後れじと匕首を執れば、豊田は涙ながら、介錯甲斐々々しく取行ひけるとなむ。あゝ三女の氣節の壯烈なる、その最後の悲慘なる、憐れといふも愚かなり。

かくて此の凶報をば急ぎて加賀中將吉治に告げられけるに吉治は早馬にて唯だ一人驅附け來り、これはこれはと驚きながら『早速吉長を呼び戻せ、事の理非を糺さん』と烈火の如く憤りて止まざれば、屋敷中上を下への騷動にて、まづ急使を歸國の道中にある吉長へ遣はされたり。その夜吉長は戸塚泊りにて、宿所へ早打の注進到着したりければ、流石の吉長もこれを聞きて驚くこと一方ならず、深く前非を悔いて歸邸したるもの丶、事已に去りて烈婦の怨魂復た呼び戻すに由なかりき。

豊田は内室憤死の後三十五日も經つたりければ、かたく先約を守りつゝ、人知れず私かに菩提寺に至り

内室の幕側に於て美事に自刃して相果てぬ。誠に男一人の不心得よりして思ひも寄らぬ變事を招き、無辜の貞女をして四人までも恨を呑んで地下に入らしむ。男女とも愼むべきは色欲なるぞかし。今も芝の某寺に四基の墳塚並びありて烈女の遺跡を留むといふ。

かゝる行は今日の女子には、固より望むべきことならねど、徳川時代の女子としては、洵に嘆賞の價値ありといふべし。

## (其四)松平伊豫守の女中よそ女

越前の國福井の少將松平伊豫守吉邦は六十萬石の國主なり。吉邦の内室は日野中納言國豊卿の姫君にて御東下の砌り京都より召し連れ來りし女中にそよと云へるものあり。器量好く、天性殊に發明にして、艶なる内に勇氣をふくみ、京家の柔らかなる慣習に引換へて、武勇を喜び、且つ忠孝兼備の操正しく、女子なれども歴々の男子にも勝さりて見えにける。そよ女の親は京都七太夫といひて京都所司代附の與力を勤めたるものなりといふ。

然るに不思議なるかな、その頃吉邦の奥方の長局の廊下に化物棲み居との噂ありて、日暮れ後は誰もむざと通行ならず、據ろなき用事調へに行くにも、女中等彼れこれと言ひ合せ、三四人づゝ連れ立ちて出入することゝせり。そよ女、平素は京言葉の優さしく、姿も手弱かにして見る人皆まことに都女郎よと評しけるほどなりしが、或る時用事ありて、夜四ツ半時頃長局の廊下を唯だ一人通り行きけるに、懸行燈も風にちらめき、吹く風身にしみて、廊下の側なる燭臺行燈等を入れ置く物置部屋より何物かコソコソと足音して、そよ女の行き過ぎたる後よりさも冷たき掌にて顔を撫でたり、振り返り見れば、何かは知らず、身の丈六七尺許りに見え、眼光りさげ髪したる眞黒なる怪物にて、氣味わるくもそよ女を睨んで立ちたり。

時にそよ女少しも驚き騒かず、走り掛つてムヅと其肢を捉へたるに、毛むさ〳〵と生へ居りぬ。化物之

を振離さんとあせりけれども、些とも動かさせず、力限り部屋の方へ引摺り行けば、化物は引かれずと踏張りける内、不思議にも次第〳〵に小さくなり、果は三尺許りの怪獸と變じてキッ〳〵と啼きたり。然れど膽略あるそよ女は聲をも立てず、矢庭に奥の方へ引摺り行けば、怪物も詮方なくやありけん、捉へられし手にポカと喰付きける。そよ女これを事ともせず、片肢を捻ぢ上げ、難なくこれを我部屋の前まで牽き來り足にて障子を明けたるに、下女はこの化物を一目見るや否や、ワッといふ聲と諸共に打倒れぬ。時に隣々の部屋より女中等多く寄集まり來りたれど、皆これは〳〵と驚くばかりにて、別に詮術も知らざりける。

この時そよ女はいと落付きたる態にて、他の女中等に對ひ、『奥方の家老衆、用人衆たる男達を呼び來れ』といふに、下女等やう〳〵走り廻りて、早速男子數人駈付け來り、何の猶豫もなくこの怪獸を踏倒し縛り上げたり。かくて吉邦並に内室にもこの由申し上げゝれば、いかなる怪物か牽き出し見よとて、御夫婦燭臺立てさせて之を檢分せらるゝに、面は眞圓にして、髪はかふろの如く生ひ垂がり、鼻尖り、口は耳の根まで裂け、惣身に毛生へて、身の丈四五歳の兒童の如く何時の間にか着たりけん、吉邦の羽織を着し、帶には段々染の手綱を結び、扨て〳〵何とも知れぬ怪物なり。この怪物剛やある鳴くやするとて打たせ見るに、唯だ擲かるゝ時、時々キッ〳〵と啼出すばかりにて、憎らしくも人の顔を眺め居たり。吉邦もいと不思議に思ひ『明日家臣中の古老のものに見せ、其の上乾度成敗致さん、今夜は嚴しく監守を爲せよ』とて、早速唐犬を入れ置く籠の中に押込め、その夜は大勢の男子來りて監守を爲しぬ。扨て『そよ女は近來稀なる女性なり。その心掛け天晴れ武士にも恥ぢず、末頼母しく思はるゝ』とて、褒美として吉邦より大小を賜はり、奥方よりも小袖二重卷物など種々の頂き物ありて大に面目を施しける。かくて夜も明け、漸う〳〵東雲の頃にもなり、少し

の油斷もなく見守り居たるが、この怪物いかなる隙術を有し、何時の間にか逃げたりけん、縛り纏げし縄許り殘して、形體全く消え失せて見えずなりぬ。然れど其の後は、再び長局にかやうの怪物現はるゝ事なく、人々皆安堵して往來することを得たりと、是れそよ女が勇氣に怖れて怪異の影を斂めたるか爲めなりといへり。

その後内室濕の疾病の痛み癒らず、函根へ湯治のことを願はれしに、早速許されければ、威儀堂々と二本道具の鎗を持たせて出立しける。抑も内室の母堂は鷹司の關白房輔公の息女にて、その母は毛利秀就の娘、又その母は越前中將秀康の女なりと。將軍家には代々柳葉の槍と稱へて紫の中結ひしたる槍ありこれは昔日秀忠公御養子を他家へ遣はされける折讓られたるものにて、毛利家を始め越前家、上杉家其他にも備へ置き、内室旅行または出火等の折柄は、打物の外必らず此槍を持たせられける。斯くて内室濕治行の御供にそよ女を召連れられたるが、そよ女旅中の扮裝いかにと見れば、不似合にも小具足に身をかため、小手臑當を着して、上には大小しほらしく差しこなし、立場休息の折ふしは、内室の乘物の側にひかへ、宿直の夜は勿論少しも油斷せず、終夜内外のことに意を留め不寐番をば勤めけるとぞ。

そよ女の服裝何となく平日と變りて、袖口より具足の金物小手など輝らめき見えけるゆゑ、内室の家老何某そよと向ひ『其方の扮裝あまり仰々しきことなり。今日天下泰平の世何事かあらん、かゝる仕度無用のよし』申しければ、そよ女これを聞きて『是は御上樣よりの仰事に候や、または御自分樣の御了簡にて候や』と問ふ。何某應へて申しけるは、『否上樣よりの仰せ事にては無之候へども、自分同役の者ども、其方の扮裝はあまり仰々しき事なり、仔細尋ね見よと申すにより聞き糺すまでなり』と述ぶれば、そよ女重ねて申すやう『這は珍らしき御尋ねかな。總じて高家の御前樣、御近侍には、男子のむざと近寄らざるものなれば、何分外面より見えぬもの

なれば、臆病男にても曲事の行はるゝやに存じ、婦女をばいとゞ馬鹿にするものゆゑ、若しもの事もやと思ひ、身を堅めまゐらすこと、御不思議に思召され候や、銘々の心掛け次第にて苦しかるまじと存じ候、今日たとひ天下安泰の折とは申しながら、事はつねに不意より起るもの、今若し狼藉者數人拔きつれて内室の旅宿に襲ひ來ることもあらんに、御近侍の婦女ども皆素肌にて相濟むべきや、平日屋敷内にてならば、この身堅めも不相應にや候はん、旅行の先にて油斷あるほど危き事あるべからず、變事の時として家來の内より不意に起るまじとも限らねば、各方は兎も角も、自分に於ては、奇を好むにはなけれど、屹度御側に宿直仕つる覺悟に候へば、扨てこそ斯様に武装致し候」と言葉爽かに述ぶれば、家老何某一言の返答にも及ばず『御尤もの次第なり』とて其儘引込みたりける。

後日吉邦この事を傳ひ聞きて、そよ女の才智と勇氣とに感嘆すること一方ならず、誠に甲斐々々しき振舞なりとて、數々御褒美に預りたるが、其の後同人をば前田將監といふ千二百石取の武士の妻に定められ、琴瑟和合して末ながく家門榮え、いとめでたき春秋を送りけるとなむ。

## 女學者

### ルラ、マリア、カザリン

藤野あまき

眞成の英雄すら賤業を耻ぢずとさへいふなるに、今の女流の中には、動もすれば學問と家政とは、全く別物の如くに心得て、學問の爲には、世にも、家庭にも遠ざかるが常と誤信するが多く、或は左までには思はずとも、學窓螢雪の勉めを積むが中には、知らず識らず、女生の天職を忘れて、家事家政と遠ざかりゆくものあるは嘆かはしき限りなり、凡そ裁縫、料理のことは、婦女の自ら進んで當るべき當然の職務なるに、それすら他人に任せて手を下さず、

己が生みし子女の教育をば、教師を雇ひて之に任せ已れは少しも之に關らざるが如きは、過れるもまた甚だしきことにして、全く婦女本來の職分を忘れたるものといふべし。

學問と家政とは、決して調和し得られざるものにあらず、智識愈々高くして、一家を治むること愈々巧みに、身を家庭に入ること、愈々深くして、心を學術界に運ぶこと、愈々切なれば、家事のよく擧がると共に、學問の造詣またその薀奧に至るを得ん、これ今日の女生に向つて、予の切望して已まざるところなり、若し予の言を疑ふ人あらば、ルラ、マリア、カザリンに就て見よ、蓋し思ひ半に過ぐるものあらん。

有名なる女學者ルラ、マリア、カザリンは一千七百十一年(我が正德元年)伊太利の「ボログナ」に生る其家素と貧しからざれば、生計に逐はれて、思を勞することもなく、また敢て富めるといふにあらねば浮華なる遊びに耽けりて、心を奪はゝこるともなかりき、ルラ天性穎悟敏達にして、一を聞きて、十を悟るの才ありしかば、夙くもドン、ロレンゾといへる司祭に識られて、六七歳の頃より、拉丁、佛蘭西の兩語を授かりしが、たゞ理會し、飜譯するのみにあらで、いと流調に語りもし、又認むるなど、人の及ばざることをすら學びたりき。

いくばくもなくして、ルラの學問は、驚く許りの勢もて上達しけるが、醫科大學の敎官タクコニ氏といふは、兼てよりルラの家と交り親しかりしかばその兩親に說き勸めて、ルラをして暫く家事の務を棄てゝ、ひたすら學問にのみ身を委ねしめむとせり、兩親も初めの程は異論なきにあらざりしが、遂にその切なる勸告に隨ひて、ルラをば遂に專ら學術に勉强する身となしぬ、かくてルラはタクコニの意見により、先づ論理學を修め、それより心理學、理科學に分け入りしが、その頃敎師の專門的智識とては、僅かに學校にて敎ゆるところのものに過ぎざりしに、ルラの深奧なる天才は、かゝる淺薄なる一片の講義

に限らるべくもあらずして、自ら學術を研究し眞理を發見するなど『ボログナ』の學者連をして、後へに瞠若たらしめしぞ、驚ろくべけれ、されば此地の紳士等はルラが學術修業のかくも上達するを見て、感心の餘り、その婦女子に稀なる學術をば公衆の前に演せしめて、世をも人をも驚ろかさんと企てけるが、之に先だちて、少女が果してかゝる試みに堪え得べきや否やを試驗せんとて、修道院長トロムベリ、博士ザノッチの兩氏を選びて、此事に當らしめしに、何れも少女の卓拔なる才力を認定し、その異能を世に示さん爲め、遠慮なく公衆の前にあらはるべしと勸めたり。

されどルラは性質謙遜にして、浮虛なる一時の譽れを求むるを厭ひしかば、人中に立ちて、誇り顏に已が修めたる學術を示すが如きことは、本意ならずとて、言を盡して痛く拒みたれども、教師を始め其他の人々の熱心なる勸告に動かされて、今は已が意地を立つべくもあらずなりぬ、千七百三十二年四月十七日アンヂアニの宮殿に於て、公會は催ふされ、當時の風習によりて、哲學上の討論は開かれぬ、ルラは妙齡方に二十二歲、場内狹しと群りたる貴族淑女、さては學者宗教家等の前にあらはれて、晴れの舞臺の上に登りしが、普通女子の習ひとして、かかる場所には、その言語擧動自ら亂れて、思はぬ失敗を取るが常なるに、ルラは神色自若として、少しも平生と異なるなく、その博識にして、渉獵の至れること、又拉丁語の流麗優雅なると、不思議と思はるゝ許りにて、感嘆賞讃の聲は場内に響きわたり暫らくは鳴りも已まざりき、かくて此の公會は好結果を以て終りしかば、その翌日ルラは大主教ラムベルチニ氏に招かれて熱心にその成功の祝福を受けしは、ルラに取りて尤も名譽とせしところなるべし。

然るに昔しも今も同じことにて、縱ひ學問深奧該博なるも、博士學士の稱號なくては、學者として通用し難きが習なれば、ルラは此の稱號を得んが爲めに復び學校に入りて研學すること一年、明くる年の

五月十二日に試驗は始りぬ、此時博士の候補者たるルラは夥多の淑女達に伴はれて、試驗場に入りしが應答流るゝが如く、成蹟尤も完全なりしかば、此頃の例によりて、月桂樹もて粧はれたる銀冠は、博士バッザニ氏の手によりて、ルラの頭にかざされ、又た博士の徽章たる上衣は其の身に纏はれぬ、その翌日カルチナル、ボリグナック氏の求めによりて、祝筵は開かれしが、此日集まれる人々の中には、非凡異材の學者ありて、ルラが學術の底をたゝかんとて、種々の手立もて試みけれども、誰れ一人として、ルラを屈服する能はざりしは、此の學者等の學術の未熟なるにはあらで、ルラの修業の多方面に渉りて、機智鋭どく、理解力の強き故なりしと知られし。

其後最高の名譽はルラの身に與へられぬ、そはかかる稀代の少女の此地にあらはれしは、土地の譽れなればとて、愈々學術の研究に、身を委ねしめんが爲め、年金を給せられしこととなり、さればルラの名聲は次第に世に聞へ、或は訪問を受け、或は集會に臨むなど、寂寞たる學窓の生活に引かへて、今は繁華なる交際場裡の人となりしが、この折端なくも著名の醫士にして、大學の教官たるヴエラッチ博士に邂逅して、互に思ひ思はるゝ中となり、赤縄遂に結ばれて、目出度く結婚の式は擧げられけり、既に一たび他家に嫁して妻となるに及びては、家事に當らざるべからず、家政を掌さどらざるべからず、家庭の責を一身に負はざるべからず、ルラ果して妻として又母として、夫に事へ、兒を育て、家事家政の務めを自らして、その一家の譽れを輝やかすこと、學者として成功したるが如くなるべきや。

ルラの一生は洵に世の女學者達に向つて、よき教訓を與ふるものなり、ルラは其後多くの子女を擧げたるが、母としての注意養育隈なく行屆きて、一點の非難をも止めず、又夫に對する情愛の深く細やかなることは世の妻たるものゝ龜鑑ともすべく、且つ一家の主婦として、常に儉約節制を守ると共に、夫の知人、已が友などを歡待するに厚ければ、世間の

評判も最とよくて一家の歡樂と幸福とは、殆んど限りなきまでとなりぬ、されどルラは、其間にも猶ほ學術の研究を怠らずして、暇ある時は常に研學を常とせしかば、大學に於ける博士等の中、誰一人として理科學、論理學などに於て、ルラに肩を比ぶるものなかりき、其後廿八年の長き間、その家に在りて研鑽に研鑽を積みて、益々學術の深奥を究めしかば遂に大學の教授に撰ばれ、實驗理科の講座を擔任することゝなりしは、女子として、無上の光榮とこそいふべけれ。

ルラの學術に於ける成功は、古今に渉りて、其類寔に稀れなるべく、その才智學識の卓拔なること、男子に比して毫も遜色なしといふべし、しかも一たび人の妻となるに及びては、よく婦人の道を盡して良婦といはれ、賢母と呼はれたること斯の如きを見たらむには、今の女丈夫を以て自ら任じ、やれ集會の政談のと立騷ぎて、徒らに虚名を釣るを以て、此上なき光榮と誤想する式部達、爭で赧然として恥ぢざらむや、されば學問はどこまでも修めたまへかし、たゞ婦女本來の道なる家庭の務めをば、ゆめ忘れたまひそ。

### △春のお化粧

すべて化粧は四季夫々手加減のあるもので春の暖かい日に逆上性の者が濃化粧をすると兎角艶を失つてその上斑の出易いものである、であるから春の化粧には先づ熱いお湯で顔を洗ひ夫から少しさめたところで首筋から耳の後は白粉を濃く鼻口のはたは中伸にして眉刷毛で額から伸し始めそれから鼻と口元の四方を掃きておしまひにその餘りで目のあたりを掃くのが良い又鼻と口元は隨分濃くして頬は中位の方が良い夫から目のあたりは成るたけ薄く塗り紅を少し掌にうけて眉刷毛でまぢりと眉間をうすつりと桃色に塗りて眉刷毛を湯にひたしざつと水をきつて額から目のあたり頬の邊を掃いて仕舞ふそれから鼻を除けて濡れ手拭でそつと押へさて乾いてから眉刷毛に白粉をつけて鼻と口のあたり丈を掃いて肌へ白粉のにじむやうにすれば美し、艶が出て逆上ても斑になるやうな事はない又同じ春の化粧でも花見等に外出する時は座敷の中で見るのとは違ひ日光を浴びたところを見られるのであるから濃化粧にすればどうしても粉がふいて見つともなく只艶の無い許りでなく何處となく下品に見えるそうかと云つて餘り薄くすれば光線の工合や又花の下では顔の色が赤黒く見えて縹緻を損ふこと大概では無いされば出ず入らずの化粧が一番良いので首筋や耳のあたりは隨分濃く白粉を伸してよろしい

講義

# 長歌の初歩

下田春興

●長歌●とは短歌に對して稱した名であります。いにしへは歌と申せば長歌の事でありまして其の他のはわけて短歌とか旋頭歌とかいふやうに申しましたのであります。然るにこの頃歌といへばたゞ三十一文字のみもてあそんで長歌を詠まうとするものゝなきは何故でありましやう、長歌は決して用なきものではありません。入込んだとのうへを詠むには長歌でなくては盡くされませぬ。(新體詩といふものあれどこは所謂俗謠にひとしきものなり、これにつきては又言ふ所あるべし)盡くされないのみではなく長歌に疎い人がくだ〳〵しく端書をまうけなどして強て短歌によみなしたのは其の人の技量の程も思ひやられてあさましいことであります。歌といふものは物にふれて感動するあまりに發する聲でありますから其の大きな事に對つて詠まれないはむねたる歌ではありまずない。それ故色々端書して強いて詠んだのを見ると古人ならこれはかならず長歌に詠むべきであるをとすぐ見くだされて其の事の欠けたのよりも其の人の淺い心が見えすくものであります。おもふに長歌を詠む人のないのは長歌はよほどむづかしいものとひが心得せられて居る人が多いからでありましやう。長歌と申しまして必しもむづかしい古言をつかはねばならぬと云ふわけのものではありません。普通短歌に用ふる辭(桓武天皇遷都以來平安時代を通じて鎌倉時代の言葉)でよいので短歌を作るとさしてかはりはありません。いはゞ短歌は學びやすくて上達しにくゝ、長歌は學びにくいが上達しやすいとまづいはゞ言ふので、つまり孰れが學びにく

へて孰れが學びやすいと云ふものではありません。然し短歌は昔から世々にすぐれた歌人も多く出でましてめづらしいたくみおもしろいふしも言ひつくしましたから今はどれほど考へても皆古人の跡のみを踏んで居て新らしく言ひ出すことはむづかしい事でありましやう。たゞ長歌は古今集のころからこのかた是をむねと詠むで居る人もなく、ことなる節をいひ出でた人もなく世々に歌數も少なうございますから古への人のおもひのこしたたくみも言ひもらしたふしも多くあるでありましやう。かく下りざまの世にしてめづらしいあたらしいことを一ふし詠み出でて古人にもはぢないわざをなし得やうといふものは、たゞこの長歌であります。この事はかねて村田春海翁も委しく言はれたことであります。それにもし長歌が盛に行はれたならば、其の効は獨、歌學の上のみではなく文章をも進歩せしめ我が國の文學をして益高尚な地位に達せしむることを得やうと存じます。

●●長歌　は其の句數の定まりがありません。たゞ五七、五七と句を重ねて終りに五七、七、の句で結びましたのを常といたします。然し句數に定まりがないとは申しましても必七句以上即ち五七、五七、五七、七、の四十三音餘のものでなくてはならんので長いのはいかほど延長くてもよいのであります。萬葉集に

　いひはめど(五言)うまくもあらず(七言)あるけども(五言)やすくもあらず(七言)あかねさす(五言)きみがこゝろし(七言)わすれかねつも(七言)

といふ歌があります。これは長歌の最も短い格であります。然し長歌は必ずしも五文字七文字のみには限りません。五字句を用ふべき所へ四字又は三字句を用ひ、七字句を用ふべき所へ六字或は五字句を用ふるといふやうなこともあります。又五字句の所を七字に七字句の所を八字に述べたのもあります。古事記に

　やまとは(四言)　くにのまほろば　(七言)たゞなづ

く(五言)あをがきやま(六言)こもれる(四言)やまとし(四言)うるはし(四言)

といふ歌があります。これは三十四音しかありませんが前に申した如く五七、五七、七、の七句の格にいひのべた四十三音のに位するものであります。この變格時としましてはおもしろく聞える事もありますが、しかいはではかなはざるものゝ外はなるべく定格にいふがよろしいのであります。それをやゝもするとわざと變格の耳遠き詞をさぐり出して、こはごはしい歌をいひ出して驚かさうとするのはまだ長歌の眞意を知らぬ故であります。

**長歌の句數**　はいかほどにも長く言ひつゞけてもよいといふことは今申しました通りでありますが長歌といひますとやたらに長く詠むのをよきことゝひが心得してさまでもない事にこれもかれも取りこんで強いて長く言ひつゞける人もありますが長歌と申しましたからとてやたらに長いのがよいと云ふわけではありますまい。彼の挿花でもつたない枝を十七本も十九本もならべるよりはおもしろい枝を唯一枝なげ入れた方がはるかに見どころがあります。長歌もこのわけて必ず句數が多くあるからよき歌、句數が少き故にあしき歌といふものではありませぬ。輕きことと又一すぢなることはおのづから短く重きこと又入込んだすぢはそれに隨つて長くもなるものであります。古への歌を見ますと大抵十句ばかりから二十句あまりの歌は多くは短歌旋頭歌に詠まばよまれるほどのものもあります。こは調をいたはり句をあやなして長歌にしたのでありますからわけてうるはしく聞きなされるものであります。此の以外のものも短歌に詠まれるかぎりはなるべく短歌に詠んでよし長歌に詠むにもはぶけるかぎり句をはぶいて贅語のないやうに心がけねばなりませぬ。

**長歌の句法**　は前に申しました如く五七、五七、と句を續けるのが正格であります。それがやゝもしますと七五、七五と聞えるやうになるものであります。萬葉集の中にも七五、七五、とききゝなされる所のあ

る歌もをりをりは見えるやうでありますが句法は五七、五七、と續けたので決して七五、七五、とつゞけたのではありませぬ。彼の萬葉集の中の貧窮問答と云ふ歌に「あれをおきて人はあらじとほこらへど寒くしあれば」とある「人はあらじと」と云ふ七言の句はようせずば上の句のやうに聞えて次の「ほこらへど」とある五言の句は下の句のやうに聞えますがこれは次の句に「さむくしあれば」と句をついたから彼の「ほこらへど」といへる五言則上の句であることが知られます。萬葉集の中に七五の句の所があると云ふのはこれらの事で決して今の人のいふ七五とはことなつて居るのであります。平安京この方の人々の歌を見ますと全く七五、七五となつて居るのが多くあります。其の一例をしめしますれば、「くれていにし□年のをしさも忘られて□今幾日あらば云々」といふやうなたぐひであります。この「年のをしさも」といふ七言則上の句となりて「忘られて」といふ五言やがて下の句となつて居ます。これも「忘らるゝ云々」といふやうに言を續けるのを「忘られて」と意を切つて「今いくかあらば」とあらぬ句で續けたから七五の句となつたのであります。よくよく前のとくらべて見又記紀萬葉の歌と古今集の頃の歌とを讀みくらべて味ふべきであります。今思ふにこの古今集の頃の長歌も元來は五七の句格でありましたらうがつゞけがらがつたなくいやしげな爲におのづから七五と聞きなされるやうになつたのでありましやう。されば今よみ試みむとする人も其の詠み續けて行く間に七五と聞えもゆかむとおもふやうに成つた時には早く句勢に意をもちひて五七と聞えるやうになさねばなりませぬ。これは長歌を詠まうとする人の第一に心がけねばならぬ極々大切なことであります。それで長歌を吟ずる時にも必ず五七で言葉を切て又五七といふやうに吟じて五七五といひ續けぬやうに吟じ習はねばなりませぬ。世には七五調を以て自然の語勢であると心得ちがへなして居る人々もないでもないやうであるがこれは山國に住

み馴れた人が鮮らしい魚を嫌ひ、濁に馴れた魚が清い流を厭ふのと一般でありまして魚の鮮しいのと流の清いのとを知らぬよまひごとでありますから論ずるには足りません。

●長歌の格調 はことさら人の定めたものではありませぬがおのづから定まつて居る格があります。權田直助翁は之を起格、進格、成格、收格、の四段格に定められまして又これを一年間に配當して四季に譬へ初學の者に覺え易いやうに致されました。即ち春は萬物の成立する時でありますから起格に適すので夏は萬物の開き進む時でありますから進格に適すのであります。又秋は萬物の成熟する時でありますから成格に適し冬は萬物の終結する時でありますから收格に適すのであります。この起、進、成、收、の四段格を以つて一首の長歌を詠み若くば解釋したならば甚だ容易の事でありましやう。今この四段の格に由りて其の梗概を序述しましやう。

●起格 は春萬物が成立するやうに意思を初めて言ひ起す條であります。これを分類して冠辭起格、序言起格、對句起格、疊句起格、體言起格の五種とします。

●進格 は前にも申した如く本旨を言ひ進める條であります。これを分類して冠辭法、對句法、疊句法、重語法、通語法の五種に分ちます。

●成格 は本旨を完成する格であります。これを分類して冠辭法、對句法、疊句法、重語法、通語法の五種とすること進格と同じことであります。

●收格 は本旨を結び收める格であります。是を分類して轉廻法、普通法の二樣とします。

●冠辭 とは枕詞といふに同意味であります。たとへば天と云はうとて久堅のとおき山と云はうとて足引のと冠らする類を云ふのであります。これは語の頭をたすけ保つ詞で一には句を修飾する辭であります。短歌にも用ひますがこの長歌には最も多く使ひます。

●序言 とは美麗なる語を以て語を重ね又は譬喩をと

りなどして云ふのでたゞ冠辭より長いだけで其の用は同じであります。この序言といふものは中々むつかしいもので平安京このかた絶えて其のたくみなものを見ませむ。功みにこれを用ひたならばそれが爲に一篇の姿がひき立つてまゐるものでありますがややもすると例の贅語の名をまぬかれぬやうになるものであります。

●對句　とは句の上下を同種の辭で組織するものであります。五七、五七、と二句の對が多く用ひられます。又四句對句と云ふのもありますが、初めは一寸まねの出來ぬものであります。長い歌の中には六句の對句などもありますがこれより上はまづありません。よし有つても我々のまねをすべき法ではありませぬ。次の疊句の所で猶申しますからそこの所でよく如何なるものかをさとるがよろしい。

●疊句　とは同意味の句を疊み重ねたもので對句のやうに双方から次の句へ連續せぬものであります。此の疊句と對句とは其の時の都合でいづれをも用ひますが一首の内に必ずいづれか無くてはならぬ句でこの美しい綾を用ひてするのは長歌の特色であります長篇のものにはわけてこの句が多く無いと如何程美しい辭も如何程深い意味も少しも感じぬものであります。しかしこれはことさらに作り出すものではありません。おのづから出來る辭の綾であります。これらの句を初句に置く事はあまりこのましき事ではありませんが一つの風體として詠むのであります。

●體言起格　とは種々の名詞或は名詞格の詞で初句を云ひ起すのを云ふのであります。此の類限りなく多くあります。純然な動詞を用ひて起格とした歌は萬葉集中は勿論古事記日本紀に載つて居る歌には絶えて見ませぬ。後世になりまして此の格のあるのは甚だしい誤であります。否、誤りと云ふわけでもありませんがさうで無くては力なげに聞えて一篇がひき立ちにくいのであります。

●重語法　とは語辭を重ねて句調を修飾するものであります。對句などと同じ類でありますがたゞ一句の

中に辭が重なつて居るのを云ふのであります。

**通語法**　とは冠辭法とか對句法とか云ふ法でなく普通の詞で言ふものであります。

**轉廻法**　とは歌の終りで言葉を上へ返して終止する法であります。收格には此の法が甚だ多くあります。

**普通法**　とは轉廻法でなく只普通の法であります。

**長歌の法格**　は前に申した通りでありますがこの法格を全部の長歌に推及し又諸書の解釋に合せて其の意義を明知していつたならば長歌を作るにも法格を辨へるにも最も容易の事でありましやう。以上の法格の外に含詞法と申しまして詞をはぶいて意を含める法もありますがこれらの事は自然におわかりになる事でありますから別にこゝには申しません。今次に法格の例を擧げて是等の梗概を知らしめましやう

（萬葉集卷十七）三香の原の新宮所を賞むる歌

境部宿禰老麻呂

山背の久仁の都は　（コレガ體首起格デアリマス）

｛春去ればはな咲きをゝり／秋去ればもみち葉にほひ｝（對句法）—（含詞法デ進格ナシテオル）テ風景宜シキ所故ニ新宮ト定メ給ヒケム口ソノ新宮所ノ「おばせる和泉の川の｛上つ瀬に打ち橋渡し／よど瀬には浮橋渡し｝「テ」（成格カラ收格へ掛ケル爲「テ」ノ助辭ヲ含メルノデス）

あり通ひ「仕へ奉らむ口萬代までに」（收格ノ轉廻法デスカラ「」ノ印ノ如ク上ヘ返シテ終止スルノデス）

（同卷六）紀伊の國に幸す時よめる歌

山部宿禰赤人

安見しゝ吾が大君の（冠辭起格）とつ宮と仕へまつれる。さひか野ゆそがひに見ゆる。沖つ島（進格デアリマス此下ヘ助辭ヲ含メテ次ヘ言ヒツゞケルノデス）清き渚に｛風吹けば白浪騷ぎ／汐干れば玉藻かり｝（對句法）つゝ（成格デアリマスコレカラ收格ヘ連續スル爲「シテ」ノ含詞ヲ加ヘルノデアリマス）

神代より「しかぞ尊き口玉つ島山」（收格ノ轉廻法デ玉つ島山はしかぞ尊きト返シテ終止スル也）

（同卷三）長皇子獵路の池に遊牛時作歌

柿本朝臣人麻呂

安見し丶吾がおほきみ
高いかる吾か日の御子 の（對句法起格）馬なべて御獵立たせる。わかごもをかり路の小野に
しゝこそはいはひ
うづらこそいはひ
をろがめ（對句法ノ進格）
しゝじものいはひをろがみ
うづらなすいはひもとほり（對句法）
もとほれ テ 畏みと仕へ奉りて。久方の天見る如く。まそ鏡あふぎて見れど（成格）春草のいやめづらしき。吾が大君かも□（收格）（ノ普通法）

（同巻三）不盡の山をよめる

よみ人しらず

なまよみの甲斐の國
うちよする駿河の國 とこちぐのくにのみなかゆ。いでたてる不盡の高根は（對句法ノ起格）
あま雲もいゆきはゞかり（言ヒサシノ格）
とぶ鳥もとびもわがらす シテ（疊句法）
もゆる火を雪もてけち
ふるゆきを火もてけち つゝ いひも得ず 名附けもしらに。（重語法）—あやしくもいますかみかも△（疊句法ノ進格）
せの海と名附けてあるも其の山の包める海ぞ□
不盡河とひとの渡るも其の山の水のたぎちぞ□（四句對句ヨリナツタ成格デアル）
日の本の倭の國の
鎭ともいます神かも□
寶ともなれる山かも□（成格）
駿河なる不盡の高嶺は見れどあかぬかも□（普通法ノ成格）

（同巻十五）妻の身まかれるを傷む歌

丹比大夫

夕去れば葦邊にさわぎ
明來れば沖になづさふ（疊句起格）—鴨すらも妻とたぐひて（起格）わか尾には霜な降りそと。白妙の羽さしかはし。打ち拂ひさぬとふものを（進格）
行く水のかへらぬ如く
吹く風の見えぬが如く（然ルヲ）跡もなき世の人にして 別レニシコトヨ□（成格）シカ 別れにし妹が着せてし

馴衣袖かたしきて。獨「かもねむ」收格
玆に二行に並記したのが對句疊句等の類でありますから思ふやうに圖をさして御覽に入れる事も出來ず又わかりにくい所もあるかも知れませんがこゝはよろしく御案に成つて御得心のゆくやうに願ひます。文字を圍んであるのは含語の印で「　」を附けたのは上句へ返りて結ぶしるしであります。又口をさしたるは、語辭の終止する所の印であります。一首の組織はこれで大概は明知せられましやう。此外に語脈といふものも有ります。語脈には直接にかゝるものと間接にかゝるものとの差異がありましてこれを直接法組織格、間接法組織格といひます。この事はこゝには申しませんが申し上た所で別に大した利益もありますまい。

**首尾照應**　といふもの歌にも文にもあります。長いものには殊に此首尾あり照應あるやうに注意せねばなりません。首尾とは始めに言ひ出した筋を失はぬやうに其の終りで言ひ納める事であります。始めにいひ出した事のつひに立消となつて他の事柄で結末を付けたのは首尾相應せぬぬえ歌と申して昔から之を戒められてあります。照應とは前後の關係をいふので前句と後句との釣合を能くすることであります。たとへば前に花さきたりと云ふたならば後に匂ふとか色鮮なりとか薫るとか散るとか云ふて照らし合はせ霜と云ふたら寒しとか霞と云ふたら長閑とか何とか云ふて前後相應するやうにするものであります。此の照應は千變萬化するもので際限のないものでありますから一二の例では盡すことが出來ません。要するに前後の釣合を能くする義であります。凡一首の歌には、一個の纏つた思想がなくてはなりませむ。順序よく之を言ひ並べるには前後の釣合を顧みなければなりませぬ。これが即ち照應であります。照應が無ければ何事も面白くは聞えぬものです。唯面白く聞えぬのみで無く其の意の聞え兼ぬる事もあります。ある人の言はれた言葉に『賤夫の言葉などには作らず飾らずものをいふから却りて天地自然の法に

協うた言葉も多きものである。一日或山賤の言葉を聞きましたら。

今日こそはと思つて出掛けた所が雨は降り出すし風は吹きだすし濡はぬれるし寒さはさむしどうも仕方が無かつたからとう〳〵むだ首折りで戻つて來た。

といふ語を其の同業者と語つて居るのを聞きました此の語首尾もあり照應もあり誠に爛然としたる一篇の名文章である。「今日こそはと思つて出掛けた所が」とは首である。「とう〳〵むだ骨折りで戻つて來た」とは尾である。「雨はふり出すし」と「濡はぬれるゝ」とは照應である。「風は吹き出すし」と「寒さはさむし」とも照應であります。此の外に省筆法の所も對句法の所もあつて實に立派な文章をなして居る。我等の爲には能い手本である」といはれた事があります。これで首尾照應の樣は知られましやう。

長歌の風體はなるべくさま〲によむことを心がけねばなりませぬ。彼の挿花などでも眞、行、草の三枝に副と胴との二枝を加へて五枝に挿けるのかまづ正風の體であるそうですがいくら花の種類は替つてもいつも〳〵同じ挿けかたではついにあきがきましていくら能い花もあまり目につかぬやうになります。それで或は行流にしたり或は草流にしたり又は草落とか行落とか何とかかとかさま〲の風體に挿けるそうであります。長歌も頂度これと同じことでありましてたとへどんなにめでたい姿でも五首十首のほどはともかく五十首百首とまとめてそれを家集などに書き記した時これもかれもおなし風體であつたなら、遂にあきてしまひまして好い歌もめにつかぬやうになります。然し歌はことさらに風體をかへて詠まれるものではありませんが心がけたら十首に三四首はおのづから替つたのも出來るものであります。この變體といふものは五種や十種ではありませんからこゝには例をも記しません。古い長歌を多く見ますとおのづからおわかりになります。又長歌撰格などいふ書にこの例があげてあります。

長歌の參考書　はあまり無いやうに思はれます。法格を記したものではまづ長歌選格であります。其の他長歌詞の珠衣、長歌玉の小琴、長歌規則長歌品定などいふ本もありますが中には寫本もありまして世につたはらぬのがあります。歌を載せてあるものでは萬葉古義が第一であります。又萬葉代匠記とか萬葉考とか又萬葉集畧解とかいふものを見てもよろしい。これらの集を見たら次に近頃のもので菅根集といふのを御覽になるがよろしい。この歌の中には五七の調がみだれて七五の俗調になつたのやら首尾照應のないのやら又曲折もなく變化もなく唯單調の句を長長と列擧した所謂俗謠の拙いものも多く交つて居ますが能く長歌の正格を心得た上で詠まうとする人の參考には可からうと存じます。又八十浦の玉とか草綠集とか採風集とか申す書も大に參考になります。又縣居歌集、鈴の舍集、藤垣内集、奴昆乃舍長歌集、寛居長歌集、山齋長歌集、橘守部家集、柿園詠草、瓊々室集、稻舍長歌集、櫻園長歌集、百園雜纂、などの家集にも見るべきものが多くあります。續日本歌學全書第九編にこの家集の中、過半は載つて居ります。又記紀歌集、稜威言別、神樂譜入綾、催馬樂譜入綾、南京遺響、など何れも參考として見るべき書であります。元來短歌にせよ歌を詠むには詩想を豐富にせねばなりませぬ。詩想を豐富にするには讀書より可い事はありません。讀書は和漢洋いづれの書でもよいのであります。理化、工藝、醫學、衞生、皆詩科となるのであります。中にも倫理道德の書とかいふものが尤よろしからうと存じます。又詩經、三體詩などもよろしからうと存じます。直接に詩想の培養となるものは前申した萬葉集であります。猶直接間接に於きまして讀むべきものも多くありましやうがそれは皆樣の御意にまかせます。唯初學の方々の參考に迄申し上げた次第であります(をはり)

野徑蝶　　中島歌子

をとめ子に交りて蝶もすみれ咲く
野中のみちをはなれざりけり

# 漢文講義

阿井笛村

## 伊勢大輔 （菊池武保）

伊勢大輔。奉仕上東后。其初入后宮。后意其善和歌。后父關白道長來。會有人獻寧樂舊都八重櫻花枝者。乃以花枝示大輔。副以筆紙。滿坐屬目。少頃。大輔徐磨墨書歌而進。文字清楚。歌亦妙。道長以下衆人。感歎之聲震宮中。

（讀方）伊勢大輔、上東后に奉仕す、其の初めて后の宮に入りしとき、后其の和歌を善くするを意ふ、后の父關白道長來る、會ま人寧樂の舊都の八重櫻の花枝を獻ずる者有り、乃ち花枝を以て大輔に示し、副ふるに筆紙を以てせり、滿座目を屬す、少頃ありて、大輔徐ろに墨を磨り歌を書きて進めぬ、文字清楚、歌も亦妙なり、道長以下の衆人、感歎の聲宮中に震へり。

（譯解）本文の伊勢の大輔と申すは、伊勢の祭主大中臣輔親の女で、紫式部、和泉式部、小式部等の人々と、名を齊しくしたる和歌の名人で、人々の善く知りたる才女子であります。此の伊勢の大輔は、一條天皇の皇后上東門院に奉仕して居ました人で、其初入后宮后意其善和歌＝大輔が初めて后の宮に入りて御目見えをしましたときに、皇后が此者は定めて和歌が上手であらふと思し召されました、其のとき、皇后の御父君の關白道長公もお出でに成て居ました、會有人獻寧樂舊都八重櫻花枝＝折柄會ど寧樂の舊都に咲き出たる、八重櫻の花の枝を獻上したる人がありました、乃で其の花の枝を大輔に示されまして、副以筆紙滿座屬目＝筆や紙をさし副へて大輔の前に置かれました、如何するであらうかと、滿座の人々が目を屬けて居ますと、大輔は徐かに墨を磨り、短冊に一首の歌を書きて進げましたが、其の文字が誠に清楚で

歌も亦た妙でありました、道長以下衆人感嘆之聲震宮中＝道長公以下の衆くの人々が、皆一同に感心して嘆めそやす聲が、宮中に震ひわたるばかりでありました、其歌は諸嬢方善く御承知の百人一首に出でたる彼の。古しへの寧樂の都の八重櫻今日九重ににほひぬるかな。と云ふのであります、此の歌は只其の時の有の儘を詠み出でたるまでにて、別に六ケしき意味もありませぬけれども、初の句に『古しへの』と云ひて、五の句に『今日』と受け、四の句の『八重櫻』を受けて、次に『九重』と續け、舊き寧樂の都の花が、今九重の雲井まで匂ひ來りぬと、云ふ心を巧みに云ひあらはしたる處に、云ふに言はれぬ妙味があるとと思はれます。

### 貴田孫兵衛母　（中村和）

文祿之役、清正赴國都。命孫兵衛。使於名護屋行營。孫兵衛有母。年七十餘。以使事急不得過省。遣一奴往問安。母仗杖。送奴門外曰。汝還語吾兒。勿以吾老爲念。吾餘命不足惜。惟恐兒臨難眷戀私親。墜公事也。孫兵衛聞之感激。

（讀方）文祿の役、清正國都に赴き、孫兵衛に命じて名護屋の行營に使せしむ、孫兵衛母有り、年七十餘なり、使事の急なるを以て過省することを得ず、一奴を遣し往きて安を問はしむ、母杖に杖り、奴を門外に送りて曰く、汝還りて吾が兒に語げよ、吾が老たるを以て念と爲ること勿れ、吾が餘命は惜むに足らず、惟々兒難に臨み私親に眷戀して、公事を墮さんことを恐るゝなりと、孫兵衛之を聞きて感激せり。

（譯解）文祿の役とは豐臣秀吉公が、加藤清正小西行長等を遣して、朝鮮征伐を爲されたる役のとであります。此の役加藤清正が朝鮮に攻め入りまして、其の國の都即ち王城を陷いれました時に、命孫兵衛使於名護屋行營＝貴田孫兵衛と云ふ者（貴

田孫兵衞は元と豊前彦山の麓なる毛谷村の農夫にて、六助と命ばれ、親孝行にして義俠の心強く、吉岡一味齋なる者の女子を助けて父の讐を討たしめ、秀吉公の御前に於て、數十人の勇士と力競を爲し、終に加藤清正の家臣となりたる勇士にて、演劇小説等に名高き人なり）に命けて、此の時秀吉公が行營（行營とは今日で申す大本營と同じく、其時の大元帥とも云ふべき秀吉公の出張所なり）とせられたる肥前の國の名護屋へ使に遣られました、然る處孫兵衞には、年七十餘になる母がありますが、以使事急不得過省＝使の役目が急がる〻故に、過て省ふことが出來ませぬ、平生孝心深き人でありますから、遣一奴問安＝一人の奴を豊前の國の毛谷村なる、母の許に遣はして安を問せました、奴が立歸るときに、其の老母は杖に仗りて門の外迄送りて來まして、偖申すには、汝が還たならば吾兒孫兵衞にそう語て下され、吾の年老たるのを以てかならず念をせぬ様に、吾が餘命は假令ひ死でも惜むには足らぬが、惟恐兒臨難眷戀私親墜公事＝惟々吾兒が難に臨み私の親の事のみ眷戀になりて、大切なる公の事を墜ひはせぬかと、それのみ、自分は恐れ氣遣つて居るぞやと、此の老母の言を、奴が還て孫兵衞に話しましたれば、孫兵衞聞之感激＝孫兵衞は之を聞きて大に感じて、心に激げみを起しました。

石川重之母　（中村和）

大阪夏役。重之從二東照公一至二京師一。病レ疫。其母自二江戸一遺レ書曰。汝家。世蒙二君恩一。若此役無レ功。則何面目再見レ吾。重之病方篤。使三人讀二之一。聽而流涕。五月五日公發二二條城一。重之疾レ力輿從焉。

（讀方）大阪夏の役、重之東照公に從ひて京師に至り疫を病む、其の母江戸より書を遺りて曰く、汝の家、世々國恩を蒙むる、若し此の役に功なくば、則ち何の面目ありて再び吾を見んやと、重之疾方

に篤し、人をして之を讀ましめ、聽て而して流涕せり、五月五日、公二條城を發す、重之疾を力めて輿從せり。

（譯解）大阪夏の役とは徳川家康公が、豐臣秀頼を攻めたる二度目の役で、其時石川重之と云ふ人が、從東照公至京師病疫＝（東照公とは家康公の事）お供をして京師まで往きましたが、ふと疫を病ひました、其の折から、此の重之の母が江戸から書を遣りました、其の文言に汝の家は世々國家の御恩を蒙りて居るに、若しも此の度の役に、功の一つも無かつたときは、何の面目があつて再び吾に見るゝやと、云ふ意味が書てありました、重之疾方篤使人讀之聽而流涕＝其の時重之は病が方ど篤くありまして、自から讀むことも出來ませぬ故、人に讀ませて之を聽き、若しき中に涙を流して感動しました、それから五月の五日に、家康公が二條の城をお發に成りますとき、重之力疾輿從焉＝重之は疾を力して輿に乘りてお從をしました。



以上二ケ條の話に似寄りたる美談は今日の場合、定めて、澤山にあることゝ思はれます。

▲小兒の躾方に就て　◎長岡參謀次長夫人芳子曰く良人は參謀本部へ詰切りで御座いますから、不束な妾ばかりでは、所謂理想の家庭を作るとは、迚も出來ません、だが舊任地廣島に在る當時より今日まで襲用する躾方が御座います。◎第一小兒に秩序の觀念を養成するとに注意し、四人の小兒に夫々一室を宛て、其室の整理萬端は、他手を藉りず自から整へさせ、一週間に一度づゝ、夫婦打揃つて其室を檢査し、若し不整頓の始末あらば、注意して之を直させるやうに致して居ります。◎日本の小兒に限つて、鼻汁を垂らす醜い癖が御座います、此等は無論平素の躾方が惡いからで……それ故小兒が兩親の前、來客の前へ出る時には、自から鼻汁を拭つて、出掛けるやうに習慣を附けて置きます。

# 英文雜録

慶應義塾大學講師　宮森麻太郎

## MISCELLANY IN ENGLISH AND JAPANESE.

I. 前號和文英譯練習の譯文

1. They say Miss Yamato is going to marry Baron Shikishima. Is that true?
2. Just so. They will marry in two or three days.
3. China is as large thirty times as Japan.
4. The name of the British King is Edward VII.
5. Is the Principal of your school loved by the students?
6. Yes, they respect and love him.
7. Is your teacher of English a hateful woman?
8. No, she is a very lovely lady.

II. Conversations.

No. 2. About the Baltic fleet.

ボールチック艦隊の話

A. Is it true that the Czar has ordered the Baltic fleet to return home?

露帝はボールチック艦隊に歸航を命じたりと云ふのは誠ですか

B. Some days ago a Reuter telegram said so, but the report has been found to be groundless.

過日ルーター電報では左様傳へましたが其報道は無根の虚説でした

A. Then do you think the fleet will be able to reach Japan?

其れでは同艦隊は日本へ來ることが出來ると思ひますか

B. No, I think not. The Japanese navy will attack it before it reaches the Japanese waters.

否左様思ひません同艦隊が日本海に來ぬ前に日本艦隊は之を攻撃しますでせう

A. Very likely. Where do you think both the fleets will engage each other?

如何にも左様でせう。會戰は何處であるでせうか

B. I have no definite opinion about that, but it is generally belived the engagement will take place somewhere near Sunda Strait.

其に就ては私は此ぞと云ふ説はありませんが世間の人の説では兩艦隊はサンダ海峡の近くのどこかで會戰するであろうと申します

A. Sunda Strait! Where is it?

サンダ海峡です其海峡は何處にあるのですか

B. It is between Sumatra and Java.

スメートラ島とジャヴァ島との間にありまず

A. Oh, I see! By the by, where is the fleet now sailing?

成るほど分りました。時に同艦隊は今何處を航海中ですか

B. Well, it is coming in three squadrons. One squadron under the command of Admiral Rojestvensky is lying off Madagascar and waiting for the other two squadrons.

同艦隊は三隊に分れて別々に航海して居ます。ロゼストヴェンスキー提督の引率せる一隊はマダガスカル島の沖合に碇泊して他の二隊を待合せて居ます

A. How many ships does the fleet consist of?

同艦隊は何隻の船より成つて居ますか

If I remember righty, it consists of seven battleships and over ten cruisers besides some torpedo-boat destroyers and some transports.

私の記臆する所に間違がなければ七雙の戰闘艦と十隻餘の巡洋艦と其外幾隻かの驅逐艦及運送船より成れりと思ひます

A. Really! What a large fleet! Is the Japanese fleet powerful enough to engage it?

へー大層優勢の艦隊ですね日本艦隊は之と會戰することが出來ますか

B. Oh, yes; never mind about that. Our navy is more than a match for it. I am sure the Baltic fleet will share the same fate as the Port Arthur fleet.

出來ますとも其事は決して御心配には及びません。我艦隊は之に匹敵して餘りあり。露國艦隊は旅順艦隊と同一の運命に陷るに相違ないと思ひます。

A. When will the Baltic fleet cross the Indian Ocean and meet the Japanese men-of-war?

何時ボールチック艦隊は印度洋を渡て日本の軍艦に出會ひませうか

B. I think that will be about at the end of February and we shall have the gladsome news of a great naval victory at the beginning of March when blum-blossoms will be in full bloom.

其れは二月の末だろうと思ひます而して三月の初め梅花滿開の頃海軍大勝利の吉報に接するだろうと思ひます

Notes 註解

1. Baltic ハボールチックト發音スバルチックニ非ズ
2. No, I think the not ハ No, I do not think tle fleet will beable to come to Japan. ヲ省略セルナリ
3. the Japanese waters ハ the Japanese seas ナリ
4. it is generally believed ハ世人一般ニ考ヘルナリ
5. sailing ハ航海ノ意ナリ帆船ニ限ラズ滊船ニモ軍艦ニモ通シテ用フ

6. Squadron ハ fleet ノ分隊ナリ
7. off Madagascar ノ off ハ沖合ニト云フ意義ナリ

III. 和文英譯練習問題

1. 其報道ハ無根デス然レ𪜈我々ハ一時之ヲ信ジマシタ
2. 東郷大將ノ家族ハ何處ニ住ンデ居ラル丶カ御存ジデスカ
3. 麴町區ノドコカニ御住イデス
4. 空氣ハ何ヨリ成リマスカ
5. 重モニ酸素 (oxygen) ト窒素 (nitrogen) トデ成立テ居ル
6. 彼ハ學問ノ爲メニ洋行スル (go abrad) ホドニ富ンデ居マスカ
7. 然リ彼ハ岩崎男爵ホドニ富ンデ居マス
8. 杉田ノ梅樹ハ何時咲クデセウカ
9. 既ニ咲キ始メマシタ

以上ノ文ノ譯文ハ次號ニ掲載スベケレバ諸孃豫メ飜譯シ置キテ對照セバ興味アルナラン

IV. News of the Day.

Admiral Togo.

Admiral Togo, Commander-in-Chief of the Combined Fleet, will probably leave Tokyo on February for the front.

聯合艦隊司令長官東郷大將は二月一日東京出發戰地に向ふべしと云ふ

Russian Prisoners.

Ujina, Jan., 26.

Two hundred and seventy-eight Russian prisoners, including eight officers, from Port Arthur landed at Ninoshima this morning.

露國捕虜

一月廿六日宇品發電

旅順よりの露國捕虜二百七十八名（八名の士官を含む）は今朝似の島に着せり

The Austro-German Commercial Treaty.

Berlin, Jan., 25.

The Austro-German Commercial Treaty was signed yesterday.

墺獨通商條約

一月廿五日伯林發電

墺獨通商條約は昨日調印せられたり

TROUBLES IN RUSSIA.

Londen, Jan., 24.—Conflicts are constantly occurring between the Cossacks and the workmen in the streets of St. Petersburg. The strike at Moscow is spreading. The gasworks bave ceased business and there is also no electric light·

露國の紛擾

一月廿四日倫敦發セントピーターースバーグの街上に於てコザック兵と職工との間に衝突は絶えず。モスコーに於ける同盟罷工は蔓延しつ丶あり。瓦斯工塲は休業し電燈も點ぜず

## DR. TAN NUYEHARA.

A telegran from Söul states that Dr. Tan Nuyehara has been formally appointed Educational Adviser to Korea.

### 幣原博士

朝鮮京城よりの電報によれば幣原坦博士は朝鮮の教育顧問に任命せられたりと云ふ

## V. Practical Letters.

My dear Mr. Shirasu:—

If my salary for August is to be paid, please keep it till I come to Tokyo. I will call at your bouse afout the 26th.

Yours sincerely,
T. I. Chapman.

Fukuzumiro, Hakone,
August 23rd.

拜啓小生の給料は八月分も御給與被下候はゞ何卒小生歸京致候まで御手許に御預かり置被下度願上候尙來廿六日頃參館可仕候

八月二十三日　函根　福住樓にて　チャプマン拜

白須様

My dear Mr. Chapman:—

Tokyo, August 25th.

Your salary for August is of course to be paid and I will keep it till you call. But I start to-morrow morning on a journey and shall be back at the end of this month. So please call at my house after that time.

Yours most truly,
Shirasu.

拜復貴下八月分の御給料は無論差上可申筈に就き拙宅へ御出浮被下候まで小生御預かり可申候然るところ小生義明朝旅行に出掛け月末歸京可致候間其の後に御來車被成下度願上候　早々頓首

八月廿五日　白須　勤拜

チャプマン君侍史

Karuizawa, July 24, 1900.

Dear Mr. Miyamori,

I thank you for writing to me. Your letter came to me here where we are spending a few weeks. This is a beautiful place among the green hills, with a fine view of Asama, and the air is elightful.

I am glad to hear that you are somewhat better, and I hope you will get quite well.

I wish you might have an opportunity to study the Bible some more.

Yours truly,
D. W. Learned.

拜啓御書面を賜はり難有奉存候御書面は當地にて落手致候小生此地には三四週間滯在致居候當地は青き小山の間にあり淺間山の絶景を控え風光明媚なる土地にて空氣も宜敷候貴君御病氣餘ほど宜敷由承り嬉敷存候尙御全快のほど祈上候又聖書御研究の機會を得られん事を望候　早々頓首

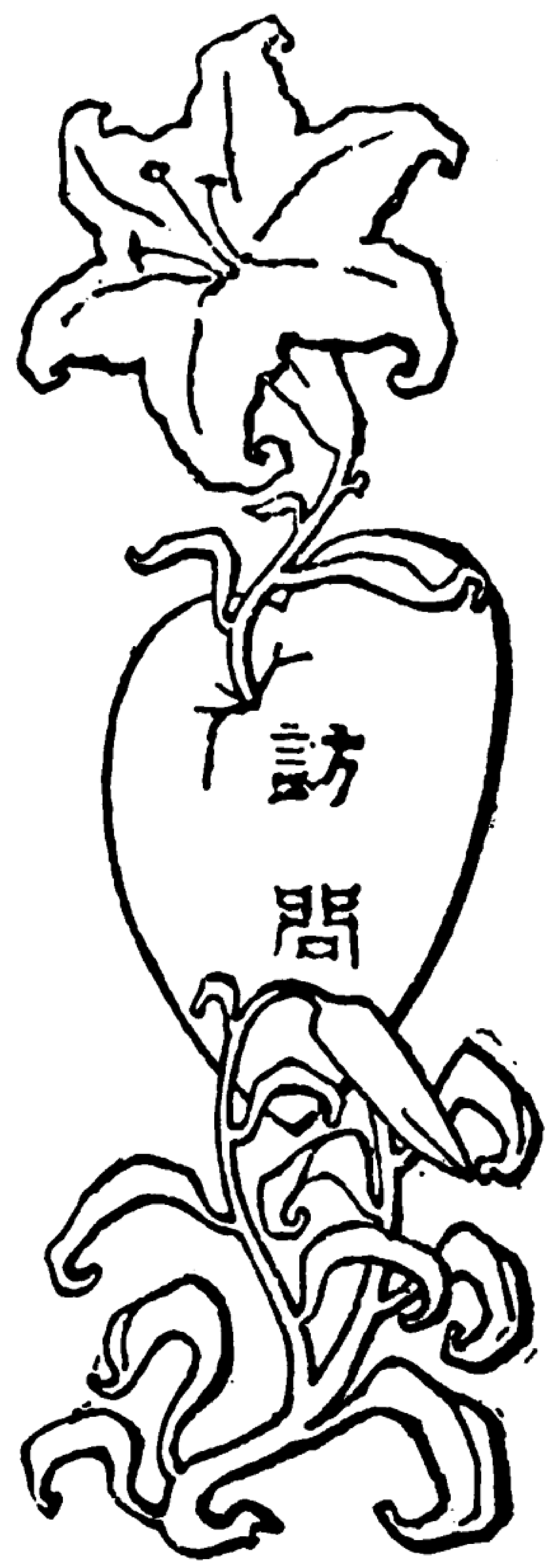
宮森君　ラルテッド拜

# 島村海軍少將夫人を訪ふ

一記者

旅順の敵艦隊を殲滅し、絶大の偉功を奏して世界のあらゆる方面に於てあらゆる畏敬と賞讃とを以て迎へられた我が東郷聯合艦隊の參謀長として勇名轟き渡れる海軍少將

▲島村速雄氏の留守宅は、麹町區紀尾井町でございますが、記者は過ぐる二月の五日の午後、同邸をおとづれました。




この日は丁度舊暦の正月二日でございましたが、大空が瑠璃のやうに晴れ渡つてゐて、風もなく、日の光り寛かにほか／＼する極めて暖な日でございました、同邸は紀尾井町でも平河町の方と、聞て居ましたから、北白川宮御邸の前を過ぎまして、まづ何處かで尋ねうと思ひましたが、丁度其處に海老茶の袴を穿てゐた年頃十一か二のお垂髪の少女が弟らしき稚き男の兒と遊んで居りましたから、記者はつか／＼と進み寄つて『何處か此の邊に島村さんといふお家はありませんか。』と問ひますると、少女はにつこりとして『あ、彼の海軍の、えらいお方の』『えさう』『それはね、此直ぐ左の横町へ入つてね、右の

方の角です。』とのことで、記者は禮を述べて直ぐと北横町へ入りました。實に三尺の少女ですらも少將の同君のことを一ト口にあのえらいといふ、記者は此言を聞いて愈畏敬の感を強め、益々賞讃の念を高めたのでございました。

少女に敎へられました通り、右手を見れば、先づ目に着く鼠色の美しき塀を以つて圍つてある嚴めしき一つの邸宅があります、さて、此處なりと首肯きながら、宏壯なる門に進めば、擬ひもなく『島村速雄』と彫り付けた白大理石の表札が出て居りました。まづ、潜戸を開けて門内に入れば、右手には最と奇麗なる二階建の一ト構檜葉の植込を過ぎて、右手の格子戸押し開らき、玄關の沓脱に入りまするに、其處には、夫人の穿物と覺しきものと、護謨製の小さき靴とが整然並んでありました。又、上り口の板の所には麥酒の箱が四つ五つ積み重ねてありましたが、これは大方少將の過日の凱旋を祝ふて來た御進物であらうと推せられました。

さて、例の如く案内を乞へば、年比十六七の小間使が出て來ましたので、乃ち刺を通じて夫人に面會をお頼み申しました。

間もなく、玄關より、直ぐ、鏡のやうに磨いてある廊下を横切つて、

▲六疊の客室

に通りましたが、小間使の婢は、郡内の座蒲團を薦めて徐に襖を閉めて去りました。で、記者は何とはなしに、左手の方を見まするに、大きな紫檀の書棚が整然と隅の方に据ゑてあつて、それには少將の寫眞、陶製の犬、大理石の花瓶、珊瑚の置物、石膏の型像なんどが陳列してあります。それから、又ずつと次の座敷の方へ目を移しまするに、床の間には狩野流の虎竹の幅、その前には、彩色美くしき薩摩燒の花瓶があつて、寒紅梅に水仙を挿けてあります違い棚には少將の寫眞、又その下の地袋の前には能代塗の膳が据ゑてありまして、勝男武士などの見えますのは、正しく陰膳のそれとも推せられました。

また、右手の椽側の方は、すべて硝子戸で取り圍んでありますが、それを見越に松柏の翠美しく少將の名譽の色のいつまでも變らぬことゝ、同夫人の淑徳貞操の聞え高きことを表してゐるかのやうでございます。

すると、やがて、次の間の襖を徐に押し開けて悠然として出て來られましたのは、即ち

▲少將夫人菅尾殿

で、年比は二十四五と覺しき、頭髪の漆のやうに艶やかな、細面の、眉目うるはしい、言葉づかひも優しく、身の擧動もしとやかな御方で、赤っぽい糸織の召物に、藤紫の半襟ほの見え、上には銘仙の羽織をすらりと着流されて居りました。

記者は先づ初對面の禮を述べ、つぎに少將の健康と凱旋とに就いて祝詞を申し上げましたところ、夫人は桃花の唇まづ開らかれて『ハイ、みなさんの御蔭で、至つて達者で喜んで居ります。……ハイ、旅順の方も宜い鹽梅に開城するやうになり、實に結構なことでございました。まあ、海軍の方も何ですが……陸軍の乃木さんの方のお骨折は嘸まア、何の位でございましたらうと思はれます。……まア〳〵旅順の艦隊も全滅になり、旅順も陷落しまして、これで、一ト安心でございませうが、これから、敵國の艦隊も來るさうですし、また、奉天の方にも又々大戰爭が初まりさうですが、軍人の御方は陸軍も海軍も同じやうに皆お骨が折れます、なか〳〵是からが大變でございますね、……』と、夫人は戰爭の前途なほ遼遠なり、我が國民たる者は、大いに堅忍持久の精神を以て、最後の勝利を博せねばならぬとの意を漏らされましたのは、流石に少將夫人の言として耳を傾けなければならぬことでございます。さてつぎに、

▲少將の凱旋

に就いて承はりましたところ、夫人は莞爾とせられて『ハイ、御存じの通り、去年の暮に東郷さんや上村さんが御凱旋になりました時に、御一緒に還つ

てまゐりましたのですが、別に戰爭のお話も何にもしませず、また、私なんかも聞きましても分ることでもありませんから、餘り戰談もしませんでした。そして、歸つたと申すもの丶、朝から晩まで始中終忙がしくつて、やれ、海軍省だとか、參謀本部だとか、それから、祝宴會だとかといふ鹽梅でいろ〳〵と目の舞ふほど飛び廻つて居りましたから、その言ひ草が可笑いです、(何うも此頃のやうでは、戰爭に往つてるより辛い)と申して居りました、オホ、、、、ハイ、身體でございますか、これは亦至極よろしく、一度だつて風邪も引きませんかつたさうで、一昨年の夏此方へ來ました時よりも、ずつと一體に肉が緊縮つたやうで、元氣も宜うございました。ハイ、今度は司令官になりまして、先達或る方面へ出掛けてまゐりました。……ハイ、左樣でございますね、東郷閣下も先日からインフルエンザでお引籠でございましたが、明日はいよ〳〵御出發でございますさうで、又々お骨折なことでございます。……なんでございますね、今日は二月五日で、戰爭が始つて丁度滿一年になりますが、去年の今日あたりは、明日はいよ〳〵佐世保出發といふので大騷な時分でした、まことに早いものですね、そして、八日が仁川の海戰で、九日が旅順の最初の海戰で、本當に世界が割れるやうな大した騷動でしたね、……』と、夫人は舊を懷ふの情に堪えざるもの丶如くで、記者も一層追懷の感に迫まられまして『考へて見まするに、よくも、まア、僅か一年やそこいらの短い月日で、彼の難攻不落といふ旅順を落し、强大無比と誇る敵艦隊を全滅させたものです。』と、云ひまずると、夫人は口元に微笑さへ見せて『そりや、駄目です、いくら天險に據つても、いくら良いお艦を持つて居ましても、人間の精神が異ひますから駄目なとです。敵の負けるのは當然のことです。……オホ、、、大變に立派な氣焰を申しました。……』と。さて、次に、わたくしは

▲少將の閱歷

に就いて承りましたが、夫人は又も笑顔を作り給ひて『ハイ、履歴でございますか、私なんかは精しいことも知りませんが、此間も、ある雜誌の方に是非とも、ほんの略歴で宜いから、調べて置いて呉れと頼まれしたので、私は母（少將母堂）に聞いたり、自分で考へたりして、ざつと順序を考へて置きましたから、それをまづ申しあげませう。……なんでも、良人は明治十六年に海軍少尉となりまして、其後は種々なお艦に乘りましたさうです。それから日清戰爭の時は、第一艦隊の參謀で、旗艦松島に乘つて居りましたが、黄海の海戰の時、大腿部の所を砲彈の破片で打たれて負傷し、一トまづ陸上勤務を命ぜられ、大本營附の參謀官となりました。その時は、まだ大尉でありましたけれど、戰役中に少佐に進み、凱旋の後、功四級金鵄勲章を貰ひました。……それから、三十年中に戰況視察の爲め土耳古と希臘の方へ派遣されました。それから、北清事變の時ですね、あの時は、既う中佐で、須磨の艦長を勤めて居まして、陸戰隊を率ゐて天津の方へ上陸して戰爭を致しました。そして、歸つてから功三級に昇りました。それから、大佐になつて、たしか、海軍省第一局、第二課次長、常備艦隊參謀などになり、それから暫く伊太利の公使館附や、海軍大學の敎官などとなり、又常備艦隊の參謀長となり、一昨々年七月二十三日に三笠に乘つたのです……ハイ、宅の方へは、先刻も申しました通り一昨年の七月二十五日から一週間ばかり歸つて居りましたが、それツ限りで戰爭に出掛けましたのです、……それから今度一ト度凱旋したのです……。』と、長々しく語られました。

▲少將の平生

つぎに、また、其家庭における等に就いて、某海軍士官から聞きましたことを併せて記して置きませう。

君は舊土佐山内侯の藩士で、當年四十七歳と聞ゆ、人となり快活明敏、而かも意氣頗る豪宕であります

けれども、頭腦の至つて緻密なお方で、何事によらず凡ての事に當つては一意專心で我を忘れて行ふといふ風であるさうで、その成功を見ない時は、飽くまで寧ろ執念く行ふといふ堅忍不拔の精神が全腦を支配して居るお方でございます。そして、斯樣に頭腦も明晰で、先見の明かなお方でございますから、戰に臨んでは、能く時務を呑み込み、早くも軍事の全局を洞見して、畫策遺算なく、思ふ存分に其辣腕を振ひ振ふて、龍騰虎攫の活劇を演じ、能く敵艦を全滅して、我が帝國海軍の實力を發揮せられたのはこれ、偏に陛下の御稜威によるとは云ふもの丶、又一つは東郷大將、島村少將の如き不世出の名將が我全海軍の主腦となつて居られたからでございますなほ、バルチック艦隊來らんと欲せば來れよ、第二艦隊でも、第三艦隊でも……吾人は此少將の如き人が我が海軍にあるを以つて敢て憂ふるに足らずとするのでございます。此後尚ほ少將の行動に就いては大いに刮目すべく、天下を驚かすべき偉功を奏せらるゝことでございませう。

少將は又一面に於て、如何にも温厚篤實なお方で、その宅に居られる時は、能く其母堂に事へられ、また夫人を始め召使の者に至るまで、決して〳〵荒々しき言葉づかひ一つせられぬといふ風である相です。

次に其嗜好に就いて夫人に聞きましたところ、夫人は『え、別に是と云つて嗜好はございませんが、まづ骨董や、刀劍などが嗜きで厶います、また植木なども嗜きなやうで』と。

さて、記者は夫人と種々お話してゐまするど、年頃は四つか五つか、顏の丸い、目のぱつちりとした實に愛くるしい少年の、眞白な西洋前垂で全身を包んだのが、ひよこ〳〵と隣室から出て來られて、林檎を其儘の頰に浴くるばかりの微笑を湛へて、小さな聲で『お母ちやん！』と呼ばれましたのは、則ち

▲令息初太郎氏

でございました。夫人は振返つて見て『坊や此所へお出で！』と云はれますると、初太郎氏はさも

さも嬉しさうに莞爾として駈けて來て、夫人の肩へ靠れかゝりました。で、夫人は『これ、坊やお客様にお辭儀は。』と勸められましたので、初太郎氏は小さき紅葉のやうな兩手を疊へ突いてこつくりと頭を垂げられましたので、記者も答禮しまして『坊ちやん、阿父樣は何うなすつて。』と、問へば、やゝ甘つたれた調子で『お父ちやんはお艦。』と、云つて罪なく笑はれました。で、記者は、向の紫檀の書棚の上に飾つてある少將の御寫眞を指さして、『あれは誰樣ですか。』と、問ひますると『坊の阿父ちやん』と、乳齒を見せられました。

すると、夫人は又微笑まれて『貴公、何ですよ、此子は一昨々年の八月生で、良人は、その後一度只今もお話し申し上げました通り一昨年の七月に歸つた限りで直ぐ今度の戰爭に出掛けましたので、父の顏なんかは見覺がありませんで、唯寫眞だけで知つて居ますのですから、今度良人が還つて來まして正物の父を見ました時は、本當に妙な顏して、暫く目を丸くして見て居ました。そして、座敷に飾つてある寫眞と暫く見較べて居つて、やがて、につこりとして直きに狎れて了ひ、それからは、阿父ちやん〳〵で阿父ちやん騷ぎをして後を追ふやうになりました。そして、若し誰でも（私のお父ちやんで、坊のお父ちやんでない。）と調戯ひますると、直ぐ掉頭して、（いやよ、坊のお父ちやんだ。）と云つて泣きさうになります。オホヽヽヽ。』

次に又

▲その家庭

に、就いて承はりまするに、夫人菅尾子は當年取つて二十六歳の春を迎へられましたさうです。實家は近藤氏と申され矢張り土佐のお方でございます。そして、少將との間に初太郎氏一人ある限りで、家族には少將の令弟茂穗君と、母堂鹿子とが居られます。鹿子は、今年六十八歳の高齡に達して居られまするが、如何にも健勝に渉らせられ、丈の高い、肉付豐なお方で、老の身の娛樂にとて、偏ら愛孫初太

郎氏を掌中の珠と愛ではやされ、夫人と共に能く其家政を治め、只管少將が奉公の大任を全うせられんことを祈つて居られるさうでございます。

夫人は夙に淑徳の譽高く、且つ女鑑として何一つ心得て居られぬことはなく、如何にも謙遜で、優雅な賢夫人で、姑の鹿子にも能く事へられて居れます。で、夫人が斯樣な人の模範となるやうないとやかな女の本領を發揮して居る、實に女らしいお方ですから、其德風に感化されて召使や小間使の婢までも平生の起居動作は勿論、客人の前へ出ても、物品の薦撤なども一々女禮の本式に當つて居りまするが、これは、疑もなく夫人の美風に浴せられてゐる結果でございませう。實に一家の主婦たる者の深く鑑むべき所でございます。見習ふべきところでございます。又、少將母堂も至つて温良で嚴格なお方で、少將の今日あるは、偏に斯母ありてのことゝいふことでございますが、此一言を以て見ましても其人の全豹を推察するとが出來るのでございます。（をはり）

# 軍人家族授產婦人會を訪ふ

女記者

日露開戰の始めより、軍人遺族救護の目的を以て設立せられたる團體は、隨分少からぬ中にも、軍人家族授產婦人會と申しますのは、伊東海軍大將千家東京府知事の令夫人其他知名の御夫人方の發起で、赤坂檜町に授產場を設けられて、熱心に事業の擴張に盡力せられて居ると云ふ事で御座いますので、記者は此頃宮里三木枝子夫人の御紹介で同會の事業の模樣を一覽致しました、會の事務は主事の富田之信氏が主宰せられて居りますが、素より慈善事業で御座いますから、經費など澤山は御座いませんとのことで、一切の事務は、富田氏と外二三の方々で取扱つて居られますので、中々忙しそうにお見受け致しました。

氏は左樣に御忙しいのにも拘らず、丁寧に記者を導きて、事業の有樣を案內せられ、又說明をも承りま

したが、其の御主意が、大層面白い樣に思はれます。それは斯樣なのです、從來まで處々に設立されてある救護會は、大抵有力家や、慈善家の義捐金によりまして維持せられて、出征軍人達の家族や、又遺族の方々を訪問したり、慰籍したり、今日の生計にも困ると云ふ樣な人々には、金品を贈ると云ふ組織で御座いますから、家族や遺族の身に取りましては、如何にも嬉しく又ありがたい事でありますが、兎に角に義捐金や寄贈金と云ふ限りのある金力を以て、此末何時迄續くとも知れぬ戰爭の間、其家族を保護すると云ふことは、隨分骨の折れる事業である樣に思はれます、實際他に永遠の救護の出來得る方法のありそうなものだと、寄々は話のある事も承はつて居りまするに、此授産會は、軍人達の遺族や家族の人々に、相當の職業を授けて、其所得の金で、自活の道を立てさすると云ふ、所謂自衛の法で御座いますので、何時迄戰爭がつゞいても、家族や遺族の人々に安心して生活をする事が出來ると云ふ樣な誠に好い考へ付きの會で、若し此樣な會が全國に幾個も出來ましたら、何の位便益な事であらふかと思ひます。

最初に導かれて參觀いたしましたのは、裁縫室で、室の廣さは三間に五間ほどの一室で、裁板を中央に挿みて二列三列、其兩側に五十五六歳の老女を頭に、若いのは二十歳位の人が、ズラリと並んで一生懸命に縫つて居ます、まださう行暮た年でもないのに、雪かとばかりに、白髮の多く見ゆるのは、虎伏す野邊に起臥する我子の身の上を氣遣ふ爲めでもあろふか、眼鏡をたよりに覺束なげに針の目を探ぐるは胸も張裂く愁い涙に目も曇る爲であろふかなど思ひまして、云ふに云はれぬ一種の感にうたれました、さて此場に仕事をして居る人が、殆んど二十人もありませうか、主事にお承はりまするど此人達のする仕事は、達者な人で一日シャツと股引、……生木綿のを三組、慣れぬ人は一組位、それで賃銀が陸軍省から一組で十三錢宛渡りますが、其内で裁ち手間やま

シンの掛賃、ボタン、糸等の雜費が五錢位は引けるので、實際の縫賃に當るのは、八錢位にしかなりませぬそうです、然し八錢と申ますのは好い手間で、同じシャツ股引で、市中の商賣人から受けて參るものは三錢五厘位であるそうです、夫から比較して見ますると此授產會の仕事は倍以上に當るのですから賃に割がよろしい、それに手の達者な人で三組も縫へば、二十四錢に當るのですから、婦人の手內職では、まづ上等の方である樣に思はれます、夫から案內せられたのは、裁ち方の室で、此室は二十疊も敷ける明るい光線のよく通る所ですが、本職の裁方二人と、助手らしき人が二人ばかり居て、頻りに例の木綿を裁て居りましたが、五組なり、一組なりに、取揃へて縫手の方へ廻すので御座います、主事の御談に、裁方の職人の月給が十二圓、即ち本職二人で廿四圓の給料は拂はねばならぬ、それが例の一組五錢の雜費の內が幾許か又加はるのです、裁方の部屋を出まして、廊下の此方へ參りますと、其所は丁度裁縫室の背面に當る廣い所で、其所にはミシンが五臺並んで居て、餘念なく、縫人から廻て來るヅボン下や、シャツにミシンを懸けて居りますが、何れも婦人ではあるけれど、軍人の遺族や家族の人達ばかりではないそうで、矢張月給十二圓宛を給せられて居る人達で、即ち此所ばかりでも、會では六十圓ほどの給料を拂つて居られると云ふ事です、此樣に種々の雜費が入るので、會の方では、隨分骨が折れることで御座います、少しでも他の入費を減じて、縫人の手間賃の方へ廻し度いと云ふて、事務の方は中々苦心せられて居らるゝ樣に承りました、然しそれらは兎に角縫賃十三錢の內から差引事が出來るのですが、茲に全く會の爲に殆ど不生產的とでも申したい位の慈善事業が御座います、それは外でも御ざいません軍人家族の人達の小兒を預る所で、此所へ參る人々も、隨分兒持が多いので、其小兒を自宅に殘して來る譯にも參らぬ、然りとて連れて來ては仕事が出來ぬ、何分不便であるから、之が救濟の手段とし

て、別に一棟の家屋を借り入れて、保育所と稱して彼の小兒達を遊ばせる方法が立てられてありますので、更らに其保育所をも參觀いたしました、保育所は丁度會の地續きでありまして、あまり懸けはなれぬ所で御座いますから、至つて便利は好いのです、二階立の五間程ある家で、完全とは申されぬが、兎もかくも一通りの便利は備はつて居て、記者の參りました時には、六歳位のが頭で、中には乳呑兒もあるやうで、總て十二三人も世話する人に助けられていろ〳〵の遊びをして居ました、二階に上つて見ますと、三人計の幼兒が、白の圍布を着て、他愛もなく眠つて居ました、ア、此幼兒達は今何な夢を見て斯ふやす〳〵と眠つて居るであらふかと思ふと、何となく可憐の情に堪へませんでした、保育所は主任の保姆一人、未だ年のお若い方でしたが、海老茶の袴で種々と指圖をして居られる、其下には年寄の婦人が三人と、廿二三許の婦人で、小兒の大小便、襁褓の世話から、食事の世話迄もして居られました、

保姆の方の話に欠席のない時には、四十人ほどの世話をしますので誠に氣骨の折れるとの事でありましたが、之は如何にも左樣でありませう、手遊品も方々の奧樣方の御寄附のもの計ですが、彼所にある乳母車も、矢張り寄贈の品で、時々あの車に小兒の二三人も載せて、外に二人位手を引いて前の廣い原で運動をさせるそうですが、此保育所は如何にも好い思ひつきの樣に思はれました、茲に保育所の便利なるは、遠方の人などは寢泊りをする事の出來る樣な仕組に成つて居るのでありますが、仕事を了て日暮から、二三里の途を歸へらねばならぬと云ふ人には餘程好都合のこと丶思ひます。

洗濯場は、三間四方程の板葺の土間の建物で御座いまして、前の廣場に建られて、茲には陸軍經理部から出ます洗濯物、又戰地から送つて參ゐりました血の付いた汚れ物などを洗濯致しますので、大きな竈二つ築かれて、夫に二つの釜が懸かつて、側に打板や、アイロンや、熨斗臺が列べてありました、此場

には本職の人二人と十五人ほどの人が寄つて、始終洗濯をして居りますので御座いますが、最低の賃銀が一日十錢で、十五錢以上、廿五錢の賃銀を給せらるゝそうであります。

これが先づ軍人家族授產婦人會の概況でありますが見ると聞くとは大層違ふものですから、軍國の今日戰利品や、活動寫眞などよりも、直接出征軍人に關係ある此會の如きを一見して、參考にもしやうし又出來ることなら、幾分の力にもなるのは、戰時に於けるわれ等婦人の義務といつても宜しいではありますまいか。

（をはり）

## 雛人形

本年は戰爭の餘響にて外箱裂地等の騰貴せしに加へて職人の手間賃の高くなれる爲め從つて稍高價なるも各組合店は協議の上昨年ぐらゐに賣捌く筈にて浮世物にては高砂、業平、小町、胡蝶の舞、小鍛冶、鶴龜、浦島、男舞、朝妻、和歌三神など例年賣行宜しが本年は軍人物、看護婦、戰勝國兒童の遊戯など種々新物が出來たり、直段は芥子三寸物（三圓より上物六七圓まで、）五寸物（五圓より七八圓位）八寸物（二十圓前後より極上は際限なし）

其他の相場は

▲「親王」三寸物上（三圓五十錢ゟ五圓）中（二圓ゟ三圓五十錢）並（一圓五十錢ゟ二圓）五寸上（五圓ゟ七八圓迄）中（三圓より五圓）並（二圓ゟ三圓）八寸上（六圓より十圓）中（四圓より六圓）並（三圓ゟ四圓）尺五（七圓ゟ十二圓位）中（五圓より七圓五十錢）並（三圓五十錢ゟ五圓）▲「官女」三寸上（三圓內外）中（二圓五十錢）並（二圓）五寸上（六圓）中（四圓ゟ五圓）並（三圓ゟ四圓）八寸上（十圓）次（八圓）▲「五人雛子」三寸上（六圓ゟ十圓）中（四圓五十錢ゟ六圓）並二圓五十錢）五寸上（十圓ゟ十五圓）中（九圓より十圓）並（六圓）▲「隨身」三寸上（三圓內外）中（二圓五十錢）並（二圓）五寸上（四圓）中（三圓五十錢）並（二圓五十錢ゟ一圓）

# 家政の一日

鳥山ちか子




▲はしがき

皆様は如何で居らつしやいましたか。私共が學校生活を致して居ました時分は、理想の良人、理想の家庭といふのを小い胸に描いて居まして、それを現實にしなければ良人を持つまい。家庭を作るまい。と斯う一人極めに定めて居ましたのです。それで理想の良人、理想の家庭とは何樣もので御座いましたかは、餘り幼い考へでして、畢竟は處女時代の美しい空想に過ぎなかつたので、茲に申上げますのはお恥しう御座いまするし、又實際有り相なことでは御座いませんので省略致して、唯處女時代に學校で敎へて頂きました家政學で御座いますね。理論と實際とは一致しないものとやら、さて實地に家政を取扱ふ樣になりますると、何うも學問の杓子定規で押通す樣な理由には參りませむ。いろ〳〵と反對の現象を觀るので御座います。最も學問は習ひました人人の働きで何程にでも擴げることが出來ますので、謂はゞ大體に過ぎないので御座いますから、其御家の生活の程度と、主婦の技量とに依り死活二途に用ひられまするので御座います。私共などは生活の度

も低う御座いまずるし、又其衝に當つて居ます私が意氣地がありませんから、習ひましたことを活用するなどは兎ても出來ませむ。が、此樣家庭を作つて、此樣ことをしてゐるといふことをお話し申しましたなら、私共が學生時代の樣に美しい空想に耽つて居らつしやるお方や、家庭を作つて居らつしやる方々に、若しや御參考になりは致しますまいかと大膽にも、『家政の一日』といふ題目を掲げるので御座います。

▲私の家庭

私が學校生活を了りました時は、自分ながらも何樣強い功名を致した樣に思ひまして、前途の光榮も光明も思の儘であると思ひ上つて、私の成功――僅かに既定の學校を卒業しましたのを、成功と思つて居ましたので――は家門の誇りであると思つて居ました。ですから、妙齡となつて居ますので、縁談の口が二三箇所御座いましたけれど、何れも是れも私の理想――幼い空想――と一致しませんので、將來を案じまして優しく勸めてくれました兩親の仰せを「否」と卻げ、二三年は美しい空想の中に送つて了ひました。

私と御一緒に學校をお出になつた方々はそれぞれ御縁附になりました。中には阿母樣とお呼れになる方も御座いますのに、私はいつ迄も處女で居るのです。

年は漸次老つて行きます。

寄る年波には鏡を碎いた美人もありますものを、况して十人並にも及びませぬ私、心に描いてゐた空想の影の薄くなつて行きますのには、心細くなつて人知れず涙の枕紙を濡らすことが度々でした。

兩親はさま〴〵に心を痛めまして私を諭したり誡しめましたりします。始めは直ぐと得られ相に思はれました光明も光榮も私を捨てゝ行きました。そして常々耳の邊で呌きます聲は『弱き者よ、汝の名は女なり』といふのです。私は何うしても『我』を折らずには居られませむ。

所へ縁談の口が――久振で――掛りました。是れが今の『私の家庭』なのです。

良人は教育家です。私の爲には幸ですか不幸ですか、良人は全然の孤獨です。で、家事向一切は私に任せきりなのですから、今迄處女で居まして世間のことは何にも知りませんかつた私は、急に非常な責任を脊負て立ねばならぬ重大な身體となりました。自分の理想を實行するには干渉をするものがないのですから、都合がよいと申せば申されますけれど、それが又一ッの心配なので御座います、疊の上での水練には達して居りましても、實地の經驗がなければイザと申す時に役に立ちません。家政學、理財學と申すものは、學校でこそ習ひましたが、申さば疊の上の水練の樣なものですから、家風が分りません中は何うしてよいやら、心配で堪りませぬ。人樣はお姑のないのを喜びなさいますけれど、私は斯ういふ時にお姑がお出でなすつたなら何程氣強いか知れませぬ。いろ〳〵御相談申上げたり、敎へて頂いたりするんだがと、思はぬことはありませんでした。

けれども私は主婦なのです。良人から任せられた一家の財政を處理して收支相償ふやうにして參らねばなりません。いゝえ、節しるだけは節して後備貯蓄をして參らねばならぬのです。そこで私は豫じめ良人の許可を受けまして

▲我が家の憲法

といふのを定めました。餘り大袈裟だとお笑ひになるお方も御座いませうが一國も一家も大小こそありますれ、平和に治めて參りますのには秩序立つて遣りませぬと兎角に紊れ勝になるもので御座います、い、ものは何でも最初が肝腎で、初めを自墮落に致しますると、それが二六時中附て廻るもので御座いますから、憲法と申すと難しう御座いますけれど、謂はば家の掟を定めたので御座いました。

それは凡べて十ヶ條から成立つて居りまして、まあ此樣もので御座います。

一、朝は必ず五時半に臥床を出る事

二、夜は十時を限に臥せる事

三、一家は祖先あつての一家なれば、子孫たるものは祖先の祭祀を疏かにせぬ事

四、親戚は骨肉を分けたるものなれば親しむべきは勿論なれど、豫じめ時を定めて訪問し、秩序なき往復は爲さゞる事

五、例へ家長たりとも、我が周圍の用事は自ら辨じ、可成人手を煩はさぬ事

六、努めて華美を避けて、萬事實用を主とする事

七、非常の場合起るにあらざれば良人は妻を、妻は又良人を、互に干渉せざる事

八、一家の經費は月毎に豫算を立て、決してそれ以上超過せざる事

九、家族は常に愉快の心を忘るべからず、愉快の心は職務に忠實ならしめ、延いて一家の平和を永遠に保ち得る道なれば也

十、毎月一回家族を擧げて娯樂を執り、其勞を慰むべき事

以上十ヶ條は上は家長より、下は下婢に至る迄、永久に相守るべき事

といふのです。私は一家のものが悉くこの掟を守つてゐさへしますれば、家庭の平和は永遠に保つて行かれ、樂しい家庭を作ることが出來樣と思ひます。さてこれから私が日常なしつゝあることをお話し申しませう。

▲一家の收入

其前に一家の收入が若干あるかを申上げませぬと生活の程度がお分りになりますまい。私共では極くの僅少でお恥しう御座いますけれど一ヶ年七百二十圓、一ヶ月にしますると六十圓で御座います。で、主人と私と下婢との三人暮しですから約くして參りますれば、中等の生活を致して參りまするにはさして難義では御座いません。私はその六十圓で一ヶ月の豫算を立てゝ、決して此豫算から一錢でも超過する樣なことはしない樣にと愼んで居ます。

▲一ヶ月の豫算

六十圓を殘らず一ヶ月の生活費に充てゝ了つてもよいのですけれど、それでは、不時の災難が起りました場合、狼狽しなければなりませぬ。それに備へまするには後備貯蓄なので、これは一家の主婦たるべきものが大に心を用ひねばならぬ所で御座りませう。其處で私は大奮發を以ちまして、先づ一ヶ月の豫算を左の如く定めました。

一金五十圓　一ヶ月總支出額

内

金十圓　家賃
金五圓　米代
金九圓　副食物
但し魚、鳥、獸肉及び野菜共
金七圓　主人及び自分小遣
但し主人五圓、自分二圓
金六圓五十錢　薪炭、石油、醬油、砂糖、鹽等の消耗費
金二圓　圖書新聞代
金二圓　下婢給料
金一圓五十錢　家族三人湯錢
金二圓　臨時費
金五圓　交際費

以上は冬季の一ヶ月の豫算で御座います。此内で漏れましたのは被服費と牛乳代とで御座いますが、被服費は軍事公債の利子と銀行の半季配當といふ別途の收入がありますから其内の幾分をこれに充て、牛乳は各自のお小遣で支出することになつてゐます。又此内で消耗費が比較上多額に見積つてありますがこれは冬季ですから薪炭費に多く掛るからなので時候の變りますと共に減じて行きますから、他の費目へ加へることが出來ます。お湯錢の少いのも同樣隔日の見積、臨時費の二圓は品物や衣服の修繕とか町内の雜費とかに當てはめましたので、交際費はその月、その月に依りまして一定してゐませんが、先づ多額に見積つて置きましたので、剩餘がありますれば他の費目へ流用しまするか、又は別口の貯蓄に充

てますかして居ます。それで十圓の殘額で御座いますね。これは全額後備貯蓄へ廻しますので、不時の災難――醫藥其他の手當――がある準備に充てゝ置きます。不充分ながら豫算の組立は了りました。さてこれを實地に運用するので御座います。

▲一日の小豫算

私は一ヶ月豫算を組立てましたが、更にそれを細別して一日の豫算を立てるのです。これは餘りに細か過ぎて面倒に思召すお方も御座いませうけれども一家の經濟は餘程注意を加へませんければ、兎角超過したがります。一度豫算を立てまして、その豫算より超過致しましては何にもなりませむ。ですから家の憲法第八項にも『一家の經費は月毎に豫算を立て決してそれ以上超過せざる事』と堅く定めてありますのです。これを定めましたのは私ですから其私がそれを破りましては何にもなりませむ。私は飽迄も細心に致さねばならぬ責任があるので御座いますで、家賃や米代は左程變動がありませんけれど、定めて定められませぬのは毎日の副食物で御座いますこれはツイ贅澤に流れ易いもので、ウカ〳〵して居ますと豫算を超過致します。私は先づ此副食物の一日の豫算を立てました。この副食物の豫算は一ヶ月九圓となつて居まする。これを一日に割當てますので、丁度三十錢となります。これが一日一家三人の副食物の豫算なのです。

三十錢。三人に割當てますと一人前十錢に當ります。此僅少なお金で滋養分を供へねばなりませぬ。それも三度の副食物ですから、一度が一人前三錢三厘餘となる勘定なので、餘り細かな計算でお耻しう御座いますけれど、この位に算當を致しませぬと、一家の經濟を冗費なしに繰廻して行くことが出來ませむ。

此他に石油とか炭とかも、一日の豫算を立てれば立てられぬことはありませぬが、それでは又餘り杓子定規となり過ぎますので、私は副食物だけとして置きました。

これに次いで肝腎なのは

▲現金買

なのです。何方様でも月給で月の生計をお立てになりまするお家は、多く月末拂ひとなさる様で御座います。これにはいろ〳〵の弊害が御座いまして經濟上のお爲めにはなりませぬ。私共は家賃を除きまする外は凡べて現金で買ふことに致して居ます。それは掛拂の弊害を認めましたからで、私が心づきました掛拂の弊害と申しますのは、

一、掛拂はツイ品を買過ぎましてなりませぬ。で、私共の様に凡べてを豫算で切盛を致します家では買過ぎをしましては經濟の狂となり、從つて豫算超過の大害に陷ります。

二、一度掛買をしまする品物の惡いのを受取ましても叱言は云はれますけれど、他に好店がありましても其店から買ることが出來ませぬ。

三、掛買をしますと前申上げました通りツイ買過ぎますから其害は晦日になりますとお拂が出來ぬことゝなります。それが爲め商人に迄信用を失ひ、下ずてもよい頭惱を下げ、侮られ毀られる様になり、果ては一家の經濟迄紊れて行き他人様に頭惱が上らぬ結果を見ねばなりませぬ。

此外に數へましたら未だ弊害は澤山御座いませう私は飽までゝ現金買がよいことを主張致します。

▲主婦の仕事

澤山のお召使をお使になります奥様方は、お手がおありなさいますからでせうが、凡べてのことをお召使にお任せになりまして、御自分は何にもなさらぬ方が御座います。これは御自分のなさるお仕事がおありなさらぬからで、結構の御身分と申す外はありませぬ。私共などは唯た一人の下婢なのですからなか〳〵何も彼もと任せて置く理由には參りませぬ家が至つて手狹ですから、御飯こそ炊きませね、雜巾こそ手に致しませね、是れでもいろ〳〵と用事が御座います。

朝は五時半に起きますのは私の家の極めで、憲法

にちやんと定めてあるので御座いますから、主人も私も奉公人と一緒に起きますので、主人は洗面が済みますと直ぐと書齋に這入ますから、私は先づ主人の書齋を掃除致し、蓐を正し、火鉢へ火を容れなどします。其他牛乳を暖めまして主人に薦めますのも、茶を入れて持て參りますのも、主人の身の周圍のことは私の役目となつて居ます。

それから主人が受持の學校へ出勤致しました後は別に是れぞといふ用事はありませんけれど、左樣かと申して長火鉢の前に座つて新聞や雜誌などゝ首ッ引ばかりもして居られませむ。主人の衣服――新たに仕立ますのは勿論、繕ひやら、洗濯やらに、お天氣都合を見まして取かゝらねばなりませぬ。その相間に靴下を編みましたり、副食物の切盛などを奉公人に指圖致したりします。これは何方樣もおなじてゐらつしやいませうから、くだ〳〵しくは申上げますまい。

▲帳簿の用意

其日々々に出入れ致しまする金子を別にお帳面に記ける必要はない、と仰言るお方もありませうが、私は、それは大な思召違ひであらうと思ひます。其日其日に出入れをする金錢ですから就中收支の道を明かにせねばならぬと思ひます。で、私は、

一、小遣帖
二、收支明細帖
三、月計表
四、財產目錄
五、半季收支明細表

と五通りのお帳面を作りました。

小遣帖　は日々のお小遣を記入いたしますので、家計の簿記法に依りますと日記帳に當るので御座います。

收支明細帖　これは畢竟家計元帖なのでして、小遣帖から其日〳〵に口座を仕譯いたしまして賄費とか、交際費とかに分けて其口座へ記入致すので御座います。

**月計表**　これは其月一杯の收支を一目瞭然に分りまする樣に作りました表で、又報告書なので御座います。主婦から主人へ一ケ月の收支決算を報告致しますので。豫算手一杯の時は心苦しく御座いますが多少でも剩餘金が出ました時は我知らず嬉しく思はれます。

**財產目錄**　公債とか株券とか、其他地所とか家屋とか、貴金屬のお道具や大切な書畵や一家の財產ともなりまするもの丶目錄で、これも亦一目見まして判然となりまする樣に記入して置くので御座います

**半季收支明細表**　これは半季、半季に報告致します決算表で。無論月々には用がないので御座います。

彼樣に五通りの帳簿を備へまして、それに遺漏なく記入して參らうとしまするには、これでもなかなか大役で御座います。毎日のことですから、時にはあ丶嫌だ、面倒だと思ふ心が起らぬこともありませぬが、其處が主婦の役目であると堪へ忍びまして、不相變實行して居ます。

此帖簿の他にまだ一ッ主婦の役目が御座います。それは、

### ▲日記帖

を記入致しますので、日記帖と申しましても簿記法で申すそれではなく、その日一日に起りました出來事を歷史的に記けますので御座います。

これも中には面倒と仰言つて卻けてお了ひになるお方も御座いますけれど、日記帖位其お家に取まして大切なものは御座いますまい。其お家の御主人は勿論、主婦のお方がなすつたこと、その日にお出でになつたお方から、そのお方――お客――とお話しをなすつた要點、さては重なる社會の出來事、御自分のお考へ、凡べてお家を中心として有らゆることを平易なお筆でお記しになりましたなら、お家の歷史となるばかりではありませむ。その日記があつた爲めに他日事が起りました時に、證據ともなるやうなことがありませう。ですから主婦としては、是非日記を記けて置きます必要があるので御座います。

で、私共は毎日欠さず、怠らず日記を記けますことを日課の一ッと致して居ます。これはまだ私が處女時代から記けて居ましたので、其頃も毎夜就眠ます前の時間を割きまして日記を記けること丶致して居ましたから、一家の主婦となりましても左迄に面倒だとは思ひませぬ。却つて、机に對ひまして其日致しました樣々なことを繰返しましたり、又はお客樣の事、家事向の事、久しくお目に懸りませぬお友達からお手紙がありました事、それからそれへと靜かに考へまして僞らず飾らず、有の儘を拙い筆で記入いたしますことが何樣に趣味深く感じますでせう。殊に家事向のことなどで好い思ひつきが浮びましたのを書き記する時の心持や、又は自分ながら善事をしたと思ひましたことを記します位、嬉しく、氣の暢々することは御座いませぬ。私が日記を絶えず怠りませんで記けまするのは、家の小歴史を殘すと申す方よりも私がこの快い思ひを致しますのが樂しみなのでして、毎夜臥りまする前に筆を執つて居るので御座います。それで私が日記に筆を執る樣になりましてから、自ら省ることが多くなりました。これと申しますのも、畢竟日記に惡いことは書きたくない。自分を僞らず飾らず記けるのが日記で、日記は取りもなほさず心の鏡なのですから、その鏡には可成取亂した醜い姿を映したくないと、自分でも愼みます樣になりましたので、自然の過失も少くなる樣になりました。私はこれを日記のお蔭と致しまして益々心を清く美しく持ちたいと思つて居ます。

▲結尾の一言

この稿を『家政の一日』と題しましたけれど、午前何時、午後幾時と分けて記しませぬから、多少變に思召す方も御座いませう。然し私の考へは家政一日のことをお話し致したいといふ意志なのでしたから斯ういふ題を掲げました。若しこれが羊の頭を掲げて狗の肉を賣つた昔時の比喩の樣だと思召す方が御座いましたら幾重にもお詫をいたして置きます。

さて、家政のことはなか／＼難しいもので御座い

まして、そのお家〜〜の流儀もありませうし、御銘銘のお考へもありませうけれど、私のお話し申上げました懺悔話——敢て實驗談とは申しませぬ——が聊かでも御參考になりましたなら、私の大いに悦ばしい所で御座います、

（をはり）

## 雛と雛遊びの由來

中村牧子

本居宣長の『玉かつま』に、人の形を小さく作りて、わらはのもてあそぶ物を、物語ぶみどもにも『ひゐな』といへり、これは小さくつくれるを鳥の『ひゝな』になずらへていへる名にて、字も雛とかき、今の世の人も『ひな』といふを、ふるく『ひゐな』としもいへるは、詩歌を『しいか』、四時を『しいじ』、女房を『にようぼう』といふたぐひにて、ひ文字を引いていふなれば、假名は『ひいな』とかくべきを、ゐとかけるはたがへり、物の雛形といふも、ちいさく物したるよしの名なり。と記し置かれたるが、古へより人の形を小さく作り、又たそれに似合ひたる家居調度などをも作り、童の戯れ遊べるを『ひいな遊』と唱へて、源氏物語、榮花物語を始めとして、諸種の物語、歌人の家集などにも多く見へたり。固より童の戯れなれば、いつといふ定まりたる時とてはなく、全く平日のなぐさみ事なりしなるは、すべての物語、其他種々の文の中に見ゆるもの、悉く時を撰ばず、年の始めの元日にも、夏の夕の高殿にも、將た秋にも冬にも、處嫌はず催されし例にて知るべし、其頃の雛遊びは、後の世の兒女子がすなる『ままごと』、『姉さまごと』といふに同じきものなりしが『まゝごと』は、童の言葉に飯を『まゝ』といひ、此の戯れは飯作り種々の食物を料理する學びなれば、と傳へらる。

さて此の雛遊びは、敏達天皇の二年、聖徳太子の幼なかりける時に始まれるよしの傳説、舊事紀を始めいろ〜〜の書に見えたれども、確かなる根據あるも

のにはあらずして、取るに足らず、古今要覽に。ひいな遊びの始定かならず、崇神天皇の御時、和珥阪の少女の歌に、比賣那素寐殊望とあり、私記に、今按ずるに、ひゝな遊びといへり、私記とは、弘仁私記か、公望私記か、知らずといへども、公望承平六年十二月八日、宣陽殿の東廂に於て日本紀を講ずといへば、其の頃の私記ならんか、去れば、たとひ崇神天皇の御時より始まりしといふことは定めがたくとも、承平年代以前より行はれしことは、疑ひなかるべし。

かく、我國の古へに在りては、此の雛遊びは、時節を定めず、久しき間行はれしものなるに、今の如く三月三日をかぎりて、家毎にかざり祭ることはいつの頃よりの習慣ならん、一說によれば、後土御門の御宇の比は、すでに有りしと見えて、飛鳥井榮雅の三月三日雛遊びの歌といふもの、月苅藻集に見えたり、されど、一條禪閤の世諺問答にしるされざりしは、世間一統の事にはあらざりしなるべし、さて古へは時節にかゝはらず、ものせしなるを、今は必らず三月三日に行ふことゝなりしは、上巳の秡の人形と、雛遊びとを混ぜるなるべし、といへり、又村瀨之熙の秇苑日渉に曰く、三月三日、之を上巳と謂ふ、艾糕を以て節物となす、(中略)此の日家に女兒あれば、必らず人勝を陳べ、艾糕、赤豆飯を供して醴酒飲讌す、之を雛會と謂ふ、因て上巳を以て女兒の節となす、按ずるに、國語人勝を謂んで雛となす、此日兒女、人勝を陳べて遊戲す、之を雛遊びといふ、古昔正月を以て此の戯むれをなす、舊事紀に曰く、敏達天皇の二年正月、侍從雛像を進むと、源氏物語にも亦た元日雛遊びのことあり、三日の雛遊びは未だ何れの時に起るかを詳かにせざるなり、近世、之に衣するに繡纈を以てし、之を飾るに金珠を以てし、一對の價或ひは五六十金に至る、比者、其の淫靡の者を嚴禁して、頗ぶる質に歸するといへども、要するに、復た古制にあらざるなり、蓋し、漢人は人日及び立春を以て彩勝をつくり、三日には則

ち韃人あり、漢人は五日を以て女兒の節となし、此の方に在りては、三日を以て女兒の節となし、五日を以て男兒の節となす、四方俗殊なりといへども、人情の相遠からざる、以て見るべきのみ。云々と、(彩勝は彩色したる人形にて、韃人は木彫り人形なり、三日は三月三日にして、五日は五月五日なれば、日本と支那とは男女反對の節句と見るべし)、去れど孰れの説によるも、三月三日の雛遊びにつきては、其起源を詳かにすることは能はず、或は考古家の説によれば、天正以後の



事なるべしといへり、暫らく其の説に從ふ外なし。

因りて、爰には三月三日の雛遊びは、天正以後の事なりと假定めんに、古へ戯むれのみにものせし雛遊びは此の頃より稍や家庭教育的意味を含まれ、女は高き卑しきを問はず、嫁しては夫に從ひ、内をおさむるものなれば、幼き時より、嫁して夫に事ふるわざ、家業の事など、此の遊びにて其の學びをなして、手馴れ習はしむることを本意とすることとなりしものらしく、民間の兒女等此の遊びをなして飯かしぐわざまでもこれに

手馴れ、家内睦まじき體をまなび、質素を旨とし、美巧を好むことなどは、露程もなかりしなるに、其の後、月を重ね年を積み、太平に馴れたる德川氏の治世も、追々に末となりしより、世間一般の事何くれとなく、奢侈の風に傾むきしまゝ、此の雛遊びもまた其の餘響をうけて、雛の供物には、膳部の外に豆煎り、はせ、白酒、菱餅、蛤など種々のものを必らず具へ、調度には、恐れ多くも内裏にて用ゐさせらるゝほどの品は、悉く之を小さく作りなして整ふることゝなりしが、其の後、今の世の如く、塗物蒔繪などにて美々しく作る風とはなりしなれ。

前にもいへりし如く、ひなは固より小さきものゝ呼名にて、後の世までもしかありて、太さも七八寸より一尺を越ゆるものなく、享保六年七月十九日、人形問屋中への御觸文といへるを見るも、先頃御觸人形裝束之儀、上方へ仕入申遣候處、不得止之儀有之由申越候に付、越前樣へ伺ひ候へば、右裝束之儀向後御觸の通り、八寸より上拵へ不申、幷に金入純子の裝束着せ候儀、無用に可仕候。とあり、兎に角、むかしは雛幷に雛遊びの調度も今の如く美麗なるを用ひず、飯も汁も蛤の貝に盛りて供へけるとぞ、今、雛のことにつき、隨筆ものなど讀みて、知り得たることゞもを書きつけ見んに。

骨董集といへる書に古製雛の一種として記せるは、白木の冠樣のものゝ上に突出したる曲尺一尺二寸ばかりなるものあり、上の方を黒き糸にて卷きたるは髮の毛の心なるべく、其の下を五色の糸にて卷きたるは衣領の心ならんか、之れを紙に鶴龜松竹の繪を描き丹靑にていろどり折疊みて後ろに立かけ置く、これは衣服の心なるべし、男雛は黒き糸を上まで卷つめずして白木を殘し、女雛は上まで卷き、これをもて男女を別てり、其の製造に大小の異同、精粗の相違ありしは言ふまでもあらじ、文化年中の頃までは、四國の中に此の古制殘り居たるよし、造りざま人の意表に出でゝ、自から古く雅致あるものにて、珍重すべき品なりきと、是れぞ古代の遺風とも見る

べきならんか。

室町家(足利氏)の頃の雛なるよし、慥かなる傳說ありとて、同じ書に載せたるを見るに、姿勢は當時の上流社會の人物の坐像を寫したるものらしく、男女とも高貴の裝束したるにて、男は高さ曲尺三寸五分女は同じく三寸三分なり。

降つて、貞享五年印本の日本歲時記に載せたる雛遊びの圖を見るも、又た、元祿元年印本の女用訓蒙圖彙に載せたる繪櫃の圖を見るも、又た同じ十年の頃畫工鳥居淸信のものせし雛遊びの圖を見るも、其の頃の雛は紙雛ならずば土雛の質素なるものにて、雛を飾るにも今の如くに段を設けず、唯だ坐上に敷物して、之れに雛人形を物に立かけ置くのみにて、其の無造作なりし態の思ひやらるゝが、女中風俗玉鏡といへるに載せし圖によれば、享保の頃より僅かに一段ばかり小高く設けて、之れに雛を飾ることゝなりしやうに思はる、紙雛とは紙を折り又は切り繼などして製したるもの、土雛とは土を燒きて製り、之を胡粉、丹、綠靑などにていろどりたるものにて、男女とも高さは曲尺にて五寸餘なり、此の土雛の製造地は、京都近くにては深草の里、江戸にては今戸あたり、奈良近くにては帶解といふ在所など、名あるものなりしが、帶解のは、男雛は太刀を帶び、女雛は天冠を被て共に臺あり、高さ六寸五分ありき、尙ほ、奈良には奈良人形の一種にて、木彫に彩色したるものもありき。

伊勢の國山田あたりにては、古へより傳へて、女兒平日の雛遊びに、小米雛とて五六分ばかりの紙雛を作り其の衣服にするものを『きゝ』といひ、そが材料としては、巾一寸長さ二寸ばかりの小さき鳥の子などの紙に丹靑もて文樣をいろどり、或は行成紙などを小さく裁て用ひ、之れに小さき紅絹の切などを添えて、衣領つきを整ふるもあり、さて鳥の子などの巾ひろき一ひらの紙に、座敷、客間、居間、臺所など家の圖を描き、小米雛夫婦と共に婢女奴僕などをもつくりて、その圖の所々に糊してつけ置き、人家

平日のさま、夫婦むつまじき體を學びて、平常の玩びにしたるよしにて、至りて質素なる戯れなりしが、こは源氏物語中、紫のうへの雛遊びの條にいへる、ちひさき屋形をつくり、ひいな押し据えてもて遊び玉ひし、ことなどに思ひ合すれば、いと〳〵古き習ひにて、此の地にのみは久しく絶えで傳はりしものかとも思はる。

又た、相摸の國愛甲郡敦木の里にて、年毎に古雛の損じたるを兒女ども持ち出で、相摸川に流し捨つることあり、白酒を一銚子携へて河邊に至れば、他の兒女もこゝに來り、互ひに雛を流しやることを惜みて、彼の白酒をもて離杯を汲みかはし、雛を俵の小口などに戯せて流しやり、一同に哀み泣くさまをなすことあり、此のあたりの雛は他の地方のものと異なることはなきも、其の外に藤の花をかつげる女人形多しとなり、思ふに、雛を河水に流すは、三月の上の已の日は水邊に祓する事の習はしありしなるから、是等の遺意にて、その古雛にもろ〳〵の凶事をおはせ、おのれ〳〵の身を祝ひしにはあらざるか、妹脊山の淨瑠璃に、雛の道具を水に流すことのあるは、作者設けしことゝのみ思ひしに、かく似通ひたることもありけり、こは古老の物語のよしにて或書に見へたるが、嬉遊笑覽といふ書に記す處も全く同じ。

以上雛につきて大方は語り盡したるが、三月三日の雛に對して『後の雛』といへることあり、此の『後の雛』は古き書には見あたらねば、元祿以後のことなるべしといふ、滑稽雜談第十七に後の雛(九月九日)と題し、和國の女兒ひな遊びをなすこと、古き物語りにも出でたり、上已の節に據あるよし、(中略)俳諧之を名付けて『後の雛』とす、其の上已に對していへるなり、と記せり、其角の句に『乘り物の步みすくなき後の雛』といへるがあり、彼是思ひ合すれば、正德享保の頃までは其の事もありしならんが、今は殆んど其の俗を絶てり、尤とも京大阪などにて古例を守る家にありては、今も尚ほ九月九日に一つ

二つの雛を出して、かたばかりの設けするよし、語り聞かす人もあれど如何にや、又た、播州の室津あたりにては、八朔（八月一日）に雛を立つる所もありといふものあれど、是れ亦たいまだ其の實否を確かめ得しにはあらず、他日機あらば、よく〳〵調して更に記すこともあらむ。

## 傳染病豫防の心得（つゞき）

醫學士　山根正次君談

傳染病豫防の方法には種々あるけれども、その最も緊要なるものを擧ぐれば、曰く隔離、曰く消毒、曰く攝生、曰く清潔の四の外に出ないのである。學理上よりこれを區別すれば、彼の海港檢疫法も、陸上檢疫法も、交通遮斷も、傳染病院も皆いづれも隔離の方法に過ぎないのである。また法律上に於て隔離法は種々に規定せられて居るが、兎に角この隔離ほど人の權利を侵害するものはないのである。法律が人の自由を制限するに傳染病豫防法ほど苛酷なることはない。即ち一人の患者のため一家、一町村、一部落の交通を遮斷して、交通上人民の生活を一時停止するので、この結果一人、一家、一町村、一國家の經濟上に及ぼす影響は非常なものである。前に述べたる某縣の養蠶家の如きはその適例である。處ろが彼の隔離の一なる傳染病院へ入院することを忌む人が往々ある。是等は公德心の薄い人と云はねばならぬ。傳染病者は自分の不幸は致方がないとして、成るべくこれを他人に傳播せしめない樣にしなければならぬ。孝行を盡すべき親や、最愛なる妻や、または主人其他の人々に傳染しないやうに早く病院へ行つて、世人の健康を保全するといふやうにするのは德義上より言つても當然なことである。然るに兎角にこれが勵行されないので、隔離といふことが自然十分に行屆かぬ。先年深川でドンナ事があつたか、その病人は傭人である、其者が吐いたり下したりするから、これは虎列剌であらう、虎列剌ならば交通

遮斷を受けるから早く傭人を自宅へ送り歸へすが宜いといふので、患者を背負せて本所の自宅へ歸して仕舞つた。是等は實に間違つて居る。その結果は果して如何であつたかといふに、深川では九軒の家が遮斷され、また連れて行つた本所の家と、背負つて行つた者の家も遮斷を受けた。さうせぬと其間に病毒を蔓延せしむる虞があるからである。現今東京では傭人が病氣に罹ると、これを宿元に歸へすが例である。御醫者に内々聞いて見ると、如何も虎列剌らしい、成るべく何處かへ遣つた方が宜からうといつて、家元へ歸へしたために惡疫蔓延することが屢々ある。これは公徳といふ事を考へて、さういふ弊害のないやうに注意して貰ひたひ。若し傭人に傳染病者が出來たならば、決して隱蔽することなく、直ちに醫師の診察を受けて、速かに治療するため早速避病院へ送るといふやうな方法を執らねばならぬ。また一方の衞生組合に於ては、かゝる事を十分に注意勸告するのがその責務の一であるからして、可成不都合のないやうに骨折りて貰ひたいのである。

次に注意すべき方法は何であるかといふと消毒である。消毒は何時でもどうか十分に遣つて貰ひたいのである。排泄物であるとか、病人の觸れた穢ない物であるとか、殊に衣服、飲食器具類其他疊であるとか何とかいふものには、十分に消毒を行ふて、若し燒くことが出來るものならば、悉く燒棄てるのが一番宜しい。何でも最初に於て消毒方法を嚴行しないと豫防の目的を達することが出來ぬ。それ故に黴菌を殺すに就ては十分なる消毒を行ふことが最も肝要である。汚れた物は成るべく燒き棄てゝ仕舞はないと、少しの物を惜んだためは非常な害を起すことがある。先年豊多摩郡にかういふ事があつた。同地のある金滿家の家で傳染病者があるといふことを警部が聞いたから其家へ檢査に行くことになつた。處ろがその家は非常に慾張の家であるから、警部が檢査に來るといふことを或人から聞いたので、患者の用ゐた蒲團だの、蚊帳だのを押入の中へ隱して、病人

は殆んど裸體で、唯だ薄い蒲團を敷いて寢て居つた時に警部が行つて、此方の家に赤痢病者があるといふ事であるがさうかと聞くと、どうも何日以前から下つて困まるといふ。ソコで警部は患者に向ひ、貴方は殆んど裸體のやうであるが、この病氣は體軀を冷やしてはいかぬといふと、どうも暑くつて不可ないから衣服を着ないといふて、上に單衣一枚掛けた許りで居るが、どうも事實でないやうに思はれたから段々調べて見ると、案の如く血が附いた衣類抔がみな押入れの中に隱してあつた。かゝる事からして何處でも、往々多數の病人が出來るものである。故に惡疫豫防上何でも初めの間に於て消毒法を厲行せねばならぬ。

消毒の事は警察や衛生組合が注意をするから十分行ふことも出來ると思ふが、殊更に消毒を要する所は塵溜とか、便所とかいふ處で、患者の出來た家などに於ては、その踏んだ便所の草履などは燒棄て、また溝渠は板をはがして十分に消毒しなければならぬ。これは病人が出だ時の處置であるが、出ない時の處置はどうしたら宜いかといふと、清潔法を厲行するが一番宜しいのである。虎列刺病の黴菌は清潔が大嫌ひである。何故嫌ひであるかといふと、黴菌の養ひになるものが皆消毒藥を以て浸されて發育することが出來ないからで、病毒を絶つには病毒に食物を與へないのが一番宜いのである。曾てナポレオン一世が露西亞に攻入つて、莫斯科の都に突入らんとした時に、露西亞人は到底ナポレオンの猛勢には、當ることが出來ないといふので、莫斯科の市街をドン／＼燒いて逃げて仕舞つた。是に於て那翁は非常なる寒國に行つて、宿るに家屋なく、食ふに食物なく之れが爲めに大變困つて、佛國へ歸へるまでに何十萬といふ兵士が死んだといふ事だ。これと恰度同じ道理で、虎列刺病の病毒を防止するには、彼等の食物を絶つのが一番宜しい。即ち溝渠や、塵溜や何かを清潔にして十分消毒をして置くと、病毒は這入つて來た處ろが發生することが出來ないのである。

序でだから話して置くが、予か實驗した所ろでは、消毒の藥料としては石灰などは効能がある。虎列刺の病毒は濕温が好きであるから、何分氣をつけて濕つた土地にしないやうに、好く乾燥して天日にでも當てると、病菌は直ぐに死んで仕舞ふ。だから濕つた地には石灰などを撒くが宜しい。近年賣出して居るベジンペクトールなども効驗がある。これは下山藥學博士が發明されて臺灣で出來る藥品であるが、消毒藥として大變に効能があるのだ。

次に肝要なるものは各自の攝生である。その中で注意を促がしたき點は、家屋はまづ日々掃除をして、空氣の流通、光線の透射をよくし、殊に便所、塵溜下水等不潔の場所に向つては十分消毒を行はなければならぬが、その外に身體を清潔に保つことが必要である。それに就てはまづ衣服を乾燥せしめ、且つ清潔にし、浴衣などは屢々洗つてさうして度々交換せねばならぬ。それから成るだけ感冒を防ぐことである。即ち風を引いては不可ない。また腹部を冷やすと腸加答兒に罹り易い。これを避けるためには子供は勿論、大人でも腹卷をして腹部の温度が急に變化しないやうに注意しなければならぬ。また腐敗に傾いた食物、酸味を帶びた食物、さういふ腐れかゝつた食物は嚴禁し、その他飲食物には一體に氣を付けなければならぬ。隨分子供などは夏季になるとラムチの腐つたのを飲んで腸加答兒を起したり何かするから、飲物に付ては世の父兄たる者最も注意すべきである。この點に於て改良水道は非常なる効力を有つて居るものであるけれど、併し往々かういふ事がある。魚類を活かして置くとか、または刺身か何かにするため鮹などを水中に漬けて置く時分に、その水は必らず冷たい井戸水でなければならぬといふ惡風が遺つて居るやうである。これは間違つた事だ尤も近頃は冷し氷抔といふものがあるから、無理に井戸水に入れて置かなくても宜いかも知れぬが、俗間にはまだ何分前陳の如き陋習が殘つて居るやうだ井戸水には種々な物が混つて居るのに、香物や茶碗

を洗ふに水道の水を使ふとメートルが動き餘計税を拂はなければならぬといふて、洗ひ物などには井戸水を使ひ、飯を炊くのと飲水だけ水道の水を使ふと云ふやうな風もあるが、これは止さなければならぬ井戸の水は最も危險で、井戸水よりして傳染病を蔓延せしめることが澤山ある。此に一例を擧げて話せば去る廿八年に伊皿子に虎列剌病人が出來た。處がその家の婆さんが洗濯物を持つて、自分の方の井戸では出來ないから、向ふ側の井戸へ行つて人が起きない中に洗つた、日本の習慣として井戸端で洗濯をするといふ悪風があるが、それは何故悪いかといふに在來の井戸といふものは多く車井戸なので、水を汲む時には洗濯物の汚ない物に觸れた手でこれを汲むそれで自然井戸の繩へ病毒を附ける。また山の神などは子供の襁褓抔を洗つてまだポツ〳〵水の垂るやうな生絞りの物を井戸側へ掛けて汚水を中へ落す。是等は實に危險の至りであるから氣を付けなければならぬ。洗濯をする時分には、必らず先に手を洗つて水を汲んで置いて、洗濯が濟んだら又手を洗はなければ井戸繩を持たぬやうに注意するが宜い。然るに世間ではどうも氣が附かずに遣つて居る。その結果はこの時端なくも伊皿子に現はれた。他人は婆さんの所業を知らぬから、同じ井戸水で米を磨いだり香物を洗つたりして、その結果長屋に多數の病人が出來た。また曾て飯田町にも膓窒扶斯患者が一軒の家に十八人も發生し、調べて見ると矢張り井戸へ行つて洗濯した爲めであると云ふ事であつた。さういふ理由で井戸水は危險であるから、飲食物に使用する水は殊更らよく撰ばなければならぬ。また近來は撒水を取るために井戸を掘る。それを取違へて飲んで居る人がある。是れはいかぬ。この事は警視廳からも注意し、特に飲むべからずといふ標札が立てられたが、立てない所もあるから過失のないやうに注意しなければならぬ。それから不熟の果物、これも父兄の大に注意を要するものだ。子供抔は不熟の果物を食つて膓加答兒を起し易い。勿論果物でもよく

熟したものは少し位ゐ食ふても差支ぬが、兎角下痢を起し易いから餘計食ふてはならぬ。またアルコール飲料並に酒類を多量飲むことは無論有害である。これは自分に實驗がある。予はこの頃酒を一滴も飲まぬから、人に酒を飲むなといふことは言はないけれど、酒を餘計飲むと腸胃加答兒を起し易く消化の不良を來すことがある。これは大變に傳染病感染の媒介をなすものである。彼の高島炭坑と云が長崎の傍にあるが、明治十八年に其處に赤痢病が起つた。日々百三十人からの患者が出來た。一日に千噸千五百噸といふ石炭を掘つて居る工夫が悉く傳染病に罹つた。然るにその原因は全く飲酒にあつて、大變に患者が出來たから、この時工夫には一切飲酒することを禁じたのである。すると案の如く一日百三十人も出來た患者が翌日には唯の三十人に減じたことがあつた。故に大酒といふことは惡疫傳染上非常に危險を與へるものである。次に注意すべきは心身の疲勞である。身體に疲勞を起すべき原因となることは努めて避けなければならぬ。身體が非常に疲勞して居ると病毒の襲來に抵抗することが出來ぬからだ。それから個人の衛生上留意すべきは豫防のため濫りに藥を飲むことを禁ずることである。誰それ發明の藥は虎列刺、赤痢に良いなどといふて妄りに飲むものがある。これは誤解である。若し眞にさういふ良藥が發明されたならば實に大發明である。コッホやペッテンコーフエル杯の大學者は苦みはしますまいまた豫防の必要もありますまい。賣藥杯には種々な廣告をして居るけれど、これには餘程注意しなければならぬ。疾病は醫者に掛つて速かに治療するが一番宜いのである。下劑杯を濫りに呑むのも無論いかぬ。また祭典を暑季に行ふのはいかぬ。惡疫の流行期に人の多數群集することは成るべく禁ずるが宜い傳染病豫防のことはこれで大抵解かるであらうと思ふ。倘ほ一言せんとするは、傳染病なるものは大都會に於て多く發生し流行して危險を感ずるといふ事である。世人知る如く安政年間に虎列刺病流行のた

新奇發明 増酒資料（さけふやすもと）

壹斗の清酒は即座に倍増し（即ち貳斗）となる大金儲的醸造化學作用の一大發明新法なり、（附錄）腐敗酒直し法、醤油参倍増法、味淋酒速造法、酢速造法、新酒を古酒に變ずる法、香竄葡萄酒速造法、焼酎倍増法、味噌速造法等以上の醸造家及び請賣營業者の大有益案内：：右今回披露の爲拾萬部限り**無代進呈**す酒造家及前記載の營業者にして望の方は郵券四錢相添申込次第直に傳習手續摘要錄を送呈す速に見よ營業上一日も缺くべからざる確實**大有益**の秘訣なり是ッ非早く利用せよ驚くべき大金儲あるを確證す（注意）本館の隆盛を羨み近時當館廣告に擬せて怪しき無効の僞法を傳ふる奸者顯はれたり有志者深く注意して僞傳者に欺かるゝ勿れ：：（當館は去廿壹年の創立也）

發明元祖 東京市神田五軒町拾九番地 **日本授産館**

肉體色白新劑

本劑は近時佛國パリス貴紳淑女間に最新流行の發明劑にして如何程色黒き男女にても特別製貳劑を用ゆれば忽ち肉體**純白色に變化**し艶麗の容貌となるを確證す世上種々雜多の色白藥を用ひて奏効なき人は速に本劑を試み見よ眼前に峻烈なる特効を覺ゆ眞に奇効顯著の確證新劑價は並製金壹圓特別製分壹圓五拾錢

專賣元 東京市神田五軒町拾九番地 **日新館藥房**

月やくおろし

必ず忽ち**快通流下**する特効あり本劑参劑分を用れば二三ヶ月間滯りたる月經にてもキレーに流下す又特別製分を用れば半年以上の月經閉止及び**血塊**にても必ず立處ろに流經す且つ月經不通月經不順より起る子宮病血の道を全治し多年滯りの古血及**惡血毒血**を一掃すること確證す但し本劑は其奏効極めて峻烈顯著なるも毫も衛生無害なり婦人諸君安心して試藥あれ價は壹劑分七拾錢貳劑分壹圓廿錢参劑分壹圓七拾錢特別製分貳圓参拾錢（注意）本劑の大盛を羨み近時續々怪しき無効の類似僞藥顯る深く注意ありて一專賣元日新館藥房」の名義に注目し購求あらんことを乞ふ

本劑は婦人の子宮を害せず如何程長き月經閉止も



わきが（腋臭症）

**根治確證 新發見藥**

醫療賣藥百方手を盡せし如何程頑固劇烈の慢性わきがにても**誓て根治**し決して再發或は他病に變ずる憂なき廿世紀的改良根治新藥なり速に試み苦惱を脱せよ價は輕症根治分六拾錢重症根治分壹圓廿錢頑固劇烈の慢性症根治分貳圓卅錢若金即刻送藥す郵券代用必ず二增割の事（電話下谷五四六番）

以上貳藥專賣元 東京市神田五軒町拾九番地 **日新館藥房**


御用諸學校
TRADE S.A MARK
ANDO-SHOTEN
No 5 Urajimbo-cho. KANDA. TOKYO
Manufacturer of Various Appliances for Gymnastic & Other Out-door Games.
東京神田裏神保町
安藤商店
電話本局四八四番
ピンポン室内テニス
一號一箱 一、二二〇
二號同 一、五〇〇
三號同 一、六八〇
四號同 一、八三〇
五號同 〇、八八〇
其他各種御注文に應じ製造可仕候
ピンポン改良室内テニス（旅行用）
一號一箱 二、〇三〇
二號同 二、二三〇
三號同 二、三五〇
四號同 二、五一〇
同用テーブル 上等一臺拾參圓 並等一臺九圓半
號大人用
御用 體操器械
体育用品
東京神田裏神保町五
S.A. 安藤商店
テニス用ラケット一組
一號大人用 一三、〇〇〇
二號同 一一、〇〇〇
三號同 八、八〇〇
四號同 七、四〇〇
五號同 六、七〇〇
六號同 五、七〇〇
七號同 四、七〇〇
小人用（小型用） 六圓
同二號（一號） 七圓
改良櫻二重枠ラケット一組
一號 拾參圓參拾錢
二號 拾壹圓七拾錢
三號 九圓五拾錢
四號 八圓貳拾錢
五號 七圓貳拾錢
六號 六圓貳拾錢
テニス組一張 一、七五〇ヨリ二、九五
○送料各種あり升
東京市神田裏神保町五
安藤商店
電話本局四百八十四

め大變な人が死んで居るが、その時分にはこの江戸城内に將軍が御居でになつた。然るに時の將軍が江戸城内に於て虎疫に罹り薨去されたといふことは記憶すべき事である。その時閣老もまた虎列剌に罹つて死なれた。伊東玄朴杯といふ和蘭學を修めた先生が駈付けたけれど間に合はなかつた。果して然らば御互の不注意からして傳染病が蔓延したならば、時として宮城の內へ這入らぬとも限らぬ。先年北京には皇城內に虎列剌病が發生して、これに罹つて斃れた官吏も尠なくなかつた。我國に於ては一般人民の衛生思想が發達して居り、殊に東京に於ては一層注意を加へて居れば、さういふ事は萬々あるまいとは信ずるけれど、若しも傳染病が一旦皇城を侵して入ることがあつたならば、吾々臣民は帝室に對して誠に相濟まぬことゝ思はれる。先帝孝明天皇の事を一寸御話しするが先帝はいかなる御病氣で崩御なされたかといふに、當時は種痘の法未だ普ねからぬ爲めに、京都に於ては畏れ多くも禁闕を侵して、孝明天皇は痘瘡に罹つて崩御遊ばされたのである。かゝる次第なれば、この帝都に於ては、惡疫豫防のことは造次顚沛も忘れてはならぬ。輦轂の下に住める人民は他の市町村に住む人民よりも、衛生上一層重い責務を擔ふて居るものである。

（完）

## 刺繡

上村百世子

### △藤搓糸縫ひ方

是も矢張り菖蒲と同じく肉を入れて縫ひます、靑か又は茶の木綿糸で葉の肉を入れます。尤も一重でよろしいので御座います、第一圖に有る如く入れ、花には白の木綿糸で第五圖の如く肉を入れ、蕾は第四に有る樣にいたします、技のすこし先きに木綿糸で肉を入れます、葉は草色を出し合せに致しまして第二圖に有る如く割り縫ひにいたします、花は第三圖に有る如く藤色のかま糸を出し合せに致しましてに


第一
第二
第三
第四
第五
第六
第七
第八

ほひだけを矢張りのこして縫ひ、蕾は花を縫ひました糸よりもすこし濃きを搓りまして第六圖に示したる如く縫ひ、次に枝を縫ふ、是は草色を割り合せにしたるものにて、まつり縫ひに致します、じくは淡き草色を割り合せにしたるものにて、まつり縫ひに縫ひながら莖を附けます、是は第七圖にありました樣に下に二針出し上に二針出してまつり縫ひにいたしまして、じくの方に付けます、葉柄は葉を縫ひました糸と同じ物で矢張りまつり縫ひに致します、にほひは黄色ではすに縫ひ、つるは極うすき草色で割り合せにして、細くまつり縫ひにいたします、芽の葉は第八圖に有る如く淡草色で縫ひます、

## 飲食物の話（つゞき）

磯部武者五郎

（三）乳汁

乳汁の重なるものは人乳と牛乳なり、左に其成分効用を記すべし。

●人乳の成分　水分、蛋白、脂肪、乳糖、鹽分等より成る、食物良しき者の乳は蛋白脂肪に富み、粗食者の乳は脂肪蛋白少し。

●効用　人乳は育兒上必用缺くべからざる大切のものなり、其の牛乳よりも小兒に有効なるは消化の良しき點にあり、即ち人乳中にある蛋白は牛乳の蛋白よりも小兒の腸胃に適し下劑の効あるが故なり。

●牛乳の成分　脂肪、蛋白、鹽分、乳糖水分等を含み消化の効よろしく人生の營養に適す。

良否の鑑別は白色、或は帶黄白色にして、僅に甘味を有するを良とす、味苦く又酸くして、且つ一種の臭氣なるは不良の品なり、蛋白、脂肪質の多量なるは晝搾りの乳にして次は朝搾り、又次は夕搾りなりといふ、又水を混じて賣るものもあれば、餘り稀薄なるは要心すべし。

●牛乳の使用法　生のまゝにては細菌の混ずる恐あれば一旦煮沸して、殺菌したるをよしとすべし。

●牛乳の製品　これには煉乳、牛酪、乾酪等あり

煉乳は牛乳を蒸發して製し、之に砂糖を加へたるものなり、其の成分は牛乳の成分に糖分を多量に加へたるものにて、帶黄白色のものを良品とす、其の用方は大人にては五倍の水、小兒にては六倍乃至十倍の水を混じて飲料とすべし、牛酪は牛乳中の脂肪を取りて作りたるものなり、色は帶黄にして其の臭新しきものは、牛乳の如く、稍古くなりたるものは、一種の臭を有す、牛酪は消化のよろしきものにて且つ一種の香氣を有する故西洋人は好んで食品に用ひ麪包につけ、又は料理に用ひなどして缺くべからざる品となせり、乾酪は牛乳中の蛋白を取りて作りたるものにて煎餅の如くなす、蛋白質に富むを以て蛋白質の乏しき食物と共に食すれば營養を補ふなり。

●牛乳類似の品　これには「アロイロナート」「ソマトーゼ」「ヲーカシン」「糜乳」等あり、「アロイロナート」は植物性蛋白質より製し、「ソマトーゼ」は動物性より製す、「ヲーカシン」は乾酪質に安母尼亞瓦斯を通じて製したるものなり、共に牛乳に代用し、或は病症等に依りて、病者には却て牛乳より有効なることあり、糜乳は又豆乳といひ、大豆を用ひて製したるものにて、牛乳に代用するなり。

### （四）水

水は人體中の主成分にして、少しにても缺くときは身體の營養を損するに至る大切のものなり、故に人三日以上も水を飲まざるときは、身體疲勞し、甚しきは死するに至る、又水の良否は大に衛生に關するなり。

●水の良品　無臭無味にして、色は透明無色、四時の温度の差著しからず、攝氏八度乃至十二度の間にあるを佳良の水とす、且つ夏時清涼にして冬時微温なる感じあるを佳とす。

●水中の有害物　不良の飲料水には種々の有害物を含むことあり、即鉛銅の類、寄生虫の卵、其他種々の細菌を含有するなり、鉛の中毒は疝痛を起し、寄生虫の卵は、多くは十二指腸虫の卵を生じ身體黄色を呈し、黄疸の病を起す、其他種々の細菌の爲には

る。「コレラ」「チブス」「赤痢」等の傳染病を生ずるに至

●●●水の檢査　水の良否を檢査するは、一に化學的に爲すに在り、これは通常爲し難きことなれば、醫師又は藥劑師に依賴して檢査を受くるを可とす。

●●●●給水の塲所　水の供給塲所は、大に良否に關するものなり左の塲所に在る水は、不良のものと爲し、飲用せざるを可とす。

一、窪池の水　二、芥溜、便所等不潔物のある近傍の水　三、井戸側破損し汚水浸み込む恐れある水　四、靜止せる水の溜りたる堀、池、沼等の近傍の水。

●●●●水の種類　井水、蒸溜水、天然水、河水等あり、井水は給水の塲所に注意して飲用すべし、若不透明にして良しからざるときは、濾過して使用すべし、濾過法には種々あれども、最も簡便なるは、砂及び炭を甕又は樽に入れ、之に水を注ぎて濾すなり、其の他煮沸して後冷却せしめて使用するもよろし、蒸溜水は蒸溜器に入れ蒸溜せしめて使用するなり、これは最も宜しく、細菌の混ずる恐なけれど、事簡便ならざる故、容易に用ひ難きなり、天然水は雨、雪を蓄て用ふるものにて、最も水の缺乏せる海邊にては多く之を使用するなり、天然水は天地間の大蒸溜法に據れるものなれば、最も清淨佳良のものなれども降下の際、空氣中の細菌、又は塵埃を帶び來ること あれば、其の用法に注意し、一旦煮沸して用ふるを可とす、河水も飲料に供すれども、其流過せる鉛道に不潔の物あるときは、水質良しからざる故、注意すべし、概して河中に岩石等ありて、水流急にして迸り流るゝ水は清淨にて、佳良の品とすべし、又山間谿谷の水も良しきなり。

わらやに梅さく　　水野忠敬

梅のはな軒端をめぐる此宿に
　こゝろたのしく住む人やたれ

梅間の春月　　黑川眞賴

鶯のなきくらしたる木の間より
　かすみていづる春の夜の月

# 四季の臺所（八）

中川雪枝

## 三月分

▲飯

『芹めし』　芹の葉も莖も細かに刻み、薄醤油加減にて飯を炊き、薪を引く前に刻みたる芹を入れて炊き上げ、釜の中にて混せ合せ、山椒の粉などふりかけ食す。

『蕎麥めし』　石臼にて蕎麥を粗く挽き割り、米飯の火を引く時、釜に入れて蓋をなすべし、此の飯は淡鹽を加へて炊くか、又は鹽を加へずして炊き、淡醤油の汁をかくるかするなり。

『三ケの庄飯』　これは餘興として加へたる、鉢の木に因みたる飯の名なり、いつも炊く麥飯の如く、うましたる麥を米の上に入れて炊き、吹あがる時、粟のあらひたるを入れ、上面を杓子にてならし、蓋をして明けざるやうに焚けばよし、尤もいつもの麥飯は米ばかりの水加減なれども、粟を入れゝは粟だけの水は餘分に入れて焚くべし。

▲生にてつくる刺身

この期にては、先づ左の如きものなるべし、

『鯉』　薄く作りて二杯酢に仕立て、嫁菜などを取合すべし、又水づくりとて、成るべく薄くつくり、汲立ての水に鹽を少し入れ、二三回洗ひ、肉のはせたる時水を切り、煎酒、又は芥酢味噌にて仕立つる料理法あり、取會せも少し氣取りて蓴菜、防風などを用う。

『鯛』　山葵の莖を用ひ、煎酒にて仕方つべし、山葵は莖を一寸ほどに切りて竪に割り、之を酢につけ色の淡紅くなれるをよしとす、

『鰡』　平作りにし、湯を通したる三葉をつまに用ひ、芥子酢にて仕立つ、

『めしか鰹』　長手作りにし、つまには縮れ獨活を用ひ、山葵醤油にて仕立つ、縮れ獨活は、薄く剝きて水に浸すなり、

「針魚」細作りにし、繊にうちたる獨活をつまに用ひ、生姜醤油にて仕立つ、又笹づくりとて大きく斜に切り、嫁菜萵苣などをあしらひて、煎酒又は二杯酢に仕立つるもよし、

▲湯がきて作る刺身

左に材料五六種を撰ふべし、

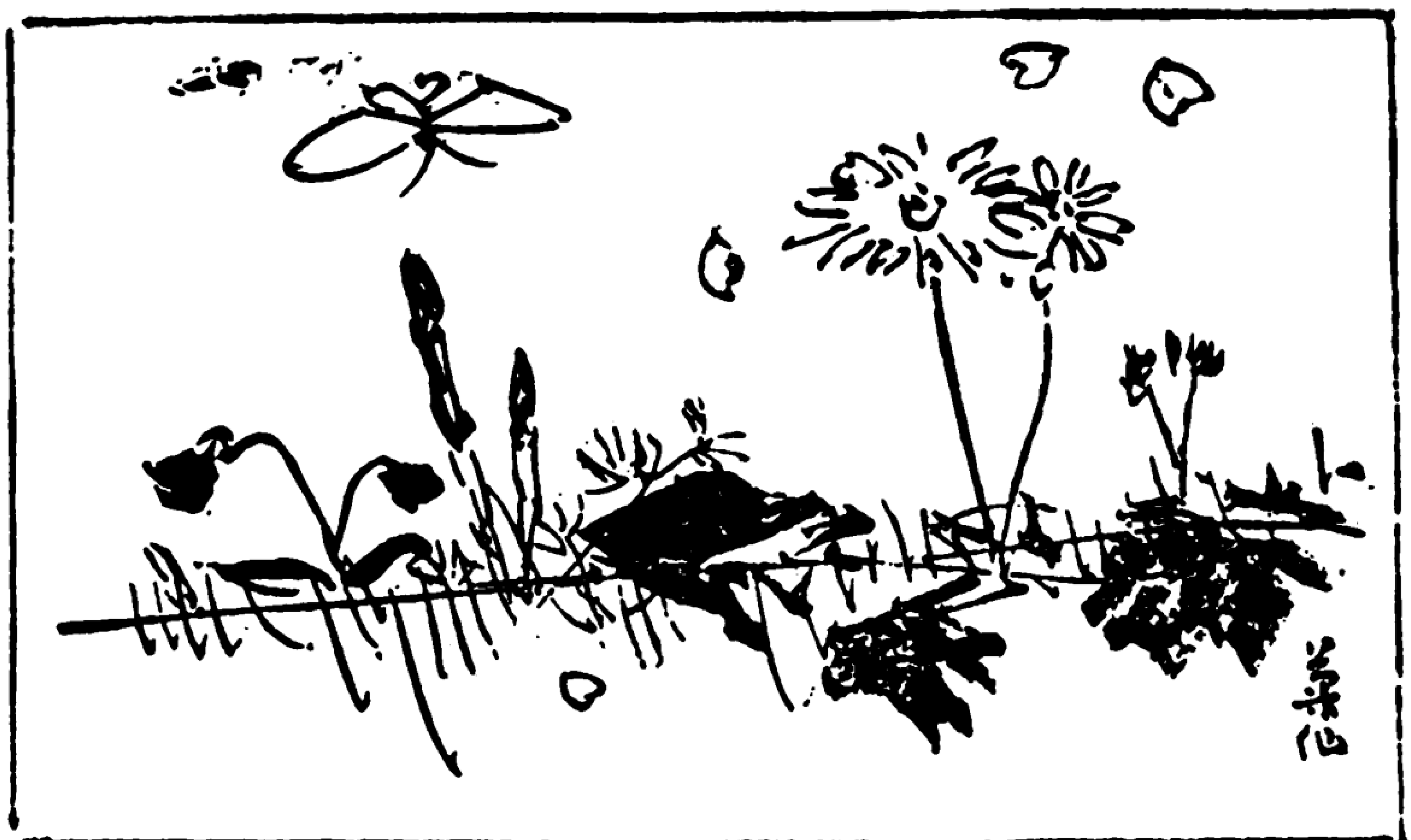
「白魚」湯を通し、茹蛸の小口切にしたるを取ませ、煎酒にて仕立つ、

「鰈」まづ刺身につくり、そをほごして四五回熱湯をかけ、水に冷し山葵醤油にて仕立つべし、

「烏賊」湯がきて平づくりにし、山椒酢にて仕立つ、

「赤貝」生にてへぎ、腸を出して湯を通し、つまには岩茸の細末にしたるなどよく、芥子酢味噌を敷きて其上に盛るべし

「牡蠣」ざつと湯がき、もやし茗荷の繊にうちたるをつまにし、三杯酢にて仕立つべし、



「鯨」白皮を薄く切りて湯を通し、蛤の剝身の茹でたるを取合せ、芥子酢味噌にて仕立つ、

▲生にてつくる鱠

材料はさしみと同じ、

「鯛」は薄づくりにして、細く切りたる鳥貝、黒くわゐ、ふくめ生姜、金柑などを添え、三杯酢にて仕立つ

「鰡」平作りにし、からすみを薄く切り、白髪蘿蔔栗と生姜との繊うち青き三島海苔を添へ、合せ酢にて仕立れば妙、

「針魚」青酢にて仕立つ、防風をあしらひにすればよし、

▲酢のもの

野菜ものもよければ、材料も以上三つのものよりは多し、

『魚鳥』にてはまづ
△縞鰺細づくりにし、赤貝の長せん、鯛の皮づくり、
いかり防風等、取合せ隨意にありて、ごぜん酢にて
仕立つ、
△牡蠣　粉生姜と橙酢にて仕立つ、
△赤貝又は馬鹿貝　細づくりにして砂糖酢をかく、
取合せは獨活の繊うち、
△鱚　笹づくりにし、甘酢にて、取合せは赤貝など
おもしろし、
△鯯、烏賊　三杯酢にて
△鹽鮭　そのまゝ細かく切りて、味醂を注ぐ、
『野菜』　二三種取合はせて見ん、
△おろし薯蕷　おろし山葵とおろし大根を副味とし
三杯酢にて、
△割干大根と青昆布　干大根を一寸ほどに切り、昆
布は洗ひて五六分程の巾に裂き、小口切にして少し
ばかり雜ゆ、
△和布と繊切大根　和布を剉みて大根とまぜ、三杯
酢をかく、

▲あげもの

『魚類』のこの期に於けるものは
△小鯛　骨を拔きて片身のまゝ、或は切りて、
△比目魚　すり身にして、
△白魚　は五六尾位揃へて、
△石斑魚の子、ごはぜ、しらすご　以上白魚と同じ
く幾尾かを揃へて、
△ぎんぽ、あなご　肉を鹽水にくゞらせ、少しあぶ
りて、
△烏賊　茹で、足ならぬ所は切目を入れ、又はたゝ
き肉にして、
△牡蠣　よく水を切り、拭巾にて搾り、五つ六つ位
を、
△鳥貝　湯煮して、
△貝の柱　ころもにてくるみ、饅頭の如くにして貝
杓子にて掬ひ、鍋に入れて揚ぐ、
△鎌倉鰕　肉をたゝき丸め、或は擂肉にして、

△鶏肉　暫時醤油にひたし、衣わげ、又素揚にするもよし、
『菜果』にては
△甘藷　は輪切にして、
△串柿　蔕を去り、種を抜きて、
△薯蕷　長さ一寸、一分角ほどの拍子木形に切り、三葉の莖を一寸ほどに切り、椎茸を細く切り粒のまゝの麻の實と共に粘粉にてくるみ固めて揚ぐべし、
△牛蒡　少し味をつけて、竪に二寸ほどに切り、細く割りて揚ぐべし、
『フライ』に用うる材料は、鳥は鶏、雉子、山鳥、鳩等よく、魚類は鯛、比目魚、鮭、鮎、鱚、針魚、龍蝦、車蝦、牡蠣等よし、

▲貝料理

前記中二種を撰びて、其調理法を
『赤貝』酢、膾は別に記するに及ばざるべし、
△汁　赤貝の割りたるを、ざつと湯煮して引わけ、其汁にて味噌をとき、一煮したる時何にてもあしらひを湯煮し、椀によき程入れ置き、貝をも入れ、其上に煮立ちたる汁を盛る、あしらひは青菜のたぐひ百合根などは前述の如くにし、椎茸などは湯につけ置き、豆腐は汁の中へ入れて煮る、
△清汁　松魚の味汁に赤貝を入れて煮る、又赤貝を湯にて煮立て、醤油にて味をつけて用う、上品にする時は昆布味汁にすべく、あしらひ前と同じ、
△ふり味噌　松魚の味汁にて醤油を抜きたるに、赤味噌を味噌こしに入れてよき程にふり出し、鹽梅したる中へ、原料を、
△煮もの　味醂醤油にて、赤貝を割りたるまゝ煮わげ、あしらひと共に煮て盛合す、あしらひは前の如くすべし、材料は菠薐草、芹、嫁菜、生麩、焼麩、松露、慈姑、百合等、
『牡蠣』赤貝と料理法を異にせるものを三つ四つ擧ぐべし、
△鶏卵蒸　十分細かなるを割り、さて鶏卵を割り、よ

くかきたて、味醂少しと食鹽にて味をつけ、大なる丼の中へ牡蠣の割りたるを入れ、其上へ鷄卵のときたるを入れ、かき廻し、針生姜を上へまき、蒸籠にて蒸すべし、これの蒸上りたるを鉢のまゝ盆にのせて持出で、中皿などに分配して食すべし、又茶碗蒸の如く、小なる器にて、一人毎に宛蒸したるもよし、鹽にて味をつけず、煮出汁と醬油にて味をつくるもよし、分量は牡蠣の身一合に鷄卵三つ位、あしらひは時候の青きもの適宜にて、

△牡蠣豆腐　豆腐を布巾にて絞り、水氣を去り、之を擂り、裏ごしにて通し、さて牡蠣に食鹽少し入れてざつと湯煮し、其汁にて葛粉少しときたるを豆腐に交せ、味醂、食鹽にて豆腐を鹽梅し、其中へ牡蠣を入れてよく交合せ、之を瀨戸物又はブリキの器に入れ、深き鍋に湯を八分目にし、前の器を入れて、豆腐の堅くなるまで煮るべし、さて之を冷して器より出し、皿に盛り、胡椒の粉などふりかけて食すれば、あッさりとしてよし、これは蒸したるまゝ食する方味よく、これも小さなる茶碗に入れ、一人毎にしたるものよし、

△油煮　胡麻油少し鍋に入れ、よく煮立て、其中へ牡蠣の身を入れてかき廻し、食鹽にて味をつけ、長芋、胡蘿蔔、芹など二分ばかりの菜切にして、氣色ばかり加へ、よくかき廻はしながら煮るべし、殊に上品なる味とならん、あしらひには生姜を用う、

△味噌煮　牡蠣の割りたるに、水少し入れてざッと湯煮し、交せ味噌を擂り、裏ごしをなし、これを牡蠣の中へ入れ、よく交合せて煮つめ、生姜の擂りたると、砂糖少しづゝ加へて、又よく交せて食すべし、

▲献立の一例

この期に於けるものを

「本膳汁」　小蛤、ほし菜、或は白味噌にて若鮎、花獨活に干海苔を細かに揉みてもよし、

「同　膾」　鯛、みるくひ、獨活の短冊三杯酢、或は伊勢海老、くらげ、栗、獨活、蓼、生姜、

『同　壺』赤味噌にて鯉に干山椒をもみてかけるべし、又白魚につく〳〵しもよし、

『刺身』比目魚、紅くらげ、早蕨或は花松魚、海鼠、わさび、又は鯉にみるくい、

『燒物』あま鯛の味噌付つき、

『平』白すぼし、座禪豆、荒芽、山椒、

『茶碗盛』鯛、白玉燒、

『大猪口』ふり蜆に若芽のからし味噌、

漬物

『三葉たまり漬』白き所ばかり揃へて、竹の皮を細く裂きて結び、根と葉の去りたるものを、よく水氣をとり、味噌のたまりを漉して、其中へ二夜ばかりにて、よき漬加減となるべし、

『葉附小大根の三杯漬』小大根を揃へ、莖一寸ばかり殘して葉先を切り、二時間ばかり日にあて、そを直に三杯酢に漬けるなり、これを洗ひ髮と稱するよし、

『山葵粕漬』山葵を短冊にうちて、鹽にて押し、翌日水を切りて粕につけ、壺に詰めて、目ばかりをしてたくはふ、

## 牛乳日本料理（八回）

清水鈴子

▲あられ葛

豆腐一丁、馬尾篩の如きもの丶中へ拭布を敷き、右の豆腐を入れ塵のかゝらぬやうにして水を切り置き別に牛乳に食鹽を加へて例の如く固まらせ、今度は久助葛をよき程の粒に崩し（粉名にすべからず）大きく平たき刺身皿の如きものにとり置のでありまする、さて右の用意がとゝのひましたらば、豆腐を冷や奴位の大きさに切り、つぶれぬやう、箸にて前の牛乳をくるみ（牛乳若し柔かすぎたる時はウドン粉を加へます、）それにまた右の葛を衣の如くにつけ、胡麻油もしくばヘット油にて揚げ、あんばいして頂くのでありまする、但しまたこの豆腐の代りに、あるは鳥類の肉のたゝき、牛肉、鱈の味、甘藷の摺り

つぶし、蓮、大根、にんじんの類、何によらず種にして用ゆることができます。然しそれらの種の固きものを用ゆる際には、皆一ちど湯煮いたします。尚また種の煮てもあまり固きものは用ゐぬがよろしうございます。

▲一ト口もの

○氷どうふ　牛乳で煮ましたもの、お平などに用ゐてよろし。

○蠣どうふ　常のもの、但し味噌を牛乳にてとくのであります。



○煎卵の花　卵の花を煎る前、牛乳を鹽にて少し固めます、加益は見計ひ。

○夕顔べた煮　會席の茶碗盛などによろしうございます、煮加減はおこゝろみの上。

○芋の子　章魚など丶共に牛乳にて煮ましてはいかが、又は葛かけ。

○海老すり流し　または結び菓子椀、茶碗ものにつかひてよろし。

○蛤　味噌したて、すまし仕立、鹽したて、いづれも牛乳を用ゐるよ。

○きぬかつぎ　里芋をむきて、胡麻みそ、牛乳を加ふはじけまめと共に精進料理の茶碗ものによろし。

○糸こんにやく、きくらげせん、牛乳うす葛にて同しく茶碗にもちゐます。

○長いも　もみかんぺうなど白味噌仕立の牛乳を加へたる本膳汁などにはいかゞでございませう。同じく竹輪とうふ、丸やきとうぐわ、又はにんじん細の目、牛蒡、きくらげ、とうの芋、またはごいし朧豆腐、新のりなど、みな白みそ牛乳にてしたてましていかゞでございませう。

○蕷つみ入れ、わかめぺた煮、竹輪とうふ、若うとさゝうち。百合根生若めなど同じ傳でいたされませう。

○百合根　丸にて牛乳煮、青のりをかける。

○かしら芋、角切にして牛乳煮、しやうが、若しくは味噌煮、青のりをかけます。

○よせ銀杏　牛乳煮、すり生姜。

○大長芋　金とん煮にいたします。

○湯葉　○がんくひ豆　○焼栗　などさま〴〵あるだらうと思ひます。

▲柿衣かけ

干柿のたねを取り、内を外へひきかへし、ウドン粉に牛乳にてときたるものを衣にしてつゝみ、やきなべの上にてやき、衣の色の變りたるを度として板にとり、小口ぎりにうすくいたすのでありまする。

▲まぐろ

生まぐろの肉のよき所をとり、さいの目に切り、別に山の芋をすり、牛乳と煮出かげんして合せたるものを、その上にかけ、わさび胡椒のるゐをそへて出すのでありまする、またまぐろをザッと湯に通したのもよろしうございます。

▲午蒡もち

太き午蒡をよくゆでゝたゝき、擂鉢に入れてすり、それにもち米の粉四合ならば、うるち六合を合せ、砂糖をいれ、午蒡とともに牛乳にてよくすりませ、丸めて湯煮し、水を切り胡麻油の類にて揚げる。

# 菓子の製法

△ミルホワイ

米利堅粉もバタも同割合です、先づ粉を煉り伸し、バタを右の粉の中に包みて伸し、伸しては包み、斯く五度位ゐしたのを、薄く煎餅の如うに伸し、菜箸の先にて穴を明け、天火にて燒くのです、(穴を明けざれば膨れる虞あり)燒き上りたる後、別にケレームを造るので、其製法は牛乳五合ならば、鷄卵の黄肉を十四個、砂糖半斤の割合にて、最初牛乳を煮て鷄卵をよく溶きて加へ、更に砂糖を混ぜて攪き交せドロ〳〵に煮て前の出來上つた皮に入れ、蓋をする必要があるから、今一枚の皮を燒き置き、中にケレームを塗りて重ね、其上に砂糖を引く、砂糖は角砂糖を蜜にて煮詰め、水に滴して漸く固まつたのを薄皿に入れ、冷まし杓子にて攪交せれば白色となる、其凝結を崩せば粘氣が出來る、夫から鍋に入れて湯で薄く溶し、表面を庖丁で厚目に引伸せば宜しい、暫らくすれば右の砂糖は固まります。

△かすていら

次には一つ、日本菓子の製法を紹介しやう、追々春永ともなれば、諸嬢の手すさみにものして、風味を試みるも妙なるべし、さてかすていらの製法を解り易く書くと、材料と合せ方の割合は、玉子百匁、砂糖百匁、御膳粉(上等うどん粉の事)六十匁だが、先づ玉子を器に割り落して、白肉と黄肉とを別々に分け、次に黄肉ばかりを擂鉢に入れ砂糖を加へて十分に擂り交せ、扨白肉を甲鉢樣のものに入れて五六本の箸で切々と攪拌し、箸の先から泡が雪の如く飛ぶを度として擂鉢へあけ、前に拵へ置いた材料に擂り交せて、胡麻の油を引いたブリキの箱へ八分目ほどに流し込み、埋火の上へかけ、鐵板の蓋をして、その上へ炭火を少々のせ、材料の厚さ一寸につき三十分間位ゐの割合で燒く、若し大きく燒かうと思へば、ブリキ箱の底へ胡麻の油を引いた美濃紙を敷き、材料を流し込んだ上にも、同じく紙を置いて燒けば、焦付く憂が少ないのです。




# 歐米女子の宗教信仰の狀態

文學博士　井上圓了

私が西洋に參りましたのは、二十一年から二十二年までが第一回で、其の次は一昨年でありまして、之れが第二回目であります、第一回の時は專ら彼地の宗教狀態を取調べる考へでありましたから、毎日々々教會や寺などを見あるきました、そして又、物數奇の樣ではありますけれども、產兒の洗禮式から、長じて年齡が十四五になれば必らず行はるゝコンホルメーションと申しまする儀式や、婚禮や、葬式に至るまで、所謂宗教上の儀式といふ儀式は、好んで見物致しました、それで婚禮の儀式も葬式も、貧富樣々なのを見ましたが、婚禮には自然時期がありますので、始終見るといふことは出來なかつたけれども、葬式は倫敦でも巴里でも市外に參りさへしますれば、一定の埋葬塲が設けられてあつて、其處では毎日午後にな

ると澤山な葬式が行はれるのでありますから、午後一時頃から其の埋葬場に出かけさへすれば、毎日でもそれが見られます、斯のやうにして第二回の時も亦た取調べましたが、それで彼地の宗教狀態を知りましたので、それ等の實驗を基としまして、歐米婦人の宗教信仰の有樣をお話することに致しませう、尤も西洋のお話をするにつけても、之れを日本の有樣と比較した方が解り易からうと思ひますから、成るべく對照することにします。

或學者の說によると、日本人は宗教に冷淡である故に日本婦人は宗教に冷淡である、西洋人は宗教に熱心である故に西洋の婦人は宗教に熱心である、と斯の樣なことを申しますが、日本人のみ獨り宗教に冷淡なといふ理屈はありません、畢竟教育の仕方によるものでありますが、併し、實際今日の有樣を概見したばかりでは、さう見えるかも知れません。

西洋に於ける宗教上の教育は眞に至つたもので、小供の時から教へ込むのであります、家庭の內は言ふまでもなく、學校生活の間も、又た長じて世の中に出てから後も、一から十まで宗教で教へ込むので、先づ家庭について言ふて見ると、每日三度の食事には神に向つて必らず拜禮をする、日本には神棚や佛壇の設けがあつて、それを朝晚に拜みますが、西洋には神棚も佛壇もないから、神棚や佛壇を拜む譯には往かぬが、食事の時には祈禱をする、又た、日曜日の朝の九時頃から十時半頃までの間に必らず教會に行く、此の時には中流以上の人々が子供を連れて行くので、下女や召使のものは留主をするのであります、晚にも朝の通り六時か七時の頃から集まりがありますが、此の時には多く下等のものが行く、下等のものは一週間の働らきで疲勞して居るものですから、日曜の朝は非常な朝寢をするので、人によると一時頃漸く床を離れて、朝食と晝食とを一時にする程なので、勢ひ朝教會に行くことが出來ぬ、それで、晚に出かける

ことになつて居りますが、教會の集まりを許した言葉に、朝の方は人物の資格がよくて晩のは數が多い、といふのがあります、かく西洋の人々は朝か晩か必らず一度は寺に行かねばならぬ自然の習慣になつて居る。

それから、兒童が漸く成長して學校生活をするやうになると、如何なる有樣であるかといふに、幼稚園ではあの稚さな小供に毎日二三度宛十分間位禮拜をさせる、小學校でも其の通りに禮拜をさせて、一週間に一度位宛宗教上のお話がある、之れが日本の修身科の授業に相當して居ます、中學校でも亦此の通りで、朝八時の始業の時になると、生徒一同を一堂の中に集めて、それには校長始め職員悉く其席に列なつて、校長は演壇に立つて祈禱をして禮拜をする、そして其の席で直ぐ出席の點檢をする、之れも畢竟は修身科の助けにすることなので、此の外土曜日と水曜日などには二時間位宛、科程として宗教上の話がある、次に大學に行つて見ると、イギリスなどの大學は宛然宗教大學といつてもよい程の有樣なのでありますが、私が晩の食事の際を參觀した實驗によりますと、生徒一同が食堂に這入つて食卓につく、一人の僧が此の時食堂に入つて來て、長々と祈禱をする、それから一同箸を取ることになつて居ましたが、之れは毎日食事の際に行はるゝ儀式なので、土曜日には說教がある、かく學校生活をして居る間でも、幼稚園から始めて大學の終りまで、引きも切れずに總ての事を宗教で教へ込むのであります。

次に、社會の方面はと觀察して見ると、社會の儀式といふものが悉く宗教に委ねてあるので、先づ普通の處でいひますと、產後一週間も經ては其の小供に洗禮を授けて、寺から名を貰ひます、之をクリスチヤンネームといふので、此の名は日本では通常死んで後につける戒名といふのに相當します、其の後、產婦は暫くして、寺にお禮參りをしますが、之は日本の宮參りのやうなもので、それから其の小供が漸々に成長

して年の頃十四五にもなると、前に申しましたコンホメルーションの儀式を受ける、此の儀式を受けて小供は其の服を變へるので、此の時から其の小供は眞正のレデーになる規定であつて、祈禱のあつた後、神に向つて誓ひをさせます、其の次は婚禮である、言ふまでもなく婚禮は人生の一大式典でありますが、法律上の規定は兎も角、久しい間の習慣によつて、此の大禮は必らず寺院内で行ふので、却々盛んなとは、日本の儀式など〻は比べものにならぬ程である、葬式は至つて簡單なもので、日本のよりは頗ぶる淋しい方でありますが、婚禮の方は却々賑やかなのを幾度も見ました、此の有樣でありますから、西洋の社會には宗教を離れて儀式といふものは皆無なのです。

此の通りに西洋では、家庭、學校、社會ともに宗教で持ち切つて居る上に、小供の爲めにする落語も、小供の爲めに著述さる〻小說も、悉く宗教に因みのあるもので、其の外、少しく道德倫理に關したもので、材料を宗教に採つて居ぬものはない程ですから、勢ひ西洋婦人は宗教に熱心でなければならんので、之れは當然の事といはねばならん、日本のは教育の仕方も、家庭の有樣も、社會の儀式も、宗教とは關係がないのであるから、其結果として、日本婦人は宗教に冷淡な現象を呈して居るものと信じます。

尤も日本でも或る格段なる地方に參りますと、西洋に劣らぬ、イヤ西洋でもこれ以上とは思はれぬ位、宗教に熱心なのを見ることがあります、即ち、加能越などの地方に參りますと、實際家庭で宗教々育を授けて居る、譬へていへば、柱傾き壁落ちて憐れな小屋を見たやうな家であつても、必らず立派な佛壇が飾つてあつて、如何に忙がしくても如何に疲れて居ても、朝晩には欠かさず禮拜をする、又家によると、萬一拜禮を忘れてはならぬといふので、佛壇の中に箸箱が入れてある、それは禮拜を忘れて食事をしやうとした時に、其の箸箱のない爲めに佛壇の事を思ひ出し、それで必らず禮拜をすることになるので、此の樣に

して三度の食事には必らず拜む家風のものもある、此の外、一字も讀むことも書くことも出來ぬものでさへ、お經だけは聞き覺えでスラ〳〵と讀めるものがある、越中の或處で、夜學會を起したいといふとで、其の村の役場に願出た、役場では至極好いことであるといふので、早速許可を與へると、其の夜學會では若者どもがお經の稽古をするのであつた、といふ事實も聞きました、それから此の地方では、寺に說敎でもあれば必らず參らねばならぬことに掟つて居る、此の通り此の地方の人々の宗敎心の强いのは、全く其の家々で宗敎に關した敎育を授けて居るからなので、此の事實によつて見ると、日本人とて天性宗敎に冷淡なのでなく、西洋人とて天性宗敎に熱心なのではありません、日本でも西洋と同じやうに敎育したならば、それ以上の熱心になるかも知れぬ。

次に女子の宗敎上の智識は何うであるかといふに、西洋婦人は日本婦人に比して宗敎上の智識が進んで居る、日本の婦人は宗旨の名は知つて居ても、其の宗旨の宗義は知らぬが、西洋婦人は其の宗旨の立て方を知つて居るのみならず、其の宗旨に關しての事であれば、何を尋ねても答への出來ぬものはない、中には其のやうな問であると、好んで詳しく說明するものもある、之れが日本と西洋と大なる相違であります、勿論西洋では、鳥渡した肖像畫を見ても宗敎の事については解りよくしてある上に、說敎などは始終あつて、女子に對する宗敎上の敎育は一體に進んで居る、我國でも前にいふた加能越などに行くと婦人であつても宗旨の立て方位は知つて居る、中には男子も及ばぬ程宗敎上の智識に富んで居るものもある、それで此の邊の婦人の信仰狀態から見ると、西洋と餘り大した相違はないやうである、固より其の智識に高下深淺の別はあるにしましても……。

次に社會の制裁はといふに、日本には宗敎上の制裁といふものは殆んど皆無であるが、西洋では宗敎の制

裁が非常に強い、日本では『無宗教主義である』『無神論者である』といつても、誰一人咎めるものはないが、西洋ではそれが可かぬ、若しも『私は宗教が嫌ひである』とでもいふものがあれば、其の人は道徳の嫌ひなものとして取扱はれる、私が一昨年英國に行きました時、田舍の或大學の教授と同じ下宿屋に下宿しまして、其の教授の信仰して居る教會に伴れて行かれましたが、其後、自分は宗教視察の目的であるから他の教會にも行つて見たくなり、教授に向つて他の教會に伴れて行つて下さいと賴みましたが、教授は承諾をして呉れない、それで、其の妻君が異つた寺に案内をして呉れることになりますと、教授はそれを止めました、其の故は、信じて居る教會以外に出入すると交際上差支へるといふのである、後に其の教授の語る所を聞けば、自分は何の宗旨であらうが何の教會であらうが、其の樣なことに頓着はせぬが、大學教授といふ地位のあるだけに、社會の制裁に困る、といふことでありました。

總て西洋各國は至る所女子が社會交際の主力となつて居りまして、女子には非常の勢力がある、そして宗教に熱心である、それと共に宗教は盛んになつて居る、即ち、彼地の交際には宗教が極めて必要で、女子と宗教は相俟つて社會に勢力を保つて居るのですが、日本では今日の狀態から推想して見ると、其の樣な狀況になることは困難であらうと思ひます。

以上のお話を概括すると、第一は、日本婦人は宗教に冷淡で西洋婦人は熱心であるといふけれども、これは天性に基くものではない、原因を糺して見ると全く教育の仕方に相違のあること、第二は、西洋婦人には宗教上の智識が多いが、日本婦人にはそれが少ない、其の結果として宗教の擴め方に相違のあること、第三は、西洋の社會は其の制裁が宗教上から割出されて居るが、日本にはそれのないこと、そして西洋婦人は交際の中心點となつて、宗教と相俟つて勢力があるが、日本の婦人にはそれのないこと、の三點に歸

着するのでありますが、要するに、人には心の樂み……慰めとして宗教を信ずる必要がある、固より其の宗教の何なるを問ふ譯ではありませんけれども、必らず其の必要のあるものと信じます、況して女子は其の性質が男子に比べて見ると一體に弱々しく、感情に動かされ易いので、從つて迷ひやすく、動きやすく、又た恐れやすいものでありますが、性質の弱々しいのを強くして、迷はず、動かず、恐れぬやうにするには、是非に何か信ずる所がなくてはならぬ、兎角、此の世は思ふやうにならぬこと勝なので、不幸や凶事も少なくない、それで、女子たるものが、一家の不幸災難に出會ふやうなことがあれば、心を苦しめ、心を痛め、心を動かすに相違ないから、平生堅く其の心を保つ爲めに、是非とも何か信ずる所があつてそれで精神の修養をして貰いたいものであります。

(此篇は博士が女子宗教學會に於てされたる講演の梗概なり)

## 小兒の流行性感冒

(瀨川醫學博士の談)

此頃は流行性感冒が流行し小兒に危險を醸すから母親は尤も注意しなければならぬとて瀨川醫學博士は下の談話を試られた▲冒され易き機器　流行性感冒に罹ると肺炎を起し易い夫れに顯はれないで熱が高いには誠に困る呼吸器、胃腸、神經系、腦の實質等は尤も犯され易い充分手當を致さぬと一大事に及ぶとが往々あるから母親の注意が大切である併し小兒計りでない大人にも流行して居るから感冒を引かぬやうにするのが肝心です▲寒い日の外出　此際寒い空氣を呼吸させぬようにする事が肝心です世の母親の誤解するのは身體さへ負い袢天で包んで温たかにしてあれば寒い日に外出しても宜からうと思つて居るが之れが既に誤たれて居る朝夕は成可く外出させぬやう其他餘り注意に過ぎて股引、襟巻等は平生から慣らして施せないように仕たいものです




# 耶輸陀羅姫

文學士　濱田紅於

雪山の巓は雲に冲る、その巓には時じくの深雪積りて、天下の壯觀を呈す、その深雪が解けて流れて谿間を出づれば、汪洋たる萬頃の波を湛へて流るゝ恒河となる、恒河の靈水灌漑するところ、千町の小田に瑞穗うちなびき、稻の香四時かんばしと云ふ、その昔、天地秀靈の氣をうけて、この間に生れしものあり、その德は雪山の巓よりも高く、その譽は恒河の水と共に絕えせず、萬代の法燈高くかゞやきて、千代に八千代に無明の暗を照らすこそたふとけれ。

今は昔、恒河の支流ラプチ河に濫流するロヒニ河の兩岸に、一對の都城なりき、その東なるを拘利城といひ、その西なるを迦比羅旆窣都城といひき、迦比羅城主に首圖駄那といへるがありき、拘利城主阿㝹釋迦の二女、摩耶と波闍波提とを娶りしが、摩耶夫人は初老の坂を踰えてもいまだ子寶あらず、心常にかなしみしが、時は西曆前五百五十六年の花の春四月八日の露の朝、嵐毘尼園の鏡の池に瑞枝さしかはす無憂樹の小陰に、初めて一男子を擧げぬ、この綠兒が「天上天下唯我獨尊」と叫びし聲は、今尙吾人の耳にも響くなり、誰か知らん、この綠兒こそ、後日一切衆生を濟度せむとの大念願を成就し、雪山の雪盡きざる限り恒河の水涸れざる限りは「世界的偉人」、「萬世の宗師」と仰がるゝ釋迦牟尼その人ならんとは。

さる程に父王の喜びは喩へむにものなく、即ち美名を撰びて、喬答摩悉達多と命じ、即ち立てゝ太子となしぬ、されど盈つれば闕ぐる世の習ひとて、摩耶夫人は太子降誕の後一週間にして、四十五歲を一期

として、黄泉の旅にと出で立ちにき、されば太子の養育は従母波闍波提專らこれに當ること丶なりぬ。波闍波提夫人は已に難陀と盧波難陀と云へる一男一女を設けつれど、いとほしき姉君の遺れ形見とて、太子をおふし立つること等閑ならず、わが子等にかへても、亡き人の精靈を安めまつらむと、よろづまめだちて營み務めぬ、その志のほどこそたのもしけれ、然るに世には往々この夫人の德を傷くるものあり、俗傳によれば、波闍波提を姉とし正妃とし、性邪佞なりと云ひ、摩耶を妹とし側室とし、性善良なりといふ、姉は子なきを悲しみ、妹の姙めるを妬みて咒詛しも、胎兒尋常の種にあらざれば、魔力も遂に及ばず、太子生れて後摩耶は咒詛の爲めに死せしが、波闍波提は後悔悟する所ありて、太子の養育に盡力せりと、然れどもこの俗傳の妄なることは、前文の紀事によりて明なり、おもふに釋迦を尊くせむとて、徒に波闍波提夫人を耻しめしならむ、小人が人の美を成すを好まざる、誠に歎かはしきことなりかし。

太子生れながらにして聰明、やう〳〵長じて文武の道學ばざるなし、されど太子はうき世の娛樂を好まず、哀憐の心深くして、涙もろき性なりければ、父王は太子が無常を感じて出家せむことをうれひ、速かに妃を迎へて、その心をうき世に繫ぎとめむとせり、時に拘利城には須波佛陀新に立つ、その女耶輸陀羅姬は、天の成せる麗質花月にもたとへつべく、その意も淳良にして、才智も世の常にあらず、當時第一の閨秀、太子の配偶たるは正にこの人なりき、故に太子十八歲の時、姬は迦比羅城中に迎へられたり、後十年を經て、姬は王子羅睺羅を擧げぬ、太子已に恩愛の絆あれど、見聞くもの悉く厭世の因となり、生死老病の四苦を解脱せむとの念は、日夜に増りゆきて、西曆前五百二十七年十二月八日の夜、引かるゝ後髮ふりきりて、いづくともなく逃れ去りけり、その後六年間の難行苦學の結果、五百二十一年二月八日の早朝、尼連禪河の畔、菩提樹下、佛教を

發明してより、數多の外道と戰ひつゝ、衆生濟度に專念せし太子が一生の歷史は、我らに大なる敎訓を與ふれども、そは本文の目的にあらざれば記さず、さらば耶輸陀羅姬の消息はいかに。

姬は心を傾けて事へまつりし太子が、遁世ありしより、悲痛慟哭、憔悴輕羅にだも堪えず、諸の王子等は姬の紅顏徒らに孤閨の中に褪せゆかむことを惜みて、屢再婚を求むるものありしも、姬の心は明鏡の如く、姬の操は吳竹の如し、いかでか浮雲の榮華を貪らむとて、二世の良人を忘れ、あだし契りを結ばむや、姬はたゞ一筋に太子の身の上をのみ思ひつゞけて、太子が鬚髮を剃ると聞けば、躬らもその綠の髮を削り、太子が粗衣を纏ふと聞けば、躬らも綾羅を脫いで布衣にかへ、太子が香飾を廢すと聞けば、躬らも金銀珠玉を捨てゝ顧みず、太子が草の枕をかたしくと聞けば、夜の衣をうすくし、太子が藜藿を土器に盛ると聞けば、躬らもまた甘脆を口にせず、全く太子の心を以て心とし、太子の行を以て己れの行を律したり、遠ざかるものは日々にうとしてふ諺もある世の中に、姬の如きは千歲の一人と云ふべし、かくて太子成道して一たび國に歸りし時、姬はその誘化によりて桑門に歸し、比丘尼の始祖となりぬ、一日姬は王子羅睺羅に告げていへらく、子たるものは當に父の財產をうくべしと、王子因て太子にいたりて道を聽き、亦黑染の衣をまたふに至りぬ。

耶輸陀羅姬について言はむと欲する所は以上の如きのみ、姬が一生の經歷はしかく落莫たれども、その太子に對して躬行せし德操は、甚だ世人を警戒するものあり、故に終に臨んで一言予が胸臆を語らしめよ。

今や我邦露國と難を搆ふと雖、上御一人の御稜威と忠勇なる軍人の努力とによりて、陸海に連捷し、旅順口の險要も我手に歸し、海上亦敵の隻影を止めず、されど勝敗は兵家の常なれば、一勝の爲めに狂喜し、一敗のために怒罵する如きは、或は國家の元氣に關せずや、我第二艦隊が不幸にして屢敵艦を逸せしと

て、上村將軍は一時罵詈の府となり、當時各新聞の狂歌川柳などは、筆を揃へて將軍を誹謗し、將軍の邸宅は瓦石雨飛の塲となりしといふにあらずや、予は多くの國民がこの薄倖なる艦隊に向つて、一片の同情を寄せざりしを惜む、されど市井の匹夫は事理を解せず、謂はゞ愛國心の誤解濫發として、むしろ憫れむべきものなり、第だこゝに輕々看過すべからざる現象あり、そは冷靜なるべき教育社會に於て、かの匹夫に似たる輕擧の顯はれしこと之れなり、讀者諸君、予を以て漫に苦々しき過去を説くものとし玉ひそ、過去に回顧せざれば、未來を警戒するに足らざるなり、昨年の本誌某號に於て、予は莊司海軍中佐夫人の談話を讀みたり、そは諸子も必ず記憶せらるゝならむ、その談によれば、東京の某女學校生徒等は、上村中將の令嬢を迫害して、遂に校を退かしむるに至り、剩これに同情を表せし莊司令嬢を併せ罵りて、いまはしき汚名をさへ加へたりと、予はこれを讀んで、覺えず長大息せりき、某女學校の教師は何を教へ、生徒は何を學びつゝあるか、教育の効果の斯くまでも顯れざるは歎はしき次第なり、我國民は武勇にして仁義に富むとは、我々も誇り外國人も認むる所なり、然るにかくの如き無情の行あるは何故ぞや、予が不敏を顧みず、この一篇を草せしは、他山の石を以て玉を攻むとの意に外ならず、國こそ異なれ、事情こそかはれ、わが國民耶輸陀羅姫の太子に對して表しゝ同情の千分一にても、外征の將士の上に濺ぎなば、かゝる心なき擧動は起るべくもあらざるべし、今や東洋の敵艦は滅び、旅順の要害は陥りて、國民の歡喜は絶頂に達せり、かつて東郷上村兩將軍の凱旋せらるゝや、全都は爭うて歡迎頌美し、倘ほ及ばざらむことを恐れたり、而して曩日瓦石を投じ、罵詈を加へたる彼の人々も、必ずや新橋に馳け付けて兩將軍を迎へしならむ、されど思へ、皇國の神兵向ふ所敵なしと雖も、寒暑風雨の妨に遭ふことも少からず、今日勝利に酔うて狂喜するもの、他日些少の數奇を見てまた妄動すること

なしとは云ふべからず、觀よ、仁川港頭に大敗せしコレーツ、ワリヤーグの戰敗將士が歸國せし時、露國の人民は滿腔の熱誠を以てこれを歡迎せしにあらずや、義勇仁慈なる我國民にして、かの兇暴殘忍なる敵國民に劣るべけむや。

## 賤女の歌（大聽に達せし）

▲松江女が身上　去る十九日宮中鳳凰ノ間に於て新年の歌御會始を行はせられし時臣民より詠進せし一萬六千三百三十二首の中より撰ばれし甲斐國大須賀松江女が歌を畏くも講師が御前にて『つはものにめし出されしわかせこはいつこの山に年迎ふらむ』と折返し折返し朗詠するや大君には叡感斜ならず龍顏に御氣色わらせられ並居たる供奉の臣僚何れも思はず感涙を催せし事の由は既に本誌にて報道し置きたる如くなるが承はる所に依れば始め御歌所奉行此歌を見て、甲斐國東八代郡境川村大須賀まつ江とばかりなれどもよもなみなみの境遇の者にはあるまじとて御披講の前日即ち一月十八日電報にて右境川村役場に松江女の身元を問合せられけるに役場よりは陸軍歩兵二等卒大須賀昌二妻と返電したりしに又御歌所よりセウジとは如何なる文字かとの問合せあり翌朝十九日役場より更に昌二と記るす由返電したれども遂に當日の御會の間に合はざりしと云ふ、斯程までに雲の上を煩はせし松江女が境遇は如何なる者か兎にも角にも甲斐の國まで態越し歌枕ならぬ歌の主訪ねばやと余は下駄ばきのまゝ汽車に乘り飄然として松江女が在處をさして旅立ぬ

▲甲州境川村　とは甲府より程隔たりたる東八代郡の山間の僻邑にて松江女が詫住居は大字石橋と云へる處にあり東八代東山梨と云へば甲斐にもなだゝる養蠶地にして石橋村も擧りて蠶飼ふ戸數八十計りはあり前には水晶の如き笛吹川の淸流寛るやかに流れをり後には雪の白衣を被げる石橋山の雄々しく峙てるあり桑畑の拓けたる間に鷄犬の聲長閑に聞えわたるなど宛然蘇東坡が朱陳村の詩の意を得たる趣あ

り斯る別天地にも自ら公の掟の行はれて明治七年石橋村大坪村坊ケ峰村三椚村を合せて圭林村と稱したりしに一昨年又更に此圭林村に五成村藤佶村寺尾村を合併して境川村と稱するに至りたるなりと云ふ境川村とは見るからに淋しき涸川の流の浮世を隔てたるに因み名けたるなりと聞く、此境川の畔なる石橋村の小字なる椽山と云ふ處にはアイヌ塚數十とあり入口の幅六尺計もある石疊の横穴にて正しく太古穴居の遺蹟とは聞えぬ猶板額と稱する地名あり父老稱す此村は其昔淺利義遠の住處にていたびたいとは世に聞えたる其妾板額女が終焉の地名の訛なりと云ふ兎にも角にも石橋村は古來よりの由緒ある村にて昔は勇婦板額の鏡を埋め今は又才媛松江女を出だせしを里人は之を村の誇りとすべき筈なるに心ばへ朴直なる里人は更に關り知らざる者の如くなり裕かならず貧しからざる此里の人心はそも如何に此里人の中に育たる松江女が身上はそも如何に

▲道すがら



いぶせき旅路を辿りつゝ石橋村より手前なる上曾根村と云へるに着したるは夜の十一時過なりき怪しげなる木賃宿を叩きて一夜の宿を賴みたれども容易には應がはず今宵は旅客多くして主もうけする部屋なしと云ふ是より先境川村の所在地判明ならざるまゝ甲府警察署にて承合せしも地方の警察は頗る呑氣なものにて不得要領なりけり詮方なく嚮導者の言に任せ足のまに〳〵進みゆけば今宵の宿はての仕末なり風流の歌行脚は世にも憐れなるものと今更悟顏をするものゝ此氷雨に一夜の露宿位は物の數ならねど境川村の所在地覺束なきが困り者なり宿の

主婦に地理を尋ね見たるに是れより遙か先なる五成村へ赴く山間なりと云ふ兎に角心安しとは思ふものゝ今度は一夜を明かす身の仕末なり依りて駐在所を訪ひ便を求めんとせしに生憎巡査は夜警に出でゝ不在なりといふに餘儀なく又も以前の木賃宿に引返して身の上と目的とを明かし辛うじて四疊の暗室へ通され僅かに今宵狼の餌食ともなるべかりし厄を免れぬさて境川村に大須賀庄次と云へる者ありやと問へば主婦は首を傾げて村には大須賀姓の者多けれども歌など詠むほどの人は豪家の大須賀太平サンならではと云ふ

▲松江女を訪ふ●●●●●

翌朝七時冷たき雨に濡れそぼちて堤、畷、里道、坂道、涸川などを渉りて白井河原三椚、大坪を過ぎ行きつ石橋村より道行く農夫に松江女の事を問へども知らずと云ふ心なしと言はゞ言ふべし今更ながら里人の長閑なる心に感じ入りぬ已むなく路傍の茶店に入り老媼に尋ねたるにそは太平サンなるべしといふ傍に男あり否ナとよ庄次サンの事なり庄次サンの宅ならば村の東端なれど可憐しや庄次サンは此程旅順にて討死しつひ四五日前村人集りて形見の野邊送りを濟したるばかりなりと云ふ我れは胸躍らしつゝ教へられしまゝ其家を訪へば軒傾きて馬小屋とも疑はるべき白屋なり大須賀ショウジ殿の宅は此處かと問へば髮おどろに振亂したる婦人の出で迎ふて然り此方なりと云ふ來意しかじかの由を告ぐればそは全く門違ゐなり此方は相川庄次なりと云ふ更に婦人の敎に任せて程遠からぬ白壁作りの家居嚴めしき衡門に大須賀莊造と門札に記したるを尋ねて案内を乞ふ後にて聞けば松江女の妹安江女と云へるが出迎ひ東京よりと聞きて安からぬ風情なりしがやがて奥に入り暫くして出で來り此方へと請せらるゝまゝ座に就きて來意を語れば瞽たる老父の炬燵に靠れゐて松江は自分の息女なれども今は不在なりと言ふ

▲大須賀一家●●●●

此瞽たる老父は名を伊左衛門と呼び今年六十九の春を迎へ正しく松江女の生父にて靑

山白水の間豊かに晩年を送れる果報者なれども斯翁唯一ッの不幸は一昨年より視神經萎縮病に罹り兩眼の自由を失ひし者から終日家にたれこめてゐるよし予は先づ翁に向ひ息女の歌の九重の空を動かし御前にて披講の榮を荷ひしを賀すれば翁は鈍き眼光を予の顔に射向けつゝ『御旦那全くドウも夢の樣でゴッス昨日の朝(廿一日)御歌所の御奉行から手紙が來やしたので松江が宅まで驅て來やして……イヤドウモヘイ全く夢の樣でゴッス』と嬉しさは眉宇の間に輝けり予は翁の物語りにて松江女は今や此家には居らずして別家しをるが如くに聞えけるより如何なる故ぞと尋ぬれば折柄茶を持ち出でたる安江女が聞取りて姉は宅より程近き處に別戸してゐれども今日は大坪まで用ありて出向きたれば正午過ならでは歸へるまじと云ふ兎にも角にも遠來の客の御待ちなれば早く呼び來たる樣との老父の言に安江女は心得て座を立ちぬあとにて松江女の素性及び兄弟姉妹の關係など尋ねしに松江女は翁の後妻たき子(五十六)の長女にて

其の妹を安江(二十五)と呼び松江は明治十年生れの本年二十九歲なるが性質は至つて正直にして今日まで兩親の言葉に背きたることなく養蠶はとりわけ名人にて昨年夫を迎ふるまでに母屋にありて養蠶の手傳をなしたゐりといふ其敎育の程度を問へば明治廿年村立圭林小學校を卒業の後は父母の膝下にありて常に兄の敎育を受け數年間讀書算術等を修得しつゝありしがやがて甲府市穴切に在る神道禊派の所屬なる玉磬女學校に入り裁縫及び女禮式を學び三十三年三月首尾能く卒業したる後も諸方よりの緣談を斷り養蠶の手助をなしつゝありしと云ふ又松江の長兄周平氏は鄉黨に聞えたる俊才にて前代議士加賀美嘉兵衛氏山梨縣警務課長芦澤道之氏等とは同窓の友にして學校の成蹟は右兩人よりも傑出し常に首席を占め居りたる程なりしが明治十四年上京して岡千仭翁の門に學び後泰東法律學校に入り常に首席に居り下りても第三席には落ちざりき周平氏また却々の風流才子にて詩歌俳諧の道にも秀でしも惜むべし明治十八年肺

を患ひて斃れたりとぞ周平氏の弟を荘造氏（四十）と呼び十八年兄を便て上京したりしが兄の病を得て斃れしを見て父母は學問は畢竟肺を患る基なりとて强ひて荘造氏を郷里へ呼返したるより氏はその才を磨くの機を失ひ其不平と無聊とを敷島の道に托し敎を隣村の宮川正彥先生及び輿石守郷先生に受けて研鑽爰に久しかり松江女もまた兄の指導を得て和歌の道を學び兩先生より益を得たること淺からずと云へり

▲●●●松江女が家　待てども待てども松江女の歸來ぬに心安からず思ひつゞけてゐるところへ實兄荘造氏出來たり重苦しき初對面の口儀懇に述べらる兎角は松江女が家を訪づれて其處に待合はすこと然るべしとて荘造氏と共に二丁許り隔てし松江女が宅に至り見ればつひ先年引移りし家のよしにて瓦葺二階建の一棟鄙びたれども見苦しからざる一と構へ外に茅葺の納屋一棟を建添へてあり背戸より直ぐ桑畠を拓き其桑畠につゞきて雄々しき石橋山聳だてり夏ならば桑の若葉の緣とぞが翠滴たる黛色と兩つながら風情ならむに折柄の北山風に白妙の雪の白衣を打拂ふ寒さ一入身に泌む許りなり請ぜられて座に就けば松江女の夫昌二氏の叔父なる人が留守居してあり家の内を清々しく拂ひ清め青疊を敷詰めたるまゝに一塵を留めず扨て荘造氏の語るを聞けば松江女の此處に別家せしは昨年彌生の頃なり先きに述べたりし如く松江女は繼母瀧子が長女にて松江女に田畠を分ち別家せしめむとは瀧子が老の思出にて其後良緣ありて程近き大坪村小野良平が次男昌二氏（三十）を入夫にして芽出たく華燭の式を擧げたるは四月の末つ方なりき伊左衛門翁は松江夫婦に前記の家屋敷に加へて屋敷つゞきの桑畠一町三反歩豬田三反歩程を分與へしかば若夫婦は何不足なく仲睦じく立働らき蠶業に俚歌のふし面白く唄ひくらしてありしが遠山の桑の葉に秋風吹きそむる八月の末ツ方秋蠶の眠濃かなる夜半の衾を駭かして新婚別の悲みは二人が身上に降來ぬ

▲●●●新婚別　征露の師起りてより國内俄に騷がしくなりゆき彼處此處に兵士のつらき別れの多かる中に

夫婦樹の連理の枝を劈く新婚の別れほど悲しきはあらじ昌二氏また○備歩兵二等卒を以て動員令に接し離情轉た切にして笛吹川の流は堰き止むる術はあれど恨みの涙は夫妻の袖に小歇なし去れど公事又如何ともする能はず昌二氏は志を決して身を装ひ直ちに旅順の包圍軍に加はりしが秋の夜の月明き頃は故郷に殘し置きたる若き妻の身の上を按じて軍事郵便に萬斛の旅愁を托すること月に幾度なるを知らず此の斷腸の文を日毎夜毎に親しみ見て今は手匣の底深く秘めつゝあるは（予之を一覧せんことを莊造氏に乞ひしも若夫婦の戯言のみにて御目を汚す憚りありとて示さゞりし）此方の松江女が身の上なり萬葉古今にて讀み知れる別離のあはれをば歌にこそ知れ今更歌の主のあはれさを身に泌みての憂思秋の永夜を泣きあかしつゝありしが流石に蠶飼ふ身の陌上桑の操正しく行すまして歸へる燕來る雁にいくその思を寄せつゝ山里の賤屋にたれこめあり



▲勅題詠進●●●●　暫くして歌の主は賤が屋に歸來りぬ松江女は初見の人の在りと知りて面はゆくやありけん座に出づるを躊躇ひし氣色なりしが實兄莊造氏のいざとて導くにさまではとて漸くに立出で予が遙々東京より訪ひし事の由を聞きひたすら打驚ける樣に

て俄には口も得開かでぞありける、打見れば面窶せる色淺黑き年の頃二十二三とも覺しき小女なり良ありて偖とばかり口籠りつゝつぎ〳〵に詠歌に就て物語るを聞けば去年の八月夫と袂を訣ちしより以來養蠶の業も自と懶くなりゆき辛き長夜を喞ちつゝありしが秋去り冬來り朽葉もいつか白妙の雪に埋れし十二月廿六日の夜半のこと閨の妻戸にたち騷ぐ北山颪の身に泌みて終夜寢もやらで唯々旅順の空なつかしう翼なき身を恨み明かせし曉のころまどろましとはわれは知らねど怪しき夢に魘はれてふと眼さむれば胸騷ぎて汗は身に流れたり夫の身の上に恙もやあると心安からざりしが後にぞ知りぬ恰も其日其夜半に夫は一川より李家屯へ後進の折敵の砲彈に右の腕、上唇及び左頰を打たせけるよしその人よりの文通あり心は海山萬里も隔てぬ仲のこれも緣の深き印と今更に肯かれつゝ夫れより文通の趣きを一家の人人にも示して濕やかに月日を送り公の報ある日を待ちたりしが行く年漸くこゝに盡きなんとして征露第二の年近づき來りしかば身の上故鄕の樣など細々書きつゞり夫の許へ送りてそなたの今如何ならんなど云ひぬ、さてその夜半の寒けき程なりき氣を慰むるよすがともなさんと種々の物の本など讀みあさりたる身づくろひして斯くこそ詠み出でけれ

御軍にめし出されしわが夫は
　いづこの山に年迎ふらむ

一夜はこれに慰みて臥し次ぎの日兄なる人に此歌を示して雌黃を乞へりしにこは餘りに幼き言ひ樣なり斯る今樣めきたるは卑しうこそ聞ゆれとて

兵士にめし出されしわが背子は
　いづこの山に年迎ふらむ

と加筆あり此歌やがて勅題の旨にもかなふべく覺えよろづ兄なる人の敎に從ひあまざかる鄙の女子の畏けれどまごころのほどをとて其後大內山へまゐらせけるを端なく世に知られて遙々の御尋ねにも預りし事の耻しさよと膝に置る手の初々し

▲御歌所御沙汰●●●●●　松江女は語りやみしまゝ茶菓を

勸めなどしてありしがやをら起ちあがりて神棚に供へたる物を取下し二たび三たび押戴きて云ふ樣は御所より斯ばかり難有き御沙汰のあらむとは夢さら思ひまうけざりしに數ならぬ身の御惠の露に濕ふことの畏しこさよとて一片の奉書を余に示すを見れば

山梨縣平民陸軍步兵二等卒
大須賀庄次妻　まつえ

新年山

つはものにめし出されしわがせこは
いづこの山にとしむかふらむ

右本年歌御會始詠進之歌依點者之選於
御前披講相成候也

明治三十八年一月十九日　歌御會始奉行

云々と記るされたり改めて讀みもて行くに歌格高古にして幽遠の趣あり大方の情を僞り言を巧みて詠みたりし歌の類とは思はれずされぱこそ歌の誠は能く九重の天を動かし歌の司人等を泣かしめたることゆめ古の歌に劣るべしとも思はれず昔は「神風や伊勢の濱荻をりふせて旅寢やすらむ荒き濱邊に」と詠みたりし歌を愛でゝ實に鬼神をも泣かしむる歌なりとて人々とりどりに激賞したりしさへあれば松江女が此歌いかでか人を感ぜしめざらむ物語のうち松江女が述懷に「ほんとのことを云つたんでほかのことは全くまぢつてありません」と誠に之れなるかな、余はひたすら此歌に感じ入りたるまゝ松江女のいなむを勸めて短冊に水莖の匂を留めて土產となし猶一首を所望したりしに去年の暮此歌と同じころ詠み置きたりしものとて

大方の人のとはねばのがれすむ
身はいとまある年の暮哉

正しく實情實境の歌とは知られたり

▲負傷●●●●せる昌二氏　は偖て其の後を如何に經つゝあるか妻の妹安江女に遣したる昌二氏が最近の消息に依りて知りぬべし、

一筆しめし上候扨てちかごろは寒氣はげしく候處おんふたをや樣には何の御かわりもなく御起臥遊ばし候哉御伺申上候就ては私事一月二日野戰病院より曹家屯第二病院へ入院同月五日ダルニー病院へ轉送となり三日間たい在同月七日ダルニーよ

りみよし丸にのり十一日宇品へ無事上陸廣島の病院に入院し今は創口もなほり毎日風呂にはいり療養罷在候殊に廣島はあたゝかにして體のためには至極よろしく候間御安心被下度候追て來月中には東京の病院へ轉療の都合に御座候間其折は御知らせ申上候

次に老鐵山と申す山の前にて大須賀勇次郎君に面會せし時は誠に意外にて一夜を語り明かし申候勇次郎君も無事に在きんに候間よろしく御傳へ被下度候早々

廣島豫備病院第七分院

一月廿日　大須賀昌二

しか〳〵とあり文中にも見えし如く昌二氏も不日東京へ轉療の由にて次第によりては郷里へ歸還の運にもなりぬべしとて故郷の親樣同胞分けて松江女は背の根の長き春日を千秋の思して待ちつゝありとなむ

（東京二六新聞布川氏記）



# 軍國の片影

笠間醉雨

兵士の母は、

江州は彥根の柳町といふに、染物職を營んでゐた岡川吉藏といふがあつた。

吉藏とは、僅か二十二歳の若者であるが、父が四五年前に歿して了つたので、吉藏は已むを得ず一家の主宰となつて、辛くも母のきみ、妹のしづ、末野の三人を相手に、その日〳〵の煙を細々ながらも立てゝゐた。

吉藏の家は元から斯うでは無かつた。父の存命中は相應に財產もあつて、相應な暮も爲てゐたのであるが、その死亡後は、まだ弱年の身の、細い腕に四人の糊口を凌ぐだけの稼も出來ないので、到頭一昨年の四月頃、粗末ながら自分の所有であつた家屋をそれこそ二束三文に賣拂ふて、今度は彥根を去つて

入日市に至り、見る影もない小やかな家に引ッ込んで、その賣拂つた金を資本に悉皆屋を營んだ。が、幸に商賣が殊の外忙しく、まづ此分ならばと、將來の光明も見えぬではなかつた。

けれども、斯う安神して將來を樂んだ、それも束の間の夢であつて、吉藏は一昨年の十二月の徴兵檢査に合格して大津歩兵第九聯隊に編入することゝなつた。岡川家では、實に杖とも柱とも爲つてゐた吉藏を、如何せん、國民の義務として徴兵に引き扱かれたので、跡に殘つた母と妹とは、唯さへ足らぬ勝の生計に一層の困難を加へて來た。

けれども母のきみは能く國民の義務といふことを辨へて居つて、未だ一度も愚痴がましいことも云はず、たとへ石に喰付かうが、三年の間は何うにかして支へ、首尾よく吉藏をして御奉公を果させたいものと、千々に心を碎き碎いて、十歳のしづと五歳のい、すゑとの、二人の少女を相手に、女の腕で殊勝にも手馴れた悉皆職を營んでゐた。

けれども、如何に手馴れた事とは云へ、女は矢張り女である、かよわい細い腕である、殊にまだ頑是ない幼兒を抱へてゐるので思ふやうに手が廻らず、いつか、つい、不義理の借財が其處此處に出來て來て、一ヶ月に僅か一圓二十錢といふ家賃さへ、滯り勝となつた。

丁度昨年の五月の下旬のことである。空はどんよりとして、一ト雨來さうな、いやに風の吹く、氣の滅入るやうな心悲しい日の黄昏ぢかい頃であつた。

平日これはといふ御馳走はないが、今日は幸ひ元締の方から、例の名物の源五郎鮒の煮付を貰つて來たので、久々のことで、夕食の食卓を賑したのであつた。

まだ點燈の時には早いが、母のお君は二分心の洋燈を點けて食卓の上に載せた。そして、表戸も裏戸を悉皆締めたので、洋燈の光がぱつと冴えて薄闇かつた一室が俄に景氣を添へた。

で母子三人は樂しく食卓を圍んで箸を執つた。

すると、突然に、
『御免なさい。』
と、云つて、表の戸を荒々しく入つて來た年頃五十ばかりの男がある。
『ハイ。』
と、優しく答へて、母は食べかけた茶碗を下に、徐に洋燈を持つて此客を迎へて、
『さあ、お上りなさいまし。』
と、云ふを待たず、早や老人はつか〳〵と上つて來て横柄に座を占めた。そして、一ト通り家の内をずらりと見廻し、行き止まつた眼を二人の少女に注いで、
『あ、今、お夕飯かね、……』
と、云つて、食卓をちらと見て、
『オー、鮒の煮付かなんかで、大層景氣が宜いと見えるね、何だ貰つた、貰つても何でも宜い、えらい御馳走だ……時に、早速だがね、例のもの如何ですな、今日は屹度といふ堅い約束だつたから來たのだがねよもや間違はあるまい。』
胡麻鹽頭の、赭顔のでつぷりとした、骨格の逞しい老人の稍血走つてゐる眼が見るからに人をして悚然とさせる。
母のお君とは、年頃四十六七の婦人であるが、顔は貧に窶れ、甘き物を食べぬ故で色艶も悪しく、如何にも痛々しげな老女である。
老女は、只もぢ〳〵と揉み手をして、更に口を開け得ない。
『今日は間違ないだらうね。』
と、老人は重ねて問うて、首垂れてゐる老女の頭の上から邪慳に見下した。そして、懐から手垢の付いてゐる細長い帳簿を取り出して、膝の上で披いて見て居る。
老女のお君は、今は何とか云はねばならぬ實に絶體絶命の場合に迫つて來たので、辛うじて言ひ出る言葉も途切れ〳〵。
『今度こそはと思つてゐましたけれど、誠に相濟み

ませぬ、――何とも御詫の仕樣もございませぬ――
――それに〳〵――先日から子供も加減が惡く――
お醫者へ藥代も收めましたので……』。
老人はフンとばかり鼻であしらうて、見る〳〵氣色は險しくなつた。

『おい、何を云ふんだえ、何を云ふんだえ、俺は今日、お前さんの泣き言を聞きに來たのではないよ。お前さんの泣き言は、既う耳に胼胝のいるほど聞いた。やれ、子供が病氣だとか、やれ、妾が寸白だとか、そんな下らないことを態々聞きに來たのではない、家賃を取りに來たんだぞ、……馬鹿々々しい、本當に……家賃も二ケ月分二圓四十錢であるのを、此方が勘辨して遣つて、一度には迚も無理だらうから、まづ一ケ月分だけ、昨日までに納めるといふ堅い約束をしてゐたのではないか　それに今日は又辷つたとか轉んだとかの云ひ譯、……醫者の藥代なんかは何うでも搆はないが、雨に濡れては居られまいから店賃の方はさつさと片を付けて貰はんければならぬ、それとも醫者には義理を堅く立てゝ、大家には軟くするといふ御積か、左樣いふ次第なら左樣いふ次第で、此方にも亦た相應な所存がある、家賃を納めぬなら仕方がない、さつさと立退いて貰ひたい、……馬鹿らしい、何處の世界へ往つたつてロハで店子を置く大家があるもんか、ロハで店子を置いた日にや大家の口は上がつたりだ。馬鹿々々しい、さあ、お前さん、……何時來ても〳〵泣き言ばかり聞かされてゐては、カラ既う際限がないから、何とか早く確然と定めて貰ひたい、此家を立ち退くなり、又店賃を勘定するなり、是非とも、今、どうとか埒を明けて貰はう……』

と、幾度も店子を苛めた經驗のある口とてなか〳〵甘く述べ立てゝ梃でも動きさうでない權幕である。

お君は既う全身を絞られるやうな思して身體から汗、目から涙。

『是非、今度だけは、お許し下さいまし、――一昨

日までに屹度——此方から持つて出ますから……
……。』
『フン、いゝゝゝゝ、ちやんちやら可笑しいわ、紺屋の一昨日、悉皆屋の一昨日、よく似たものだ、當てにやならない、虫の宜い事お云ひでないよ、そんな口車には最う〳〵金輪際乘りませぬ、……馬鹿々々しいよく〳〵其樣なに圖々しく出られるなあ、……俺も我慢の出來るだけは我慢してやつて置いたのだから、もう此上は容赦はせぬぞ、……さア、コラ、立退くか、勘定するか、早く定めなッ。』
と、老人は語調も荒く斯う云つたが、其殘忍な相がまるで鬼のやうに物凄く、血走つてゐるぎよつとした眼が一ト際恐しく怪しく光つた。




母のお君は默つて首垂れて身動きもせず石に化したとばかり
老人は白眼み付けてゐる部屋の隅には少女の泣聲。
『さア、どうする。』
と、老人はお君の何とも答へぬのを戻かしく思つた

のか、自烈たいのか、居丈高になつて攻め掛けた。

『さアどうだ。』

と、更に雷の如き大聲を頭から浴びせられたお君はその瘠せたる兩掌を徐かに合はせて、

『どうか。』とばかり、震へて歎願。

見る見る顏を火にした老人は、突然、つゝ立ち上つて、その枯枝のやうな兩掌も折れよとばかりに蹴ッ放し、驚く老女の領頭をむづと攫んで、手荒くも戸外へ投り出した、二人の少女もわつと泣いて母の後を追うて飛び出す。

戸外は一面の黒闇、まるで惡魔の手で押へたかのやう、哀れな人の子、泣いて迷うて行く所を知らず。

○　○　○　○　○　○　○

沒義道なる家主、鬼の紺重と渾名を打たれてゐる加藤重右衛門に追ひ出された岡川の母子三人は、一時その隣家なる古物商新莊豊吉といふ仁に救はれてゐたが、其後またも運命の手にさいなまれて町税滯納の爲め、僅かに殘つてゐた皿小鉢を差し押へられゝ、ほんの着のみ着の儘となつて了つたので、お君は熟熟浮世の果敢なきを歎ち、泣く／＼長女しづを子守に出し、自分は日雇稼をして、辛くも末野と二人の口を薄い粥に濕らしつゝ、味氣なき露の命を繋いでゐるが、これは全く長男の吉藏をして天晴れ帝國の軍人たるに耻かしからぬ行爲をさせたいばかりの一念力なのである、吉藏今や肌寒き滿洲の野に露營して、そも如何なる夢を結んで居るであらうか。さるにても此哀れなる兵士の母は、何の罪あつて斯くは運命の手に弄れるのであらうか。あゝ。　（をはり）

## 玉襷

去年の某の月のことである。長州詫間の浦には何事が起つたのであらう、まださの空の微暗い時から人馬の往來織るが如く、宛ら世の中の喜悲を此所一ところに集めたかのやうなことがあつた。

但見れば、波上には巨船大艦幾艘となく陸地近く並んでゐる、海岸には人馬の山を築いてゐる。

馬の嘶き、人の叫び、車の音、汽笛の聲、海と云はず、陸と云はず、まるで破れるやうな騷動で、殺氣は暗澹として天地に滿ちに滿ちてゐる。

突然、

「それ馬よ、人よ。」

と、叫ぶものがあるかと思へば、早や十幾頭かの馬は、何れも牽綱を離れ、鐵蹄地を蹴り狂ひ狂うて、彼方此方へと駈けずり廻つてゐる。

これは、滿洲へ渡るべき某聯隊と共に輸送すべき軍馬が、何かに驚いて、先づ其一疋が絆を切つて暴れ出し、終に他の十幾頭も次第〳〵に絆を切つて、斯樣に手も付けられぬやうになつたのである。

雲霞と群つてゐた人の山は、急遽に崩れ初めて、大混沌大動搖を極めた。

逃げる、追ふ、飛ぶ、駈ける、罵る、怒る、泣き叫んで、既早や戰爭が初まつたかのやうで、それはそれは非常な騷動となつた。

群衆が立騷けば騷ぐほど馬は益々暴れ愈々狂ふた幾多の兵士は今から早や必死となつて、それ等の離れ馬を捕へやうとした。馬は逃げる、人は逐ふ。その内に一疋の馬は、群衆の內へ突進して、遂に森田傳吉、松本米太郎と云へる二名の輸卒を蹄にかけ、剩へ頭肩の嫌ひなく咬み付き咬み付いて、見る〳〵流血淋漓とばかり、二人は重傷を負はされて地に伏して了つた。

斯樣な所で斯樣な人と馬との戰爭が起らうものとは、誰も豫期してゐなかつたから元より衞生隊も無ければ、看護婦も居ない。

さて、此倒れた怪我人を如何したものであらうと人々は手に汗を握つて居た。が、幸ひなる哉、此時丁度其所へ見送の爲めにとて愛國婦人會○○支部の婦人達が數十人來合せてゐたが、その中の二人の何處かの令夫人らしいのが、この有樣を見るより、早くも進み出で丶、甲斐々々しく襷を十字に綾取り、それ血止めよ、それハンケチよと、所屬の軍醫を助けて應急の手當を爲たのであつた。

さて、又茲に一つの困つたことが出來て來た。此二名の兵士は何れも素より生命に拘るほどの重傷ではないが、尙ほ數日の休業を要するから、强ひて征途に登らすべきでもない。が、兎に角、今此二名の補充を爲さなければならぬ、不慮の出來事とて其準備も無い、さりとて又本隊へ歸つて補充の兵を出すべき時間とても無いので、所屬の大隊長〇〇〇少佐も是にはほと〳〵當惑したのであつた。

すると、そこへ雜用に來た數名の兵士があつたから、即ち〇〇〇少佐は其內の二名を選拔して補充することに決した。

この命令を受けた兵卒は、何れも突然な事とは云へ、豫て覺悟の上のことで、又、願ふても行きたいのに、自分等の取殘されて居つたのを今更遺憾に思つて居つた折柄であるから、自づと喜色が滿面に溢れ潔よく命を受けたのであるが、さて、服裝等と來ては、平常の其儘であるので、乃ち婦人會の面々は、負傷者の着てゐた服を脱がせてそれを補充兵に着替へさせるやら、なか〳〵の混雜であつた。が、是も即座に首尾よく整うて、何日の何時でもといふやうになつた。



しかし、此補充兵の整うたのは、只外から見た外形のみで、實は內容の懷の中までは一向に整つてゐなかつた、兵士自身も是には甚く當惑して、早速是の事を所屬の小隊長に相談した。

小隊長の〇〇中尉もこれはと亦聊か當惑して、そりや左樣だらうと如何にもぬるい挨拶、これと云ふ成算も無いので頭を掻くばかりだ。さあ、兩兵士とも氣が揉めて堪らない、戰爭には怖くない、命は惜しくはないがこの「金の缺乏」といふことには酷く胸を痛めて、既早や打死したやうな氣さへするのである。

小隊長に補充兵二人、三人鼎の足の如く突立つて首を傾げてゐるが、これはといふ名策も出ねば、これはといふ智慧も湧いて來ない。

所が今まで、〇〇中尉の背後に立つてゐて、此話を聞いてゐた一人の婦人がある。

年頃は二十五六の、顏色白な細面の、目鼻立の美しい、漆の髮を丸髷に結つた、背のすらりとした婦人、扮裝は黑羽二重の紋付に繻珍の帶、金簪の光り指環の光り、パチン留の光り、それに人品の光りも添はつてゐるは、いづれ名ある人の令夫人なのであらう。

此盛裝の婦人は、何と思つてか急に驅け出して、愛國婦人會の會員の群衆へ投じた。そして、支部長なる〇〇夫人に此補充兵の金の問題に窮してゐることを告げた。そして、早速會員一同に諮つた所が、みな妾も妾もと財布を叩いたので、立ちどころに三十數金の金圓を得た。で、この婦人は手早くこれを懷紙に包んで、〇〇中尉に手渡し、そして、二名の兵士に贈るべく話した。

小隊長の〇〇中尉は甚く其の好意を謝した。けれども我が意だけでは勝手に處分することも出來ないので、乃ち上官〇〇〇少佐に其旨を逐一上申した、少佐も之を聞いて深く婦人達の同情を喜び、早速二人の補充兵を呼び付けて、群衆の面前に於て、極めて簡單な一場の演說をした。

「お前等は、急に、これから戰地へ行くことになつ

たのだが、それ〳〵十分の用意を爲て居つては時間が移る、だから止むを得ず、負傷者の服を其儘着て、劍も靴も其儘用ゐて行くといふやうなことになつた。が、金がないといふ事に氣が付いて玆に被居る御婦人達からお前等に此のお金を下さつた……。』と、云つて、白紙に包んだ金子を胸のかくしから取り出し、

『……まことに已むを得ぬ場合であるから、御婦人達の御厚意をお受けすることに爲ました。まことに深い〳〵お情の籠つてゐるお金で、お前達に取つては、至つて名譽のお金であるから、お前達も能く〳〵御婦人達の御厚意を謝し、一厘一毛たりとも決して〳〵無駄に遣つてはなりませぬ……。』

と、斯くて、その金子を二名の兵士に配與したのでいづれも双眼に感涙を浮べて、恭しく受納し、婦人會の群衆へも一揖して、直に軍務に就いたといふことである。

群衆は此光景を見て、少なからず感激した。そして、これ實に愛國婦人會の旨趣に適つてゐるものであると稱へぬものは無かつたといふ。（をはり）

## 鶴の話

梅廼舍主人

世の俚諺にいふてある「つるが掃溜に下りたやうだ」とは、美の極と醜の極とを對照した言葉であつて、其の美の値を秤量することが出來るのであります、彼の翠滴たる若松生茂りて砂眞白き間を長閑に逍遙する態や、削るが如き巖の邊に老樹を侶として舞戯るゝ姿を見ては、實にや蓬萊仙境も斯くまでにはと疑はるゝでありませう、其の外、日出の鶴の純潔なる、千羽鶴の優麗なる、愈よ出でゝ益す其美を表はすではありませんか、此等は誠に好畫題であるが、歐米の畫伯などは夢にも描き出すことの出來ないもので、去りとて我邦の美術家こそ此上なき幸ひを受けて居る次第であります、されば此美の妙趣は我美

術家の手によつて、繪畫に、圖案に、彫刻に、鑄物に、織物に、陶器に、漆器に、偖は襖、屏風、軸物に至るまで、總ての美術工藝上に應用されて、而も至つて世の氣受が宜しいやうであります、別けて、結婚とか新年とか、お目出度い時の裝飾などは、殆んど此の靈鳥で持ち切つて居ると申しても差支ありません。

さて此の目出度き靈鳥は、如何なる處に棲んで居るかと申しますと、此の鳥の羽風を鳴して翺翔して居りますのは、目下日露大戰爭の大舞臺になつて居る滿州の廣野はいふまでもなく、北は露西亞のシベリア地方より、南は朝鮮一帶に渉つて居まして、昔は海を隔てた我邦にまでドシ〳〵渡つて來たものでありました、其の頃は年々秋季の候になると、北地の寒さを厭ふて、支那朝鮮の各地から日本海や支那海を超えて、日本に雖ひより、白砂青松の邊より山紫水明の間に打ち群れたもので、我が蓬萊洲裡の光景は爲めに一段の美觀を添えたことであらうと思はれますが、實は此の好い時候を利用して、喬木大樹に巣をくふて、其の雛を育む爲めに來たものに外ならぬのであります、諺にも燒野の雉子夜の鶴と申すのがありますが、大方その育兒のさまを寫さうために古への聖がかく言ひ殘されたものでありませうが、由來孝道を發揮させる上に於て、多少の裨益を與へたものなので、是れぞ即ち鶴の靈鳥たる所以の一つであらうかとも思はれます。

斯かる靈鳥でありますから、維新以前までは其の保護が至つて嚴重なものであつて、若し之を捕へたことを發見されますと、早速斬罪に處せられたさうであります、勿論、今日でも之を捕へることは禁止されて居まして、此の禁令に背いたものは、誰れでも二圓から二十圓までの罰金に處せられることになつて居るのです、然るに、此の禁止令の發布される以前、即ち舊幕府の禁令は弛むし、明治政府の禁止令は未だ發布の運びに至りかねて居た、維新匆々の折柄、既に亂獵の慘禍にかゝりまして、今では西南地方の

一部などにポツ〳〵殘つて居る位ゐのことに過ぎません、現に古老の話を聞きましても、僅か三十餘年の前までは、淺草邊などでも折々見受けたことがあつたさうでありますが、只今では、花屋敷か動物園などの飼鳥を見るより外、致し方がないとは、呉々も殘念の次第であります、尤も現今、花屋敷や動物園に居る鶴は、頭が赤いので丹頂と申し、毛の色は、眞白でありますが、昔し淺草などに居つたのは、眞鶴といふ灰色の鶴で、其肉は尤も美味でありましたから、德川幕府時代には、正月元日の吸物として、將軍家に供へたとのことで、ソレハ〳〵此上ない御馳走としてありました、但し動物園には僅か一羽だけ眞鶴が居たかと思ひますが、若し果して居ますなれば、鶴の種類について比較研究をするのには、好い都合が得られませう。

皆さん若し動物園にお出でになれば、屹度、鶴が鰌を啄むのを御覽になりませうが、よく氣をつけて觀察すると、却々面白いことを發見いたします、御承知の如く、此の鰌の外皮は至つて滑こくて、其の上ヌラ〳〵とした液質を帶んで居りますから、吾々の手では、容易に甘く摑むことの出來ないものであります、處が、鶴の嘴は、東北地方に用ゐられて居る鰌挾といふものにソツクリで、一度挾んだら、流石の鰌も跳ね出すわけにはまゐりません、其の東北地方で用ひて居る鰌挾は、一端に節のある一尺五六寸の竹筒を節元まで二つに割つて、其の割つた端の所に鋸歯をつけ、右と左から嚙み合はせるやうに仕掛けてありまして、之れで鰌を挾みさへすれば、先々百發百中と申して差支ありません、ソコデ、鶴が鰌を挾む樣子を見ると、先づ其の嘴で橫さまに咬へますが、去ながら鰌挾のそれのやうで、鰌は全く動くことも出來ないのであります、で、其の鰌に泥土のやうな汚ない物が附いて居ますと、二度も三度も洗つた後でなければ食べません、其の鰌を洗ふ時は何うであるかといふに、上下の兩嘴をゆるめ、頸を振り〳〵調子をつけて、一時は之を空中に支へて、段

段咽喉元の方へ送り込みますが、如何にも巧みなものであつて、而も其の食物に愼みのあるさまは、只管感ずべき外はありません、名高い昔し話しの一つにもありますが、或る高貴の家の料理人の話に、私は度々鶴の料理を手がけましたが、其の餌袋に一杯食物の詰まつて居たのはありません、譬喩にも腹八分目に醫者要らずと申しますが、鶴は千年の齢を保つだけ、不斷食物に嗜みの深いことは此の通りであります」と、マサカ千年の齢を算へた人もありますまいが、兎に角、斯ういふ風に食物の行儀が宜しいので、能く其の健康を保ち長壽であることは、動物學者の認めて居ることであります、是れも亦た鶴の靈鳥たる所以の一つであらうかと思ひます、

鶴はかく嘴と命の長いだけではありません、其の脚と頸との長いことも鳥類の中で第一と申して宜しいでありませう、鶴がスツト嘴まで押立てた時には、其總丈が五尺程にも達します、かやうに其の支體の長いのは、淺瀨を渉りて小魚を漁る屈強な利器で、其の生存の必要上是非ともサウなくてはならぬのでありませう、で、其の頸の長いに伴ふて、其の内部にある氣管も亦たそれだけの長さのあるべきは當然のこと、而も其の氣管の一端が胸の中で卷いて居るので、丁度、幾つも卷いてある大喇叭のやうな構造で、一度鳴き出すと、天も地も震ふばかりの大きな聲を發することが出來るのであります、其の聲を聞く時は、如何にも宏壯雄大な思がして、ゾツトするばかりに感じますが、是れも靈鳥たる所以の一つであらうかと思ひます、序に申し述べて置きたいのは鶴の胸の大いに出張つて居ると、即ち胸骨が非常に發達して居ることとなのですが、これは、申すまでもなく其の氣管が卷いて居るためと、今一つは、過激に大空を翱翔する爲め、肺の發達が充分なからであります、從つて胸骨の筋肉も著るしく發達し、其の活動機關たる羽翼の支持を強固にし、全體の勢力を總て此の部分に集中し居るやに疑はれます、勿論斯る構造は獨り鶴のみでなく、鳥類全般の通有性で

あつて、絶大の活動をなすものは、一に之に據らぬことはありません、それについて可笑なことを思ひ出しました、其の昔我邦の畫家は、理科的智識が乏しいのと、其の上寫實の方が正しくなかつたのと、兩々相俟つて、ツイ胸のないやうな鶴を描き殘されたものが少なくありません、ソコへ行くと、流石に應擧の如き、若くは近來の進歩した畫家などには、ソンナ不具のを描いたのは見受けぬでありませう、



今一つ、誰も殆ど誤まりながら悟らないのは、其の尾、羽を黒く描くことであります、之は飛んだ間違である、試みに鶴が飛ばうとして羽を擴げた時を御覽なさい、よく〳〵見れば、其の尾と思つたのは翼の羽の黒い部分で、尾は短くて而も眞白なものでありませう、處が、翼をたゝむと、其の黒い羽先が尾のやうに見えるので、ツイ粗忽な描き方を致したのであります。

彼の鷺は、脚や頸や嘴の長い處と、食物を漁る樣子などが、よく鶴に似て居まして、鶴と等しく涉禽類と呼び做されて、動物の分類上では同じ種屬になつて居ります、即ち鶴は、動物界中の脊椎動物で、脊椎動物中の鳥類で、鳥類の中の涉禽類に屬して居るので、鷺とは全く其の類を同じくして居て、丹頂と眞鶴との別ちがあります。

爰に團栗の丈競べがあると假定しまして、其の集まつて居る連中は孰れも生半可通の面々で、他愛もないお饒舌の處へ、學藝才操兼ね備はつた三輪田刀自のやうな方がお出になつて、「さて皆さん」と一聲呼び掛けられたとしたならば、其の有樣は如何でありませう、それこそ、如何なお轉婆のハイカラ者流でも、チント襟元を正さなくつてなりますまい、斯の樣な場合を諺に寫して「鶴の一聲」と申しますが、さて實際に此の「鶴の一聲」がよく烏や雀などの騷がしい囀りを壓するほどの勢力あるものでありませうか古い書物の中などにも、「其聲天に聞ゆ」など〻書いてありますが、果して之が理科的に說明し得らる〻ものでありませうか、抑も又た、文學的の一誇張に過ぎないのでありませうか、それは前段の事實に照し合せてお考へになれば、思半ばに過ぎるであらうと信じます。

以上申し述べた所によつて、鶴は其の長い脚と長い頸と長い嘴との利益によつて、生存競爭の上に於て充分自から養ふことの出來るのは、已にお解りになりましたでせうが、鶴が自から衞ること即ち敵を防ぐには、ドンナ戰鬪用具があるでせうか、迚もあの細長い脚や頸や嘴位ゐでは、他の强襲に出逢ふ曉にはサン〲の敗北を取るより外に仕方がありますまい强いて申せば、其の兩翼が唯一の利器で、イザといふ場合には、一ト羽叩いて三十六計の奥の手を掟めるより安全な方法はなさ〻うに思はれます、併し、鶴の速力では却々大鷲などには叶ひませんから、これは甚だ危險な防禦と申さねばなりますまい、デハ鶴は如何なる手段方法によつて敵を拒ぎ居るのか、又た如何なる方法によつて、生存競爭上優勝の地位を保つてよく其の種屬を繼續し得るのか、之れは大に趣味のある問題と思ひます。

鶴の性質は温厚にして、而も時に臨んで動かざる特性を持つて居るので、靜かなること林の如く動かざること山の如しと申しても宜しいでせう、それでありますから、偶ま大敵の來襲を受けても、樹上に其

の地位を保ち充分其の身を整へて、悠然とすまして居るのであります、然るに敵は此の樣を見て敢て進擊しやうともせず、唯だ其の虚を伺ひ居れど、決して其の態度を崩しませぬから、終には畏氣を出して退却するとのことであります。

それについて味ある古老の物語があります、古來、鏡は女の魂とまで尊みて、新婚の折は必らず新調の鏡を輿入の什具に供へたものでありました、そして其の鏡の裏模樣には鶴と松との裝飾が多いのであります、これは單に千年の緣を新婚の祝に擬らへたばかりでなく、女子が其の操を守らんには、猶此の鶴のやうに溫厚で堅志でありさへすれば、如何なる無作法の惡漢も閉息するもので、よつて以て婦德を全ふせよ、との戒めであると聞きました、如何にも尤なお話で、此の性質こそ女子の爲めには唯一の味方で、何やら兩者の關係が淺からぬやうに感じました故、こゝに書き添へることにしました。

## ○八日の旅（三）

松林歌子

### 十九日　善通寺及び金比羅詣で

翌朝起き出でしは早や七時を少し過ぐる頃なりき裏手なる硝子障を開けば下は一間半余の道をへだてゝ二間巾余りの堀り切りあ、其向うに敷地廣くして二階造りのさのみ大いならぬ西洋館ありこれは讃岐鐵道の本社なりと朝飯を終へて金比羅詣でにと出で立つ善通寺は弘法大師出生の地にして四國第一の寺院なりとの事なれば琴平に至る途中にて一滊車だけおくれて善通寺に立ちよらんとて琴平迄の切符を求め午前九時五十一分の滊車にてゆく讃岐鐵道は特等と並等との二つに別れたれば乘客いと多し又喫茶室ありて十四五才の少女前髮大きく取りし束髮に黑の改良服を着し海老茶袴はきたるいと愛らし十時二十分善通寺驛着車はあれど僅か十町余との事に運動かたがた歩まむと道もわかれど滊車中よりのぞみし五重の塔を目的てにて行くに停車場通りに第十一師團の兵營あり初めには輜重兵第十一大隊ありて一人の兵士門を警衛せり裏手なる練兵場にては輜重兵の四五十人練兵の最中にて何れも白の服裝をなし馬上にて種々の荷を搭載し四人の馬上なるは黑服にて一人劍をぬきはなちたるは指揮官なり表の方には上着、ずぼん、しやつ、づぼん下等の洗濯物かわかしありけふは日曜日なりければ多くの兵士は外出したりと見え其他に四五人を見受けしのみ此處に降りて騎兵の服裝せる五六人の兵を見うけしは騎兵大隊にてもやあらむ此處にて四つ角となり道をへだてて又遠く兵營つらなれり右手の左角には丸龜憲兵本部分隊第十一憲兵大隊との掛札あるあまり大いならぬ建物あり此處より幾まがりかをまがりて漸く善通寺の門前に出でぬ門前には屏風が浦善通寺と記せる二つの提灯あり此處屏風が浦との名あるは此寺建立の頃寺地の近傍迄海水みなぎり香色山筆山等の小峰相連なりて恰かも屏風を廻

て進れし如くなりしにより屏風が浦とは呼びけりとぞ門を入れば直ぐ左側に釋迦如來の堂ありて此堂の前より眞すぐに巾一間半餘の敷石あり其左右には藥師如來五重の塔伽藍などあり伽藍は半間斗りを距きて四方に石垣をめぐらし高さ一間餘のそてつ五六本立てり阿彌陀如來の堂は極めてさゝやかにて其後に何百年とも覺しき丈二三間位のいと生ひ廣がりたる楠のゝあり仁王門を入れば左右に金員寄附者の姓名を刻みたる石數多く立てられ又左側に小兒胎毒御守受所あり第三門の左右には仁王いかめしく番兵の如くにひかへたり門を入れば右に直徑二三尺餘りの撞鐘の善通寺事務所あり左には高さ二間幅一尺四方位の石碑二つありこの後に幾世經ぬらむと見ゆる老松三本あり丈けはあまりに高からねど廣く横にのびて二十餘本の杖つきたり行き當りは即ち本堂にて兩側に弘法大師御出生所との提灯あり堂の建築其他は餘りにおごそかならず覺ゆ右より廻りて裏に至れば一間口余りの裏門あるに如何なる處ぞといで見れば僅か二三歩にして小さき石橋あり右には稻の足穗いと美し渡りて左に五六間いと高く急なる石段ありあへぎつゝ上り見るに二十坪計りの開きたる地にして二つの石燈籠といたく荒廢せる堂の如きものありて何々祖先の陵地とか記しあり後には三百尺位の圓錐形の山ありて麓は小さく中腹よりは稍高き松の列を正して寸尺の地をもあまさず生ひ茂れる



あり此山を脊に左をのぞめば多度津港の海上はるかに見渡され右には兵營いかめしく連なれり松の根に憩し休らひ十一時半頃より車を驅りて停車場に趣くに未だ二十分余の時間あれば近き茶店に時の至るを待つ此の間にて二列車の時を費やしぬ此時練兵は早や終へつと見えて兵士等の腰間劍を下げたるまゝ水を肩にし或は大いなる籠様のものを二人して荷ひなどしてかひ／＼しく立ち働く様の見ゆ十一時五十八分の汽車にて琴平に趣く此琴平は金比羅神社の爲めに賑へる土地なれば山の麓に至る迄の人家多くは旅籠飲食店にて客も多くいと賑やかなりこゝにパノラマ館あり先づ旅籠虎屋に入るに外觀の宏大に家屋の建築勇壯なるは門前なる石田旅籠等の及ぶべくもあらず椽の欄干廊下の手摺等は皆竹に虎或は松竹梅等細密に一枚板に彫り貫きたる其見事なると實に目を驚かす計りなり我等の休みしは十二疊の坐敷にて三間半に四枚立ちの金襖を立てたり晝食を終へ二時四十分頃より宿の番頭に案内せられて金比羅山に上るに左右に瓢・かんふろ、盃御守術袖餅子、ぬか飴、簪、さなだ帶等の店連なり、又賽錢を取りかふる家いと多し第一の鳥居には天下泰平國家豐饒の八字きざまれたり左に鼓樓ありて此處に清少納言の塚碑あり右に琴平神社の事務所あり又左右に櫻紅葉の數多きは花の盛りの思ひやらる又今少し秋ふかゝらむには一層のながめならましをいまだ紅葉も緑の色

ふかきぞいとくちおしき二の鳥居を入れば金員寄附者の姓名を其金高と共に記したる高札あり又二百圓以上の寄附者は一人〳〵に石の柱にきざみたり二三十間を行きて右に大日本水難救濟會の出張所あり左に折るれば右にきり島つゝじいと多し神馬所には二頭の神馬あり又休息所あり十段余の坂を上れば右は社務所の下[illegible]被ひ堂あり堂の右に明治十年の役の碑あり又「皇族下乗」との高札たてられたり旭の社は天照皇大神宮を奉祀し三つ巴の金の紋大小十あまりも棟にちりばめられたるいと美にし右にゆくを十間余にして天下泰平國家安全と記して第三の銅の鳥居ありこれは第百七代後陽成天皇の御宇に曽我部元親の寄附なり元はさかきの御門と稱へしが今は賢木門と云ふ御年社事知社を右に上れば御本堂あり又段を上れば直ぐ右に玉水舎あり右の方石垣より下を臨めば凡そ十二三坪と思はるゝきりしまつゝじの谷ありあはれ斯の躑生よいかに妙なるながめなるらむ少し左手に圓錐形をなせるは飯山と呼びて世に讃岐の小富士と稱ふとかや玉水舎にて身を清め御本堂に參拜す御本堂の左に直所とて神官の詰所あり其向ふに神樂堂あり少し行きて右に三穂津姫の社ありて崇徳天皇をも合祠し奉るとなり御本宮と三穂津姫社との間に回廊にて連れり三穂津社の左に南北の繪馬堂あり多くは日清戰役の圖水難の圖あり又水難救濟具陳列場ありて種々難破船の道具あり北繪馬堂の外側に一尺五寸余の二頭の龍の額あるは左甚五郎の作にかゝり木地に金箔を施せる物にて既に三百年余を經ぬとぞ繪馬堂を出れば右に半間の銅馬あり此宮の御守を受くるには並二十錢特別五十錢との事にて御參拜の印に御守受けられてはとの案内人の勸めにさらばとて一人前五十錢をいだすにまづ三穂津姫社側の祇所に案内せらる此處にて一人の神官出で來て祓ひをしこなたへといへば後に從ひてゆくに美穂津姫社より回廊を廻り直所の前を通りて御本宮に歸り神前に居ならぶ御奥殿は御扉を閉し奉りて此處に金比羅大權現しづまりますなり中央少し高き所に今上天皇と記し奉りし塑物あり又兩側には各宮殿下付雲尼文秀尼殿下の御名を記し奉りしあり暫くにして他の一神官いで來て神前にぬかづきかしは手打ならし拜し終へて奥殿に進み御扉を開き奉り祈りの言葉おごそかに金のへいはくを以て祓ひをなす此處にて御守りと赤き錦の御守入とをさづかり又他に二人の神官出で來て御神酒御供物を賜はるいとかしこし右終りて御本堂より下り此處にて神官の好意により案内者を添へられたればそれに從ひて廻廊をくゞれば御寶藏御典あり此處より右方に頭をめぐらせば御奥殿の左外側に廣き檜の一枚板に櫻の幹いと大きく金を用ひて作り藏は銀をちりばめたるあり其精密なる細工美はしくも珍らしく又さけゆき計りなり今偕にこれを金の櫻と呼びなせりとか奥御殿は天井も皆かゝる細工になり十人の職工半歳の月日をつゐやせりとかにて其細工の上は硝子を以て張りつめたりこれは外より容易く見らるる處なれどやゝもすれば心づきがたき處なればかゝる細工のある由知らぬ人も參詣しても見落す事あるなるべし現に己等も案内人はありながら御守受けたる爲に案内せられし程なり御本宮の左側に唐金製の鶴三羽と二つの龜との寄附物あり祇所の前面に巖魂社と云ふあり此處より坂を下れば旭社の右方にいづるなりさて以上見終へて宿に着せしは三時半頃なりしかばすぐ樣勘定をすませ四時八分發の滊車にて多戸津に歸着せり金比羅山は麓より上る事九町余との事なれど上るにいとやすし六時半頃入浴し七時夕食事すこれにて金比羅詣でも事なく終へぬさて高松の栗林公園は日本三公園の一なりとかや人々の噂さに聞きたれば訪はまほしきものよと樂しみけるに先き滊船にて高松はいまだ虎疫のあとをたゝずいとあやふければ要なき限りは避け給ふ方よろしからむと田中少佐に注意せられたればいたく失望せしのみならず高松には源平の古戰場なる屋島山檀の浦等の風景に富めるありと兼而聞きつるをかく近くまで來てあだと引かへさん事のいかにも口惜しければ宿の主人に委細問ひ合するに仰せの如くいまだ一日に一人位の患者はあれど御心配は御無用なりとの事にいと嬉しくてさらば明早朝よりいで多知公園、屋島山等に上りて夕刻當地に引かへし滊船の便をかりて岡山にいで歸途宮島に立寄ら

むとの話になりぬおのれ折角のついでに急行ながら高松より大坂にいで奈良京都あたりの名所めぐりしたらむにはと云ひいづるに父君さても心あがりせしもの哉とわらはせ給ひつ日數よみながら本月二十五日迄には必ずぐ歸國いたさでは叶はぬ故今四五日の日數なり何處も一夜宿りならむには行かれぬ事もなかるべしされど日々休みなく走り廻らむ事の苦しからずやそれだに忍ぶとならば何れにてもとの給ふに遂にこゝに奈良京都急行の旅はなりたちたりはじめ宮島あたりまでの旅行の次第〳〵にのびゆきてかく都近くまでに進ましとは實に思ひの外の事どもなり九時頃明日の日待ち遠く樂しき夢を結びけり

## 米國だより（結婚のいろ〳〵）

桑港にて　うまのかみ

一、いゝゝ、日本ナイチンゲールの結婚、ゝゝゝゝゝ

◎『日本のナイチンゲール』と云ふ藝題で桑港マーケット街マゼスチック座で米人が日本芝居を演ずると新聞にも廣告し、市街の要所々々にも大々的の廣告をしてありました、これは時節柄日本赤十字社看護婦が何かの美談を仕組んだ者であらうと考へまして平生、芝居嫌ひの私も女鑑の讀者のかたがたへ有益な通信を差上げられる事と大奮發を致しまして、一夜見物致しました。

◎マゼスチック座の前で先づ驚きましたのは、入口に掲げてありまする看板の繪でありまず、白帽白服の赤十字社風ではなくて、だらしない藝者姿の娘が三味線抱へて歌つて居る繪であります、何の爲めにこんな繪を見せますのかと、ふしんに思ひましたのです。

◎入場着席の後に役割番附を貰つて見ましたに

ゆき子（日本のナイチンゲール）……………レールス孃
ジヤツク、ピ、ジエロー（日本在留米國紳士）……………ソルントン氏
ハンモン（東京駐在米國領事）……………マルストン氏
伊藤（媒妁人）……………コラン氏
太郎（ゆき子の兄）……………ジヨン氏
おかよさん（ゆき子の姉）……………パルテス孃

まだ有りますけれども畧します其次に順序書きを見ましたに

初　幕　江の島の茶屋の場及び東京街道
二幕目　ピジエロー氏の九段の寓居の場
三幕目　帝國ホテル一間の場
四幕目　芝神明社内祈禱の場
五幕目　再び九段坂の寓居の場

これで八子るのですが、役割と順序とを見ましたが、

けでは、何が何やら一向其樣子を想像しかねます。

◎最後に此芝居の由來を書いて有るのを見ましたところが、下の如く見えます

オノト、ワタンナと云ふ日本婦人は、米國に住んで居る、有名な英文小說家でありまず、先般ワタンナ孃は、日本のナイチンゲールと云ふ小說を著はして、ニウヨルク市で出版しましたが、相かはらず世間から非常の好評を受けました、さて此度演じまする五幕續きの芝居は、ウイリヤム、ヤング氏が前記のワタンナ孃の小說によつて、脚色した者でありまず、又舞臺の作法は、モリス氏の指圖に成りたる者でありまず、云々。

此オノト、ワタンナ孃は、早くより日本婦人文學者として、米國に知られて居まするが、其實地の御當人をば、誰でも知つて居る人がないやうです、或人は之を日本人ではない、と申して居ます、成程名前が日本人の名前としてヘンでありまず、併し每度日本の事情を詳く知つて居て書きます所は、米人とも見られませぬ。

◎日本音樂『ゆふぐれ』の前奏終るや否や、幕がそろそろ開きまして、現はれ出しは、江の島の且ある料理店の表座敷、藝者やら女中やら若い娘の五六人、火鉢一つを取り圍み、入り來る客を待つ風情、其娘どもの有樣と云つたら、何れも袖の長い、フキの廣い、着物に帶は〆めず、たゞ細いシゴキを卷き付けて、うしろへ廻はし、丸く太つてる腰部へ結び垂れた樣は見れたものでは御座ませぬ。(コンナ不恰好な風をして、これが日本婦人の風でございと、一般の見物人に思はせますは、不都合千萬ぢやとも云はれませぬので、ひそかに心の中で憤慨して居ましたのは私でございます。)

◎其所へ三四人連れの西洋人が入つて來まして、椅子テーブルを持ち出させ、酒肴を取り寄せて、やがて娘ども一同呼び集めて、ステテコ舞をやらせまして、大愉快を極めました、ステテコ舞だと申しますけれども、日本の踊りのやうでもあり、カドリール

(方舞)見たやうの所もあつて、和洋折衷のダンシング(舞蹈)で有りました、併し唱つた歌はほんとうの日本の歌でありました、『おつる涙は瀧のごと……』など六かしい節をよくも稽古して覺えました事よ、と感心して聞きました。

◎此西洋人客の中に、ジャック、ビジエローと申しまする米國紳士がありました、此紳士は九段坂の上の東京市中を一目に見晴らす所に寓居を搆へて居る人ですが、今ステテコ踊を見て、其踊り兒の中に非常に氣に入つた娘がありましたので、幸ひまだ細君を持ちませぬに因つて、此の氣に入り娘を、何れ手續を踏んで、本妻にすると申しまして、無理に所望して大金を出して、身受けをして東京の寓居へ連れて歸りました、此の踊り兒が、即ち日本のナイチンゲールなるゆき子で有ります。

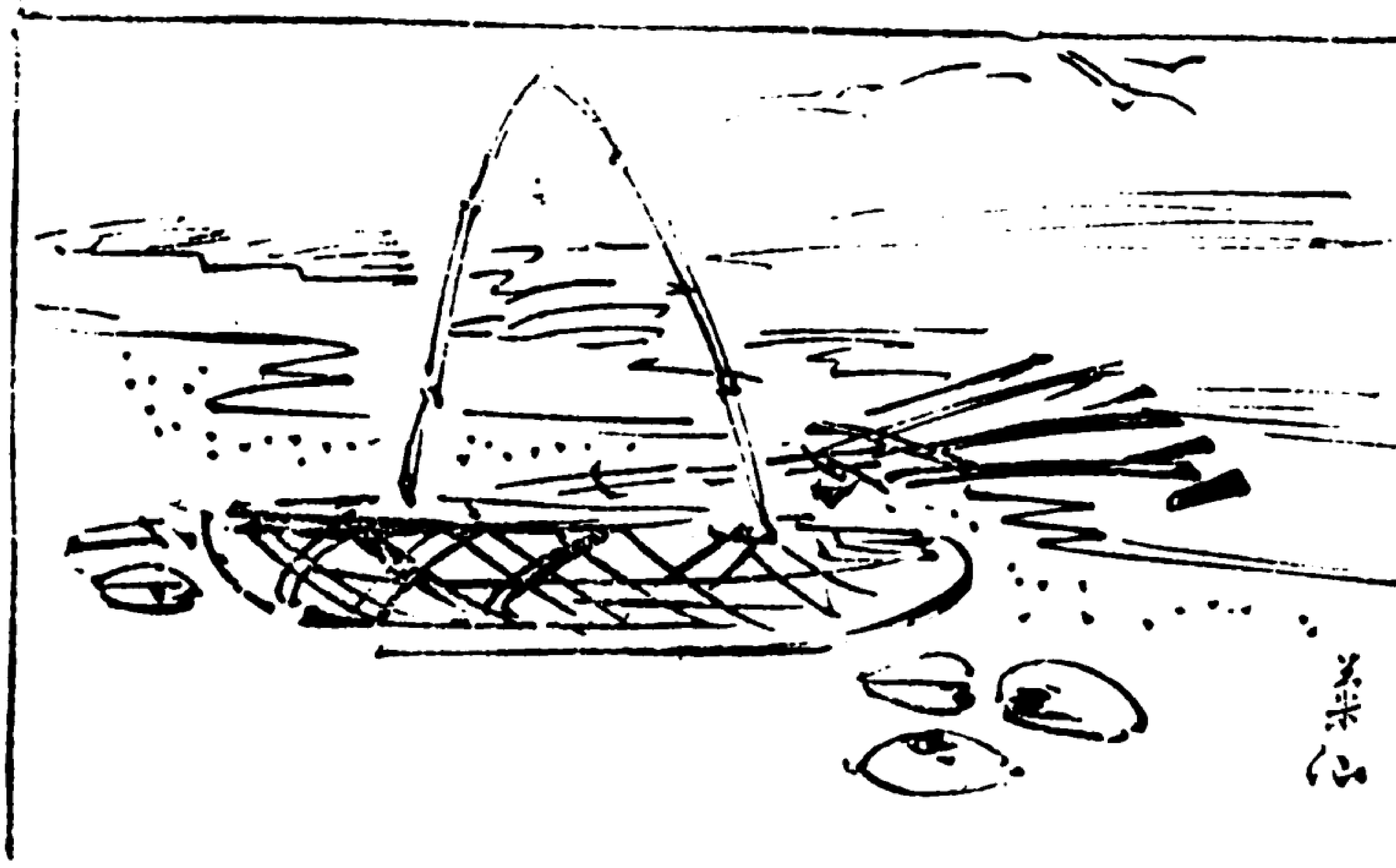
◎二幕目は、九段坂の上のビジエロー氏の寓居、日本風に裝從した一間に、机一つ、長椅子一つ、然るに此座敷に仕舞つて置きました、結婚證書を、盜賊が忍び込んで持ち去りましたので、大騷ぎ、之は以前にゆき子と夫婦約束をした事があつた、或る書生の仕業であります。

◎三幕目はビジエロー氏が、帝國ホテルに居ります所へ前記の書生が行きまして、我が夫婦約束をした女を奪ひ取つたは何故ぞと、難題を吹きかけますとビジエロー氏は否とよ、彼女は既に我が妻と定まつたのであると答へ、結婚證書がないではないかと切り込めば、人の事には世話をやくなと、爭論して、終に其書生が、外へつかみ出される所であります。

◎四幕目はゆき子が、芝神明社へ參詣して無事に治まるやう祈禱の場です、若い十二三の娘子供が、例の帶なしの細紐姿で、江の島の料理屋で見た踊りと同じやうな踊りをやりました、但し神前の事ですから、素手では踊りませぬ、鈴を持つ代りにシンボールを持つて、チヤリン〳〵と拍子取つて踊りました神官の姿と來ては、又奇妙奇手烈、一人は白髮、一人は胡麻鹽、髯はもさもさと一尺餘も延ばして、如

何にも神々しい顔付きなにも拘はらず、其衣服は衣冠でもなく、直垂指貫でもなく、たゞの寐巻きドテラを着流したまゝ、又更に一層奇妙奇手烈な事は、神明社の御神體として奥に安置してゐるのは、鎌倉大佛の坐禪の姿でありました。

◎五幕目は、前記の書生が、更に惡智慧を廻して、ゆき子の兄の太郎、及び其の町内のものをそゝのかして米人が太郎の妹を誘拐したそれを取戻す爲めとて、打ち連れ立つて高張提燈を持ち、日本刀を横へて九段坂のビジエロー氏の寓居へ暴れ込む所を、結婚證書盜み取りの事發覺して惡書生は警官の爲めに捕縛され、ゆき子の兄の太郎も、漸く夢が覺めて、惡書生に欺された事を後悔し、茲に改めてビジエロー氏と握手して、仲直りをなし、日米人の結婚が、首尾よく成立つた所で大團圓であります。



◎私の側に坐を占めて居た、一米人私に向つて曰く『中々うまくやりますな』私これに答へて曰く『私の國の人はあんな風をして居ませぬ』

◎此芝居は二週間興行して千秋樂となりました。

## 二　四十年間の夫婦別れ

◎それも戰爭のため。ミソリ州のセントジヨセフと云ふ所に、幼少の時より相愛して夫婦となりおほせました、男の名はジヨン、女の名はヂヤントン、既に五十年の昔となりました、夫婦となつて、三人の子供までなしたる仲なるに、折りしも起りしは、米國南北戰爭、男は南軍の味方となり、妻は北軍に心を寄せたる爲め、心にもない夫婦別をしましたのは一千八百六十四年の事であり

ました。

◎南北戰爭平定の後、ジョンはカリフォルニヤ州に鑛山業を營み、今はヨセミテと云ふ村に一家を構へ何不自由なく月日を暮らして居ますが、をりにふれて思ひ出すは、別れた妻と子供の身の上でります。

◎妻チヤントンは、夫に別れて以來、殊に三人の子供をかゝへて、辛苦艱難をなめましたが、巡り〲て桑港に來て、わび住ひをして居ますするうちに、何時しか、歲月もまた經て、子供も皆生計の助けをするやうになり、まづ〲無事に今日を過されるやうになりました。

◎さても老ひたるチヤントンは、ある日桑港とオークランドとの渡し船の中で、偶と舊夫のジヨンに廻り合ひ、嬉いやら悲いやら、淚は出ても言葉が出ず、他所の見る目も顧みず、たゞ兩人は抱き合ふのみ、離れた鴛鴦の再び翼さしかへて、ヨセミテなる住所に四海波靜かに立ち返りましたのも、これ偏へに貞操を堅めたむくいであると、世間の人々は申して居ます。

### 三、夫婦の芝居

◎これは去る頃オークランドのウエストレーキ公園內での出來事人靜まりたる此の眞夜中に怪しや彼方に悲哀の聲、必定自殺か他殺かと、聲をたよつて急ぎましたは、是もお役目の警察官です、男の聲で、尙ほ張りあげて

『オ、貴樣は敵の犬、直ちに一刀で斬り捨てやうイヤ、イヤ、暫く生かして置いて、敵の樣子を探ぐるのも後日のため！』

警察愈々驚いて、呼ぶ子鳴らして同役呼ぶのも打忘れて、直に近より樣子を見れば、先きぢや一向氣にかけず、一人は男、直立したまゝ、左手に紙片を持ち、右手はおのが頭をなでゝ居る、一人は女、共同椅子に腰うちかけ、男の顏を見つめて居る、是は次の週間でグランドオペラハウスと云ふ劇場で、興行する芝居の立役者、デスモンド氏が、妻と共に

セリフの稽古をやつて居る所です、警官あきれて兩人に向つて曰く『串談ぢやねい！』

### 四、街上の婚禮

◎これは十月の九日夜の出來事です、サンタクラと云ふ町で、アレキサンドロ、キジャダと云ふ男とフランシスカ、カルデロと云ふ女が、街上で結婚式を擧げましたと云ふは、物ずきでも何でもなく、止むを得ないためでありました。

◎カルデロ嬢の母は、其結婚に賛成しませぬに因て嬢の家で式を擧げる事が出來ません、そこで大に智慧を絞つて登記役所へ電話で、カルデロ嬢の宅へ、官吏の出張するやうに頼んでやりました、さて新夫新婦は、登記官吏の出張する中途に出會ふやうに見はからつて、家を出まして、やがて街上に其登記官吏に出會ひました、之を引き止めて、一伍一什の事情を申し立て、結婚の承認をしてもらひたいと願つたのです。

◎官吏は驚きましたけれども、新夫婦の友人どもが其側にあつて立會人となつて居るので、別に手續の欠けた事もないから、すぐに之を認可しました。

### 五、戰塲の結婚

◎先般グーリック號が、桑港を出帆して東洋へ向ひました、其船客中に、クーレドム、オバール嬢と云ふ米國婦人がありました。

◎此オバール嬢は、瓜生海軍中將夫人の卒業されたワッサー女子大學の卒業生であります、今年漸く卒業しましたのです。

◎許嫁の夫たるチャーレス、アンダースン氏は、現に日露戰爭の戰鬪區域内なる朝鮮國は義州の五十哩東方にあたる、雲山と云ふ鑛山の技師をして居まするので、オバール嬢は、千里を遠しとせず、遙々と打ち渡つて結婚式を擧げるのであります。

◎亞米利加婦人の氣象は、こんな者であります。

### 六、軍醫結婚して免職

◎フオルト、モツトの軍醫ジョン、スミス氏は免職になりました、理由は黒奴の少女と、結婚したからで。

# 河原操子女史へ贈品寄贈人名

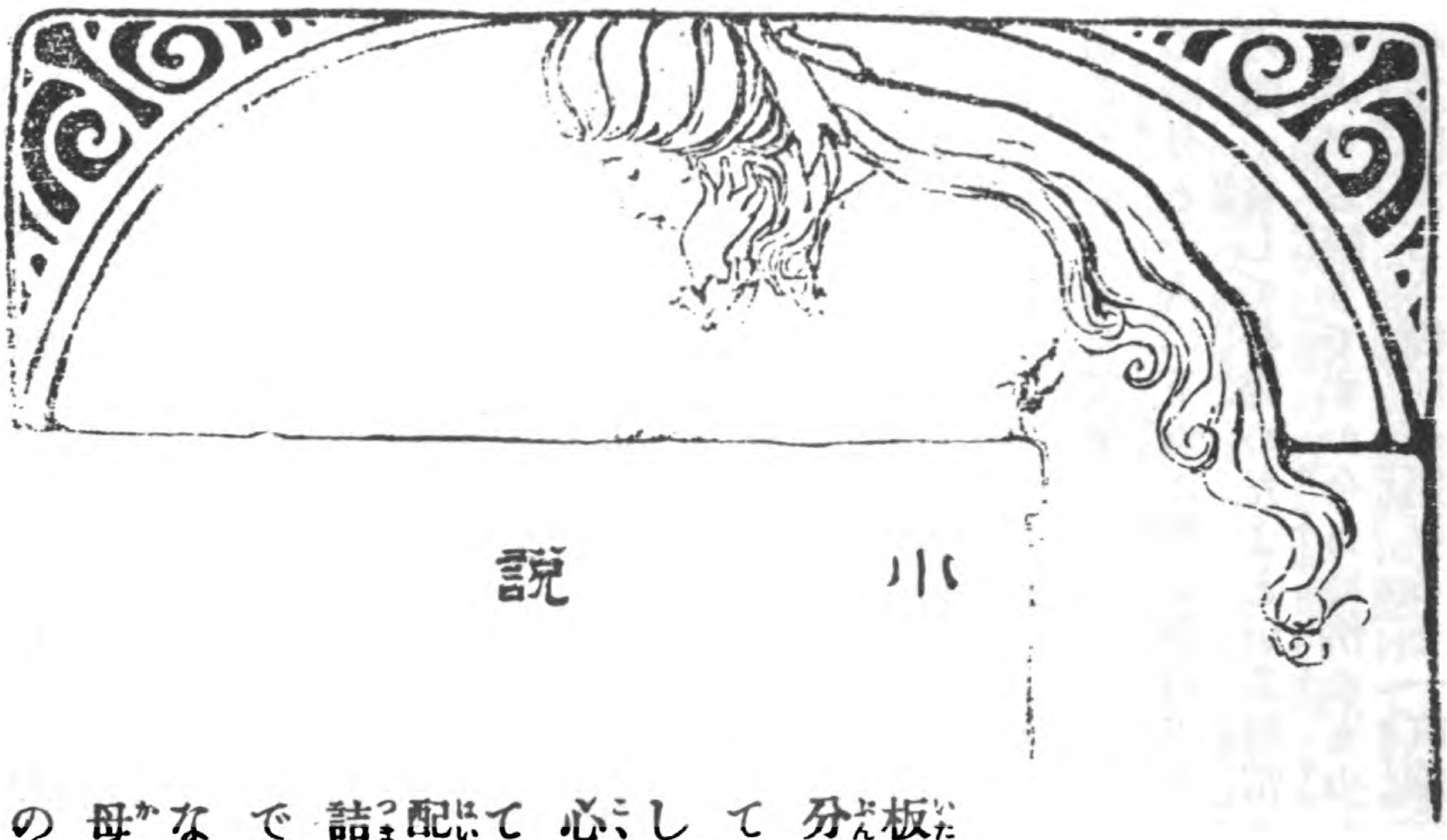
金五拾錢　廣島縣宇品港碇泊東英丸乘組二十一班看護婦
金壹圓　東京市日本橋區本材木町
金五拾錢　京橋區五郎兵衛町
金壹圓　麻布區東町四十七番地
金參拾錢　但馬國養父郡淺倉
金參拾錢　前橋市石川町七
金拾錢　東京市下谷區根津
金貳拾五錢　同市京橋區築地二ノ二〇
同貳拾五錢　仙臺市定禪寺通
同　同
同　同
同　仙臺市元寺小路
同　東京市赤阪區青山北町
金五拾錢　同市牛込區新小川町二
金參拾錢　同
金拾錢　同
金拾錢　同
金貳拾五錢　仙臺市元寺小路
同　同
金壹圓　東京女子高等師範學校生徒
金五拾錢　同校

峰岸ふじ　西川喜久　同よね　某女　林環子　林艶子　田尻保代　竹のふし　林廣子　新山春子　中平幸　橋本鷹松　橋本和久里　橋本松子　橋本繁子　石光つる子　篠田利英　篠田貞子　篠田利子　篠田照子　津々良つね子　津々良みね子　有志數名　理科一年級生徒

金廿錢東京女子高等師範學校生徒渡邊れい子◎同齋藤久子◎金拾錢安藤しげ子◎同岩井ちとせ子◎同淺野ゆき子◎同牧野いさみ子◎同國澤きよ子◎同樽井とよの子◎同吉田はつ子◎同七條はな子◎同井原とね子◎同上野せつ子◎同波多野政江子◎同一色鏡子◎同吉川すゞ子◎同八木ひさ子◎同高山きみ子◎同村上りよう子◎同小野いち子◎同石田ひろ子◎同渡邊のぶ子◎同池上てつ子◎同田口もと子◎水田みつ子◎同山田みどり子◎同中田くら子◎同福王子小梅子◎同齋藤れい子◎同安川あい子◎同中野はつえ子◎同平松けい子◎同奥村よね子◎同別所はじめ子◎同内山よし子◎同山田かずえ子◎同安部ふで子◎同水野よし子◎同澤ひで子◎同岡村しづ子◎同河野ふさ子◎同高田とみ子◎同城戸ゆう子◎同綾部あつ子◎同野澤みどり子◎同内田じけの子◎同鈴木靜江子◎同井上はる子◎同鈴木ふみ子◎同吉川すみえ子◎同横田つる子◎同堀口きみ子◎同町田うめ子◎同山本とし子◎同新家みすゞ子◎同辰已すゑ子◎同稻葉てつ子◎同宮崎うめを子◎同上野まつの子◎同松河ふじ子◎同山崎すい子◎同織田やす子◎同倉田穰子◎同三浦くに子◎同渡邊とし子◎同橋ため子◎同小杉さだ子◎同薩埵和榮子◎同瀧本たね子◎同棟木操子◎同天野みち子◎同鍋島やす子◎同菊田とよ子◎同中山みさを子

△〆切期限三月十五日限に付寄贈志望の向は至急申込まれたし

女鑑編輯局




# 金時計

## （上）

黒田撫泉

學校の歸りから諸禮の稽古とカシメラの袴の裾を輕々と捌いて短靴の運びも快活に日毎築地河岸を往來した時分には橋板を轟ろかして通る貴婦人の馬車を見ては軈て自分も同じやうな身分になる事を豫期しシルクハットの若紳士が綱曳車を飛ばすのを見ては何時か自分もアゝいふ夫を持つ事と心で決めて裏店の女房の話し聲や隣家の娘の三味線杯は耳にもかけず只管品位を保つ事をのみ心懸けて居た處が扨妙齡になつて四方より言込んで來る縁談を聞いて見ると一ツとして豫ての理想に適ふやうなものはない世話好な差配の爺さん親切な神田の伯父さん迄が一緒に腹を合はしたかの様に詰らない對手ばかりを持て來る、マア酷い事夫じやア妾が可愛さうですワと言つて遣り度く思つた事もあつたけれど娘の口としてそんな輕佻ない事は言はれず只聞かない似をして二親には阿父さんや阿母さんさへ御異存がなくばと體のよい事を言つて居たもの丶腹の中の煩悶たさは一通りではなかつた二親も亦適に可愛い丶娘の事ゆゑ

詰らない處へも遣り兼ねたと見えて體よく辭る樣子であつたが左樣〳〵辭つてばかりも居られず毎時火鉢の向ふ前に坐る時は屹度縁談の噂が始まり本當に帶にや短かし襷にや長しとは能くいつたものぢやアないかと互ひに溜息を吐いた揚句はお妙とても今年はモウ廿歳決して早い方ではないから能ひ加減な處で極めないと却つて不仕合せを招く事があるかも知れぬとの結論に一致してしまふ、お妙は是を聞く度に悲しいやうな心細いやうな氣がして其高い理想は一段づゝ低めらるゝやうな感じがした終にお妙廿一の春二親からお前此處等で身を定めないと私達も安心が出來ずお前も身の振方が付かず飛んだ世間の笑い草になるよとの注意を受けて止むを得ず納得し折角胸中に築き立てた宏壯美麗の樓閣は一轉して間口三間奥行五間の小綺麗な借家と變じ其身も内務省屬官竹内潔の細君と事が極つてしまつたのである

けれども潔は名の如く潔白な人である姿とても醜くはなし酒も嗜まず煙草も深くは喫まず殊に氣質も至極優しいからお妙の夫として別に不足はないが只不足なのは月々の收入三十五圓こつきり家賃と下婢の給金とを拂ひ其跡を生計に宛ると殘るものは誠に僅かでお妙が命よりも大事に思ふ衣服が着られず三度の食事よりも好な芝居が碌々見られぬといふ一事である去りながら夫は人の贅澤、好い着物は着ずとも醜くさへ無ければ夫で濟む芝居抔は見なければ別に見度くもないものだといふ里の親爺の意見には大いに尤もな所があるからお妙も其氣になつて夫大事と家政の事に當つて居た今日も時計は軈て四時役所はそろ〳〵お退けの時分と一人の下女に勝手許の支度を吩附け自分も座敷を掃除して火鉢へ炭を加で居る處へ戞如と格子戸の開く音して今歸つたよといふ聲常よりは一層優しく何やら愉快の消息を齎らしたかの樣に聞えた

「オヤお歸りですか今日は例より少しお早いやうですネ

「左樣だらう役所が退けると一直線途中は電車を奮發して來たのだもの

「お召物は此處に案火に懸けてありますよ

「左樣か夫は忝けないお前の暖かい親切だ冷めない内に着替へやう

脱いだ洋服は帽子と列んで長押に懸り襟飾はお妙の繊弱い指によつて今丁寧に疊まれて居る、潔は書生羽織の紐を結びながら火鉢の前に坐して

「今日はお前に歡ばせる事があるので夫で大急ぎで歸つた譯だ先づ其洋服の懷袋に見える白いものを出して御覽なさい

「オヤさう歡ばせる事なら孰れ善い事に違ひありますまい月給でもお上んなすつたのですか

「アハ、、歡ばせるといへば直に月給と來るから閉口する子、マア併し追ては月給にも及ぶだらうがソ、其白い四角なのだ

「ぢやア是ですか

手に取つて眺めながら火鉢の向ふへ坐り

「マア大層綺麗なお手だこと竹内　潔殿　表は宛名ばかりです子

「マア能いから中を御覽

糊は既に剝してあるから開て見るのに世話はない直に引出すと一枚の金縁の厚紙是へ美事に左の文字が印刷してあつた

　征露の大詔煥發せられて茲に一年、皇軍海に陸に連戰連捷以て大いに我帝國の威武を發揚し列國をして一層親愛の念を厚うせしむるに至り候もの是畢竟するに我帝國陸海軍人の忠實勇武克く　皇上の御稜威に添ひ奉りたるの結果に外ならず候へ共軍國多事の秋に際し諸君が拮据精勵能く其職務に盡瘁したるの

事も亦與つて力あるものと存じられ候就はて來る十二日(日曜日)當大臣官邸に於て聊か祝捷の意を兼ね且つ諸君慰勞の爲園遊會を相開き候事に決定致し候間當日は萬障御差操令夫人御同伴にて御出席被下度此段御案内申上候以上

お妙は之を熟と見て

「オヤ是は大臣さんからのお招き狀ですネ、令夫人御同伴と書てあつて見ると妾も行くのでせうかネ

ト不審さうな顏をした

「勿論讀で字の如しだからお前も一緒に招かれた譯さ甚麽だ斯んな嬉しい事はあるまい、實に此案内狀は六ケ敷かつたのだよ高等官の方々へは一體に廻つたから差支はないが屬官は能い處ばかり行くといふので我々へはお鉢が廻らなかつたのだ、トコロが局長さんの骨折で斯ういふ愛度い會には成るべく多くの人を招くがよからうとの説に一致し屬官中でも望のある者を撰拔して列席させるといふ事に極つて僕も其選に當つたのだ言換へれば有望の人物の中へ加へられたのだから僕に取て這麽な緣喜の良い事はないのでお前是非行て貰はんきやならん左樣せんと局長さんの親切を無にする樣で大いに惡い、夫ばかりではない斯ういふ時機を幸ひに上等の奥さん方に御懇意を願つて置くのがお前の役目だお前が旨く如才なく遣てくれゝば僕も大いに工合がよい僕は決して女房の庇陰を以て出世をしやう抔といふヘチな考を持つ者ぢやアないが妻たる者の才覺如何によつて夫の身に幸福を與へた例は幾許もある、甚麽だ當節は實に難有いぢやないかお前でさへ大臣閣下から令夫人といはれて斯ういふ席へお招きを受るのだよ本當に這麽好機會はありやアしない

お妙が最初の理想は夫と共に手を執て斯ういふ會へ出席し天晴東洋のハミルトン夫人として美の模型とな

り交際社會に持囃され度いといふ願望であつたが今は大いに其理想が違つて居る……空中の樓閣一轉して裏町の借家と化したゞけに……、併し出ても見度いやうな出度くもないやうなムヅ痒いやうな氣がしてジツと案内狀を見詰る計りであつたが軈て之を火鉢の傍へ投出して

「妾は止しませう誰方か御同僚の方で行かれない人の奥さんにお上げなさいな

と案に相違の返事をして

「是は否んな何故止すのだ行かれない人に遣つたつて仕樣がないお前行かれるのが名譽なんだよ

「ですけれども妾には行かれないんですもの

と愈々悄れ返つた潔は不審の雲が晴れない

「何故さ

「何故つて……マア考へて御覽なさいな妾は何を着て行きますッて

「ダカラあのソラお前此春里へ着て行たのをさ

「あれは花色裏ぢやアありませんか里ですから能いやうなもの丶斯ういふ宴會へ花色裏では失禮でさア

「夫ぢやアあのソラ小紋の三枚重に紋が付て居るから能いぢやアないか僕等の身分で餘まり善い服裝をして行ちやア惡いよ

「でもあれは裾が違ひます裾の違つたのを着るのは見とも無いぢやありませんか見とも無い服裝をする位なら行かない方が能うございますワ

「夫んなら同じ裾にしたら可い直と呉服屋で買つて付替れば造作もあるまい

「甚麼して左様直といふ譯に往くものですか第一同じ色はありはしません別に誂へて染さしたッて旨く出合ふものぢやないのです幾許か違ひますワ

「少しは違つたッて能いぢやァないか誰も一々眼鏡を懸けて裾の色を見て歩きやァしまいし

「でも女といふものは眼の早いもので直に見付かりますワ夫りやァ誰も笑ふ人はありますまいが跛な着物を着て多勢の中へ出る位氣が引けて辛い事はありやァしません

「夫は困るな甚麼かならないかな仕方がなきやァ新に調らへても出席しなければならないよ

「でも調らへるといへば安いお金では出來ず矢張欠席した方が能うございますよ

「一體新調して幾許位かゝるだろう

「左様ですね夫は妾にも能くは分りませんが……

と火箸を取て灰の上へ縦横の線を引きながら

「マア上着と下着二枚引返して縮緬が三反一反十五圓宛としても四十五圓紅裏が三枚ぶりで十圓では上るまいし夫に胴を絹板〆にしても是も十圓の上にならうし上繪や綿や仕立まで入れて彼是百圓足らずは懸りませう

「百圓、左様かなア

とさしもの潔も驚ろいた、が併し今となつては仕方がない

「ジヤア奮發して調へるとしやう着物が出來れば行くだろう

「夫は着物さへあれば妾も左様いふお席へ出て見度く思ひますから行きますとも、併し調へるにしても今からでは急がなくちやア間に合ひますまい

「夫は急ぐさ明日役所へ行きがけにお前と一緒に三井へ行て注文するさ幸ひ阿母が死ぬ時に殘した金が二百圓手も付けずに銀行へ預けてあるから其内の半分を使へば濟む事だ

「でも阿母さんの殘したお金では

又も小首を捻るのを

「ナアニ斯ういふ事に使ふのだもの阿母も定めて地下で滿足して居るに違ゐない是が出世の端緒となれば愈々以て目出度い譯だ

と全く決心した樣子、お妙は氣の毒のやうな嬉しいやうな苦しいやうな賴もしいやうな

「マア飛んだ散財事が起つて……妾しや何だか濟まない氣がして……

と又もや火箸を取て灰を掻散しながらも其歡びは顏の笑靨に溢れて見えた、朴訥の下婢は突然後から

「奧さんお目度うございますお召物が出來ますの

と是將た羨ましさうに差覗く

「アラ嫌なお竹だよ

（中）

愈々園遊會は明日となつた三井へ注文の三枚重ね今日は矢が降つても石が飛んでも必らず出來る約束の日とお妙は朝から心待にして居たが晝過るまで沙汰がない其内に潔も役所から退けて來て家へ這入ると直に着物はとの尋ね是も早く見度いと樂んで居るのである、スルト程なくゴト〳〵といふ音が聞えて一臺の自動車は潔の家の前に停り手代らしい一人の男が包を持つて御免なさいと這入つて來た物珍らしい下婢のお竹は斯くと見たから堪らない急いで入口へ駈出して

「アラ奥さん早く來しつて御覽なさい三井からお召物が出來て參りました妙な車で
とけたゝましい聲、お妙はさすがに落付いて
「オヤ番頭さん御苦勞樣、出來ましたか拜見しませうオヤマア大層仕立榮がしました事紋も綺麗に上り
ましたネ
「ヘイお仕立に念を入れましたでおふきの工合も能く出來ました何卒能く御覽なすつて下さいまし
「成程マア能い格好です事貴方一寸御覽なさいませ
潔も莞爾として出て來た
「イヤ綺麗〳〵色合が至極能い僕の見立も滿更けなしたものでもあるまい
「マア是が旦那樣のお見立本當に能い色だこと何といふのでせう
とお竹は胝だらけの手を差出した潔は之を礙つて
「オット夫な手でいぢられては閉口〳〵
手代は思はず微笑しながら
「マア藤紫の少し燻んだのですなお裾の模樣も淡平して居ますから非常に上品です奥さんには能くお
似合遊ばします
「お前が是を着ると本當に何處の令夫人かと思はれるよ所が僕の妻ぢやア餘り巾も利かないなアハヽヽ
「へい何う致しまして
と手代も笑ふお妙は滿足を通り越て少し夢中の氣味となり
「其なに似合ますかネ番頭さん序に見て戴きませう妾だけ帶は是を締めやうと思ふんですが甚麼でせう可

笑しかないか知らん
急いで簞笥の抽斗より嫁入の時持て來た一の丸帶を取出した
「成程是は結構な繻珍ですなお模樣は松竹梅茶が勝て居ますから此お召物には打て附です是に此おみ帶なら何處へお出になつても決して引けを取る事ぢやアありません
と手代は頻りに愛嬌を振かけて居る此間に潔は用意の金を取出し談話の途切を待つて渡してやると手代は之を請取つて數多度額づいて立去つた
「大金が掛る丈あつて逌に善い子如何に小さい身上でも此位な着物の一組や二組は持て居なければ困るものだマア出來たから是で安心一寸着て見なさい僕は久々で令夫人の盛裝した處を拜見しやう
下婢も傍から口を出して
「左樣ですよ奥さんは姿が能いから召したら甚麼にお立派でせう妾も拜見し度うございます
右左から勸められた、素より着て見度いのは山々である
「ぢやア着初をして見せう似合ますか知ら……
是よりお妙は盛裝に取掛つた三枚重ねは美事に其賤しからぬ姿を飾り帶もお太鼓に結ばれて之に少なからぬ品を添えた其鏡の前に立つて嫣然此方を見た姿是が自分の妻かと潔は俄に尊敬の念を生じて次で後を向いて嫣然たる姿是にも亦尊敬を拂ふべき價値は充分に認められた
「イヨ艶麗嫻雅優美高尚、斯して見ると僕の妻には惜いもんだ併し其着物が出來て急に亭主が嫌になられては僕には能い面の皮だ
「アラマア奥さんアラマア

と下婢も頻りに賞詞を浴せ掛て居る、お妙は鏡の前で右へ廻り左へ廻り鏡と我身を見比べて暫く詞も無かつたが何を思つたか急に萎れて

「妾は矢張止しませう

と又もや以前の様子に返つた潔は膽を潰して

「明日行くのをかエ

とジッと見詰めた

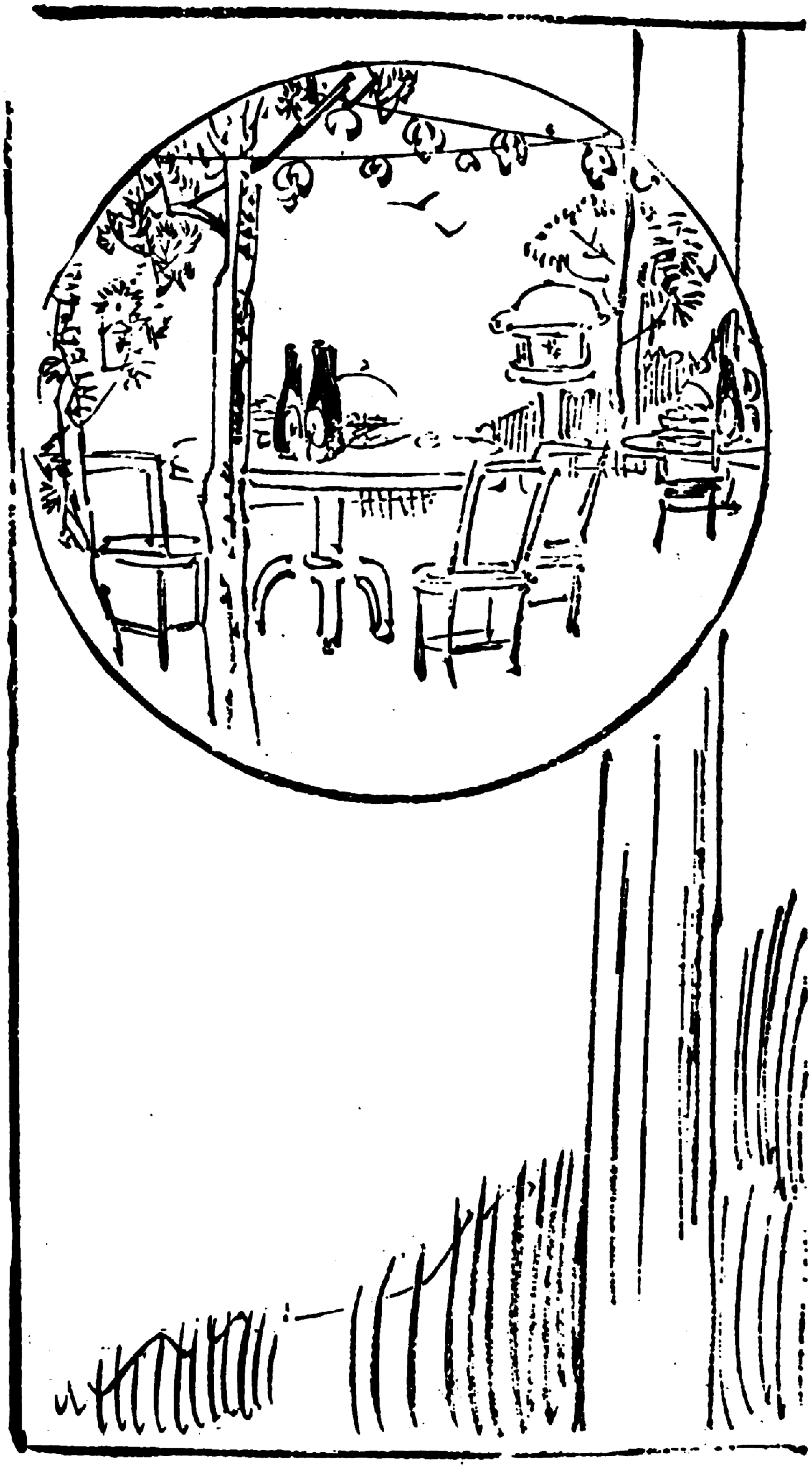
「何だか是ぢやヤ可笑しいですもの

「此姿で何が可笑しいものかお前左様贅澤をいつちやア困るよ

「何も贅澤をいふ譯ぢや



アりませんけれどマア考へて御覧なさい此着物に此帯でせう此位な服装をする者が時計の一ツ位持て居なくては似合はないぢやわりませんか



「成程なア

是には潔も少しく同情を寄せた

「併し時計などは無くても濟むぢやないか僕でさへ二圓五十錢大見切のいかさま銀時計一ツしか無いのだから

「ダッテ歴とした奥さん方が列ぶのでせう皆金剛石の指環だの金時計だのと種々な飾をして居る中に妾

一人是ッ切では何だか物足りないぢやありませんか
「夫では時計も欲くなつたのか段々大事になつて來るナ
「買ひ度かアありませんけれど何だか釣合が變手古ですもの
「夫ぢやア斯うしたら能いぢやないかお前が學校以來のお友達ソラ赤阪の道子さんあの方は今銀行の重役の奥さんになつて金銀珠玉何でも澤山に持てお出だからあの方の處へ行て一寸借れば早手廻しだよお前が永い間能い中で交際つて居るのも斯いふ時の相談對手に頼み度いからぢやないか何の時計位借りたつて明日一日置て明後日直ぐ返せば何でも無い事其位の物を貸てくれない人なら頼もしくも何ともありやアしない

諄々と說かれてお妙も成程と感じた
「夫なら一日借りませう妾がいへば屹度貸て下さるに違ひありません
「夫が善い直ぐ其支度で行て來るがいゝ
相談は早くも一決してお妙は直に人力車を道子の家へ飛ばせた幸ひ道子は家にあつてお妙の切なる依賴を聞き歡んで種々の時計を取出し孰れでもお氣に召したのを持ていらつしやいと云てくれたからお妙は彼是と手に取て見比べ寧そ借るなら氣に入たのをと金剛石の幾個も附て居る金側金鎖の懷中時計を借りて歸り愈々明日の宴會には盛裝を凝す事となつた

（下）

麴町永田町の內務大臣官邸、今夜は何やらお催しがあると見えると通行人が足を止めたも道理門には大なる國旗を交叉し球燈彩旗數多揭け列ねたのみならず玄關先には黑塗馬車や人力車が列をなして馬丁車夫等

の笑ひ聲が囂しき迄に聞えて居る
電燈の光皎々たる階上の大廣間には主人公たる大臣と其令夫人が席順なしに居列んだ各局長と其夫人、屬官と其妻との間を斡旋して共に三鞭の盃を擧げ互ひに皇軍の戰捷を祝し又軍人の勇武を稱へていと樂しげに談話して居たが其中に誰定るともなく竹内潔の妻は居列ぶ夫人中第一の美人と相場が定つて竹内と共に此處へ來い彼處へ行けと八方から持囃されて一方ならぬ賑ひとなつた殊に局長は竹内が斯る美人を妻としたる幸運を祝すといつて一同と共に祝盃を擧げ大臣さへもお妙の美を賞して竹内に盃を賜はつたから同人は大いに面目を施し平素は飲めぬ酒ながら今宵ばかりは心地よくツイ飲過て醉が發したので其座を外して廻廊へ出で廣庭の夜景を眺めながら獨り冷たい風に吹かれて居た、然るに妻のお妙は尚も諸方から歡迎を受け甲の局長の夫人が是非遊びに來るやうにといへば乙の局長の夫人も是を緣に末長く御懇意を願ひ度いと反對に賴む仕誼でお妙の得意は一通りではない始めて斯ういふ宴席へ出で始めて美の女王として尊敬されたのであるから夢の上に夢を見る心持がして全で境界が變つたかの感じがした
其中に夜は次第に更て來客は一人起ち二人起ち最早大分引けて來たがお妙はまだ衆人に歡迎を受けて居る潔は例の二圓五十錢時計を懷袋から出して思はず時の移つたのに驚ろき元の宴席へ立戻つてお妙にも其意を通じ愈々歸宅と決して大臣閣下を始め各局長夫妻にも厚く禮を述べ打連れて玄關先まで立出ると局長からはイヨ羨ましい抔と冷評され夫人連からもわざ〳〵送つて出て前の約束を是非と云て繰返された夫妻は一々に挨拶し履物を穿いて石段を降りたが此時潔は妻の勞を謝する積で外套の懷袋に入て置いた肩掛を取つて後から掛てやつた、お妙は夫と知て腹の中にギックリ之を拂い退る樣にして急いで門外へ走り出たが是は肩掛が少しお麁末であるから他の夫人等に見られまいとの用意であつた潔は其處へは氣が付かず

「お前是を掛けぬと風邪を引くよ

と跡から追つて門外へ出たが是も夫の親切と思へば無下にしては濟まぬのである元より抱へ車夫のない悲しさは此盛装で戶外へ出ても車夫を呼ぶといふ洒落た事は出來ない去りながら縮緬の裾でスタ〳〵步いた日には車に乘るより高い價に付くから夫妻は頻りに人力車を探したけれど近所には頓と見當らぬ漸やう丸の内を出外れる時分に二臺の辻車を見付たから二人は之に飛乘つたが此車は所謂夜稼ぎの禿ちよろ車で車夫の服裝も僅に規則に外れぬといふ計り隨分如何はしい風體であつた若し晝ならばお妙には所詮乘れぬ車である

車は我家の前に着いた內へ這入つてホッと一息

「マア能かつた今日といふ今日程愉快な事はない大分お前は賞められたぜア、お前が賞られると僕も矢張嬉しく思ふから不思議だナア

と火鉢の前へ堂平と座して足踏み延したのは潔である お妙の嬉しさは又一倍

「本當に左樣でしたねヱ夫も此着物を拵へて戴いた御陰ですワ

是も火鉢の傍へ坐らうとしたが思ひ直して

「夫よりか早く着替ませう

いそ〳〵帶を解き始めると甚麼した事かお妙の顏は見る〳〵內に蒼くなつた

「オヤ〳〵妾甚麼したか知らん

俄に周章しき舉動は一見して只事とは思はれない潔は見るより吃驚して

「何だ〳〵甚麼したのだ餘り歡んだので逆上でもしやしないか

お妙の狼狽は愈々甚だしくなつた
「マア大變だ甚麼しませう
今は着物を庇ふの念も失てヘタ〳〵と其場へ座つてしまつて
「甚麼したのか話して聞かせな
「マア妾飛んでもない事早く車夫さん其處等に居るなら呼で下さい大變です妾時計を
此時計といふ一言に潔も亦蒼くなつて
「時計をどうした早く〳〵
「能くは分らないけれど此處へ這入つて着物を着替やうとすると無いんです何でも妾大臣さんのお邸を出た時は慥に有たのです辻車の上で止せば止かつたのを借物だから大切と思つて胸から外して手に持つた迄は覺えて居ますが夫から先が分らないんです何でも車の上へ置忘れたに違ひありませんこれが無いと大變です早く呼で下さいよ
此語に潔は愕然として驚いた
「チョッ困つた事をしてくれたな夫ぢやア早く
直に戸外へ驅出して元來た道を一散に大臣官邸の門外まで行て見たが終に似寄の車夫にも出會はない若しや門の内へ落したのではあるまいかと思つたがノメ〳〵這入つて探し物も出來ず殘念ながら引返し尙道々も注意しながら若しや今頃はお妙の帶の間からでも出て安心して居る事ではないかと覺束ない事を頼みにして悄々と歸つて見れば一縷の頼は空頼み矢張無いと云てお妙は力無げに倒れ下婢は之を介抱して居たアア潔は此處一期の大厄難に落たのである、去りながら今は最愛の妻を叱つても詮がない只善後の策を講ず

るのが第一である先づ警察署へ行て簡單に此趣きを訴へ引返してお妙を勵まし兎も角も明日の相談といふ事にして睡に就いたが徹夜少とも睡られない其睡れないのを幸ひでもないが其間に相談したのは道子への言譯である折角親切に大事の品を貸て呉たのを何う口が裂けても失したとは云へないから石一ッ脱れたのを時計屋へ直しに遣つたと口實を設けて二三日返却の日を延し其間に同樣の品を探して買て返すと極たのである故で翌朝夫婦は早く起て身支度を調のへ役所へは病氣屆を出して夫から時計屋を廻り始めたが先づ尾張町の天賞堂から京屋銀座の服部から玉屋と順々に廻つて下谷の玉寶堂まで行たけれどもお妙の借たやうな時計は一ッも見當らない併し何うでも無いでは濟まぬ爰此廣い東京だから何處か探したらあるだらうと日の暮るまで探し尚翌日も探して居ると只ある一軒の時計屋で同じ形の時計を一個發見した夫婦は先づと胸を撫で・扨其價を聞て見ると周邊にある金剛石が十個で千圓金時計が二百圓鎖が百圓都合千三百圓といふ高價である百圓でさへ驚いた潔千三百圓と聞ては悶絶する筈であるが流石は男子此期に及んでは左のみ驚いた顏はしない早くも思案を固めて此品を買ふ事に談判し價を千百圓に負さした上に此處四五日金才覺の間決して他へ賣らぬやうかたく約束して歸つて來た、歸ると直に金才覺である自分の衣類はいふに及ばずお妙にも因果を含めて新調の衣類を手離させ家財道具も荒方は賣拂ひ高利貸といふ高利貸を頼み廻つて一生懸命千百圓の金を調達して件の時計を買取つたが夫が爲夫婦は世帶を張つて居られず近所の獨身者の二階へ同居し下婢お竹にも暇を遣つてお妙自からすゝぎ洗濯に當り又内職にも手を出し潔も亦役所の退けから商家の帳付に雇はれ又日曜日には筆耕をして手間賃を取り之を蓄て利拂ひに宛て少し宛なりとも元金を返して居たが何にしても千圓足らずの大金容易な事では皆濟にはならない來る年も來る年も四苦八苦で詫をいふやら借替をするやら樣々の算段をして渡る内に六年餘りを經て漸やうの事で皆濟となつたが此時は

潔の髪は蓬々として油氣なくお妙も嘗て羨まれた美貌は失せて全く窶れ果た一個の世話女房と變じてしまつた、けれども心の苦勞は最早無い今は天地に何の跼蹐する所も無いから潔は肩身廣く役所へ出掛けたお妙も今日は久々で日比谷公園へでも行て見やうと晝過から家を出で公園心字の池の畔を徘徊して六年振で始めて眞の快樂といふ事を味つて居た、スルと向ふから一人の令夫人車夫らしい者を供につれ頑是ない兒の手を引てブラ〳〵と此方へ遣て來たからお妙は思はず歎息を吐いた

「ア、世にはあゝいふお氣樂なお方もあるお羨ましい事だ

云ながら偶と其顏を見るとこは如何六年前金時計を貸て呉た道子であるお妙は返濟の時期が二三日後れたので義理が惡く其內大いに零落したからツイ無沙汰になり先方でも夫を不快に思つたかして弗つり音信は絶たけれども其人の面ざしは忘れない殊に彼の時計の事は終生忘れんとしても忘れ難い所であるから見得も振も構はず走り寄り

「マアお珍らしい貴婦には實に申譯がないんです

と以前の樣に聲を掛ると彼方の令夫人は合點の往かぬ顏

「オヤ誰方でしたかッイお見忘れ申ましたが

「お忘れは御尤もです道子さん妾は貴婦から時計を拜借した妙ですよ

聞て道子は仰天した

「アラマア貴婦お珍らしい甚麼してそんなにお變ん成すつて……

と例に變らぬ親切の詞であるお妙は其事ならば問はるゝを待たず話し度くて〳〵胸から込上る計りで思はず涙もさしぐんだ

「妾は是非一度貴婦にお眼に懸つてお話をし度いと思つて居ました妾が這麼に變つたのはあの拜借の時計の事からですよマア聞いて下さいまし

共同椅子に腰を掛ければ道子は又も不審の面持

「あの時計からとは甚麼いふ譯です早く聞かして下さいましな

是將聞度さが込上るのであるお妙は今に耻る處はない有やうは云々と何もかも裹まず打明ると道子の驚きは又格別

「アラマア夫な事ならば何故其時に明ら樣に仰やつて下さいませんでしたあの時計の事ならば此なく〳〵御心配は決してお掛申ませんものマア甚麼したら善いでせう妾は貴婦がお返しになつたから其儘に仕舞込み此兒が出來てからは一度も取出した事はありませんがそんな高價い品ですか妾がお貸申したのはあれは鍍金で石も金剛石ぢやありません何とか申す安い石ですものを

是を聞たお妙は

「エーッ

と計り跡は目を睜つて何にも言はない唇の色も變つた樣子である車夫は早くも氣が付て是は大變だとお妙を醫師の許へ擔ぎ込み蘇生を待て其自宅へ送り屆けた、道子は早々歸宅してかくと夫に話すと夫は其信義に感心し左らば其金時計を買取らうとて早速千百圓をお妙に贈つたがお妙は此時も醫師を要したらしかつた

（完）

# 文林

## 寄道祝

君か代にいよ〳〵廣くなりにけり
　神の開きし敷島の道
高崎　正風

仇の船影もとヽめぬ海つ道に
　君かみいつはみちわたりつヽ
本居　豊頴

くろかねの道ある御代となりしより
　遠き旅路もやすけかりけり
黒川　眞賴

神代よりかはらぬ道の年々に
　みろくなるこそ嬉しかりけれ
小倉　文子

かちいくさつヽく御國はもの毎に
　たヽしき道をふめはなりけり
姉小路良子

みち〳〵にみちのはかせの現はれて
　ひらきもらさぬ君かみよ哉
坂　正臣

みこヽろのおくのたかねも言の葉の
　道によりてそ伺はれける
小池　道子

ものヽふの道ひらきしてからくにも
　たやすく通ふみよとなりけり
藪　兼子

海山のひらけゆくよもそのもとは
　人のまことの道にそありける
北島　登子

さかえますみよのたふとさしられけり
　道なき道のひらけゆくにも
津守　好子

大御代はふみひらくわさいくさこと
小杉　榲邨

皆すゝみゆくわか國の道　中村　秋香

外國のたねもましりてさま／＼の
道に花さくみよのはるかな　大口　鯛二

きみかよは遊へる民もなかりけり
その道々に身をはゆたねて　千葉　胤明

みいくさにふみひらかれしわたしの丶
道はまかねの道にまされり

子日遊び　下田　春興

ひめ小松生ふる野のべに
おほ御輿すゝめたまひて
はつ春のはつ子のけふの
玉はゝき取る手もゆらに
くよの明きこしめしつゝ
あそはしゝ古きためしを
今の世にひきつたへつゝ
水とりの賀茂のやしろの
みやびとが袖うちつらね
ちはやふる神にまうすと
やすみせす君をいはふと
みあれ野の小松がはらに
たもとほり入立つ見れば
くだりたる人の代としは
おもはれぬかも

山家立春　菊池　武貽

此朝け鳴て出つる鶯の
山里よりや春は立らん

餘寒

解そめし筧の水のおと絶て
ふたゝひ氷る山の井の水

松有歡聲

皇軍の勝のたよりに萬代を
うたふに似たり松風の聲

旅順攻圍軍の成功を祝て

天の下岩木までもやこたふらん
かたき砦のおちし祝に

西郷隆盛

くもりてもふたゝひ影を照しけり
鶴丸山の弓張りの月

新年山　正六位　西内　成郷

あふかさる國人もなしひむかしの
山より昇る年の初日を

年立山になひくさやけさ

浦　雪
松風もよせくる浪も音たえて
　浦しつかなるけさの雪かな　　服部　磯子

里　霰
はけしきもなるれは馴てねやたゝく
　あられの音もしらてねにけり　　前田　利匘

馬上雪
駒はせてとりてをめくるつはものゝ
　あとおふことくふるみ雪哉　　鈴木　小舟

池　氷
春風にいけのこほりも打とけぬ
　うをの心やのとけかるかん　　北郷　久政

岡　雪
そらはれし雪のあしたのほしか岡
　つねよりはやく人の集へる　　香川　景之

磯　霰
浦風も浪のひゝきもさえ〳〵て
　あられふりきぬ磯の松はら　　松平　乗承

江　雪
ふりつもる雪重ければ難波かた
　入江のあしはさやかさりけり　　芝　葛鎮

あたらしきみつき積そへ大内の
　山ゆたかなる年は來にけり　　成郷母　西内久美子

初日かけ八洲の外のしま山も
　みはたかゝやく年は來にけり　　從八位　樋口　壽丸

大君の御代のとかにもとしたちて
　あさ日のほれりおきつ島山　　從八位　脇阪　環

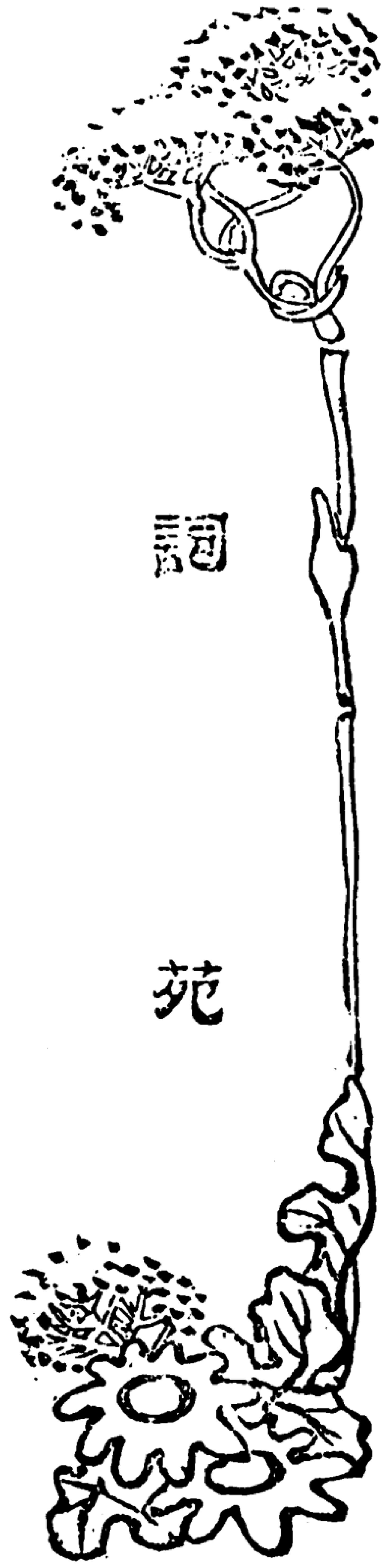
としの立光もしるしひむかしの
　山にかゝやく朝日子のかけ　　島田熊治郎

神路山みねの榊葉たちさかえ
　はつ日に蔭は西にのひつゝ　　橋本　好雄

あらたまる年をむかへて畝火山
　松ふく風の音ものとけし　　山田　米三

あら玉の年のはつ日の大御旗
　山またやまに打なひきつゝ　　清閑寺修麿

いさみ立心もあかき日の御旗　　堀部　賢秀




従二位子爵 黒田清綱先生撰
（代撰菊池武則先生）

## 澤若草

### 天

東京府豊多摩郡千駄ヶ谷村字原宿六十八番地 駒澤さだ子

若くさのもゆるとみえてきのふけふ 野邊の澤水うちけふるなり

### 地

大和 栗山俊子

千代よひて田鶴の立けるあと見れは 澤邊の小草もえそめにけり

### 人

肥後菊池郡城北村 徳永房子

おり立ちてつむさへをしく思ふかな 野澤にもゆる春の小くさは

### 甲

雪消えて野澤の水もけふるなりみくさもいまかもえわたるらん 赤坂 松本くす子

我が宿の垣ねの小くさあをむなりそともの澤はいかにもゆらん 埼玉 横田やな子

身にしみて風ははるともおもはぬにゆきけの澤にわか草のもゆ 陸前 前田河みさを子

淺澤の水にもえいつるわかくさに春のかけこそあらはれにけれ 肥後 佐々有隣子

### 乙

春霞たなひきそめしきのふけふあささはのへにもゆるわかくさ 岡山 小山松枝子

乙女子かつみあふ見ゆれ若草のもゆるさわへをゆきかへりして 陸前 吉澤いと

はるさめのめくみの露にうるほひて澤のわかくさ萌出てにけり 神戸 清水かをる

若草のもゆるをみれはあささわの水のおもさへはるめきにけり 但馬 田尻保代

むらきえの雪ものこれる澤へにももえいてにけり春のわかくさ　下谷　岡田柳子

ぬるみゆく野澤の水にかけ見えてみとりにもゆる春のわかくさ　肥後　德永而有子

氷さへとけてのどけき澤みづにいまかもゆらん春のわかくさ　肥後　德永萬壽子

うくひすの聲ものとけき昨日けふ澤へくまなくもゆるわかくさ　羽後　武藤定子

消えのこる雪かきわけて里の子か野澤にもゆる小くさつむなり　和泉　稲原菫子

この朝けこま引入れしあささわの水もけふりてもゆるわか草　熊本　日高かず子

かすか野の雪消の澤へうらゝかにきのふもけふももゆる若くさ　本郷　西岡古代子

春雨のはれたるあとを今朝見ればさわの若くさいろまさりぬる　愛媛　高橋茂子

見わたせはさわ邊の氷うちとけてみとりにもゆるはるの若草　長野　小泉みつじ

春あさみ雪けのさわにきて見れはうら若くさそもえそめにける　長野　小泉たつ子

ふく風の長閑けき春になりしより澤のわかくさもえそめにけり　麻布　林　[illegible]子

氷ぬる澤のわかくさはるかせのさそふまにくもえいてにけり　前橋　竹のふし

ゆき消えてもゆるみとりのわか草に野澤の水もぬるみそめけり　加賀　北[illegible]

うすくこく澤邊にもゆる若くさはふるはるさめの名殘とそ見ゆ　すな子

愛媛　菫子

らすらひのとけし澤水打ちけふりもえそめにけり澤のわかくさ　武井鈴子

むすほれし野澤のこほりとけそめてうら若草そもえいてにける　秋田　古澤りく子

ねせりつむこらにふまれて昨日けふもえいてにけり澤の若くさ　埼玉　横田すま子

澤野へにふみからされし古草をあを葉にかへすはるのあめかな　埼玉　横田秋子

春雨のふる野の澤のわかくさのみとりふかくもなりにけるかな　小石川　新井ちよ子

きゝすなくこゑも聞えて山澤のわかくさ青く萠え出てにけり　大和　栗山多加子

きのふよりふるともみえぬ春雨に澤のわかくさもえいてにけり　神奈川　森田はな子

春風にこほりもけさはとけそめて澤のわかくさもえいてにけり　神戸　今西みさを子

春されはまつおり立ちて少女子が澤のわかくさけふもつむ見ゆ　三河　榊原きく子

しらゆきの消ゆる下よりきのふけふもゆる若草いさやつみてむ　三河　榊原てる子

うなひらとやかてあそはむあさ澤の岸の小草ももえ初めにけり　日向　岸上はる子

きえのこる雪間をわけてもえいてし澤の小くさに春さめのふる　熊本　田代きわ子

淺澤のこほりもとけてわかくさのもゆるあたりそ春めきにける　大阪　田中たつの子

なまなこをつれて若草つみてこん野澤のみつもぬるみそめけり　赤阪　岩谷淺子

打むれてつまむ少女かいろも香もひとつににほふさわの若くさ

萌え出でし澤の若くさつみためて手籠に入れゆく里のをとめ子

北海道　小山春枝子

（以下到着順）

埼玉　戸田折香

淺澤のせゝらく小川のきしの邊にいやめつらしくもゆるわか草

越後　山田涙子

ゆきとけし澤のわか草うすくこくもえ出にけりこゝにかしこに

福岡　小島まさ

見渡せはまつのみとりのそれならてゆたかにめくむ澤の若くさ

長野　田島みよ

春さめに澤のこほりやとけつらむ小草もけさはもえそめにけり

神奈川　鈴木べん子

雪きえてみとりなつかしのさわにももえそめにけり春の若くさ

東京　窪田圓子

遠山もはるのかすみはふけぬらんをりしろ色に澤のわかくさ

下野　ふぢえ子

はるかせにみとりいろこくもえいてぬ雪消のひまに澤の小草は

山城　鈴木薑子

うすらひのまだとけやらぬ澤へにも春しりかほにもゆるわか草

岐阜　小出しげ子

かれをはなゆきけのかせにふしたれと澤の若草もえいてにけり

福井　牧かれ子

いとはやもぬるみわたりて淺澤のみきはの小草もえそめにけり

東京　ゆり子

こゝろしてゆけよ小女子澤の邊はなへてみとりに草はもえけり

埼玉　町田勝子

はるくれは鳴立つ澤もいつしかにつや〳〵しくも若くさのもゆ

栃木　田部井くに子

我か妹か澤へ若くさつまんとてさけし小かこのあいらしきかな

富山　孝　工

去年の雪消ゆる野澤に來て見れはむら〳〵もえし春のわかくさ

靜岡　竹内みつ子

白雪のきゆるまにまにもえいててさはへの小草みとりそひゆく

大坂　山中とみ子

さる澤の夏のやなきの下くさにもゆへきはるはわすれさりけり

大坂　山中ます子

春くれはあさ澤水そぬるむなるきしの小くさもいまかもゆらん

奈良　天野照子

はるさむみ野澤のこほりとけぬまにはやもえそむる岸の若くさ

赤阪　毛田みや子

春さめにみとりの小草もえそめてあれ田の澤もにきはひにけり

本郷　小阪みさを子

昧さはふめもはる〳〵といつる日にやゝあをみゆく澤のわか草

牛込　すみ子

かれあしはをれしまゝなる淺澤にもゆるわかくさ色みとりなり

本所　季子

さゝなみのよするとみえし淺水にきよくももえぬ春のわかくさ

兵庫　高橋まち

山さわにいてゝつまなん賤の女かもてるてかこや若くさのうへ

兵庫　きみ子

はるかせにさわの氷もうちとけてうつりそめけりわか草のかけ

常陸　市村久子

やまさとの澤のむらゆきゝえはてゝはるの日かけに生ふる若草

三重　神田みよし子

いつしかとこほりもとけて春こまのあさる澤へにしける若草

武井鈴子

若草をふみていなゝくわかこまのたつなとるてに春のかぜふく

もえいてし澤の若草かけ見えてあらぬみとりの色まさりけり
廣島 淳子

雪はまたきえもあへぬに若くさは野澤おしなへ靑み渡たれり
富山 大木滋子

澤のへに少女子あまたむらかりてあそふもゆかし小草つみつゝ
牛込 石井貞子

こほりたる澤にも小草もえにけり君かめくみのつゆをたのみて
肥前 藤松りか

白雪もきえしあしたの澤の面にはるかせ立ちてわかくさもえぬ
大阪 山本伊勢子

とちこめし氷もいつかうちとけてはやおひいてぬさわの若草
大阪 中江なほ子

むすひにしこほりはいつかとけそめてみとりに返る澤の若くさ
麹町 石川薫子

日にそへてみとりそふらん色はまた淺澤のへにもゆるわかくさ
愛媛 梯たけ子

春さめのひとつめくみに日毎〳〵澤邊のくさは色まさり行く
牛込 後藤喜代子

見わたせは澤邊のあしも水とりのあをはの色につのくみにけり
赤坂 岩谷梓子

氷ゐし野さわのみつもとけそめてきしの小草ももえいてにけり
上總 高石とよ子

澤水もぬるみそめけんみきはよりきのふもけふももゆる若くさ
芝 松永德子

七くさのがすにせんとや小女子は小澤の小くさ今日はつむらん
本鄉 西野つれ

あを〳〵と澤のわか草もえいてゝ露も色香をそえにけるかな
秋田 伊東りよう

春雨のめくみのつゆにわか草のこの澤へよりもえいてにけり
吳市 和住千鶴子

澤のへにもえそめにけるわか草そ春のひかりに生ひしけるらむ
秋田 古瀬惟子

あしたつのあさる澤への若くさをちよのしとれと胸もぬるらん
紀伊 白蘭女史

のとかなる春のひかりにうるほひて野澤の小草いろまさりつゝ
伊賀 佐々木まさ子

澤氷の見えし野澤もはる立てはけふわかくさの萌え初めにけり
埼玉 澤田房子

にこりなき淺きなかれの澤水にもえ出てにけり春のわかくさ
埼玉 澤田伸子

さわ水の氷はとけてわかくさのひと葉ふた葉ともえいてにけり
陸前 前田河千年

もえいつる澤の若くさみるにつけみいくさ人もこゝろやすけむ
薩摩 松原みれ

すみなれし雁も歸りていつしかにわかくさもゆる野への淺澤
小石川 酒井寸枝子

いまはなきこひしき友と去年の春つみにし草はもえいてにけり
小石川 とみ子

亡友とつみてあそひし澤見れはこゝろもしらでもゆるわかくさ
肥後 佐々小琴子

淺澤の底にもはるはかよふらんきしのわかくさもえこそいつれ
神戸 海乃潮子

澤の邊をきのふもけふもうちつれて露にぬれつゝ小草をそつむ
京橋 高橋珍子

春雨のふるのゝさわにおとめ子かいかにぬれてか小草つむらん
秋用 細矢はる

消えのこる雪にゆふへの雨ふりてはるしりそめし澤のわかくさ

朝かすみもれてうないのこゑすなり野澤の小草もえ初めにけむ　愛媛 眞佐子

春なれや雪けにさゆるそらなから澤のわかくさもえ初めにけり　福井 岩橋花子

みわたせはふるの〻澤へ消えのこる雪のなかにももゆる若くさ　熊本 田代綾子

老のみもわかやきませとちゝはゝに摘みてさゝけむ澤の若くさ　伊豫 渡部もく

若草のうきつしつみつ澤みつになかるはこらの籠にもれけむ　岩代 曾野和子

もえ出てまた日もへさるわか草にた澤のみつはふかくみえけり　山口 村上操子

あさ澤のみつをふかめて色ふかくきしへにしける春のわかくさ　松山 田村多豆子

山澤のつゝみにのこるしら雪もしらすかほにそもゆるわかくさ　松山 上原のふ子

うくひすのはつねうれしくきゝなから雪けの澤に若なをそつむ　下野 井上滋子

七くさのかすをつまゝしこのさわに雪わけ生ろくさのかす〳〵　下野 井上倫子

みわたせはいつしか雪はきえはて〻もえてそみゆる澤のわかくさ　長野 小泉篠子

雨風のゆるみにはるやいそきけんもえてそ見ゆる澤のわかくさ　長野 山本基子

白ゆきのむら〳〵消えておそくとく野澤のあたりもゆるにひ草　長野 山本直枝子

澤の名のゆきけの水もぬるみつゝもえいてにけり春のわかくさ　三河 永井さい子

つらゝゐし水はなかれて今更にきぬあらはするわかくさのいろ　静岡 土井桂子

わか草のもゆる澤邊にふみわけてつはなつむなり里のうない子　伊豫 山本田鶴子

ふむ人もあらむ野澤の小草まではるにはもれす萌え出てにけり　千葉 海保しつ子

春雨のめくみあまねくいつしかとみとりにもゆる澤のわかくさ　本郷 青木たま子

雪ふかき澤のわか草したもえてはるのこゝろも見えわたるかな　日本橋 牛山粲子

若くさのもゆる澤邊に春立ちてのこりしゆきもいまかきゆらん　向後ふさ子

淺みとりひとつにもゆるはるののにわきて色こき澤のわかくさ　大阪 みほ子

はるもなほ淺澤小野のゆき間よりおのかまに〳〵もゆる若くさ　神田 山田婦美子

ふく風にさわたの氷とけぬらんはるのわかくさもえそめにけり　播磨 横田春枝子

春日野のゆきけの澤にけふもまたれせりつむなり里のおとめら　麻布 林艶子

朝日かけてりそう澤のわか草にたまとあざむくつゆそ見えける　京都 森本秀子

# 馬上春風

## 天

東京市赤阪區青山北町六丁目四拾五番地　岩谷淺子

駒なへて花の下みちすきゆけは
にほひをおくる志賀のやまかせ

## 地

春かせに駒のたつかみけつらせて
もののみにいつる大和ますら夫

東京市本郷區弓町 西野つね子

## 人

のる駒のたつな引しめつはものか
むかふとりてに春かせそふく

東京市京橋區南鍋町二丁目七番地 渡邊名和子

## 甲

大阪 山中金子

いさみゆくこまの手綱をひきとめむうめか香おくる野路の春風

大阪 山中富子

咲花も駒のあゆみにまかせ見んのとかにもふくはるのやま風

靜岡 秋子

乘駒のあがきの音ものとかにてたつかみの上にはるのかせ吹く

東京 渡邊初子

つはものかくつわならへて斥候にとのりゆく駒に春かせそふく

本所 三坂きやう子

駒とめてなかむる袖にかほるかなはなのさかりの志賀のやま風

肥後 千々波橘子

さくらかり駒のりいて丶ゆく人のそてさへかをる花のしたかせ

大和 栗山たか子

のる駒のひつめのおとものとかにてふく風かほる花のやま道

神奈川 森田はな子

こまなへて花のかけゆくころも手をのとかにおくる春の山かせ

愛媛 さゆり

山さくら雪とちりくるはるかせに駒のいなゝきいさましきかな

熊本 田代きわ子

のる駒のあかきはやめて花かけにやすらひなれは春かせそふく

備後 高坂たゞ子

駒とめてあらしの山をなかむれはふく春かせにはなそちりくる

## 乙

赤坂 松本くすゑ

駒たにもたゆとふものをやまさくらわけゆく峰にはる風そふく

秋田 細矢はる

山こしてあたなうかゝふものゝふのこまさへいさむ春風そふく

神戸 今西みさを

のりて行く駒のたつ髮みたれつゝたけきすかたに春かせそ吹く

千葉 溝保しい子

砲音のはけしきまゝにこまとめてむかふ砦にはるかせそ吹く

本橋 牛山棠子

駒いさむみいくさ人のかといてにむめか香おくる春のあさかせ

肥後 德永而有子

のる駒もこゝろもいさむ花かけにたもとのとかにはる風そふく

赤坂 岩谷梓子

花のかのかせにたくひて鞍馬路やこゝろも駒もうちいさむらん

牛込 後藤喜代子

すみれさく野路をわけゆく駒のうへにしつかに渡る春の朝かせ

松山 田村多豆子

かけいてゝ駒はあるれとたつかみを吹く春風はのとけかりけり

北海道 小山春枝子

吹きおくる野中のかせに旅ひとのこまの黒かみみたれたる見ゆ

千駄谷 駒澤さた子

咲く花の木かけにいこふ馬の上にふくものとけき春のかせかな

愛媛　梯　たけ子

のるこまに春の野みちをすき行けは秋のとかにあさかせそふく
麻布　林　瓔子

かけりゆく駒のたつかみなひくまて春風わたるおほはらのさと
金澤　永、島　波子

もののふのたつなひかゆるこまの上に花ふきおくるはるの山風
愛媛　高橋　義子

かちときをあけてかへらんもののふの馬上ゆたかに春風そふく
すな子

わか駒のたつな取りつゝ野邊ゆけはかすみをはこふ春風そふく
神奈川　菊子

武夫のこまにうちのりいさましきかとておくりて春かせそふく
板橋　田中拾紫子

古しへのせきちをしぬひ乗駒のうへにひとむらはなちりかゝる
松山　山崎よし子

さく花のにほひちらしてあてひとのとゞむるこまに春風そ吹く
麻布　林　艶子

こまとめて嵯峨の御室の山さくら見かへる袖にはるかせそふく

（以下到着順）

静岡　竹内みつ子

もののふの乗しつめゆく駒のうへに梅か香おくる春かせそふく
富山　土子

春の夜に栗毛のこまにむちうちてさくり來つらむ敵やあるかを
松山　山崎匡子

胸とめてなかむる君のそでの上にさくらちらして小の風ふく
本所　季子

つゝのおとひゝきし野邊やいつかたそ駒のたつかみ春風のふく
三重　神田みよし子

かへりみる花を一ひらのるこまのうへにちらして春かせそふく
長門　白萩女

乗るこまのいなゝき渡る聲たかしはるかせさむき夕くれのそら
下野　細野喜美子

義にいさむやまとたけをかのる駒のあたりのどかに春風そふく
下野　井上滋子

松かけにしはしやすらふ我こまのいなゝきのとかに春風そふく
富山　大木滋子

皇軍を風もむかふやのるこまに沙河のあたりのうめかをるなり
廣島　淳子

いくさひと馬上はるかに新領地なかむるそこにはるかせのふく
岡山　小山松枝

吹く風もかをるやまちに駒とめてまづおもひやる沙河のへの春
神田　山田ふみ子

胸とめてうちみる顔はかすみつゝわかこころも手に春かせそふく
備前　吉澤いと子

廣き野もせましと駒のかけゆけはそてさむからぬ春かせのふく
京都　森本秀子

駒にのり敵とたゝかふものゝふか荒野のすへもはるかせのふく
神戸　島川とよ子

かくはしきほまれとゝめんますらをかむち打つ駒に春風そふく
神戸　清水かをる子

荒のはらさつと吹くるはるかせにぬしなき馬のひとりいなゝく
長野　山本直枝子

花の香を吹てそおくるはるかせにわかあら駒の手つなゆるみぬ
長野　山本基子

春かせになひくみ旗を見るかてに馬もすゝめりならし野のはら
長野　小泉たつ子

ますらをの馬のりならふならしのに空ものとかに春かせそふく

駒とめていさやなかめん春日野にふくはるかせは花の香そする　長野　小泉德子

のりて行く駒のたつかみなひきつゝ心のとけきはるかせそふく　長野　小泉みつじ子

駒とめて花さくかけにやすらへは霞みをもれてにほふはるかせ　肥後　德永欣子

のる駒も心のとけきはるかせにかすみの袖をかさしてそゆく　肥後　德永成蘇子

あら駒にのるもいさましつはものゝいさをを花と春かせそふく　羽後　武藤定子

春風のふきてちりぬるさくら花のるますらをのそてにをちくる　備後　高阪津ちえ子

駒とめていさ水かはんはるの野の小草のうへにかせかほるなり　和泉　福原菫子

ひはり毛の我のる駒もあからなむ雲井にさそへのへのはるかせ　熊本　日高かず子

駒のせにびわかきならす旅僧のころものそてにはるかせそふく　岩代　菅野和子

くしき香を東風吹き寄來す花のみちわか駒なきぬあけほのゝ空　本郷　西岡古代子

たつかみもなひかぬ春はわか駒のいふきの風ものとけかりけり　松山　上原信子

さく花につなけはのとむ春かせはむちうつ駒にあらくふきけむ　山口　村上操子

われもまた大和櫻にもれしとやうまの背かろくはるかせのふく　京都　竹下すゑ子

さくら咲くいさをともなれ我駒のたつかみゆする忍ふはるかせ　土井桂子

荒野ふくかせのとかなるはるの日は駒のこゝろもなほ勇むらん　牛込　石井貞子

をもふとちかはたの里に梅みんとのりゆくこまにはる風そふく　芝　松永德子

のとかにも駒の立かみうちなひき支那のひろ野に春のかせふく　上總　高名とよ子

まんしうになひきかゝやくやまとかせ馬上にむかふ戰勝のはる　羽前　横澤とも子

のるこまの立髮の上にちる花のゆきふきはらふはるのやまかせ　三河　永井さい子

たつかみをかせに吹かせて峰こゆる駒の行手にはな散りみたる　伊豫　山本田鶴子

春の日にむちうつ童のたつなにもあらしにちりしもゝの一ひら　淡路　春海玉枝子

駒なへてやたまにいそしむものゝふの花はさくらむ春風のふく　伊豫　渡部しく

のとかなるのへの道かな駒とめてたなるやなきに春かせのふく　肥前　藤松りか

てきみかた遼河をはさむ川きしにはるかせふきて千馬いなゝく　大阪　山本いせ子

いくさ人ふゆをこへきて乘る駒のあしけもなひくはる風そふく　大阪　中江なほ子

のるこまのあしもぬるみて川添のやなきしつかに春かせそふく　大阪　田中たつの子

駒とめてかすむゆくてを眺むれはころもて輕くはるかせそ吹く　福井　岩橋花子

春風のふくものとかにわかのりしこまのたつかみ打みたれつゝ　熊本　田代鐵子

日向　岸上はる子
春かせにひんのほつれけけつらせて馬上にうたふ乙女あひらし
三河　榊原てる子
なのつから駒のたつなもゆるむまていと心地よき野邊の春かせ
三河　榊原きく子
乗駒にむちうちすゝむますらをのこゑのとかにも春かせのふく
京橋　高橋珍子
のろ駒のうへ寒からぬ雪ちりてはるかせにほふ比良のやまこゑ
神戸　海乃潮子
出征の我はらからはうまの上に故きようのはるのゆめ見給はん
小石川　寸枝子
馬の上につるきとりつゝあたともとかはする間にもかよふ春風
肥後　佐々有鄰子
さくら花さきのさかりはわかこまの鞍のしほでにかよふ春かせ
肥後　佐々小琴子
春風はのとかにかよふひはり毛の駒のりなへてゆくはたかつま
小石川　宮田茂々代子
春風ののとかにかよふ馬の上にますらたけをはつるきとるなり
薩摩　松原みれ子
あたし野のかすみと烟をわけすゝむ駒の上ゆるくはる風の吹く
小石川　新井ちよ子
笠一つつきけの駒におくられてふくかせかろしはるのやまみち
陸前　前田河みさを子
のとかにも駒にまたかるいくさ人春のかせにそいよいさむらん
陸前　前田河千年
駒の上をすみかともするますらをものとけかるらむ春の風かな
埼玉　澤田房子
つゆ消えて朝日のかけものとかにて春かせそふく駒のうへかな
埼玉　澤田仲子

春かせのそよ吹く野邊の若くさもわかのろ駒のふみて行くなり
埼玉　横田やな子
はるかせの梅かゝさそふこまとめてまつうちわたす月の瀬の山
埼玉　横田須磨子
春風のわたりし日よりのろこまのこゝろもいさむ花のやまみち
埼玉　横田秋千
のろ駒も春はこゝろのなつむらんはるかせわたる嵯峨みむろ道
伊賀　佐々木まさ子
乗る駒のいなゝくこゑも長閑にてたつかみそゝき春かせの吹く
呉市　和住千鶴子
春かせにかすみふきときのろ駒のいはゆる桜ものとけかりける
秋田　古瀬惟子
青やきのいとのとかなる春かせはのりてし駒のあとよりやたつ
秋田　古瀬りく子
駒なへてかちときあけしつはものゝひけにもかほる春風そふく
秋田　伊東りよう子
いさましく駒にのりにしつはものゝそのなにほはし春風のふく
紀伊　白鷗女史
朝東風にゆめやふられて蝶一つまへに狂へりこまをとゝめん
下野　ふぢえ子
里の子かふしおもしろく馬の上にうたふあたりを春かせのふく
埼玉　戸田折香子
こゝちよきたもとの風に思はすも駒のあかきをとゝめてしかな
越後　山田なみ子
いくさひと駒をとゝめて岡の上にやすらふなりを春風の吹く
播磨　横田春枝
あさもゝのありかさくりて勇みたつ馬上のとかに春かせのふく
福岡　小島まさ子
はるかせに旭のみはたひろかへし駒すすますする西伯利亞のはら

華族女學校教授 井上頼圀先生撰

# 雛祭り

熊本市中坪井町 日高かず子

## 天

今年は彼處よ此處よと、初節句すなる友の家めぐり歩き、己が雛の數少きをかこちて、母君を困じさせ參らせ、蓬摘みにと春の野に日暮しつるは、昨日今日の樣なれど、今は昔となりて、人の親とよばれ、何子の雛祭りせんずる身ともなりぬるかな。」さはれ常ならば兎せん角やと、いとなみもあるべけれど、去年よりの御國の災は　大君のみゐづにかつ〳〵拂ひて皇軍の勝は勝つものから猶滿洲の野に武夫を送り、朝な夕な　大御心をなやましたまひ、仕へ奉る民草は力を協せて、身のほど〳〵に盡さんとあたし暇なき折柄なるを、など、遊び事の樣なるすさびせんや、とは思へど幸あれと希ふ親心の例ばかりをとて、我子に父君の御手づからものしたまひしてふ、古き内裏の軸物取り出し、御酒供へなどす、幼き折さへ忍ばれていとなつかしう打見やれば、小瓶に挿せし初咲の桃の花笑みそへて、三千年の榮見すめり。「あはれ此ひなき戰勝國に生れ合ひたるかたみには、おひたたん行末長く、國の爲家の爲に盡しつゝ、雛のこと世にもてはやされて、譽ある女になれかしと、眠れる我が兒の頭かいなでつ、心ばかりを祝ふになむ。」

## 地

播磨國加西郡西横田村 横田春枝子

三月三日、げに思出で多き日なるかな、世のうない乙女子の、夢まどかに結びもあへず早起するも、雛祭の日なればこそ、緋の毛氈敷きわたし、内裏を始め種々の雛、諸の小さき手道具に至る迄、美しく飾り立ては、家の内も花々しく見ゆるものぞかし。思えばおぼろげなる昔なり。祖母樣母樣の我にと祭つて給ひ

しを、乳母の背より、眺めて、武者人形恐ろしと泣きしは、四ッの年なりし。雛様のお膳ならでは御飯頂かずとすねて、母様困らせしは五ッの年よ。おたばこぼんに水色の鹿子、自らにては一かどの姉様になりすまし、我身のよりも大きなる顔の市松抱きて、よい子よ母様のお乳わげんなど云へるを、隣見せし下女に聞かれて、顔赤らめしは、七ッなりき。今年は私一人してよと大人ぶりて、何くれとなく調度運び出づる折、倉の石だん履みはづし、折角のお臺所を微塵にして、厳き祖母様に、差出は女の第一の傷、何事も我が分に過ぎたる事はひかへてこそ、とお叱り受け、祖母様こわしと思ひしは、九ッなりしが、十一十二と年ゆきて、飾り立てより、桃の花、白酒、草餅の供物、膳部の料理迄も、人手をからで仕とぐる樣になりては、又一入の樂みにて、友の誰かれ打寄て遊び戯れ、小さき器にて酒宴し、興ずるなど、わきて忘れがたく、寄宿舍生活のころ、たがひに持寄りし市松を本箱の上にならべて、米のとぎ汁、桃の花に、古里の彌生しのびし折の事ども、思ひ出されておかし。友の誰様は早もわか様まうけ給ひて、今年は初雛祭りしますならんに、今も猶、昔ながらの雛祭樂しと待ち、嬉しと思ふ、我が心こそ、やき物の奴よりもおかしうてなむ。

# 人

東京小石川區小日向水道町　新井ちよ子

梅はちりすぎしも、里々の桃のやゝ笑みそめつ、いとも長閑なるを、今日は雛祭りすべき日なりければ、同胞らととくより壇なと清めんとて、立働きつゝある折りしも、ふすまより入り來る人の音すと思へば、妹は早やわら姉様がなどゝ、緋桃の花の蕾となかばなるを持たりけるにすがるも、おかしかりき、やがて弟も、かけこみ來るを、何かと思へば、人形のいとも怪しげなるを抱きて、姉さまに貰ひしなりとて、雛の壇に据えては取り、取りては据えつして居るに、妹のわら邪魔するよなどゝ、はては爭ふに、姉君のか

ろく制し給へば、又も外にかけ出でゝ、やがてたこ揚ぐる聲のもれ來れば、あまりの可笑しさに、顔を合して打興じぬ。

かくてあられなどたうへつ、緋桃の花のうるはしき事よ、雛のあいらしき事よと、打語ふふほどに、やがて正午に近づきしかば、かねて母上の造られし、白酒などを酌みつゝあれば、すしも出來ぬとて、下女のはこび來るを、あらよき御馳走よなどいひつゝとれば、あなはづかしふできなるをと、日頃にも似ぬ下女のつゝみがちなるも、ゆかしかりき。

とかくするほどに、窓の日影も森に落ちて、うすれゆくに、學の友なる竹子樣より、雛につけてもなき妹の思ひ出でられて、との文に袂さへしぼられぬ、實に、かく團居の樂しきにつけても、同胞もたぬ人は如何、わきて亡せにし人はと、夜一夜思ひ續けられつ。

肥後　佐々有隣子

内日刺都も。あまさかるひなをと女も。今日は三月の三日なれば。朝日の豊榮登より。心いそいそして。上下かけて雛祭りにたちはたらきぬ。そもそも此祭の式は。ふるき朝廷の御式に習ひ。雛かざるべき殿は新調して。軒端には柳のしだれ枝をさしはやして簾の代となし。柱には桃花を立そへ。門には櫻木を根こしにこちて。春風にかをらせていとにぎにぎし。御饌に。桃花酒。はは子餅。ひし形のかがみ餅。田にしの味噌あへ。ねぎのあつもの。とりどりの珍味をぞ供たる。午前十時ころより。師の君の家の雛祭に詣ぬれば。七十歳にちかき夫婦の君たち。ともに立出たまひて。皇國の故事をおつることなく妾等にいと細やかに語りきかせたまひぬ。其ひとつふたつは耳底にあり。曰く舊幕徳川家の式はほどほど。朝廷の御式よりも。美麗なりしとぞ。國主城主の式もこれにならひて殿なりしといへり。我等の舊藩士の家式も。いと

ど嚴重なりしといふ。そもそも。二月の末つかたより。藩士の家には白石。千石。萬石といふ。領知の郡村あれば、知行所の百姓等を、帳元庄屋といふ。頭百姓が。組下の百姓を引連て。藩士の屋敷に出勤して。此の雛祭の式に仕へしとなん。今は昔のあとかたもなく。四民ともに目出度大御代の恵の露にうるほひて。今日のむつまじき。雛祭の御酒を若き女子たちとくみかはし。かぎりなき戰勝國の軍人の妻となり。母となりて。萬世不易の天皇の大御代に。奉仕せんことを。朝夕神に祈禱奉り。此の雛祭の式のごとく。むつまじからんことを。老夫婦がくりごと守りたまへと。ねもごろにさとし給ふことのかたじけなさを。今日の家づととはなしぬ。

愛媛 高橋茂子

ためしなき戰捷の年とは云へなほ時局の前途遼遠にして思へば去年よりかけて君國の爲め命をうしなひし者そも幾百千の數を知らずされば其遺族中には悽状筆紙に盡し難きを見聞しにつけ誰とて同情の涙を禁し得らんたゞ胸なたつ思ひに過す昨日今日 世事をわきまへぬ少女はいざ知らず最早學校教育もなかば終へんとする者如何で雛祭りとて徒に一日も過さんやされどこれ昔よりをみな子の祝ひにあればかたはかりも祭らでやはと情に厚き母上のたまひければおのれ何とてそむくべき心の嬉しさたとへつべくも有らねど何時迄飾る物にやと笑ひ興じつゝ思へばおかしき古びたる雛なれど美しき桃花に引立てられ座敷は見違ゆるばかりと成りぬ間もなく隣家の花子の君訪ひ給ひてさびしさは何處も同じと聞くげにさも有なん。戰爭は貴賤を問はず我國一般の事にしあれば務めざるべからずはげまざるべからずはたひかゆべき處に心せざるべからず。 おのれ花子の君をそゝのかしいつよりか思ひに過し負傷者獻問を思ひ立ちぬればせめて慰めの片はしにもと花子の君と同道して傷になやめる我同胞を病院に訪ひ心ゆくばかり慰め家路に就きしは日も西山に落なん頃家には待つ友などありてさすがに嬉しく夜はふくるも知らで語り遊びぬ

下谷 岡田柳子

彌生の空麗かに、長閑けき日影の、園生の桃花に匂へる風情、いひ知らず、なかし。いつもながらの、雛祭り、いざ下り立ちて、床しき花の一枝を、色香と共に、供へてむと、紅白の枝ぶりよきを、折り來れば、妹は小瓶とりいで、水などさす、今日は節句とて、近きあたりの子等招きよせたれば、いと賑はし、稚子に結べるあり、桃われなるあり、或はおさげに、おのも〳〵愛らしき姿して、とり〴〵の細き調度、おかしげに眺めては、打興じ、こは何といふ品よ、其は何など、ゑみつゝ問答ふる樣の愛らしさよ、さはれ己れも、一度は斯る折もありけん。雛に飾れる小さき膳に、姉共〳〵打向ひて、いと嬉しう、幾度も飯かへては、たうべし其折の樂しさ、思ひ出られて、そゞろゑみつゝ居れば、去年のむつ産聲あげし姉の稚子の、はひより來て、珍らしげに雛を見つゝ、果は手をのべて、取らまほしげなる其笑顔の愛らしといふも中々なりや。今より幾とせの前なるやよひの今日、諸共に雛の祭りを樂しう嬉しう待ちわびつる姉君、今は母よ〳〵とよばれ給ひつゝ、 此幼な子おほし育つる御身とはなり給ひしよ。

松山 たけ子

上巳の節句としいへば何となく嬉しき心地せらるゝを、弟の意地わるくも、僕はつまらないと思ふ、雛祭りなんかは禁じて貰はふなど、云ひ出でたるこそ、にくらしけれ、實にや一年に只一度箱の中より出でませる雛樣なればとて、心をこめて飾りたるめざましさよ、上段は、九重の御わたりになぞらへたれば坐ろに畏く感ぜられそがもとには近衛のますらをさては美しき女官たちの侍ひ次段には五人ばやし居並べりいづれも皆衣裝の色は稍あせたれど是や我初節句の折都より父君の家づとにとて求め歸られしものと思へば嬉しくも忝けなき心地ぞせられける。その下にはとりどりの裝ひなせる人形の、今にももの云ひ出でんばかりに笑みを含みてづらりと並べる樣の、らふたさ、見る妾さへも思はずほゝゑまるゝよ、下段には白酒、菱餅、蛤を初め種々のもの備へて今日こそはといつきまつりぬ、やよ好夫よ、御身にも、やがて、さまざまの御馳走參らせんと云へば、弟はほゝゑみつゝ、中々よき節句なりなどと、以前にひきかへての言の葉、をかしともをかしうなん、午後には必ずと約し置たる伊都子孃の來給ふらん、さらば妾が心つくしの手料理に白酒すゝめ參らせ、此雛壇の許にて面白く樂しく遊び暮さばや、

岡山　小山松枝子

やよひのうらゝかなる空に、にほへる桃の花もなつかしく、よろづすゝみゆく御代の春にも、なほ手ならししすさびすてがたくて、雛祭りの料にと一枝手折り來れば、恰もこの美しき桃花のごとき唇をうごかして、一年にたゞ一度きます君のもてなしにと、小女はよろこびてとかくなす愛らしさ。棚にはなやかなる氈を敷きて、最上段に屏風など建て優にけたかき内裏樣をはじめ、内侍のますらを其外つきづき順序よくならべ、小女らの美しく裝ひて立てるあり坐せるもあり、いろいろの調度も打ちましりてかざられ、はぜ白酒菱餅蛤など供へられたり、折しも二三の小女來りて、あるはたたへあるは評しあひ、つひに雛の衣服の裝飾つけなほし、さては膳部のこしらへと立ちさわきぬ。あはれ、やがては人の妻となり家の母となるべき幼子の、さゝやかなる調度もて、婦女としてのつとむべき業をこゝろむる、この雛祭り、わが國にはむかしより行はれしとか、げにこよなきすさびやめでたき風習かな。

神戸　今西みさを子

一年の行事多かるが中に、雛祭社、最床しけれ、萬事變れる、今の聖代に、都も鄙も、高き賤しき、其程々に雛を飾りて、祝ふ、彌生の節句は今日しも來にけり、思へば、幼き折なりけり、ゆくりなく、學び屋の友垣、雛遊せんとて、訪ひ來ますと共に、叔父上の八歳に成れる從弟を伴ひて、訪ひ給ふ、我此上なう嬉しうて、是等の手を取り、雛の間に伴ひぬ、先、上段に祭れる、內裡雛、公卿雛、偖は、山賤、雛くむ盃杯、彼は美し、是は醜し抔、各々品評めしける中に、緑の黑髮長うたれ、皆一樣に眞紅のみ袴、着けさせられて、九重の畏き、御邊の祝の宴、開かせ給へるさへ、計り知りて、最、床しかりつれ、かにかくと、罪なき遊びに、時過しける程に、何時しか夕陽も西に入りて、早月彌高く、差出ぬ、左れば、祖母君のみ手に成れる、夕餉も、最嶌かしき、雛の御前に供し終りぬ、偖友の最早歸らむと、云給ふを、今宵一夜は、我家に明し給ひてよ、平常より、面白き、從弟も來り在れば、御宅には、婢女成共、願遣らむにと云ば、友も快く諾ひ給ひて、趣味一入添ひぬ、偖、從弟の何故、斯年每に雛を飾り、緑紅白の菱餅を供へて、祝ふにやと問ふに、叔父君語り給ふ樣汝等が、小學讀本にも見えつらむ周の祖先、重き病に罹りける時、蓬の餅を食うべて、癒ぬとなむ、是彌生初三日端の午の日也、後、幽王、祖先の姿をしつらへ、年每に、其日草の餅供へて、祝へるとなり、夫より端午の節句と云いて、我國迄傳へられたる也、といと興添へて語らせらる。年每に彼の話に、夜を更す例なりしよ、アゝ樂しかりし雛祭も、今はそのかみと成て、萬、儘ならぬ身の、況て、昔を今に、なす由もなく、轉た懷舊の淚止めあへずなむ。

京橋　高橋珍子

今日は彌生三日とて、幼き妹の例になくとみに早う起出で、ひいなまつりすとて、あやしけなる手つきにみづからはゝきとりざしきなどそうぢするを、母君の見給ひて妾にも手傳せよとの給ふ、やがて床の間に三ツば四ツばに段立しつ、ひなをとり〳〵かざりたて、折敷などとりすゑ何くれとさゝやかなる調度ながら、ものゝ本など見合せつゝ所定めてかざり立つる後より、弟の己も手傳すとて、妹と爭ひ泣かぬ斗りのさわぎにうるさしとや覺しけむ、祖母君のめかれ片手に出で來給ひて、女の調度などに手をふれては、軍人にはなれずなどすかし給ひつゝかにかくと道具の配置など敎へたまふ。妹は庭より桃のひらきそめしを手折きて花桶にさし何くれと心くばりて、はれ着なとよそほひ、まつま程なく使もていひやりし友どちも五六人つどひければ、白酒などとり〳〵進め、くみかはしつゝともに悅びあひ、何くれと妹のあるじぶりてまろうどあしらひするさまの、ろうたけに大人びたるを見るにつけても、嬉しかりける己が昔の忍ばれてなむ。

肥後　德永廣子

四方の山べをみわたせば。雲かとみえて。花もにほひ。霞の衣ひきはへて。いとのどかなる彌生の空。今日しも唐土にも詩人うちつどひ盃を水にうかべ酒くみかはし。たのしめる事もありしとかや。わが日本にも某のみかどの御時より。曲水宴をはじめたまひしことのありつるよし承る。それより歷代の朝廷にも佳節の一に算へ給ひつといふ。今上の聖代にはかゝる節句は改められ。紀元。天長の兩節とぞなりにけるいと尊や。下さまには今も昔時の姿をまもりて。三月雛祭なぞ行ひける。女兒の生るれば彌生節句とて殿に桃柳をうるはしく立つられ。種々のかざり。うつくしき階段をまうけ雲上人の。いもせの中むつまじき御姿あまた立ならび給ふ。かたへには犬はりごなども立ならびぬ。御前には。よもぎのはゝこひし餅十二膳部うづたかし。里のをとめ子は。御前にぬかつきて。ねぎごといとかはゆうし。妾も御祭の式につらなりて。なにとなく心すがし。若かへり幼なくたのしきおもひをなし侍りぬ。

岐阜　小出せん子

もう二ツ寢るとお節句姉樣早く雛樣を飾らないとお城の內で躍て居ますから、と幾度か責附かれて二日も前より雛箱を藏より運び、嬉て座數の床の間に並べて御殿しつらへ棚釣りなんどして妙子が日頃母より敎はりたるやうに大內雛次は矢大臣左大臣次は五人囃子さては靜御前、潮汲、花車など順序正しく大廣間も所狹き迄に置き並べかれて川窓の笑吹の桃白き唐津燒の花瓶に挿して側に置きたるもいみじう麗しく古びたる雛の一際都雅て見ゆるなり。斯くて御殿も整ひたればいで節句の馳走なと母諸共勝手に下りたち、昔より我郷の習とて山椒餅、白、蓬の菱餅を始め數々の料理整へ貝細工蒔繪なんどしたる愛らしき雛の重や膳部に盛るを始終待ち居たりし妙子はなかめてあら此の汁椀には田螺が二つしか入らないとつぶきつゝ膳部を運ぶもいと面白し。扨夜に入り人々集ひ親しき友も來合たれば雛の前にて心盡の手料理進めかるた雙六等の遊びも樂しくいと餘念なかりし折しも、如何にやしけん妙子が花車の虫食まれたるを見出し、さも悲しげに姉樣今年は澤山樟腦を入れてよと訴ふるが如くに云ふを、妾は例もならばあゝと肯ふ所なれど少女ながらも軍國の此の時にこそと思ひて徐に其の悲を慰めて後昨日學びたる化學の火綿に樟腦の必要なる事戰事には火綿の大切なるを等を細かく說きて之に代ふるに煙草の骨にせばやなんどと敎ふれば傍に熱情籠めて聞居たる弟の俊郎は得堪へぬにやつた立上り樟腦なぞ用ふるとサーベルで切るぞと躍上るも勇ましや

北海道　小山春枝子

二色の菱餅、あられ、白酒、お菓子、金柑、佛子柑、などくさ〴〵の供物に五楷雛壇、倘狹き心地す。

四五人の學友訪ひ來りて、『長子樣のお雛拜見に參りました』と云ふ、われは去年の目出度き天長節、然も其日の午前三時に始めて此世の光りに照されし末の妹『長子』を抱きしまゝ友を迎へて一室に

導き、心計りの茶菓を饗しぬ。

やがて立て並べし雛の數々うち眺めつゝ………上段の親王様其お顔の神々しさ！、お武家風の男らしさ！、さかゆきの可笑しきは奴雛！、賢のねうちは老翁にぞある！、子持ち雛の可愛らしさ！、など思ひ／＼の品さだめに餘念なき嬢様の一むれ、これなん物言ふ雛よとわれは附け加へぬ。

午前十時、辭し去る友の仲間に加りて、今日一日を雛見に送らばやと、われも其御跡に從ひぬ。

京都　森本秀子

うら／＼と見渡すかぎり横雲み空に棚引きて、そよ／＼と吹く風は物和らかに面を拂ひぬ、見れば彼方此方もいと長閑に春めきて遠野面に烟る陽炎萌る若草も色美しく折知顔なる木々の梢に囀り交す鶯の色音も清らかに澄みていと床しく覺ゆ。今日は三月三日彌生の節句とて妹の待にまちし日にぞありける、我は裏の園に行きて桃花をと思ひしに何れも蕾固く結びて笑み初めんけはひもなし如何にせばやと躊躇ふ折しも、駒下駄の音して周章だしう妹の來りて、姉様花ならば妾が昨日持ち歸りしが好きになど云へば聽てゆきて見るに稍々狂ひ居れど詮無ければそを瓶にさして程よき所見つくろひて供へまつる、午後よりは兼て約束なしなきし君達の來給ひ母上の手づからかもし給へる白酒を汲みかはし暫しは語らひとよめきて賑かなりしに、其の内一人の君云はれるには今日の祝ひ日をあだに過さむもをしければ皆々思ひの和歌を作り明日師の君のお點削を受る事いかに興あるとならんなど云はれしに皆それよとて話の了るや急ぎ首打傾け考ふ風情など見る目も可笑かりつらん、かくて日西山に舂きて黄昏近くなりぬれば皆々惜しき別れをつけぬ。

備後　片山松子

日當りよき四疊半には今日しも上巳の節句とて古き新しきとりどりに雛のかず／＼飾りつけられぬ其前にて遊べる姉妹は七ツの春迎へし文ちやんと五ツになる秀ちやんとにて共に林檎の如き頬にクル／＼ツとしたる眼房々したる黑髮を文子は下髮に結ひ彩色よき時色リボンさえ吹かしけり二人は餘念もなく市松人形を弄ぶ折しも隔の襖押開けて入り來りしは年若き母なる人にて薔薇色の頬に溢るゝばかりの笑を滿へさあ御馳走も出來たから仲好の美ちやんを呼んで入らしやいとの仰せに二人は嬉しさうに出で行きぬかくて母なる人は庭に下り桃と柳を手技り來て花瓶と白酒とに插すお梅はくさじの御馳走はこびぬ斯る所に打興じつゝ歸り來りしは姉妹の外に從姉に當る美ちやんと其弟の繁さんにて何れも日々手を携へて幼稚園に通ふ最とも仲好の友どちなり得意の桃太郎歌ひつゝやがて此處にはまこと可憐なる雛祭りの宴を開かれぬ慈愛籠れるかず／＼の御馳走を神の如き四人は嬉しさうに頂くなり庭の白桃は未だ咲き揃はねど紅梅は今や盛りにて絶えず床しき香りをこゝに送り來るはそも此可憐なる風情を慕ひてや

神奈川　森田はな子

古より桃の節句としも、もてはやしてしが、やよひと名は通ふなれど、今は春の始にしあれば、花もいまだほころびえぬなり、南向なる座敷にだんをかまへ昔ながらの色もなつかしき緋毛せんをしきのべ、雛をば、かざりつらねつ、恰も紅梅の盛りなるを、さしそへ朱桃に似かよふなどゝ、もてはやしぬ、深き紅なゐに雛の面も一きはいろそひて、艷にぞ見ゆめる、上段に幾千年をか經しと見ゆる緑の松蔭に雪もまがふばかりの、鶴は遊べる、模樣の屏風めぐらして、かざられたるは、いとふるびて見ゆ、こは祖母のもて來しものよ、昔は御殿にてはなど、同じくり言くりかへし、はなれゐし、はらからに、あひたらんやうなること、いひ／＼昔なつかしげに、ながめぬ、三寶に紅なる鯛だるま、露のほゝつきなど菓子供へつ、雛をし見れば、自と心幼めきてつれの面も和ならぬはなし、人形のやうなる小女等今の世のさすがに日のはたなど、かさゝせし、人形をいだき、こは看護婦よなどゝふりわけ髮に面おほはれて、もてあそぶさま

ひいなと、ならびかざらまほしくあいらし、古をしのぶやさしきまつりの女子にはいとくまたなく適ひしこととぞ思ほゆ、　一たびはことぎれたれど今はおのづと、　家々に行はれきつるも理とこそ思ほゆれ

麹町　石川蕗子

八重霞引き渡る大空に新柳長く地に垂れて風先づ春の消息を通じ来りつ、庭にも春の緑色満ちて萌え出でし若草緑なり、けふは雛様祭りなりとて里よりおこせし桃の二枝三枝床上の瓶に挿しつ、心計りの雛祭りしぬ、　固く結びし淡紅の蕾何時か少しふくらみつゝ色濃き花片風になびくなど、　さながら美數人の朱唇の笑みのそれに似て優にとうとくなまめかしよ我も大裡様ならぬ人形一ツ二ツ飾りつチヨトの白酒に頬染めぬ…我故里の姪もさな今頃は稚く又たやさしげなる大裡雛を並べ日あたりよき座敷にて御酒、イリ豆、白と緑なる蓬の菱餅供へ参らせつ、妾が送りし手球看護婦、軍人の押絵など傍に飾りたて先づ御二方に御酒参らせ次々と盃口にあてやがて已れもたうべしならむに長姪は雛様のため御馳走の役、次姪は共に運びの役、彌太郎富子は兄姉の御馳走に預り御客様役なりなどはらから打集ひ父母の御膝許にて楽しき一日を送らなむに熊本なる姪は如何に！甥は如何に！アゝ母なき家にいかなる雛祭りに日を送りしや。

越後　吉田波留子

かすみこめたる四方の野山も、笑ひそめ、花にあそぶ蝴蝶、梢に歌ふ鶯も、目に見、耳に聞ゆるもの、いづれ、長閑ならぬなし。未だ、氷も、解けやらぬ、満州の野に、出征せる、将士は、そもいかならん。身を裂く如き風の朝、しのつくばかりの雨の夕も、露まどろまず、守りする時もあるならん。われ等、ひるは暖たかき食に飽き、夜は厚き衾を重ぬる者の、いかでか、雛祭り等の出来得べきか、などいひ出るもありしを、母君のいなとよ、かゝる世にありてこそ、ことに必要なれ、男子は外にあたり、女子の内を治むるとは、古よりの教へならずや、已れ年毎に雛を祭るは、遊び戯むる為ならず、汝等の他日、人に嫁せし後、良妻賢母たらしめん教へ草の一とせしなり。されば、国家多事の今日、ことに、よく内を守り、男子をして、内顧の憂なからしむるを、女子の一時として、忘るべからざる事なりと諭し給ひければ、皆々、げにもとて、準備にかゝりぬ。床の間には高き壇をしつらひ、珍らしからぬ年毎の雛を飾り、左右には今を盛りの、紅白の桃花を、例の、自己流にて活け、其の前にはくさぐさの調度等、處せき迄、置きならべぬ。やがて、三日となりぬ、朝の程より馳走の準備にていといそがし、かゝる程に、妹も学校より帰り、客人も、来り給ひぬれば、父君も、母君も、同じ筵に、いとゞ楽しきまとゐは開らかれぬ、父君の面白き御話、或は母君御酌にて、盃の数を重ね、頬を赤うし、もろ手にて掩ふるもをかし、已れも、堪へ難ければ、庭にドリ立ちて、折から日は山の端にかくれ、あかきあかき、空のかなたに、ねぐら求むる鳥の、一つ二つ見ゆ。

群馬　林廣子

歌るたの聲の止みぬ間そ、睦月きさらぎ過去りて、桃節句とも云ふなる彌生月三日とは早やなりぬ。清く飾れる雛がみだん、いや古き新しき等数々、これなん、祖母君が、秘めをかれしものよと、今の世には、なかなかに、得やすからずとや。

まちこがれし節句日、折あしくも金曜日なるを、あやにく、テニスの大会ありとのを日頃好める事ながら、いと今日は、恨めしかりしと、末なる妹が物語り、友どちとつれ立ちて、四時頃帰り来れ。直に夕げ終りて友どち等とふるき学びの思ひ出を、共々に、話しつゝ話されつ、折々弟があどけなき口振に、一同ドツトの大笑ひ。程はへたれども、妹がもちくる歌るたに、皆々も、快くうべなはれぬれば、西と東とに別れ、いきごみいとゞ勇しく、姿もなどて劣じな、白毛の胸に、むちうちてきに對ふもいとをかし。　夜の更るをもえしらずに、　時をすごして十時まで雛がみ前に面白くこのやよひ

節句をばすごしつる。

名古屋　不破きみ子

朝まだきより、お隣の娘ちやんの聲ものどかに聞ゆる、今日は彌生の三日、例年なれば、母もまじりて、雛飾なし、樂しく、一日を送るべきに、今年は、日露交戰中、今や我同胞は、尚春寒き滿州の野に、我等に代り、家を忘れ、身を忘れ、命を犧牲となし、奮戰せられ父國にありては、父を失ひ、母と共に、涙に袖を絞るあり、良人の安否を案じ夜な／＼安く眠りもせず明すもあり、兄君の無事生還を祈り朝な／＼氏神へ詣で、祈願する乙女もあり、中々に哀催す今日、いかで雛祭等と、打興し得べき、されば今日の費用を省き、某婦人會へ寄附せばやと云へば幼女迄も賛成し、緜纓りぬ、さはいへ、雛も嘆かせ給ふとかや、言傳へければ、內裏、雛、左近櫻、右近の橘、絲纓おひかけの隨身、狗張子、五人雛子、などを、並べ、草餅、白酒、蜆、煎豆、霰、些少供へ、三千年に、齡なかゝれと、桃花の初咲瓶に挿せば無邪氣の、乙女、ばうち喜び、是姉樣に戴いた人形よ、是まゝ事の膳よ椀よと、獨り、樂しみ、居しに、いつしか、戶外に出、あれ、春ちやんよ、花ちやんと、西東より、呼集ひ、それ鞠つきよ、鬼事と、春の衣の袖かろく、空を霞と馳廻り、はては、一年一日目出度此日、旅順の降伏何やらと、節面白く歌出る心根、幼女ながら、戰捷を祝ふ樣の、勇ましさ、又織なす錦、櫻にすみれ、いばらに牡丹、春社よけれ、鶯こよ／＼こよと、幾同音に、歌ふ、口元の愛らしさよ、其聲を便りてにや、二ツ三ツの小蝶、何れよりか飛來りて舞ひ、紅白の桃花梢に笑ひぬ。

相模　永島波子

あまり大人氣なしと母上にたしなめられつゝも、むすぼれがちの心とくよすがにせんと、強ひて乞ひまゐらせつ。漸く飾りつけし雛壇。もえんばかりなる毛布しきつめたる壇上に御座まします內裏の高き御姿、五人ばやしの愛らしき風情、いづれ去年にかはらじものを、何となう物足らぬ心地せらるゝぞ是非なき。

思ひ出づればいたつきの床になやみし妹の、今朝は心地もすぐれたればと久々にて起き出でつるに力を得、共に花を供へ供物參らせて心行くばかり遊びくらせし去年の雛祭り、いかに樂しかりしよ。

あゝさはれ其雛、今は亡き妹がかたみと思へば、中々に思出の種なるかなゝど、そこはかとなくありしむかしを思ひつゞくる折しも忽ちハラ／＼とちりくる小瓶の桃の、紅の花びら二つ三つ

岩代　菅野和子

今日の主人公照子は當年四歲なるが雛飾る室に嬉々として遊戲に餘念なし、客人は、よの人ならで學びの友垣達にして、總て、良妻賢母と成り、清き樂しき家庭作らむ素稽古にもと御招き集ひ合する事とはなしぬ、されば雛人形の飾りも心を用ゐ、野のまゝなる桃の徒に挿したるにも意を注ぎ、御料理の獻立も正式に物せしにぞある、

定刻に皆々來給ひしそ光ある御代のしるし見えていと／＼嬉しけれ、先づ雛室へ案內しけるに友垣の君の何につけ御譽の御言葉、心ひそかにうれしく皆々の御批評を仰ぎぬ、お茶進むるにかつて學びし甲斐ありて復習をかねたる此式、ひけをとらざりしこそ有難き業なれ、

御雛樣に供へし如く配膳を終りぬ、主人公も恆に似氣なく大人敷く、共に箸とり給へり、母の御酌にて、形ばかり白酒を薦めけるに上戶ならぬぞ奧床しう、家庭改良とや、子女の躾けなどの物語りに一盞ばかりにて雪の顏肌、桃の花よりも紅に、唯額に手翳して『ホヽヽ』とのみ笑ひ合ひけるぞをかしかりき、

御飯もすみたれば、こゝ片付けて、雜談に耽る、妹照子の可愛しとて、抱き上げて「キス」し、禮式作法のかた學びのをかしうて笑ひ罵る樣、いかに、うれしく樂しき今日の日よ、

妙子樣の明笛吹けば、音樂に感じ易き敏子の君、內より「ヴアイオリン」取寄せて合奏し、美和子の君うたへば、節子孃拍子とりなど

興じがり、小さき此居間に和氣靄然、將來妾等の手になる理想の「ホーム」と打喜びぬ、

松山　田村多豆子

上巳のはらへといひ、曲水宴といひ、むかしはさま〴〵のいかめしき儀式ありて、いとをかしかりつらむを、維新の後は例の五節句も廢せられて、いとさう〴〵しうなりぬ、されど、桃の花ゑみをふくみて、柳の眉のうちひらけたるのとけきなりにあひて、雛の御前には、みき、くさ餅、などそなへてとり〴〵に、うないらのかしつけるにむかしのわらは遊びも思ひ出られて、いとなつかしう、などかこのまゝにやと、硯ひきよせて、

このひなの御前つかへしうなゐ子の昔しを今の我身ともかな、とかいしるしたる、いささか述懐めきてなむ、

前橋　竹のふし子

逃月てふ二月も行て彌生とならば女子ある家は取々に雛祭にと心を注ぎ我家にても姉妹多ければ年々行ふ此祭いと賑はしく數日前より彼此と用意おさ〳〵怠らず料理の數々重詰となし、はた品々の供物に心を配り手落なき樣段の數々調ぶれば島臺と共に穗も未出ぬ、稗を頭より着たる土雛の供へあり、之なん昨日妹の草を分け土を返し辛じて探したる物ならん、猶物足らぬ心地するは桃なき故か、昔は此三日を桃の節句と云ひけるとか、去ど暦變りてよりは花等見可くもあらねば豊後梅を供へしなれど思へば昔此節を撰びしも因る處有ならん、さすれば舊なりと遊ぜん物と花鋏手に木の下へと赴く此花の盛の頃は枝に巢喰毛虫を忌み其下過るさへ厭はしく袖を覆ひてかけ行く程なるを今は枝に縋りて撰ぶも可笑し去をソレ毛虫よといつの間にか後に來て弟の不意撃に驚き、振よき枝を放す口惜さ、去ど漸々齢豊なる枝二ツ得て瓶挿添へ參らすにいと滿足に笑み給ふ心地して嬉し、之にて皆調ひぬ、夜は親友招き雛段の前に陣取り骨牌遊の面白くさて源氏合せに妾第一等の點札に隱藝てふ難題を受け何卒宥して と只管願ふ甲斐もなく早弟は爽に乘り桃の木の下の薔薇と迫るに 打懸ふな去ば僕代らんと鼎居る客の面前にいとも可笑しき樣なすに皆々どつと打笑ふ恥しさ 穴あらば入たき心地猶も次々に藝の出る面白さ、興は盡ねど更ぬればと白酒に頰赤めつゝ去り給ふ、

本郷　西岡古代子

日當りよき奥の小座敷、あな杉山樣のお美しいこと、あれ貴方こそ此雛樣のやう、など可愛ゆき聲にて罪なき事を爭ひ興ずるは妹が雛祭なり。しばし笑聲の途絶えしは主客の座の定まりしにや。彼方に鶯の歌我れを呼ぶ計りに高う聞えぬ。此神の如き小さき客人の中に。はや浮世の罪を重れし我の交らはむも餘りにまた罪深き所爲なれば、此方の書齋の窓を放ちて他所ながら眺め入るに、美々しく飾られたる雛の前に並べるは、孰を雛と紛ふばかりなる天使の如き小女五人。左手にて細かい擧げつゝ妹が歡待振の精悍しき、庭面には緋桃白桃の、長閑けき春の光を浴びて今を盛りの嬋妍たる、雛、小女、桃、まこと美しき配合ならずや。春風そよと桃に渡れば花一片又一片舞へる胡蝶にも似て。小女等は手を拍ちて時ならぬ雪とぞ笑みこたれける。女心の、特に涙脆き我が瞼はいつしか露を帶びたりし。幼なき折玩びたりし我が雛古りて、我もまた雨風いたむ人とはなりぬ。春、人の春は一度去れば還へらざれど、自然の春は年々其若やぎの色に復へらざることなし、三千歳の桃だに新となりし例聞くを。かくまで果なき浮世、されど徒に夢の浮世とうち捨てゝ心のまゝに過しなば、永き未來を如何にすべき。勉み勵みて文書き遺せば、縱ひ假の屍は消ゆるとも、我精神は永劫に生けるにあらずや。我涙は直に消えぬ。小女等の興はいよゝ闌に、鶯の歌一しきり彼方に聞えつ。

能登　高森いち子

去りにし年の、三月三日の雛祭なりき。妾は親しき同窓の友光子の君と共に、位置よく三段に、飾られし雛の品評め、かれよこれよと心樂しく、三味線手にもつ人形の、あまりに其風のおかしさに、光

子の君の聲高に笑ひ給ふ時しもあれ、玉の如きみ聲に驚きたりしか、桃の花びら、ひら〳〵と白酒の上に。かくと見させ給ひし、君は早くも巧の三十一文字と化せしめ給ひしを、あわれ妾は、其才をうらやみしよ。

今日は年こそちがへ、再び樂しきひな祭りなるに、あゝ今年は誰れと共に樂まむか、我親しき友は、今は何處に、今近云ふも涙の種なり、君は過ぎし秋の夕桐の一葉と共に、はかなくも黄泉とかへ……あゝ光子の君の居まし給はゞ……あゝ

大坂市　三　保

一年の月日、小さき箱に納められ、塵深かき藏の隅に、眠り給ひし雛の君は如何に驚き給ひけむ、もゆる計りの緋の絹、打敷きたる壇に、小かなる御殿は築かれたり。風吹げと散らぬ櫻の妙なる色に、匂はぬ橘まで、ゆかしき心地す、右近、左近、の儼しきいでたち拟は丈なす黑髮、艷やかに緋の袴粧ひたる女官の氣高さ、五色の幕打廻したる此方、一本高き花の木陰に打集ひたる女房は、かいどり着たるあり、やの字に結びたるありいづれも目のさむる斗り美し。十段の壇の飾りは悉く調ひて賤か座敷に九重の雲井の奥も偲ばれぬ十あまりなりし妹の同じ年頃の友とち集へて、主顔にもてなしたりしは昨日の如き心地すなるに、はや一年の夢となりしが、冷たき土に可愛きむくろを埋めてこゝに九つの月日重ねつ。知らずよみの國にも汝が友ありや、はた雛ありや、曾ては汝が爲なりし雛を今年は只一人祭りて涙にくるゝ姉の思を知るや、妹。つきぬ思はみ墓の前に語らむ、汝がめでし此白桃の花、之をしも手向んと、雛壇の一枝手折れば、時ならぬ雪は紅き絹の處々に亂れぬ

鎌倉　岡田玉緒子

餅取りて消え殘る雪に起臥しますご方の御留守宅にては今日の雛祭りも賑々しく出來まじ、女の子の又となき樂みとて如何に淋しと思ふならむ、松子の級にも多しと聞く呼び集えて樂ましめて上けよと母上の仰せ妹はもとより我も雀躍して喜び使を馳せて待つやがて輕き足音させて集ひし小さき客を雛段の前に招ず、皆人形取り持ちて子守歌唄ふ年配、顔に笑をたゝへて居並ぶに雛に愛嬌そへて美し、出征中の兄君の安否を問へば恙なき由嬉しく例の重詰白酒鮨など取り出でゝ進む、主人役の妹は交際家とてあれこれともてなし振りもおかしく、大方食終る時此小主客の耳を驚かしたるは音樂隊、急ぎ少女軍は二階へ馳せ登るに太鼓の音すさまじく勇ましや進軍の曲、又雛の間へ來れば菓子果物の持ちだしあるに妹は大喜び早速飯事と雛の調度取りおろし小さき主客打交り調理に忙し、其樣の邪無さ可愛さ、高き上より見そなはす雛樣も笑み給ふなるべし、折柄父上他より歸り給ひて白酒召上り御機嫌よく御顔を緋毛氈の如くにして入り來たり給ひ此手料理の御馳走に預り給ひつゝ樣々可笑しき事をのたまふに笑ひ聲絶間なし、火ともし頃になれど歸らんと云ふ者なかりしが迎者來たれば殘り惜しげに歸り行きたり、あはれ今日の樂さ如何なりけむ、有難きは我父母上の御心にこそ。

廣島　淳　子

今日は三月三日、桃の節句とて、雛人形をまつり、菱の餅、白酒、煎豆など供するは何處も略同じ。例により祭壇兩方には、桃、柳、椿などいと美はしく、柳に、毬も可愛氣なり。上段には内裡さま三組、二段には五人囃、福助、三段には、人形、下段には膳、三寶に白酒、重詰など並べられたり。殊に今年は靜子の初節句、常ならば親類縁者の雛彼も多く招くべけれど、出征諸士の艱苦をおもひ出ては、なかなかに、さる事もおかしからじとて、眞の形ばかりとはなしぬ。されば西田の伯母樣、從妹のみいちやん、きいちやん、花さんなどのみ招き置きしに、二時頃來ましぬ。妹の雪ちやんは嬉しさのあまり、是は何處から貰つたのよ、是はどこ、彼はどこ、彼と是とがあたしのよ、など暫し說明に餘念なかりしが、今はあきてか小さき女將先に立ち日當りよきお庭に遊ぶうち、夕膳もならびたれば、一同お雛さまの前にて白酒酌み交はし、赤飯、すし、重の内など取出し、いと

面白く四面やまの談など物語りつゝ、食事すみて九時頃一同歸りましぬ。まづは雪ちやんの待ちにまちしお節句も是でお終ひねといへば、姉ちやま、おたちまだたんと／＼お節句ちゆるよ、とその無邪氣さ愛らしさ雛人形よりも層一層、あはれ神よ雪ちやんの此の無邪氣さをとこしなへに授けさせ給へや。

呉市　和住千鶴子

春霞、かすみそめてよりひゝまたれつる彌生三日の日も來にけり。うらゝかに晴れわたりたる空に、うないらが野邊にて摘みし母子草、菱形のもちひをひいなにまいらせつ。桃櫻こちたきまで瓶にさし入れ、もろもろのひいなへの供ものはさらなり。椀、皿など持ちて小さき料理人のたちつゐつ、いざきませひとよ酒くみてんといふ。いはけなきものどものおかしきすさびに、いとゞ心ものどけく桃の匂ひに空さへゑめるけしきぞ、身の老らくもしばし忘れて、三月の長き春日もなほあかなくに、くらしつ。

淡路　春海玉枝子

桃花今を盛と咲き亂れ人の心もおのづと春めきぬ。昨日母樣の今年は軍國多事の折柄ゆゑ例年の樣にはでく／＼しくひな祭をしてはならぬその費用で新聞を買つて戰地の軍人方に送つてはどーかとの仰せに兄弟一同異議なく御言葉に從ひぬされば床に座し玉ふは大ひな二つのみ。畑にニツコリ笑む桃の花あちらこちらよき枝ぶりを撰びて手折りぬ。水かけ清めて花いけにさし今日の御馳走のかわりとしてさゝぐ。床の樣何となう淋しく覺ゆれど見る人心あらばかへりて賑わしくゆかしく思ひ玉ふらんと思へば心の中はれ／＼しきにぞ。やがて叔父上の來玉ひて一度は驚き玉ひしかど事の由申し上げしにつく／＼感じ玉ひ五厘切手買ふべく金戴きしにうれしさいはん方なし。午後郵送されし新聞紙取りそろへ帶紙の貼り正しく切手はるに忙はし。戰地の人々事の由知り玉わぬとてもさぞうれしう思ひ給ふらん。あゝ樂しかりしこの節句、あゝ好日心地よかりし卅八年三月三日よ。

本郷　星野千代子

あたし、お父さんの、御みやげに、戴いた、あの御人形もね、外のと、みんな、一所に、きれいにお飾りして、其れから、御友だちはね、お向ふの川島さんと、市川さん、意地悪るの花子さんは、いやよ、あゝそう／＼青山さん、あの方あたし一番好きよ、大好きだからね、明日は皆さん御呼び申して、ね、どうせう、おもちやの、御重箱も、おぼんも、みんな、お人形に借してやりませう、あの、御菓子や、みかんや、五色のいり／＼や、御山に積んで、御馳走して上げませう、早く明ければいゝ、とまどろみもせで待ちに待ちたる三月三日はいとうら／＼と、長閑にて、空の色はいと澄み渡りて、軒近う咲きほこれる梅は、なつかしき香のあふれて、窓のあたりいとゆかし、起くるより今日の集ひにはせ廻れる文子の友は、一人、二人、又三人と、漸々打ちつれ來て、雛を飾れる八疊の奥の間は、實に樂しく樂しき平和の光のみち／＼て、えもいひしれぬ祝ひの聲のはやく優しき唇より出でゝ、笑聲の絶ゆる時無し、文子は、おばーさん、いらつしやいよ、此お人形にね、御馳走するから、お祖母さんも、御中間になつて頂戴、よーお祖さん、母君は笑顔もて入り給ひぬれば、おかしうちいそき、手に／＼、己が玩弄物の御料理取り出てゝは、母君に又雛の許に心を盡してかしづく樣、いとろうたげなり、薄紅梅のリボンかざせる、青山と云ふ、中にもおとなしげなるが、まあ此御馳走は御やめにして唱歌を謠ひませう、エー、そうしませう／＼お祖母さんにオルガン、引いていたゞいて、と文子も、よろこびて、是に從へば、いとよろこび給ひて、さらば私が引くから、御そろいで、いゝお聲で、謠つて御聞せなさいと、樂器取り給ふ一、二、三、そまつにすなと、母上の、仰せ給ひし此人形、着物を、きせて、帶しめて、箱の御殿に座らせてとすゞふり出すやうの聲はり擧げて謠ふさまは實に春の野に飛ぶ蝶々の[illegible]に聲ある、自然の調に相和して、めぐるが如く、彼の月の宮居に仕ふらん、天つ小女の舞ふ樣も、かくやなど思はれて、いと美しく樂しき雛祭なりき。

## ○兩宮殿下の御高德

高輪御殿に在す兩内親王殿下の御高德は申すも畏き次第なるが分けても軍事の上に厚き御心を注がせ給ひ名譽の戰死者とし云へば一兵卒だに親しく御手記遊ばされて祭壇に納め給ひ殆んど寢食を忘れさせられての御精勵と承はる尙近き頃の御樣子を拜するに出征軍人の爲めには一瑣事さへ忽になし給はず恭き思召を加へ給ふなど誠に畏多き御事なり

▲慰問袋の御調製　戰爭に就ての御注意はなか〳〵に御敏く渡らせられ公報の發表されし時など軍機に關するを以つて何れの方面とも詳細に認めざれば殿下は直に地圖を御手になし給ひ前後の關係等より瞭に御賢察あらせられ侍臣を召して細かなる御說明をなし給ひ侍臣をして其御英明に驚嘆せしむと申す、又戰地に於ける軍人の慰藉は慰問袋を寄送するより良きはなしと申せしを聞食され土曜日の午後及び日曜日の外は拜謁をも許し給はず日夜慰問袋の御調製に御全力を注がせられ折には御歌など御添へあらせ給ひ更に御倦怠の御樣子なしと承はる

▲戰死者の名簿　左れど御日課は每日午前九時より午後四時に至る迄必ず御勉學あらせ給ひ其の寸閑をもつて繃帶を捲かせ給へど尙此外に殿下の御熱心に勉め給ふ御事あり之れぞ戰死者の名譽を留むる御名簿にて將校より兵卒に至る迄階級姓名戰死の場所等



瞭かに御認め遊ばされ祭壇に收め給ふ此名簿は縱一尺幅一尺一寸の横綴とし表裝は御躬ら陸海軍の意匠に縁みて丹精を凝し給へりと申す

▲一葉の寫眞　佐々木御養育主任知邊の人にて早稻田に植木職をなせる栗原善太郎と云へるあり陸軍一等卒なれば召集せられて戰地に向ひ昨年十一月廿六日二龍山攻擊の際名譽の戰死を遂げしが其の忠烈なる偉勳は夙に上官にも認められ惜しき丈夫を失へりと嘆ぜしめし程なれば佐々木氏も其の戰死を惜まれ弔典として金品を手向けられしに彼の未亡人は厚意を謝し紀念の爲めとて生前の寫眞を送りたり然るに此事早くも殿下の令聞に達して「是非に」との御下命故殿下に献上なしければ直に御祭壇に飾付け給ひ御懇切なる御備物に佐々木主任も感泣の涙に咽び厚く御禮を申上げしとぞ

▲特例の拜謁　其他高輪御殿に出入する御用の商人等にて出征する者あれば殿下は必ず厚き思召を下し賜ふなるが此程同じ商人にて津の國屋と云へる酒屋の雇人某の出征する事聞え上しに殿下は某を御庭前に召させられ「御苦勞」との御言葉を下させられたり某は感泣の迸るを知らず「盟つて戰功を立てまする」と餘所ながら申上げ勇んで戰地に向へりとぞ又麻布一本木の佐々木氏邸に宿泊せる軍人には夫れ夫れ特例の拜謁を仰付け御菓子を賜はり御避寒の如きも昨年は殊に御遠慮あらせられ軍國の爲めに盡させ給ふと承はる



## ○今昔叢譚

（故副島伯第二の令夫人）

嗚呼副島伯は薨ぜられた、伯は元佐賀藩の士族で明治の元勳中最も硬骨を以て知られた偉人、其人格は末世の子弟が好食餌とするに足るは勿論だが、伯が平素嚴格なる事は殆んど眞似も出來ぬ位で、今の夫人正子を迎へた當時の一話は大に伯の半面を窺ふべきものがある

今は昔高島嘉右衛門氏がまだ日本橋の濱町に屋敷を

持つてた頃である、伯は最愛の夫人を先立て頻に鬱ひでゐられたから平生親交ある高島氏は太く心配して牧朴眞氏を招ひて何かして副島に妾でも持たせる策はあるまいかと相談をかければ牧氏は首を捻つて『どうも彼の天神樣には餘程勸め方が難しい、併し今君の處に來てゐる松島の娘、(岐阜縣士族松島謙助の女にて即ち今の副島夫人正子の前身)なら多分氣に入るだらう』と云ふ『何さま彼の女なら御同樣に取り持つても恥かしくない若し副島に怒られたら實は君が餘り鬱いでゐるから揶揄つたのだと笑つて仕舞はふぢやないか』とこゝに評議は一決した夫から牧氏は暖い好い日を見計ひ副島氏を越前堀の屋敷(伯の邸は當時越前堀にあり)へ尋ね『墨汀に船を浮べて詩でも鬪はさうじやないか』と巧く說き勸めて伯と共に船に棹さして大川を上る、此方は高島が見張つてゐて自邸へ召び込むと云ふ趣向で、萬事滯なく伯を引つ張り込み、正子に斡旋させて一酌を催したが高島氏は頓て機を見て伯に向ひ『貴君も夫人を亡されてお獨身では御不自由でせう、就ては此座に侍べる彼の女を妾にでも召して子供衆の世話でもおさせになつたら如何です』と口を切れば、牧氏は側から幇助を揭ひて頻りに勸めた、スルト伯は色を正して『我輩は未だ妾を持つ程腐敗しない、寧そ彼を本妻に迎へると致さう』と言ふたから流石の二人も其意外に驚いたが伯は其內手紙を認めて屋敷へ送り子供を召寄せて『汝等を態々召んだのは餘の儀でない、今日高島牧兩氏の御世話に依つて之なる婦人を余が妻に迎へたから、汝等は只今より之を母として能く仕へろ』と、嚴格に言渡された

○女子高等師範學校の生徒募集　同校にては來四月入學せしむべき私費(國語體操專修科)生徒卅名を募集す出願者の資格は一、品行方正身體健全教員たるに適當の者二、修業年間四年の官公私立高等女學校卒業生又は是と同等の學力ある者三、年齡滿十七歲以上三十歲未滿の未婚者にて二月四日の官報に依り入學願書を作り二月以後の戶籍謄本を添へ三月廿日迄に出願すべしと

●寄稿家に告ぐ　詞苑欄の和歌及短文とも今回は寄稿頗ぶる多数に上り加ふるに記者輻湊したるため随意課題の和歌短文今様新体詩は勿論課題に屬するものも亦た登載し得ざるものあり依てそは悉く次號の誌上に讓ることゝしたり幸ひに諒せよ

●訂　正●　前號詞苑水邊梅に天位を得たる●岡田春子孃の和歌下の句「庭にうつらふ」とあるは「底にうつらふ」の誤植に付茲に正す

## 新刊書目

| | | | |
|---|---|---|---|
| 女學世界 | 第五卷第二號 | 日本橋區本町 | 博文館 |
| 六合雜誌 | 第二百九十號 | 芝區三田四國町 | ゆにてりあん |
| 中央公論 | 第十九年第二號 | 本鄉區西片町 | 反省社 |
| 婦人世界 | 第四十五號 | 大阪市南區末吉橋通 | 浪華婦人會 |
| 日本婦人 | 第六十四號 | 東京豊多摩郡澁谷村 | 帝國婦人協會 |
| 家庭のしるべ | 第八號 | 日本橋區 | 白木屋 |
| 時好 | 己之第二號 | 日本橋區駿河町 | 三越吳服店 |
| 正教要話 | 第六卷第一號 | 神田區駿河臺 | 教要社 |
| 家庭週報 | 第十六號 | 小石川區女子大學校 | 櫻楓會 |
| 教界時事 | 第四十三號 | 麴町區上二番町 | 教界時事社 |
| 婦女新聞 | 每號 | 牛込東五軒町 | 婦女新聞社 |
| 中學科講義錄 | 每號 | 神田區北神保町 | 大日本國民中學會 |
| 東京經濟新報 | 每號 | 京橋區彌左エ門町 | 同社 |
| 婦人と子供 | 第五卷第二號 | 本鄉湯島 | フレーベル會 |
| 音樂之友 | 第七卷第二號 | 府下巢鴨東福寺 | 樂友社 |


定價

| | |
|---|---|
| 一冊 | 前金貳拾錢 |
| 三冊三ヶ月分 | 前金五拾七錢 |
| 六冊半年分 | 前金壹圓拾錢 |
| 拾貳冊一年分 | 前金貳圓拾錢 |

全國無遞送料

廣告料

| | |
|---|---|
| 五號活字廿三字詰一行 | 金三拾錢 |
| 半頁　三十二行 | 金八圓 |
| 一頁　六拾四行 | 金拾貳圓 |
| 表紙一頁 | 金拾六圓 |

（色刷は特に御相談に應ず）

御注文規定

一切前金の事（但郵券代用一割増の事）●前金領收證は差出不申本誌の到着を以て金員領收と御承知ありたし●領收證を要せらるゝ方は別に参錢切手御送附ありたし●爲替受取人は東京市京橋區築地貳丁目貳拾壹番地國光社と御認ありたし●振込局は東京築地郵便受取所へ●御照會の件は返信料御送附あるべし

明治三十八年二月廿八日印刷
明治三十八年三月一日發行

東京市京橋區築地二丁目二十一番地
編輯兼發行人　渡邊　彙一
東京市京橋區築地二丁目二十番地
印刷人　河本龜之助
東京市京橋區築地二丁目二十一番地

發行所　株式會社　國光社
（電話新橋二六九三番）
（電話新橋特八八番）

## 輕便＝瓦斯の煮燒＝德用

瓦斯は燈火用の外料理其他一般の煮燒用として使用は輕便マッチ一本あれば晝夜何時にても即時に用を便じ火力加減自在にして火災の危險なく且大に人手を省き費用は薪炭よりも低廉なり

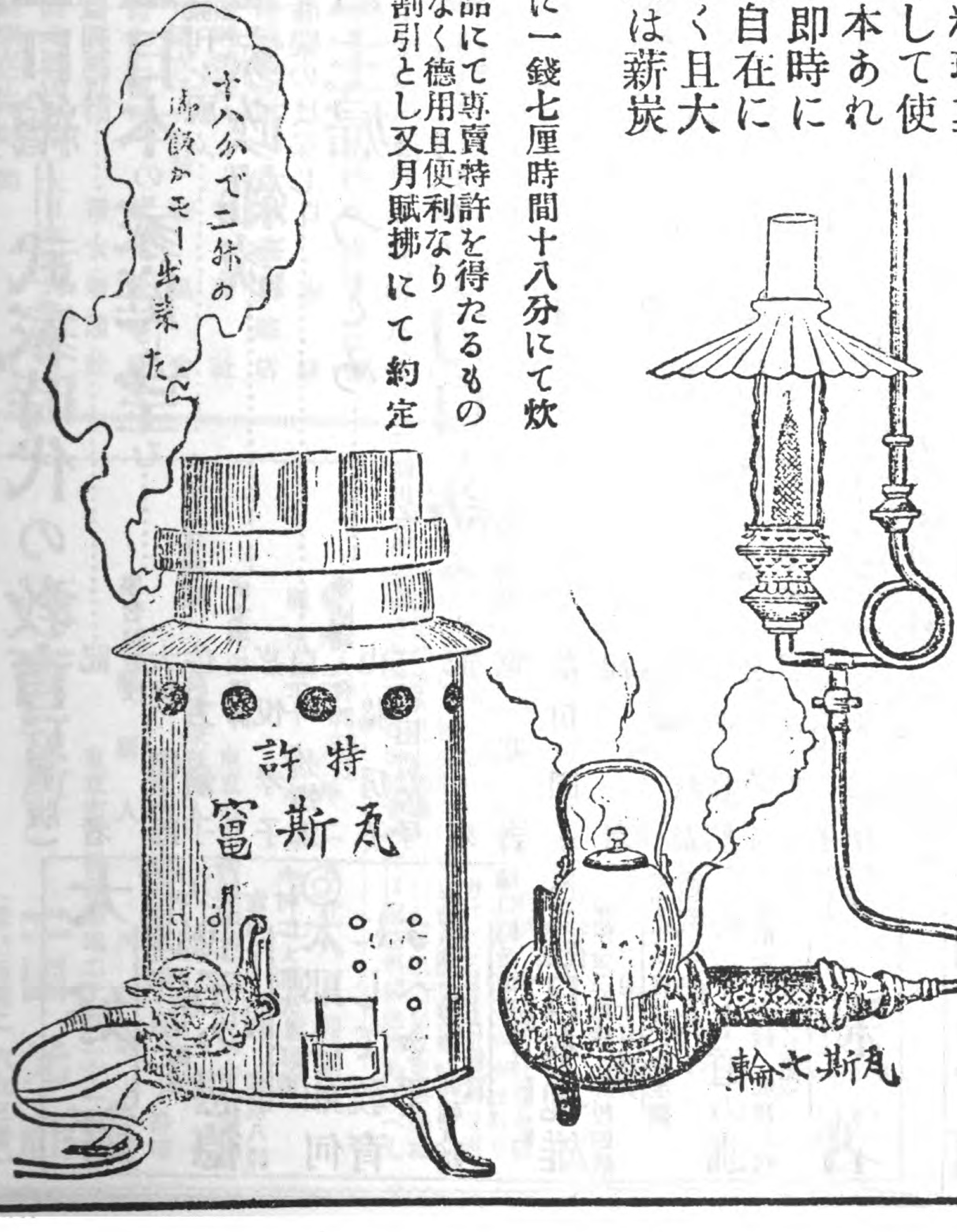
○三升の米は瓦斯代僅に一錢七厘時間十八分にて炊くを得べし

○瓦斯竈は本社の發明品にて專賣特許を得たるものにして瓦斯消費量少なく德用且便利なり

○工事費は前金拂は一割引とし又月賦拂にて約定す

○臺所竈、七輪、湯沸、風呂、並燈爐等に專用の瓦斯代は特に定價の二割引とす

尙各種瓦斯器具は當社構内陳列所又は銀座所等へ陳列縱覽に供居候御立寄御一覽被下度候




神田區錦町三丁目

# 東京瓦斯株式會社

電話本局一三番、五四八番 二三〇三番

阿多廣介先生
園田竹熊先生
編纂◎明治卅八年二月文部省檢定濟

# 新刊 女子補習讀本

菊判大和綴美本
定價 上卷金貳拾五錢 下卷金三拾錢
郵稅壹冊金四錢
郵券代用壹割増

本書は高等小學校卒業後更に補習科を修むる女子、及び修業年限二個年の高等女學校技藝專修科生の使用に供せんが爲め編纂せるものにして力めて國定の小學讀本に連絡を求め其の材料は家事家政女工等を始め實業に關する事項。國家公衆に對する必要なる心得及び美文和歌等の趣味を涵養するに足るべきものを選擇したれば實用的並に文學的興味を兼有せる完全の讀本として學校は勿論家庭に於ても必須のものなり

## 重要目次

## ▲▲女生及家庭の讀物▼▼

（國光社發行）

| 著者 | 書名 | 冊數 | 定價・郵稅 |
|---|---|---|---|
| 島田佳矣、野口駿尾共著 | 女子技藝 編物模様圖案 | 全五冊 | 定價 松ノ巻四十錢 櫻ノ巻五十錢 藤ノ巻五十錢 菊ノ巻五十五錢 梅ノ巻五十五錢 郵稅各二錢 |
| 棚橋絢子刀自著 | 女道叢話 | 全壹冊 | 定價金三十錢 郵稅金四錢 |
| 三輪田眞佐子刀自著 | 女子之本分 | 全壹冊 | 定價金二十五錢 郵稅金四錢 |
| 三輪田眞佐子刀自著 | 女子處世論 | 全壹冊 | 定價金二十錢 郵稅金四錢 |
| 磯部武者五郎先生著 | 家計簿記法 | 全壹冊 | 定價金十五錢 郵稅金二錢 |
| 藤野天城先生著 | 女子小觀 | 全壹冊 | 定價金二十錢 郵稅金四錢 |
| 堀內新泉先生著 | 女樂師 | 全壹冊 | 定價金卅五錢 郵稅金六錢 |
| 松川鷲州先生著 | 結婚と家庭 | 全壹冊 | 定價金十五錢 郵稅金四錢 |
| 堀內新泉先生著 | 家庭の鑑 | 全壹冊 | 定價金十八錢 郵稅金四錢 |
| 女鑑編輯局編 | 新編ひめかゞみ | 全壹冊 | 定價金二十五錢 郵稅金四錢 |
| 清藤正輔謹著 | 皇后陛下御略記 坤徳 | 全壹冊 | 上製卅五錢 並製廿五錢 郵稅四錢 |

| 著者 | 書名 | 冊數 | 定價・郵稅 |
|---|---|---|---|
| 梅澤和軒先生著 | 清少納言と紫式部 | 全壹冊 | 定價金卅五錢 郵稅金六錢 |
| 澁谷愛先生著 | 萬國女子風俗 | 全壹冊 | 定價金二十五錢 郵稅金四錢 |
| 堀內新泉先生著 | 少女讀本 | 雪の巻 月の巻 花の巻 全三冊 | 定價各金十八錢 郵稅各金四錢 |
| 大町桂月先生著 | 常盤御前 | 全壹冊 | 定價金十三錢 郵稅金二錢 |
| 小林雨塔先生著 | 勾當の內侍 | 全壹冊 | 定價金十三錢 郵稅金二錢 |
| 落田耶先生著 | 袈裟御前 | 全壹冊 | 定價金十三錢 郵稅金二錢 |
| 國府犀東先生著 | 靜御前 | 全壹冊 | 定價金十三錢 郵稅金二錢 |
| 長田偶得先生著 | 顏世御前 | 全壹冊 | 定價金十三錢 郵稅金二錢 |
| 杉谷正隆先生著 | 家庭訓歌 修身百首 | 全壹冊 | 定價金二十錢 郵稅金四錢 |
| 高瀨眞卿先生著 | 學校家庭 修身一夕話 | 全壹冊 | 定價 特六十錢 並三十八錢 郵稅八錢 六錢 |
| 指原乙子女史著 | 女子文章軌範 | 全壹冊 | 定價金三十錢 郵稅金四錢 |
| 華族女學校御編纂 | 國語假名かつひ一覽 | 折本 | 定價金拾貳錢 郵稅金貳錢 |

# 第五回内國勸業博覽會

# 賞牌并に褒狀受領

壽美禮おしろい

登錄商標

五二會評品會功勞銅牌

THE BEST MADE
SUMIRE
VIOLET PASTE

ヴワイオレツト蛛製
錫器附 乳白硝子器入
壽美禮おしろい

# 壽美禮おしろい




ねり製 定價 大壜二十錢 小壜十二錢

水製 定價 大壜二十五錢 中壜十五錢 小壜十錢

ヴワイオレツト水
スミレ水白粉




錫枠附乳白硝子器入

すみれ白粉は欧米諸國に專ら流行する香料及弊店特製の化學的炭水素の新成蹟體等を以て配劑しわるを以て皮膚を艶麗ならしめ芳香馥郁として長時間保續するの特性あり『壽美禮白粉』は常に用て御顔肌等の色を白變せしめきめをこまかに、にきびそばかす、わせも等を生せす御肌へを清々しく天然の白色きに至るべし『華おしろい』は芳香馥郁長く保つが故宴會祝席雜踏い場所に臨て諸々の惡臭を退け不淨を拂ひ心氣を清爽快活ならしめ衞生上有益無比の逸品なり『壽美禮白粉』は高等優美にして其意匠も美妙なれば御進物に最も適當す方今東京横濱に於て上流社會に益々好評を博しつゝ流行せり

# 皮膚艶白劑 壽美禮あらい粉

綠、藍、紅彩蝶番ひボックス入三錢
鑵詰六錢五厘 袋入壹錢

●弊舗製造の壽美禮洗粉の義は方今欧米諸國に專ら賞賛する香料及弊店新製の原料を用ひて製せし物なれば朝夕此洗粉を御用ひ給へば漸々皮膚の色を白くし美くして艶を出しきめをこまかに常に御肌を清々しくなし總而皮膚の患ひにかゝる事なし

●常に髮洗ひに用ひ給へば毛の拔る病を豫防し毛のくせを直しよくして艶を出し髮のねばりを取り油あかふけ等を生せす又絹綿布等に用ひて能く汚垢を落す總て物を漂白する性あり

●使用法は普通あらひ粉の半分にて能し水又は温湯に溶し又はぬかに混ぜ入浴の際用ふるを良とす

登錄商標

西洋色白くなるあらひ粉

SUMIRE.
WASHLNG IOWDER.

壽美禮あらい粉




## 製造本舗

東京東兩國（兩國橋際元町）

# 伊勢吉壽美禮堂謹製

賣販所は全國到る處小間物店化粧品店賣藥店其他各勸工場各劇場運動場に有り

女鑑

明治三十八年三月一日發行　每月一回一日發行　明治卅五年三月十二日第三種郵便物認可

第拾五年第參號



東京築地株式會社製造所印刷